THE CENTRAL REVIEW

中央公論

12-1923

十二月號

第三十八年　第十三號　第四百二十九號

▲說苑

病者虚弱者を强健化し 健康者は益々精力を增加す

●帝國大學病院　赤十字社病院　各府縣立病院　御採用

醫學博士 粟本東明氏　醫學博士 土田卯三郎氏　醫學博士 河西健次氏
醫學博士 齋藤秀雄氏　醫學博士 增山正信氏　醫學博士 諏訪鑾一氏

實驗御推奨

補血强壯

ブルトーゼ

特長

一　芳香美味良藥にして口に快し
二　絕封に胃腸を害せず食慾增進す
三　速に吸收され血を增し肉を肥やす

種類及適應症

補血强壯增進劑	單味ブルトーゼ	半月分金二円　一月分金三円
神經質疾患特効劑	アルゼンブルトーゼ	半月分金一円三十錢　一月分金三円五十錢
腺病質特効劑	ヨードブルトーゼ	半月分金一円三十錢　一月分金三円五十錢
健胃補血强壯劑	キナブルトーゼ	半月分金一円三十錢　一月分金三円五十錢
呼吸器系疾患特効劑	グアヤコールブルトーゼ	半月分金三円五十錢　一月分金五円五十錢



賣劑各地藥店にあり

說明書進呈

發賣元　大阪市東區道修町二丁目　藤澤友吉商店
京城府西小門町四二番地　藤澤友吉京城支店

代理店　東京市日本橋區本町四丁目　合資會社　高井商店



小林古徑筆

大正十二年

中央公論

十二月一日發行

十二月號

第卅八年 第十三號

第四百二十九號

大試練の歳末を送る

大正十二年も暮れる。震火災は九月に起つたのだけれども、出來事が大きいだけに前八ケ月の各般の事件は丸で忘れられ、少くとも在來の各般の計劃は殆んど續行を停止せられ、天下は今や罹災地の復興問題に忙殺されて居る。普選問題の如きもあれど、當面緊急の問題に押されてか、左までの昂奮を國民に促さない有様だ。故に大正十二年を震火災の歳と謂ても不穏當でなからう。來るべき歳も亦同じく復興問題に大部分の精力を絞らるべきは今より豫測するに難くない。

所謂復興問題が、單に東京市の恢興といふだけでなく又近縣罹災地の外形的復活だけでなく、東京附近を中心とする罹災地の復興を通して新日本の活動的本源の培養を圖らんとするものなるは今更云ふまでもない。さうでなくんば復興問題は新日本の積極的創造氣魄に取つて格別の意味はないのだ。併し乍ら最近傳唱せらるゝ復興計劃は果して這の期待に十分應ずる底のもの〻のだらうか。又一般國民の昨今の意氣込みは果して理想的計劃の遂行を勢援する底のものだら〻か。

前者に就ては暫く云はず。後者に就て吾人は日を經るに從て震災當時の氣魄の漸く弛頽せるに非るやを疑へさるを得ない。年改まると共に捲土重來の奮勵を必要とするとき、吾人は讀者と共にこの點を大に戒めて置きたいと思ふ。

震災當時は人みた儉約であつた。寧ろ儉約を誇示するの風さへあつた。然るに昨今は如何。物價も安かつた。暴利を抑ふるの手段も公私兩面からいろ〳〵講ぜられた。今やまた昔の通り小賣商の跋扈に委して顧みさらんとして居るではないか。若し夫れ都市計劃に至ては、其の初め絶大の慘禍に驚められて理想的方案によるべきの念強かりしも、今や局部的小利害に制せられて極めて姑息的なものになり了らんとして居るではないか。其他算へ來れば限りもない。實際慘害を蒙つた東京方面でさへ斯の如し。東京以外の人心の復興問題に對する熱情の冷却せるは怪むに足らぬのではないか。

尤も今度の大惨害に依て促された人心の緊張は、處によつて同一でない。湘南方面から横濱地方の人が最も大きた打撃を受け其の結果今なほ前途を考慮するの餘裕すらなき程の窮境に居るは言ふまでもないが、東京方面に在ても山の手と下町とで人情は全く異るを見る。從て直接災害を蒙らない各地方の人心の比較的悠長なるは怪むに足らぬ。が併し、間接の影響としての經濟的壓迫の如きは可なり强烈なものがあるから、今次の災害はまた或る意味に於て全國的と謂てい〻。況んやその復興に至ては實に全國の協力に依て始めて成るものなるに於てをや。

然し吾人の特に人心の弛頽を慨くは、復興施設の不徹底なる完成の爲めばかりではない。有形無形の一般的恢興の爲に人心の緊張は何よりも大事だと思ふからである。今や舊歳を送るに臨み、吾人は特に此點を有識階級たる讀者に諮り、諸君の聲援に依て來るべき歳に於ける國民的氣魄の新生面をもたらしたいと念ずるのである。

今次の震火災を歐洲諸國に於ける戰禍に比較するものがある。誰をも苦めた戰爭の災厄から獨り幸に免れて居つた日本も、今次の損害に由て御多分に洩れぬ仲間となつた譯であるが、併し損害の大さに於て、災厄の一般的なるに於て、又その長く續ける點に於て、我の損害は到底彼に比すべくもない。彼に在ては禍害の眞に異常絶大なりし丈け斯んな目には二度と遭ひたくないとの決心鞏固を極めし所以を想像するに難くないが、我に在ては崩れた煉瓦塀を――煉瓦の危險を人も說き自らも經驗せるに拘らず――復た同じ煉瓦で築き直して居る樣な姑息苟安を怪まない。復興の大策に就て混迷錯亂してゐる點は彼我相似たるものあるが、私かに思ふに、彼に在ては災厄の深酷を極むるの結果目前の經營に忙しく將來を謀るの餘裕に乏しきに因るとすべく、我に在ては禍害の程度全體としては左まで甚しからず爲に將來の對策を攻究するに眞劍味を缺くに因るとすべきであるまいか。損害のあ〻まで大ならざりしは喜ぶべしとするも、之を機として得がたき教訓を其間に求め以て將來の進運に資する所あらしめんとの用意よりせば、亦多少の遺憾なしとせぬ。吾人は固より損害の小なりしを悔ゆる者ではないが、之に緣りて道義的教訓を得んとする用意よりして、歐洲と自ら境遇を異にするに鑑み、國民を鞭韃して其弛頽を阻止する爲にはまた格別の努力と警戒とを促さねばならぬと考へるのである。

禍多かりし歳を閉ぢるに當り、特にこの點を讀者に告ぐる所以は、來るべき歳に於て一層の國民的緊張を促さんと欲するからである。

中央公論



第卅八年第十三號
十二月號
第四百二十九號

生活原理の極致としての合議主義

田中王堂

●

合議主義とは、今日における、そして、今後に亙る人間の生活一般のはたらき振りに與へられた名稱である。其れは、代償と代表との作用としてはたらく哲人主義の頂點であり、大團圓である。哲人主義はその精神を一にし、その發動を異にする專制主義と反抗主義との二つの段階を經て最後の段階たる合議主義に臻つた。こゝに、わたくしは一つの、唯一つの興味を有つ。蓋く現在に生きるために正しく現在を知らうとすることが、即ち其れである。然し、正しく現在を知るためには、合議主義の考察は、必然に、專制主義と反抗主義とへの溯源に依つて先驅されねばならぬ。

人間の生活の樣式が彼れの關する文化の程度の相違するに隨つて相違して來たことは、これまでプレトオ、アリストオトル以下、苟くも人間の生活を歷史的、哲學的に考察した者の一般に看取したことである。此等の人々の說明は孰づれも彼等の道德的興味、若しくは、政治的主張に依つていろいろに傳彩されて居るがために、わたくし共の道德的興味、若しくは、政治的主張にして彼等のと一致しない限り、其等の說明がわたくし共に取つて神話に過ぎないことは、尠なくも神話的要素を多分に含んで居ると見えることは洵に止を得ない。さうであるに拘はらず、其等の外衣を剝ぎ、其等の志向だけを取るならば、彼等の間に一致する點は極めて多く、そして、其の點こそは今日に在つてもわたくし共が同意出來るものなのである。

わたくしとしても、無論、彼等の意見を參照するが、わたくしは其等の多くの變遷を哲人主義の、即ち、代償と代表との作用の樣式の變遷と見るものから、彼等の意見は自然、この觀點より取捨され、醇化されねばならぬ。されば、わたくしに取つては同一原理でありながら、異なつた文化の下に、どうして其れが外形上そんなに異なつて發動したのであるか、發動しなければならなかつたか、といふことが中心問題となるのである。

ソロモンは『神を畏れるは智慧の始めである』と說き、キリストは『神は愛である』と教へた。それで舊約の主は峻嚴の神であり、新約の主は慈愛の神であるとされて居る。事實、確にさうであつて、この觀察の中には普通世人の氣付かざる甚深の意義が含まれて居るのである。そしてわたしからすれば、この事實は端的に人間の生活のあらゆる側面と機關とに現はれた哲人主義の進化の行程を象徵するものと見られるのである。

人間の生活の樣式が宗教的體驗に憑據し神と人との關係として語られる時、どうして其れが神を畏れることから、彼れを愛することにまで變形するか、神を畏れるといふことと、彼れを愛するといふこととの間には、どれ丈け大なる、

そして、どれだけ多くの相違が暗示されるか。この間の消息を心理學上の言葉に引き直すならば、一體どういふことになるであらうか。

畢竟するに、神と人間との關係は衝動合理化の過程の中に顯露し來たる事實である。（人間の性情に固有する其れの兩岐性に基つき、）衝動が合理化されるに方つても、其の單一なる活動は暫らく作用的に二つの側面として對立することとなる。こゝで、假りに、其等の側面に支配する方と、支配される方との名稱を附するならば、信仰的表現に隨つて、支配する方は神を代表し、支配される方は人間を代表する。さうすると、神を畏れると、神を愛するとの相違は、支配する方と、支配される方との間に見出だされる關係の相違である。反省と訓練とが十分でない間は、新たに生ずる衝動と其れに依つて惹き起される他の衝動との間に、理會と協同とは容易に成り立たないで、當の衝動は兎角孤立して絶對的におのれの權利を主張しようとする。然し、其等の他の衝動は生活全體のエコノミイより倏ち連衡して其れの主張を沮遏し、若くは、抑壓しようとする。この場合に在つて、人間は神の威力に慴服しないわけにはゆかぬが、其の神は人間に對して極めて親しみなきものである。之れに反し、反省と訓練とがだんだんに徹底して來るに隨つて、新たに生ずる衝動はおのれの權利を主張するが、有機的に其れを主張し、其れに依つて惹き起された他の衝動は其れを監督するが、有機的に其れを監督するが故に、此等の間に理會と協同とが成り立つことは左程困難ではない。この場合に在つては、神の命令はいつでも人間の欲求を參照して形造られるのであるから、其の神は人間に對して極めて懷かしみのあるものであらねばならぬ。先きの神はシナイの山巓に於て恐ろしき雷雨の中に十誡をモオゼに授けた種のものであり、後の神は、『幸福なるかな心の淸き者、其の人は神を見ん』とキリストが啓示した種のものである。

社會人の生活に於ける哲人主義の變遷の經緯は個人の生活に於ける其れの變遷の經緯に比して、遙かに夾雜であり、

遙かに紛糾、繚亂して居るが、前者は後者の新らしき狀態に置かれ、新らしき要素が附け加はつたため、其等に相應して、自然に充實され、擴充されたまでであるから、其れの原理と傾向とに於ては、兩者とも大略同樣である。其れの輪廓を一口に言つて見れば、一つの集團に屬する異なる個人間の叡智の相違と才能の適應性の相違との交徹關係に於て、代償と代表との作用がはたらいて居ることは過去も現在も、乃至、將來と雖も、別に異なるところはないし、又、異なら う筈もないが、たゞ、叡智の相違の側面から觀察すれば、優者と劣者との間の協同が專制の其れよりも合議の其れに進み、才能の適應性の側面から觀察すれば、一つの組合と他の組合との間の交渉が外援の其れより內融の其れにまで進んで來たことである。

自發變化の傾向に從つて、總べての個人はそれぞれ新らしき性情を生れ享け、新らしき欲求を懷抱して居る。されば、苟くも優者にして劣者を統卒して、そこに一つの協同團體を成り立たせようとするならば、彼等は或る風に劣者の欲求を滿たすやうに、新らしく生活の方針を工夫して行かねばならぬ。然しながら、わたくし共は嘗て人間の文化の極めて幼稚であつた時代のあつたことを記憶せねばならぬ。そこに個人と個人との關係はホッブスが想像したやうに『狼と狼と』のそれではなかつたが、彼等の智力と德性とが未開であつた結果として、彼等は彼等の私生活の性質に關しても、公生活の性質に關しても、はつきりした理會が有てず、適當な處置が取れなかつたのである。隨つて、彼等が感想したり、行動したりすると、やゝもすれば、私生活に於て、特に公生活に於て不斷に困迷と撞著と衝突とに陷るを免れなかつた。かゝる時代に在つては、優者が劣者のために生活の方針を計畫し、實施するのに、彼等より何等の參考資料をも徵することは出來なかつた。其等の方針の一切は優者自づからの肚裡より案出され、運出されなければならなかつた。優者は劣者の幸福のために謀つて、彼等の生活を豐富にするよりも先きに、其等に秩序と統一とを與へることを念

務と考へたのであつた。そして、事實、確かにさうであつた。この目的を達するために、優者に取つて何物にも勝りて肝要であつたのは、人間性の機微を洞察する直截なる知見と、一旦其の知見に依つて發明された鐵案を大膽に實現する不屈の精神とであつたのである。

「民の聲は、神の聲」といふ諺は膚淺なるデモクラシイに依つて、採つて以て其れの格言、若くは、揚言とされて來た。然し、民衆の大數は、今日に至つてすら、神の意思を表白すべき何等の聲をも發しないくらゐであるから　まして、當時に於ては、彼等の殆ど全部が神の意思を表白すべき何等の聲をも發しなかつたのである。彼等のたまたま發したのは、發することの出來たのは、纔かに、とぎれとぎれの囁嚅、若しくは、嗟歎に過ぎなかつた。其等は感情の洩露であつて、思想の表現ではなかつた。其等が一つの明晰な意味を有つた神の聲となるためには、聰明にして同情ある指導者の解釋と統一との工夫が其等の上にはたらくのを俟たなければならなかつたのである。事實、さうであつたに拘はらず、或は、さうであるがために、（これまでわたくしが說明して來た意味に從つて）そこに哲人主義は確かに行はれて居たとわたくしは言ふのである。何故ならば、指導者は民衆の幸福のために代償的に計畫し、其の計畫は彼等の欲求を深化し、醇化することに依つて其等を代表して居たからである。

この時代に於て、總べての生活の機關の中で最も强大であつたのは政治と宗教とであつた。一層嚴密に言へば、（宗教は政治の一部に過ぎなかつたから、）政治であつた。仔細に點檢すれば、他の機關と雖も、特に夙に自由精神のはたらいて居たギリシヤ人の如きに在つては、既にそれぞれ特徴ある中核を作つて居たのである。然し概して言へば、其等は政治のはたらき振りに依つて掩擁され、浸潤されるのを免かれなかつた。それで、わたくし共にして當時に於ける指導者の資格より延いて、彼等と民衆との關係を知らうとするならば、政治のはたらき振りに於て、其等を見るを便利とす

る。

政治に於ては指導者と民衆との關係は、普通の稱呼に隨つて、支配者と被支配者との關係となる。支配者の職掌、若しくは、特權を得る筋道は一樣でなかつた、或る者は異種族より來たつた征服者として其れを得、或る者は同種族に屬する長老として其れを得或る者は選擧に依つて、或る者は世襲に依つて其れを得た。此等の相違より、支配者の資格及び被支配者との關係には多少の相違が生ずる筈であり、事實、生じたのであるが、其等の本質に至つては、孰づれの場合に於ても殆ど同樣であつた。彼等は支配者として專制主義の實行者であつたのである。

專制主義の特徴は、支配者が直接に被支配者の意思と協議せず、間接に彼等の休戚の條件を推理し、若くは、想像して、爲政の方針を定めて行くところにあるのである。まだ被支配者の側に在つては協議すべき何等の意思をも有たなかつたのみならず、往々にして、一度、彼等の幸福が目的とされた爲政の方針が實施された曉に於てでさへも、其れの志向を理會するだけの聰明を缺いて居た。斯かる狀態に在つては、教化の補角として威力の示されたことは洵に止むを得なかつたのである。されば、あの時代の支配者の中の最も優れた一人であつたマホメットにしても、片手に劍を持ち、片手にコオランを持つて世間を征服したと言はれて居る。然し、あの時代に於て、苟しくも支配者たらんと志した者は、誰れにしても悉とく彼れと同樣に片手で威力を揮し、片手で教化を布かなければならなかつたのである。そして、さうすることは久しく超道德の教說に依つて詭辯化された人々が淺薄に考へるやうに、決して矛盾の所爲ではなく、極めて合理の方法であつたのである。但し、わたくし共のくれぐれも留意しなければならないことは、威力と教化との相關作用の解釋に關してである。其等の支配者はまづ威力を以て民衆を戡定し、さうした後、彼等に對つて教化を宣傳したのではない。支配者は或る教化を民衆に頒與し、たゞ彼等をして其れの實踐に依つて其れに内在する功利を自づから

發見せしむる、若しくは、體驗せしむる機會を開かんがために威力を利用したのである。『一寸の蟲にも五分の魂。』『服從は承認より來たらねばならぬ。然し、どんなことをしても、威力だけでは承認を導き出すことは出來ない、それを導き出し得るものは、最後に於て、獨り敎化だけである。若し此れが事實の眞相でなかつたとしたならば、どうして等しく專制の支配者でありながら、或る者は『民意を得』て彼等の職掌、若しくは、特權を保ち、他の或る者は『民心を失』なつて、彼等の職掌、若しくは、特權を褫はれたか。此れは、換言すれば、前者になつては威力を敎化の方便として被支配者の欲求の達成を圖つたのに、後者に在つては、敎化を威力の口實として其れの發動を壓迫しようと企てた相違に歸する外はないではないか。『眼高手低』といふ言葉があるが、この言葉の最も極端に當て篏まるのは、專制政治の下にある民衆にであつた。彼等は政策の計畫者としては、何ものでもなかつた。然し、其れが實施の批判者、制裁者としては、有力なる或るものであつた、否、有力なる總べてのものであつた。如何に橫恣に威力を弄した君主、若しくは、有司と雖も、彼等の意思に反して、長く彼等の政策を維持することの出來なかつたことは、分明に歷史の立證するところである。

あれほどにデモクラシイの純眞の信者であつたジエ・エス・ミルさへも、彼れの著『代議政治』の卷頭に於て、代議政治はあらゆる文化と國民性とに適した政體ではない。其れの効果は特殊の文化の中にある特殊の國民性に依つて其れが運用された時に、始めて其れの良果の現はれるものであることを力說して居る。わたくし共は人間の文化が或る段階にあつた間は、專制政治が最適の政體であつたことに一點の疑を挾まない。然し、わたくし共が現に營み、そしてますます其れを擴充することをわたくし共の理想として居る今日の文化の標準よりすれば、決して其れを適宜なものであるとすることは出來ない。其れに含まれた多くの重大なる缺陷は容易に指摘される。其等の缺陷は分派と變形との自然の傾

向に隨つて、殆ど無數のものとなつて居る。然し、其等の淵源は唯一つである。專制政治の眼目としたものは何物にも先き立つて秩序であつた。必要に迫られては、或る種のものに限つて改造を圖らなかつたではないが、其れは、たゞ秩序を保存するための止むを得ざる方便としてに過ぎなかつた。專制政治の要諦は如何に民衆を支配するかにあつて、如何に個人を開發するかには無かつた。確かに、其れの下には、masses あてつ、individuals は無かつたのである、尠なくとも、さうあることを其れの理想としたのである。この見地よりすると『是以、聖人之治、虚其心、實其腹、弱其志、强其骨。』といふ老子の言葉は專制政治の奥秘を道破したものである。傳統の尊崇、格式の固執、既成の門閥と階級との守保其他、曰く何、曰く何、苟くも專制政治の特徴を形造つて居るものは、一つとして其淵源を 殆どあらゆるものを犧牲としてまでも現存の秩序を維持しようとする精神に發しないものはない。

さきに、わたくしは專制主義の形を以てはたらいて居た哲人主義の下にある人間の生活一般の特徴を髣髴せしめるに簡明なる方法は、當時其れの機關の中で最も大なる威力と効力とを有して居た其れの政治を考察するにあるとし、これまで專制政治の運用を叙述して來た。今は、これまで考察して來たものを其れの側面より、若しくは、裏面より援立し、塡補する目的を以て、等しく專制主義の機關として精神に於て其れに先行し、機能に於て其れと協同して專制主義の骨髓となり、同時に、手姿となつて居た其れの學問と藝術とに就いて考察するところがなければならない。

其れの政治として專制政治を體現した專制主義は、何れの學問として辯證學を體現し、其れの藝術としてクラシシズムを體現した。わたくしはこれより尠しく辯證學とクラシシズムとの體系を叙述して見よう。

專制政治と辯證學とクラシシズムとは專制主義より派出した三つの分身であつた、否、專制主義の一つの體の三つの用であつた。普遍、法則、若しくは、類は特殊、事實、若しくは、種の意義、即ち、關係に他ならない。隨つて、普

遍、法則、若しくは、類は特殊、若しくは、種のはたらきに依つて、始めて或る性質を以て存在するのである。さうであるに拘はらず、普遍、法則、若しくは、類は特殊、事實、若しくは、種に先行して、前者は後者に其れの規律と、其れの價値と、そして、其れの存在とさへをも與へるものと想像し、この想像に據つて性情の陶冶と境遇の整頓とを圖らうとしたところに專制政治と、辯證學と、クラシシズムとに共通の特徴がある。今日の文化の標準よりすれば、かゝる考へ方は確かに不自然である、愚問に等しきものである。然し、さきにわたくしが夥しく之れが證明を試みたやうに、過去に於て、專制政治を最適の政體とした文化の段階があつたことが事實とされなければならぬならば、其れと同じ理由で、其の文化の段階に在つては、辯證學が最適の學問であり、クラシシズムが最適の藝術であつたことも、亦事實とされなければならない。

眞理の追窮が學問の目的であることには古代と近代を通じて何等の相違もない。然し、學問に依つて追窮される眞理の性質に關する理會に至つては、此等の間に非常な相違があつた。これは主として眞理なるものは人間の叡智に依つて組織さるべきものであるか、或は、單に發見さるべきものであるかの根本概念の相違より來たるのである。詮ずるに、古代人に取つても、近代人に取つても、其れが學問である限り、（或るものは宇宙の觀照を名とし、或るものは道德の維持を名として居ても）生活の內に生起する問題の處置を目的として工夫されないものは一つもある筈はない。總じて學問は個人的に、社會的に、そして、宇宙的に、（勿論、此等は異なる興味に依つて取られる異なる觀點に現はれる一つものの異なる側面に過ぎないが、）隨時に生起する衝動、若しくは、欲求を、生活全體の立場より、或る原理の下に統一することを其れの職分として居たのである。然し、古代人からすると、其等の原理なるものは永恒に亙つて固定の樣式を以て儼存したのであつたから、學問はたゞ其等の原理が如何なるものであるかを見いだし、特殊の衝動、若しくは、欲求を

適當に其等に下屬せしうれば、其れで學問は其れの最後の發言をなし、其れの最後の職分を盡したのであつた。プレトオの理念説に於ては、其等の原理が原型と呼ばれ、アリストオトルの論理學に於ては其等の原理が類と命ばれて居る。然し、兩者に在つて眞理の標準とされたものは略ぼ同一であるし、其れを把持する方法に至つても、其の外形が異なるほど其の實質は異なつては居ない。要は、孰づれにあつても、過去に於て工夫された若しくは、結晶した情操、概念、道德觀念を生活の方針の標準として、其等を以て新たに生起する個々の衝動、若しくは、欲求を制御して行かうとしたのである。如何に嚴密にさうしようとしても、新たに生起する個々の欲求若しくは、衝動は一つ一つに獨自の新らしきものであるのであるから、たとひ其等が最も都合よく舊きものに依つて制御されたにしても、兩者の交渉の結果は、或る Surd を殘しながら、なほ多少新らしきものたるを免れない。この事實あるがために、新らしき生活は必然に舊き標準を搖蕩するに至るのであるが、其れは人間の生活の本質より生ずる出來事であつて、此等の學説に依つて志向された成績ではない。此等の學説に依つて志向されたものは、どこどこまでも、舊き標準を妥當のものとし、其れに據つて新らしき衝動、若しくは、欲求の中に化醸する疑惑を解釋し、困難を解決することであつたのである。そんな企の無理であることは明らかである。それでも、彼等は稀世の天才を傾注して彼等の主張を支持しようと努め、そして、彼等の學説が當時の人々に對つて能く眞理の觀と説服の力とを具へ得たのは、全く、其等が彼等の棲息した社會の構成と理想とを分受して居た個人的の、そして社會的の生活の構成と理想とを洞察し、道破したからである。

人間の生活は關係にまで發展する要素を含んだ衝動を以て出立する。そして、其等の衝動の對象の全部でないまでも、尠なくとも、其等の大部分は色彩と形態とを具へたものである。隨つて、其等の對象を整頓するに二つの方法が取られ得るし、事實取られて居る。此等の一つは其等の對象を概念的の關係にまで化して總合することである、他の一つ

は其等の對象を知覺的の樣式に止めて總合することである。前の仕事は主として知力が司り、後の仕事は主として想像力が司る。

想像力の特徴は衝動の對象たる個々の知覺より其等の色彩と形態との富贍を減殺することなく、其等を一つの全體に總合することである。わたくし共の經驗の有てる色彩と形態とはわたくし共の生活の重要なる成分としてわたくし共に取つて一つの價値である。さうであるがために、人間は文化の如何なる程度にあるも、彼れの生涯を通じて彼れの想像力に依つて色彩と形態との鑑賞に多大の興味を有し、其等の洗練に多大の工夫を費やす。想像力が其れの發動の頂點に達して色彩と形態との美の鑑賞に滿足せず、進んで其等の美の洗練を目的として來ると、そこに一種の活動が生ずる。わたくし共はこの活動を藝術と名付けるのである。

如何なる時代に於ける藝術と雖も、生活の中に美を創造することを其れの職分として來た。然し、如何なるものが美であるか、如何なる方法に依つて美は創造さるべきものであるかの點に關しては、時代の相違するにつれて非常な相違がある。クラシシズムの解釋と理會とに隨へば、眞の藝術は特殊の中に潛在して、其等の個々の表現の淵源であり、動力となつて居る普遍を發揮して、其れに見らるべき、若しくは觸れらるべき樣式を與へるものでなければならぬとされた。

例を彫刻に取つて言ふならば、實際に見出だされる人間の身體は如何に視觸を欣ばすほどのものでも、其等は悉とく個性に制限された上、瞬間の表情と動作とに制限されたものであるから眞の藝術に依つて理想とさるべき美ではない。眞の藝術に依つて理想とさるゝほどの價値ある美は、瞬間の表情や動作に制限されてはならないのみならず、個性に制限されてはならない。其れはあらゆる個性に共通するが、孰づれの個性にも偏せず、汎く、深く、人間の普遍性となつ

て居るものを把持し、表現したものでなければならない。其れはあらゆる場合に應ずることの出來る表情と、動作とを豐潤に、剛健に包容したものでなければならぬ。然し、其れは外にはたらいて居る力ではなくして、中に潜んで居る力である。中に潜んで如何なる機會に遭遇するとも、綽々たる餘裕を以て千變萬化して、其れの要求に應じ得る力である。ギリシヤの彫刻が泣かず、笑はず、怒らず、泰然自若の姿勢を取つて居るのは、さうする力を闕くためにさうして居るのではない、其等の一つに費やすよりは、無限倍の力を有つことを示すがためにさうして居るのである。ギリシヤの彫刻が其れの材料として、色の中で、一見最も單純であつて、其の實、最も蘊蓄多き白色の大理石を擇んだのも、其れの内容に相應して重大なる意味のあつたことである。

同じクラシシズムの藝術にしても、ギリシヤ人が悲劇に依つて運出しようとした思想は彼等が彫刻に依つて運出しようとした思想とは其の相を異にして居た。彼等が彫刻に依つて運出しようとした思想は人間の普遍性であつたが、彼等が悲劇に依つて運出しようとした思想は宇宙の普遍律であつた。總べてのギリシヤの悲劇の題目は宇宙の意思と人間の意思との間に葛藤の生じた場合には、如何に後者は苦鬪し、煩悶するも、遂には前者のために壓服され、破壞されるに至る筋道であつた。然し、彼等に依つて宇宙の意思とされたものは、其れが運命と名付けられるにしても、何と名付けられるにしても、苟くも其れが法則、若しくは、命令として人間の生活と交渉を有ち、又、さうであることが彼れに依つて理會され、納得され得るものならば、畢竟するに、其れは過去に於ける長き經驗に依つて人間の生活の中に沈澱した處世の方針に關する本能、習慣、儀禮等に他なる筈はない。そして、わたくし共にして尠しく其等の志向と功利との上に考察を施す時、わたくし共は確かに其等がさういふものであることを發見するのである。さうすると、ギリシヤの悲劇は飽くまで舊き傳統の權威を高唱して、其れの下に新らしき衝動、若しくは、欲求を服從せしめることを生活の信

條としたのであつた。總じて的確なる意味に於て、悲劇的とは或る事件の企に闘して敗殘せる主人公の悲慘なる最後を指すのではない。たゞ其れだけならば、或はむごたらしいとか、或は血腥いとか、或は痛ましさの極だとか謂はれやうが、決して悲劇的とは謂はれない。さういふ破目に陷つた主人公が、おのれのさういふ最後を宇宙の、若しくは、人生の法則より來たる當然の約束として認識し、肯定するところに悲劇的の意義は始めて成立するのである。この意味で、ギリシヤの悲劇が描寫しようと努めた事件の結末は確かに悲劇的であつた。何故ならば、此等の主人公はおのれの企が祖國の傳統への反逆であつたために、おのれ悲慘の最後を遂げながら、尙ほ其等の合理性と必然性とを認識し、肯定したからである。ギリシヤの悲劇は壯大に深刻に、悲劇的の美を發揮したものとして、確かに千古に亙つてあらゆる悲劇の典型であらねばならぬ。

斯くして、クラシシズムの藝術は、其れの彫刻にすれば個性の發動を無視して獨り永遠の人間性を重視し、其れの悲劇にすれば　個人の意思と社會の制度とが衝突に來たつた時に、いつでも前者は後者の前に屈服すべきものであることを力說したのであつた。

こゝでわたくしが辯證學とクラシシズムとに就いて說明したところのものが事實の眞相を捕捉して居るとしたならば、其等が專制政治と相竢つて、專制主義なる一體の三用として如何に互に提携し、塡補し合つて居たかが推察出來、其等を機關として居た人々の情操と、思索と、交際との全體が推測出來るといふものである。そして、此等は悉く哲人主義が專制主義の形を以てはたらいて居た間の人間の生活一般のはたらき振りであつたのである。

わたくしはウオルタア・パチオットと倶に、人間の文化の或る段階に於て、專制主義が其れの建設と發展とに多くの貢獻を爲したことを承認するに躊躇する者ではない。人の心の中に忠誠の精神と勤勉の習慣と、卓越・欽信する情操と

を植え付けた如きは其等の最大なるものである。然しながら、其の後、人間が次第に達し得た覺悟よりすれば、專制主義は此等の效果を收めるために、彼等の到底忍ぶことの出來ない多くの犧牲を造つて居た。永劫に亙る人間の文化の進程より見ると、個人は出來得るだけ彼れの才能を完成することを其の理想として居り、社會は其れの各のメンバアより出來得るだけ殊なる、そして、卓越した奉仕を受けると同時に、出來得るだけの公正の考慮を以て其等の各の業績を待つことを其の理想として居る。さうすると、此等の個人的理想と社會的理想との兩方の實現を阻害する專制主義は其等の實現に一層便利なものにまで變形するか、さもなくば、さういふものに依りて取つて代はられねばならぬ。

ジエ・エス・ミルは、專制國が其れの子弟を教育するといふことは一つの矛盾である、彼等を教育することは、やがて彼等の理智を啓發することになり、啓發されたる理智はやがて專制に對する反逆とならねばならぬ、といふ意味のことをどこかで述べて居る。然し、民を愚にする政治の下には、又、民を愚にする教育が施されて居たのであるから、五百年、乃至、千年といふ長い期間に亙つてさへも、ミルが想像したやうに專制國の教育の結果が直ちに其れへの反逆となつたことは、不幸にして餘りに稀有の事實であつた。然し、若し幸にして事實がミルの談理して居るやうに都合よく經過したのであつたならば、それこそ、人間の文化の或る期間に於ける一つの制度としての機能より、宜しく專制主義が志向して居らなければならなかつたものである。

專制主義はおのれを超越して漸次に合議主義にまで變形して行くのを以て其れの出現の、そして、其れの活動の唯一の理由として居るべきであつた。然し、(こゝには細論して居るわけには行かぬが、)わたしが曾て生物的法則、及び、社交的傾向と呼んだ二種の惰力の微妙なる交錯に依つて、人間の生活の中に發生したあらゆる計畫、若しくは、制度と等しく、專制主義も人間の文化の全體よりおのれに賦課された權能を正確に自覺することが出來なかつた。其れの權能

が推移的に作用として成り立つことに氣付かずして、永久的に本質として其れを持續しようとした。そして、さうすることが時勢の推移し、隨つて、要求の變化するにつれて、如何に多くの障礙と損害とを人間の生活に與へるかに全然盲目となつた。そこで、其れをしておのれに賦課された機能を正確に自覺せしめるものは其れ以外に在つて、其れの生殺と廢立とを司る絶大なる權威者より來たらなければならない。この權威者は不可思議なる人間の生活そのものに他ならい。斯くして專制主義の改造は獨り其れと其れに反抗するために起つた新らしき理想、若しくは、方針との間の爭闘となつて現はれることになる。

專制主義より合議主義への橋梁となつた爭闘の歴史はわたくし共に取つて極めて興味ある、そして、多大の教訓を含んだ歴史である。其れはわたくし共がわたくし共の現在の生活を理會するためには輕視することを許さぬ一つの人間文書である。何故ならば、廣くはデモクラシイの意義に關し、狹くは代議政治の運用に關して、容易に拔き去り難き誤謬と偏執とはあの爭闘の行き掛りと過程との中に胚胎され、決定されたからである。

專制主義より合議主義への橋梁となつた爭闘の歴史を支配したものは嚴密に言へば主義と名付けられるよりも、寧ろ氣分、若しくは、情操と名付けられるのを妥當としたものであつた。何故ならば、それは大局の上より觀て、大體に於て集合する結果を齎すやうに、同じ方角に向つて進んで居たことは居たが、(例へば、專制主義、又は合議主義の如く)一つの知見に依つて統卒された手段の總和ではなくして、てんでに獨立の興味を有ち、其の興味を滿たさうと努めて居た試みの響應であつたからである。それには現在の桎梏より脱却するために一致し得る氣分はあつたが、それには將來の幸福を建設するために統一された理想はなかつた。されば、若しわたくし共にして辭令より強いて其れに一つの主義としての名稱を與へるならば、反抗主義が相當するものであらう。さうすると、わたくしはこゝに其れの派出として政

治に現はれたものに革命主義の名稱を、學問に現はれたものに、經驗說の名稱を、そして、最後に藝術に現はれたものにロオマンチシズムの名稱を與へることにする。

實に人間があの反抗主義を道具としておのれの文化の精神と組織との立て直しを圖つた時代は偉大であつた。それは千古に亙つて人間の威力のために陸離たる光彩を發するものである。其れの功績の赫灼たるものがあつたと同時に、其れの破壞の慘憺たるものがあつたが、前者は後者を償うて尙ほ餘りあつた。其れが或る時は正路に逡巡し、或る時は彷徨に彷徨し、幾多の誤謬と失敗とを重ねながら、初めに糢糊たる衝動として著想したものを終に明瞭なる方針として實現するまでに至つた經過は可なりに紛糾と、錯雜とを極めて居るが、其れを貫通して絕えずはたらいて居た中心事實といふものは簡單に說明することが出來る。其れは、一方に於て既に其れの機能を失なつたが、無理な手段に訴へても其れの權威を保持しようとする制度が存在し、他の一方に於て漸く其の制度の抑壓より來たる苦痛に堪えられなくなつたが、其れを適當に改整する方策と力量とを具へない欲求が發生した時に、此等兩者の間の關係として自然に化醸されるものである。この關係の特徵は孰づれの一方にしてもおのれの立場を、一層正確に言へば、おのれの立場に膠して獨りおのれの情操が解釋したもの樣のみを急に正當とする結果、他の一方の存在と意義とに對して絕大の不信と無制限の反感とを抱くことになる。

人間の生活の根本材料たる衝動は、其れの道具たるがために元來、樣式たる要素と、內容たる要素とを含む。彼れが生活し始め、經驗を蓄積し、醇化して、或る方針を形造つた後は、此等は個人的にも、社會的にも、時間的に、即ち、相續的に見れば、此等の二つのものの中で樣式たる側面は舊き制度の側面を代表し、內容たる要素は新らしき欲求の側面を代表することになる。舊き制度は新らしき欲求を統率して其れの渙散を防ぎ、新らしき欲求は舊き制度を擴充して

共れの新鮮を保つ。此れが人間の生活の一般圖式である。如何なる時代に在り、如何なる場合に方つても、共れが人間の生活であらん限り、決してこの圖式を出るものではない、又、この圖式の他に成り立ち得るものではない。極端なる守舊も極端なる急進も、悉とくこの圖式の內に於ての相違のことである。然し、久しきに亙つて舊き制度が隨時に新らしき欲求より來たる改造の計畫を排斥し、一向に固定したおのれの體系を株守して行くと、共れと新らしき欲求との間に一つの鴻溝が劃せられる。新らしき欲求がこの鴻溝を徹するの道を謀り而かも、理智を以て共れを謀らずして感情を以て共れを謀らうとすると、そこに反抗主義が胚胎するのである。

『革命はフランスに新らしき何物をも齎らさなかつた、』と『歐羅巴と佛蘭西革命』の著者アルベエル・ソオレルは言つた。此れは主として共れの國民性の偉大さを高調するためであつた。然し、如何なる時代に起つた如何なる運動に就いても此れと同樣な觀察はなされ得ることであつて、或る觀點からすれば、共れは永久に亙つて一個のツルイズムとして受け取られねばならぬ。人間の言語にして、思索方法にして、彼れが正しとし、美とし、善とするものにして、約するに、彼れの性情にして一つの運動に依つて一變され得るものでない限りは、共の運動がどれほど宏大であり、到徹のものであつても、共れが變更したものは、共れが變更せずして、若しくは、變更することが出來ずして、殘したものに比して極めて微々たるに定つて居る。然し、あらゆる運動の成績をこのやうに觀るのは冷靜なる理智の判斷であつて、激越せる感情の評價ではない。共れが人間の性情を一變し得るものと觀、共の確信に隨つて一徹に驀進するところに激越せる感情の評價の特色があるのである。そして、反抗主義はかゝる感情を共れのベヒクルとして居るが爲めに、その局に當つて往々にして能く大事を成し遂げるのである。尠なくとも過去に於ては確かにさうであつた。舊き制度の利害と新らしき欲求の利害との撞著がカアライルの言葉を借りれば『吾れ汝を殺すか、汝吾を殺すか』の險惡な性質を取つて來

た時に、その切迫した形勢を打開し得るものは、最早、彼我の合理性を相對的に商量して、そこに妥協を策する理智の判斷ではなくして、絶對的に彼れの合理性を拒否し、我れの合理性を主張し、一擧にして勝敗を決しようとする感情の評價であつたのである。

人間の生活の中には、其れが如何なる時代に於て、如何なる場合に方つて出現するにしても、其れの根本性質から長い間の過去を通して多大の努力と工夫とを以て創造され、修正され、繼承されて來たものがある。此等は其れの根本性質と倶に嚴密に人間的と呼ばれ得るものであつて、如何なる運動と雖も、其れが眞に賢明であり、おのれの將に爲し遂げようとして居る事業の性質と範圍とに關して明確なる理會を有つて居る以上、十分に其等の價値を承認しなければならぬものである。其等の價値を承認すまいとするのは、恰も天に向つて唾するのに等しきものである。然し、事實として、其等は撲滅さるべき、若しくは、改廢さるべき制度や、その他のものと纏綿してはたらいて居るのを常とするがために、反抗主義は制度や、その他のものの價値を否定しようとして、其等より引き離して此等のものの價値を承認することを怠つたのである、知らなかつたのである。この點よりして、反抗主義は確かに一つの自己眩惑であつた。僅々なる必要のものを建設せんがために、不必要に有用なるものの多數を破壞しようとする不明の事業を企てゝ居たのである。卵を壞さないならばオムレツは出來ない。如何にもその通りである。然し、反抗主義の所爲は尠しばかりのオムレツを作るのに澤山の卵を無駄にしようとするに等しきものであつた。然しながら、既に人間の過去の歴史に於て反抗主義に依らざれば彼れの生活の様式と其れに關する情操とを轉換することの出來なかつた時期のあつたことを承認するわたしは、其れがどれほど、どんな種の過失に陷つたとしても、その理由で、苛酷に其れを責めようとは欲しない。其れは其れの有てる、若しくは有ち得た最大の光りに隨つて行かなつたのである。たゞわたくしは其れの勇敢を偉なりとし、其れ

の行績に感謝すると同時に、わたくし共の理會と覺悟とに基づき、其れの所爲より一つの教訓を引き出さうと欲するだけである。

斯くして、反抗主義は其れの分派たる政治に於ける革命主義、學問に於ける經驗説、藝術に於けるロオマンチシズムを通じて、人間の生活の方針としては三つの缺陷を含んで居た。一、コンヴエンションの嫌悪、二、協同作用の沒却、三、叡智の相違及び才能の適應性の相違の認識に對する躊躇等が、即ち、其等である。此等の缺陷は其等が革命主義の中に見出だされると、經驗説の中に見出だされると、乃至、ロオマンチシズムの中に見出だされるとに依つて、其の分量を同じくせず、又、其等の各の態容を大分異にして居るが、其等は政治と、學問と、藝術との人間の生活に對して機能を一にせざるところより來つて居るのであつて、詮ずるところ、此等の三つのものの及び、其等の結合の變形である。革命主義の政治と、經驗説の學問と、ロオマンチシズムの藝術とはわたくし共の生活を近代化し、わたくし共を近代人たらしめた極めて貴重な三つの遺産である。わたくし共は公正に其等を尊重せねばならぬ。然し『遺産を能く運用する者にして、始めて其れを所有するのである』といふゲエテの意見に於て眞實であるならば、わたくし共は此等の三つのものの精神の相續者となるために、其等の形骸の放棄者たるの覺悟を有つことを忘れてはならぬ。

コンヴエンションと、協同作用と、叡智の相違及び才能の適應性の相違の認識は人間の生活を組織し、支持する骨髓である。此等は人間の生活に在つて哲人主義の幹根を爲し、萌實を結んで居るものである。此等を閑いて永恒に亙つて人間に取つて如何なる種の生活と雖も成り立つ筈はない。事實さうであるとすると、反抗主義が此等のはたらきを輕視したのみならず、此等の存在さへも無視しようとしたのは纔かに其れの氣分に於てであつた、其れの實行に於ては、始めより終りまで、盲目に、然し力強く其等のはたらきに依つて推進されて居つたものとせねばならぬ。事實、さうであ

つたことは反抗主義が人間の文化のあらゆる段階の中で、最も完全に此等のものの機能の發揮され得る合議主義への必須の橋梁であつた一事に鑑みても明瞭である。但し、反抗主義の支配して居た期間に亙つて、哲人主義は極端なる變形を取り、極端に變則にはたらいて居たことをわたくし共は否むわけにはゆかぬ。それは現在の生活の改善に關して其等のものの機能を沮止し、其れの全部を暗中に摸索しながら、未知の生活の創造に向つて傾注して居たからである。

畢竟するに、反抗主義は其れの志向からしても中間の、而かも、短期に限られての生活の方針である。人間の文化進程に於ける其れの意義は、永遠に、其れの二大方針として殘るべき專制主義より合議主義への橋梁としてのみ始めて成り立つのである。專制主義に於ける生活の方針は舊き制度を以て新らしき欲求を抑制することに依つて作られた。合議主義に於ける生活の方針は新らしき欲求を以て舊き制度を擴充することに依つて作られる。專制主義に於ては、國家の制度を維持することが主であつて、この目的に合する限り、個人の欲求を滿たすの道が講ぜられたのである。合議主義に於ては、個人の欲求を啓發することが主となつてこの目的を達するために國家の制度を改めるの道が講ぜられるのである。そして、この主從の關係の顚倒を齎らしたものが反抗主義であつた。一旦反抗主義の手に於て殆ど乖離の極に達するまでに混亂の狀態に陷らしめられた人間の生活を組織する其れの樣式と其れの內容との二要素は、反抗主義の硫黃の洗禮に依つて再び其れの平衡を回復することが出來た。然し、其れの性質に至つては大分に異なるものがあつた。專制主義の理想としたものは靜的平衡であつたのに、合議主義の理想とするものは動的平衡である。大觀すれば、實に人間の仕事は、古今を通じて、彼れの生活の內其作より隨時に破壞される其れの平衡を隨時に回復して行くことにあると言へる。然し、其れを靜的に回復しようとするのと、動的に回復しようとするのとの間には其れの意義に於て、其れの手段に於て若干の相違がある。何人にしても、苟くも古代人の生活と現代人の生活との特徵に關して一通りの知識と理

會とを有つ者にして、古代人の生活の特徴は靜的平衡を立して行かうとしたところにあるが、現代人の生活の特徴は動的平衡を立して行かうとするところにあるとするわたくしのこの意見に同意しないものは一人もあるまいと想はれる。古代人の物理學に在つては、靜止は物體の常態であり、運動は其れの變態であつたのが、近代人の物理學に於ては、靜止は運動の一つの樣式であると定義されて、運動が物體の常態であつて、靜止は其れの變態であるとされて居るが如きは、たまたま、生活全體に對する兩者の覺悟の相違の一象徵に過ぎない。

わたくしの理會に隨へば、合議主義に依つて志向される文化は文化の精華であり、頂點である。あらゆる文化の段階の下に發生し、爭鬪と交錯とを續けて來た總べてのものは、譬へば百川海に宗朝するが如く、悉とく合議主義の文化に至つてそれぞれおのれの役目の自覺を得て、てんでに適處に就いた觀がある。哲人主義は合議主義となつて、始めての其れの良心を得たのである。

合議主義とは其の言葉の暗示する如く、人間の生活は、其れが個人的にはたらくと、社會的にはたらくとに論なく、其れを組織する總べての要素の間の作用、即ち、合議によつて始めて完全に成り立つものであるとする見解と　實行とに依つて支配される生活の方針の總稱である、言ひ換へれば、一個人の生活に在つては、個々の衝動が、個人の生活と個人の生活との間に在つては、個々の意思が最も合理に、隨つて、最も自由に交渉し、發動して居る生活の方針の總稱である。何故ならば、若しそこに力といふものがはたらいて居るならば、其れはたゞ其等の協同の樣式であり、若しそこに制度といふものが見出されるならば、其れはたゞ其等の欲求の體現であるからである。之れを要するに、そこに何等の外的のものなく、そこに在るものは悉とく内的であるのがこの合議主義の生活の方針の特徴である。わたくしはかゝる事物の狀態が今日遺憾なく實現されて居るとは考へない。現に在る事物の狀態はこの理想に達せざること遙かに

遂いのである、然しながら、今日に於てはわたくし共の總べては、個人として、社會人としてわたくし共の現に有てる總べての機關を利用して、一向專念、一歩一歩この理想の實現に近寄らうとして居ることに一點の疑を挾む餘地はない。

今日、わたくし共が合議主義の終局の理想を實現しようとして居るに方つて、之れが最大なる障礙を爲して居るものは、わたくし共がまだ反抗主義に含まれた缺陷を會得せず、隨つて、其れの主張と感化とより十分に解脫し切らぬことである。言ひ換へれば、合議主義は其れの理想の實現の手段としてコンヴエンションの嫌惡と、協同作用の沒却と、叡智の相違、及び才能の適應性の相違の認識に對する躊躇とを抱擁するのみならず、其等をおのれの理想の實現に缺くべからざるものと盲信して居ることである。合議主義は人間の生活に於て此等のもののはたらきが漸く圓熟して來て後、始めて其れの方針として彼れに依つて採用されたものである。其れの原理は此等のものの十分なる活動の上に置かれて居るのである。されば人間の生活に於て此等のものが十分に其の機能を發揚すればするほど、合議主義の根柢は其の鞏固を增して來るといふものである。

合議主義は現にわたくし共が營みつゝある生活の方針の總稱である。されば、さきにわたくしが爲した例に倣つて、其れの派出を政治と、學問と、藝術とに求めるならば、其れが政治に於て現はれたものは代議政治であり、學問に於て現はれたものは實驗學であり、藝術に於て現はれたものは象徵主義である。そして、政治と、學問と、藝術とは合議主義の下に於て、其等が專制主義や反抗主義の下にあつた場合に、到底達し得られなかつた程度に互に交徹し、融通するのである。合議主義の下に在つては、學問と藝術とは政治の手段として其れに隷屬するがために、其れの特色を分受するのではなくして、政治と、學問と、藝術とは、各同格を以て協同し合ふがために同一の色彩を共有して居るので

ある。マシユウ・アアノルドは、『自分は何物にも勝りて教化に關心する。然し、秩序の成り立たないところに決して教化は發達しない。そして、秩序を成り立たせるものは政治である。この限りに於て、自分は善き政治を尊重する』といふやうな意味のことを述べて居る。サンタヤナに取つても、政治は協同生活の基礎を据えるものとして重要な方便ではあつたが、人間が協同生活の最後の樣式として之れが實現に努力しなければならないものは、全然、政治のはたらきを超越した學問と、藝術と、宗教とのはたらきに依つて組織された、彼れの謂ふところの『理想社會』であつた。ニイチエに至つては、始めより政治のはたらきには百害あつて一利なしとしたものであつて、『國家亡びてそこに始めて個人あり』とまで極言して居る。概して教化のチヤンピオンなる者は政治の機能に對してこのやうな意見を懷抱するのである。然し、此れは一つの僻見に過ぎないとわたくしは考へる。わたくしの考へるところでは、人間にして彼れの人間性を失はざる限り、政治は永久に教化の一つの、而かも、重要なる一つの機關として彼れの生活に於てはたらいて行かなければならないものである。たゞさうあるためには、政治は生活の組織と、理想との變遷に鑑みて、絕えず、他の機關に及ぼす影響の考慮より、若しくは他の機關と協調を保つて行く考慮より、おのれのはたらき振りと生活全體に於けるおのれの位置とを反省しなければならない。それぞれ一つの機能を以て或る側面より生活全體を統一して居る一事に關しては、學問にしても、藝術にしても、總べての機關が悉とく然りである。政治が其れの機能の本質より、特にさうして居る外觀を呈するとも、其れがために其等に君臨するやうな僭越な態度を取つてはならない。これだけの意味のことは學問と藝術との機能に關しても、言はれ得ることであり、又、言はねばならぬことであるが、たゞ、今日の事情の行き掛りより、政治に對つては消極的に其れの機能を佽いて其れの僭越を抑へ、學問と藝術とに對つては積極的に其等の機能を說いて其等の卑屈を伸べようとわたくしは思ふだけである。そして、合理主義に至つて、政治も、學問も、藝術

も、始めてこの自覺に達したのである。尠なくとも、この自覺に達する端緒を得たのである。さきに、わたくしが合議主義の下に在つては、政治と、學問と、藝術とは、其等が專制主義や反抗主義の下にあつたよりも、遙かに互ひに交徹し、融通するに至つたとは、この好ましき曙光を指して言つたのである。

それならば、合議主義の下にある、一層正確に言へば、合議主義の派出としてそれぞれ代議政治、實驗學、象徴主義の形を取つた政治と、學問と、藝術とは如何なる組織を有し、生活全體に對して如何なる機能をはたらかして居るか。

わたくしは政治よりわたくしの考察を始めることにする。

人間は彼れの根本性情より一つの協同生活を組織することに依つて、若しくは、其れに仲間入りすることに依つて、始めて彼れの人間性を完成することが出來る。彼れの個性は社會性を假定し、社會性に依つて浸透された個性である。學問も、藝術も、政治も、衝動として彼れの性情の中に潜在する。然し、其等が彼れの欲求を滿たす機關にまで形造られるのは、彼れが實際に一つの協同生活を營んでからのことである。されば嚴密なる意味に於て、學問にしても、藝術にしても、政治にしても、協同生活の所産である。この一點よりすれば、ドイツの學者が英米思潮の缺陷を是正するつもりで、平板に、饒舌に、全體は部分に先行すると力說することに倦まず、たゞさう紙型式に力說しさへすれば、個人と社會との關係の總べては悉とく明瞭に解釋されたかのやうに想像して居る稚氣にも多大の理由は見出だされる。特に政治に至つては、其れに特有なる機能よりして、卓越した意味で協同生活の志向を保障するために其れを營む總べての個人に依つて工夫されたのである。

小數の惡人を除き、個人の多數は彼等の營む協同生活の繁榮のためにそれぞれ或るものを寄與して居る。彼等は、又それぞれおのれの幸福のために、其れより利得するところのあるのは當然である。窮竟するに、政治は出來るだけ一つの

協同團體と其れを營む總べてのメンバアとの間に成り立つ Give and Take の關係を公正にし、其れの効果を高揚する方便に他ならない。されば政治は其の協同生活を營む總べての個人の意思に依つて形造られ、彼等の要求を參照して執行さるべきものである。これだけのことは政治一般の通義である。如何に極端なる獨裁主義の政治と雖も、この條件を無視したならば其れの機能は停頓して了ふやうに、如何に極端なる民主主義の政治と雖も、其れの役目の一切はたゞこの條件を尊重するだけのことである。

それでは、專制政治と合議政治との間に何等の相違もないか。無論、大いにある。然し其の相違は志向に關してではなくして、手續きに關してである。そして政治に於ては、手續きの相違が極めて重要な意義を有つて居るのである。つまり、民衆の欲求を滿たすために、彼等の意思に依つて其れの方針の形造られることに關しては、專制政治と代議政治との間に何等の相違はないが、其等の意志の發動するプロッセスと其等の欲求の發見される方法とに至つては、專制政治と代議政治との何には、間接と直接との相違があるのである。そして、人間の叡智と德性とが發達し、修練を經てだんだんに協同生活に堪えるやうになつて來るに隨つて、間接に發動し、發見されるものよりも、直接に發動し、發見されるものの方が優れて居ることは明白である。この事實よりして、今日の、及び、今後の政治は代議政治でなければならぬ。其れが代議的たるに於てますます完成されねばならぬとわたくしは考へ、且つ、斷ずる者である。

わたくしは今日代議政治が一層正確に言へば、代議政治と呼び做されて居るものが、非常な不信用と不許判とに陷つて居ることを知り、そして其れには多分の根柢のあることを知つて居る。論者は代議政治と民衆一般の幸福とは氷炭相容れざるものと極論して居る。然し、彼等が今日の代議政治を非難するのは、其れが代議政治であるからではなくして、其れが代議政治の名を冒しながら、其れの實を擧げて居らないからである。詳しく言へば、其れは、今日とは大い

に其の社會組織と社會理想とを異にした十七世紀、十八世紀の遺物たる抽象個人主義の集團より全く脫し得ず、人間の政治的自由を尊重する形式デモクラシイに踏躊して彼れの經濟的自由を計畫する實質デモクラシイにまで進展することを知らざる結果、一つの協同生活を營む總べての個人の利益を考慮するやうにはたらいて居らないで、纔かに彼等の或る者の利益を庇護するやうにはたらいて居るからである。されば、若應世の中に現行の代議政治を目して缺陷多きものとし、其れに取つて代はるために來たるものがあるならば、其れは如何なる聲明と、組織と、希望とを以て來たるにしても、其れの本質に於て、結局、代議政治たるの範疇を脫するものでないとわたくしは確く信じて居る。人間の性情の一變せざる限り、一つの協同團體に屬する總べてのメンバアが舉つて最も適切に、卽ち、最も直接に其れの生活の方針を討議する道は或る種の代議政治を外にして一つもあり得ない。一個人の生活に於てそこにある總體衝動がそのまゝ其れの方針とならず、其等の醇化されて出來る一般衝動だけが其れの方針となると同じ原理で、協同團體の生活に於てもそこに在る總體意思がそのまゝ其れの方針とならずして、其等の醇化されて出來た一般意思が其れの方針となるものならば、等しく其れの決定に參與しながら、交代にでもせよ、一時に方つて彼等の或るものは代表者となり、他の或るものは被代表者となることは必然であり、自然である。一つの同協團體に屬する總べてのメンバアが一堂に會して其れの生活の方針を討議することの永久に不可行なるべきは彼等の數より來たる不便に根柢するのではなくして、主として、さうすることの彼等の意思を醇化する方法としての不備に根柢するのである。(姑らく現行のプロツセスを借りて例說するならば、)尠なくとも道理としては、若くは、理想としては、彼等が代議士を選擧する時に、彼等の意思は醇化され、代議士の彼等の黨內に於て相談し、議會に於て討議する間に、彼等の意思は彼等のより優れた意思に依つて醇化される。このやうに、幾度か醇化の異なる段階を經て行つて、始めて個々の民衆の意思は國家の意思にまで統一されるのであ

る。

往年、竹越與三郎氏が『國民讀本』と稱する青年向きの一書を著はされたことがあつた。西園寺公（當時、侯）は其れに題して、『民可使知之、不可使由之』とされたのであつた。此れは孔子の言として『論語』に出て居る『民可使由之、不可使知之』の旨趣を逆にしたのであつた。一字の改竄に依つて、（彼れの所見に隨つて）專制政治と代議政治との基本精神の相違を明らかにしようとしたところに西園寺公の機智は窺はれるのであるが、わたしは孔子の意見が專制政治の眞に憑據すべき精神の説明としては一方に偏し過ぎて居ると同じやうに、公の意見は代議政治の眞に憑據すべき精神の説明としては他の一方に偏し過ぎるところがあると考へる。若し個々の民衆の意思が到底其のまゝ直ちに國家の意思ではなくして、此等がさうなるためには幾段階の醇化を經なければならないならば、代議政治の眞に憑據すべき精神は民衆をしてどこどこまでも其れの政策を知らせることを努めなければならないが、さうしたところで、彼等をして其れに由らしめるの一部分は殘らねばならぬ、否、一部分を殘さねばならぬものである。

總じて一つ一つにはそれぞれ多少の道理はあるが、互に矛盾するところのある多くの意思を材料として、一つの意思を構成するには、どうしても其等は代償の方法に依つて醇化されねばならぬものである。例へば、こゝに一つの事件に關聯して利害を共有するが、其れの處置に就いて意見を異にする二人の人物があり、そして彼等だけではどうしても一致點に到著することが出來ないために、彼等は之れが仲裁を第三者に托したとする。この場合に、彼等の間の爭議を調停し得る資格のあるものは甲の主張だけを理會し、全然其れに同意して了はず、又、乙の主張だけを理會し、全然其れに同意して了はずに、親切に兩方の主張を理會しながら、公正に其等の價値を審判し、兩方の主張より一層濶き見地に立ち、一層深き道理より總合し、統一する者でなければならない。さういふことを爲し得る人にして、始めて嚴正な意

味に於て此等兩人の意思を代表するといふものである。代議とは、在るがまゝの意思に拘束せらるゝことなく、又、其等を超越することなく、終始、其等の志向に即しながら、其等に潜在する意義を發揮することに依つて其等を醇化することである。この事實よりして、わたくしは代議政治は政治のヴェヒクルとしてこれまで人間に依つて工夫されたものの中で最も完全なるものであるとするものである。

今日、正確に代議政治の性質と作用とを理會する上に取つて、甚だしく其れの照準を失はせて居るものは、其れが其れの內具價値に於て取られずして、其れの表記價値に於て取られて居ることである。この表記價値は其の始め歷史上の行き掛りより鑄出され、それから後、其れの虛僞であることを覺ると、覺らざるとに論なく、其れを警言することはおのれに便利とされた代々の當事者に依つて蹈襲されて來たものである。其れの內具價値は人間の根本性情に參照して、其れの實際のはたらき振りを考察して發見されるものである。一國の方針は選擧人の意思に依つて決せらるるものである。被選擧人はたゞ其等を仲介するに過ぎない。これは表記價値である。選擧人の意思はそのまゝ一國の方針とはなり得ない。幾つかの段階に於て幾つかの機關と人格とを通して醇化されて、始めてさうなり得るのである。これは內具價値である。わたくしが不思議に堪えないのは當事者は兎に角として、代議政治の批評家。非難者までが、盲目に沒批判に其れの表記價値を受け取つて、其れの缺陷として批評し、非難して居ることである。『如何なる種の集團に就いて見ても事實としては愚人賢者に比して其の數に於て遙かに多い。隨つて選擧にしても、議會の議事にしても、多數に依つて決せられる以上は、畢竟するに、代議政治は衆愚に依つて左右される政治である』と無雜作に結論する如きは、彼等の盲目に、沒批判に、其れの表記價値を受け取つて居る一例である。斯くの如きは、あらゆる樣式の政治に於けるよりも、代議政治に於て民衆の意思は最も明確に、最も敏活に、表現されると同時に、愚人の意志は賢者の意思に依つて最

も完全に醇化されるといふ代議政治の最大なるメリツトの一つを閑却し、没却して居るものである。

民衆の意思は醇化されて始めて一國の意思となるものである。それに拘はらず、否、それであるから、わたくしは代議政治に參與する民衆は聰明であらねばならぬといふのである。昔、或る人がデモストニイスに對つて、雄辯術に取つて第一の秘訣は何かと問うた時に、彼れは言下に其れは活氣であると答へた。そこで、それでは第二の秘訣は何かと折り返して尋ねた時に、彼れは第二の秘訣も活氣、第三の秘訣も活氣と答へたさうである。實に、聰明なることは、代議政治に參與する民衆の具へなければならない第一の、第二の、第三の、そしてあらゆる資格である。彼等が聰明であることの大切なことは幾度重ねて力說しても決して其の煩を覺えぬほどである。彼等が聰明であつてこそ、始めて適切に彼等の意思を形造り得、其等の意思を公正に醇化して、其等を一國の意思となす彼等の代表者を鑑識し得るのである。

代議政治は理想の政治である、永遠に一つの理想として殘るべき政治である。それは現在に於て見出だされるよりも、近き將來に於て見出だされるよりも、遙かに、遙かに聰明なる、そして、善良なる民衆の存在を假定して工夫されたものであるからである。隨つて其れが現在の民衆に依つて運用される時に、其れがいろいろの矛盾と破綻と、過失を化醸するのは洵に止むを得ない。畢竟するに、今日のところ代議政治はなほ一つの要求であつて、一つの現實ではない。然し、わたくし共にして既にこの理想の實現に着手したからには、わたくし共は能く其れの縕義を理會し、其の縕義に隨つて、一日も早く其れを現實とすることに努力せねばならぬ。

次に、わたくしは合議主義の派出たる學問、即ち、實驗學を考察して見る。

さきにも一通り說明した通り、宇宙と人生との性質の理會に關して、古代人と近世人との間には非常な相違がある。古代人は其等を既定のものと理會したに反して、近世人は其等を未定のものと理會する。既定なるが故に、古代人に取

つて正しき生活は其等に適合するやうに生きることであつた。未定であるが故に、近世人に取つて新しき生活は新たに適當に其等を構成するやうに生きることである。斯くして古代人の生活の機關として辯證學が組織され、近世人の生活の機關として實驗學が組織されたのである。

中世紀の終り、近世紀の初めに至つて　人間の生活の組織と理想とは既に靜的より動的に、保守的より改造的に移つた後までも、古代人の思想はいろいろの行き掛りより、其の餘威を以て人の心を壓迫し、拘束して居た。當時、學問の志向と生活の欲求との間に大なる矛盾のあるのを感じ、後者の解放のために前者の改革を唱へ出したのはヒエウマンニトであつた。彼等は形而上學を以て人間の幸福に有害でなければ無用のものとし、之れに取つて代はらねばならぬものとして科學を唱道したのであつた。彼等の情操と考へ方との中には大分に尙ほ形而上學の痕跡を止め、科學の概念と研究方法とに關しても尠しも明確なる了解を有たなかつたのである。されば、嚴密なる意味に於て、彼等は科學の創始者ではなかつたが彼等は確かに科學の氣運の開拓者ではあつたのである。

『自然を支配しようとするならば、吾人は先づ其れに事へねばならぬ』とはベエコンの喝破したところのものである。この格言の中には、到底當時の形而上學の中に見出だされ得ない二つの新鮮なる思想が目的と方便との關係の形で見出だされる。其れの一つは、自然を支配することであり、他の一つは其れのはたらき振りを理會することである。自然を支配することは學問の目的であるが、之れが方便として學問は必らず謙遜に其れのはたらき振りを理會しなければならないといふのである。ベエコンのこの指揮を奉じて、近世科學は勃然として興つた。そして、倏ちにして光輝ある成果を收めた。然し、近世科學はたゞ其れの功利の一點に興味を有つことの專らにして、斯かる成果を齎らしたおのれの所以の意義を反省することを忽にしたのであつた。既に人間の生活に役立たせるために人間が自然を觀察する以上は、そ

こには一つの特定の興味がはたらき、其れに依つて割せられた選擇や、假說や、證明が行はれて居らねばならぬ。つまり、さういふ人間的のプロツセスを經て現はれる成果は全然人間的のものであつて、たゞ人間的のものとしてのみ意味あるものであらねばならぬ。

然し、科學者は自づから範疇を自然に與へ、其れの樣式に依つて自然を整頓しながら、其の事實に氣付かなかつた。之れがために、さうして出來た成果は、自然そのものの醇乎たる記錄であると誤解して居た。この誤解も、科學者が、實際の仕事に携はつて居る間、彼れは彼れの多年の經驗と修練とから得た方法と直覺とに依つて實績を擧げて居るのであるから、直接に大した障害を齎らすものではない。然し、科學者の仕事の性質の上に反省して、其れの意義を解釋しようとする哲學者が科學者の自然の研究に用ゐて居る方法と併せて、其れに關する彼等の誤解を無雜作に受け取り、其等を押し擴めて生活一般の事件に、例へば、認識や、道德や、社會生活の事件に應用することになると、とんでもない間違ひを生ずることになる。このとんでもない間違ひが、卽ち、經驗說の中核となつて居るのである。

經驗說はウイリヤム・ジエムスが『半途の經驗說』と呼んで居るやうに、人間の生活一切の事件を彼れの經驗の所產として見、其れ以外の何物としても見まいとする動機は確かに正しきものであつたが、其の經驗の中にはどれだけの志向と作用とが含まれて居るかを發見する用意と知見とを全然缺いて居たところに其れの短所がある。この結果として、其れは人間の解放のために有害なる舊きコンヴエンションを破壞するのには相當の貢獻を爲すことが出來たが、彼れの眞の自由のために有益なる新らしきコンヴエンションを建設するのには、何等の役目をも滿たすことが出來なかつた。經驗說に依つて形而上學の基礎は殆ど一掃されたが、其れに取つてかはるべき新らしき哲學の建物は築かれなかつた。經驗說の取り壞した建物の古材木の中に、其れが見逃がした永久に役立つ素質の多分に含まれて居ることを發見し、

其れを利用し、全然新らしき設計に依つて美しき殿堂を打ち建てようとするのが經驗學である。

經驗學は組織されたる反省である。そして、最廣義に於ける人間の生活をその反省の對象とする。其れは人間の生活全體に關する組織されたる反省である、反省する人間の生活そのものである。人間は如何にして現にわたくし共が見るやうな生活を營んでゐるか、彼れは如何にして歷史がわたくし共に對つて記錄するやうに發展して來たか。如何にして神話や産業や、遊戲や、政治や、宗敎や、學問や、藝術が其の生活の機關として工夫され、其の生活の發展に伴なつて變遷して來たか。美と功利、制度と欲求、傳統と改造、個人と協同團體、此等はそれぞれ互に如何に交錯し、融通して居るか。總べて以上の問題を發生的にと等しく、論理的に、そして、どこどこまでも經驗內の事實として究明し、說明するのが實驗學の職分である。

畢竟するに、昔も、今も、これから先きも、人間の生活は衝動を洗練して其等を理想としてはたらかしめ、知覺を統一して實在を體現することに限られて居る。隨つて、生活の知的指標たる學問の役目は如何なるプロッセスに依つて衝動は洗練されて理想となるか、如何なるプロッセスに依つて知覺は統一されて實在となるかといふことに限られねばならぬ。然し、此等は、(無論、當時としてはさうすることに十分の功利はあつたのであるが、)夙に人間に依つて作用的に對立せしめられずして、本質的に分離されて了つた。そこで、(この點に關しては、東洋も、どこも大體同樣であるが、)西洋に於ては哲學といふものがプレトオのを始めとして、最近のに至るまで其れの外形こそ變つて居るが、其れの仕事は本質的の分離をそのまゝ受け取つた上、無理な、隨つて、煩瑣な思索の方法を通して、其れの內に作用的對立を見出ださうとすることであつたと言へる。實驗學は始めから端的に其れを作用的對立と理會し、代償と代表との原理のはたらきとして、其れの進行の中に起る經緯の一切を考察し、評價しようとするものである。

生活の平衡は一行爲、一思索毎に、時々、刻々、轉覆されて居る。古人の學問たる辯證學は、其れを靜的に、保守的に、回復しようと努めたものである。近世人の學問たる實驗學は科學と哲學との協同に依つて其れを動的に、改造的に回復しようと圖つて居るのである。そして、わたくしは、この事實の中に、哲人主義の自然の進行を認取する者である。

最後に、わたくしは合議主義の派出たる藝術、即ち、象徴主義に一瞥を與へるところがなければならない。

ウオルタア・ペエアタにクラシシズムとロオマンチシズムとの關係を論じた一つの文章がある。其れの要旨は、簡明である。何にしても新鮮なる樣式を以て起る藝術はロオマンチシズムの藝術である、然し、歳月を經るに隨つて、世人の承認に依つて其れの卓越性が確立されて來るし、其れはクラシシズムの藝術となるといふのである。さうすると、ペエタアの意見に據ると、ロオマンチシズムとクラシシズムとの差別は、或る藝術が（其れが卓越したものであると假定して、）發生してからの時期の相違に關するものであつて、其れの內容の相違に關するものではないことになる。然し、此れはクラシシズムとロオマンチズムとの相違に關する解釋として、果して正當なものであらうか。

わたくしはクラシシズムと、ロオマンチシズムと、象徴主義との差別を其等の各の理想の相違に置かうとする者である。そして、其等の樣式や表現の相違は其等の理想の相違より自然に發動し、成熟したものであると考へようとする者である。一言にして此等の三つのものの理想の相違を普遍と特殊との關係として暗示して見れば、クラシシズムは普遍獨り其の權威を逞うし、特殊は纔かに其れの隷屬であつた生活の藝術である。ロオマンシチシズムは普遍の餘威と特殊の反抗とが對峙して居た生活の藝術である。象徴主義に至つては特殊正に天下を平定し、普遍は其れの家臣たることを失つた生活の藝術である。

『物窮すれば則ち通ず。』ロオマンチシズムが象徴主義のために其の端を開いたことは疑はれない。然し、ロオマンチシズムより象徴主義への道は遠く、紆餘を極め、且つ、岐路は岐路を生じて居る。こゝに一個の藝術史家としてではなく一個の文明史家として藝術の理想の變遷を語つて居るわたくしは、煩瑣に、散文的に、一々其れの經過を繹ねる暇も有たないし、さうする必要もない。直接に象徴主義の先驅者の役目を努めた寫實主義、自然主義、印象主義、などに就いてさへも、特に關係深き印象主義より考察を始めることを以てわたくしの當面の目的には十分であるとせねばならぬ。

普遍は實在ではない。其れはほんの名目に過ぎない。實在は特殊だけに限られると中世紀の末期に於て唱へ出された哲學上の名目論は、政治上の個人主義と相竢つて十七世紀の後半より十九世紀の上半にかけてますます勢力を得て行つた。印象主義はかゝる氣運に依つて醞釀された藝術上の一主張である。其れは個人主義の氣分を以て名目論の理論を藝術のヴェヒクルで表現しようとする努力である。其れの主張を約すれば、大體次のやうなものになると思ふ。

藝術は實在のものに興味を有ち、其等を其れが美感をはたらかす機緣とし、對象とせねばならぬ。普遍は實在するものではなく、實在するものはたゞ特殊だけである。それでは、何が特殊であるか、ちよつと考へたところでは、無雜作に常識が作り出し、無雜作に其れが信じて居る個體、若しくは、個性だけは概念のはたらきを竢たずして知覺に映じ來たるものであるから、最後の特殊であるやうに思はれる。然し、此等も追窮して行くと、最後の特殊でないことは直きに明白になる。わたくし共は庭前の松の木の個體を見、隣家の人の個性と交はつて居ると想像して居る。然し、事實に於てわたくし共はそんなことをして居るであらうか、又、そんなことが出來るものであらうか。わたくし共の世界はわたくし共に依つて知覺されるものから成り立つて居る。そして、知覺されるものはたゞいろいろの屬性だけである。其等の屬性を統一し、擔つて居る一つの本質があるといふことは便宜上人間の揑造したものであるといふことは、夙にロ

ツクに依つて十分に立證されたことである。實在するものは知覺に來たる屬性だけである。そして、屬性には恒久不變のものは一つもない。其等は悉とく瞬間瞬間に變化し、生滅して行つて居るものである。あの松の木の色にしても、形にしても、絶えず變はつて居るではないか。隣家の人の容姿にしても、感情にしても、動作にしても、絶えず變はつて居るではないか。さうすると實在としての松の木、實在としての隣人を忠實に把持することは、或る瞬間に於て現はれる其等の色なり、形なり、容姿なり、感情なり、動作なりを描寫することに歸せねばならぬ。この事を外にして、其等の實在を把持する道は一つもあり得ないわけである。若し生活の中に美といふものがあるならば、其の美の一切は瞬間の印象の中に見出だされねばならぬ。

さつと言つて、斯くの如きものが印象主義の論理とも呼ばるべきものである。印象主義はこの論理に據つて製作の上に其れの主張を實現しようとして居るのである。

藝術に於て實行され得る一つの主張として斯かる事を主張する印象主義にどれほどの意義があるであらうか。印象主義が自然に、若しくは、人生に或る美を發見し、其の美を洗練して更に優れた美を創造して居るならば、彼等はこの論理を遵奉してさうして居るのであらうか、或は、彼等の信條に於ては兎に角、彼等の實行に於ては、其れを裏切つて、始めてさういふことが出來るのであらうか。

(この場合、語義の明瞭にされることが重大なる要件であるから、)わたくしは尠しく語義の詮索をせねばならぬ。印象といふものは知覺の條件として心理學に依つて假定されて居るものであるが、直接にわたくし共の體驗には入り來たらぬものである。わたくし共の體驗の最も單純なる成分である知覺にしても、其れは嚴密なる意味での印象ではない。其れは既に心のはたらきに依つて、印象の上に選擇と、組織とが施されて出來たものであるから、印象以上の或るもの

である。されば、印象主義の要求する對象が如何に單純なる、そして、如何に短時間に存在し得る體驗にしても、其れが人間に依つて美しきものとして體驗されるには、其れは最小限度にでも繼續と關係とを有たねばならぬ。そして最小限度にでも繼續と關係を有つものは、既に其れの上に人間の選擇と組織との工夫が施されたものであらねばならぬ。言ひ換へれば、其れは客觀よりの印象ではなくして、主觀よりの表現であらねばならぬ。印象主義が表現を其れの對象として居りながら、おのれの主張を印象主義と呼んで居るのは言葉の矛盾である。

それでは、印象主義の要求するものは、印象ではなくして、其の實、表現であるとして、何故に印象主義はこのやうに人間の經驗の單位とも言はるべき短時間しか其の存在を有たぬ體驗を描寫することに興味を有つのであるか。其れがさうすることにどれだけの根柢があるか。さういふ體驗を印象と信ずるのとさういふ體驗に興味を有するのとは全然二つの事柄である。さういふ體驗に興味を有することには相應の根柢があるとわたくしは考へる。それはわたくし共の知覺に由るにしても、若くは、欲求に由るにしても、たゞわたくし共に依つて實際に體驗されるものだけが實在である。そして、其の實在は、第一義に於て、體驗される瞬間に於てのみ存在するといふ眞理に根柢するのである。第一義の實在は瞬間の體驗だけなりとする印象主義の主張を破るべき何物もないやうである。然し、瞬間の體驗といふものの性質に關する印象主義の解釋には何等の缺陷も含まれて居らぬとしても、あの松の木の色や形にしても、隣人の容姿や、感情や動作にしても、印象主義がさうと取つて居るやうに、其れが左右に存在する、若しくは、其れの前後に起るものと全然無關係に孤立して存在し得るものであるか。さう取られた時に、此等のものが實際に見られ、感ぜられるだけの性質を尠しも失はないであらうか。こゝに大なる疑問がある。

心理學上に於てウイリヤム・ジエムスの縁暈説と呼ばれるものは有名なものである。この縁暈説の解釋に依れば、如

何なる種の經驗と雖も、緣暈を有つて居る。其れの中核より見れば、それぞれ孤立した存在と意義とを有つて居るやうであるが、其れは、其れの末梢に於て緣暈を有ち、其の緣暈を通して他の多くの經驗と聯絡し、融和して居る結果、其れの獨自の存在や意義と見えるものも、其の實は其等の經驗の存在と意義とに依つて傳彩され、滲透されて成り立つのである。例へば、わたくしが靜寂なる夏の日に急に耳を劈く雷の音を聞いたとする。わたくしが聞いたのは雷の音そのものではなくして、靜寂を破つたところの雷の音である。孤立した雷の音といふものは到底聞くことは出來ない。又、よく暗記した詩句若しくは、文章を口誦むとする。その場合にはわたくしが第一語を吟じて居る時に、既に豫想で第二語は起りつゝあから、第二語の意味に依つて第一語の意味は感化されて居る。わたくしが第二語を吟ずることになると、第一語の餘韵は尙ほ殘り、第三語の前影は既にはたらきかけ始めて居るから、第二語の意味は、前後の語の意味から同時に感化されて居る。無論、第三語より最後の語に至るまで取次に同じことは起り、隨つて、同じことが言はれ得るのである。緣暈說の解釋するやうに若し此等が實際に經驗される事實であるとしたならば、（そして、わたくしは其等を事實と受け取つて居る者であるが、）其等は人間の生活の特徵の理會に關して如何なる光りを投ずるであらうか。

さうすると、特殊だけが實在すると言つても、眞に實在する特殊は他の總べての特殊を排斥し、孤立して瞬間に現はれるものではなくして、前後左右に其れを取り捲く特殊の交徹と援助とに依つて、始めて成り立ち得るものであるから、獨自の中核を保ち、其れをおのれの特徵としながら、其れに關係ある特殊と成りたけ多く抱擁するものが特殊として最も多くの實在を有つものであるといふことになる。この見地よりして、純粹無垢の實在を把持せんとして、一つの繼續體より出來るだけ孤立した、そして、一瞬間に現はれ、次の瞬間に消えて了ふ色や、形や、容姿や、感情や、動作を捥ぎ取らうとする印象主義の信仰と努力とには尠なからざる謬謬が含まれて居るやうに思はれる。こゝに、印象主義

の誤謬を是正して、一層深く特殊の本質を發揮しようとする象徴主義の出で來たる理由と機會とがあつた。

『瞬間の中に永久を觀る。』『瞬間を以て永久を捉へる。』此等は象徴主義が其れの格言として居るところのものである。然し、瞬間は時間の最も短かきものである、そして、永久はあらゆる長き時間を超越したものである。されば、文字通りにこの主張を解釋するならば、この主張ほど無理なことを實現しようとして企てて居るものはない。然し、其れを形容的に解釋すれば、象徴主義の企てには十分の理由がある。それはどこまでも特殊を最後の實在として其れの外にも、上にも何等の實在を認めまいとする。然し、かゝる特殊は出來るだけ多く、そして、豐富に其れの有する、若しくは、有ち得る關係が其れの内容として盛られた特殊である。あの松の木の色や、形や、隣人の容姿や、感情や、動作の特殊性は其等が實際に有てる、若しくは、有たせられ得る、關係の出來るだけ多くが其等の内容としてその中に盛られた時に、其等の特殊性はますますその完成に近づくのであるとするのである。されば、尠しく象徴主義の格言を變更して、『最小の有限の中に無限を觀る。』若しくは、『最小の有限を以て無限を捉へる』とすれば、こゝで謂ふところの無限は Unendlichkeit でなくして、Unvolledung であらねばならぬ。つまり、人間のあらゆる種の存在と意義とを構成する關係の出來るだけ多くを其の中に盛り、さうして、此等の存在と意義とを觀照しようとするのが象徴主義の主張である。

かういふ風に考察して來ると、わたくし共はロオマンチシズムを中點として、主客顛倒して普遍と特殊とは再び完全なる一致に齎らせられたのを見るのである。クラシシズムの理想は特殊を溶解した普遍を把持することであつた。象徴主義の理想は普遍を蘊蓄した特殊を發揮することである。

藝術は政治が生活の指標であり。科學が生活の指標であるとは異なつた意味に於て、其れの指標である。わたくし共

が象徴主義を現代生活の指標として取る時、其れは如何なることをわたくし共に物語るか。わたくし共はこれまで一度も試みられなかつた程度に大膽に、自由に、平凡の中に理想を發見し、着實なる方法を以て空想を現實と化して居ることを其れは物語るである。

わたくし共現代人は一面に於て極めて空想的である。然し、他の一面に於ては極めて現實的である。極めて空想的であるとはわたくし共が奔放な企畫を立てる點に就いて言ふのである。極めて現實的であるとは着實な手段を用ゐて其れを實現して居る點に就いて言ふのである。わたくし共が一方に於ては極めて空想的であり、他の一方に於ては極めて現實的である不思議な生活を營んで居ることはわたくし共の政治も、學問も、道徳も、優に立證して居ることであるが、わたくしはこれが卑近の一例として飛行機の發明を取らうと思ふ。

わたくしがこゝに現代生活の一つの象徴として飛行機を取るのを見て、世人の或る者は飛行機は結局單に物語的のものたるに過ぎない。どうしてそれが現代生活全體の象徴となることが出來ようか、などと沒分曉のことを言つてはならない。其れはわたくし共現代人の最深の理想のはたらきの成果であつて、其の理想はわたくし共の政治や、學問や、道徳の中にはたらいて居るものと同じものである。飛行機に依つて着々其の實績の擧げられて居る人間の解放は、政治や、學問や、道徳に依つて企てられて居る人間の解放と毫も徑庭なきものである。

禽鳥の如く自由に大空を飛翔したいといふ憧憬が遠き昔より人間にあつたことは、そんな道具の工夫に關する失敗が多くの神話や、傳說の種となつて居るのでも明らかである。然しながら、彼等に取つては其の憧憬を實現する準備を闕いて居たから、彼等に取つて、其れは、長い間一つの空想たるに止まつて居た。現代人になると、根氣强く其の空想を現實に化し得る條件を研鑽し、推敲して、其の企畫の前に横はるあらゆる障礙を取り除くために苦心したために、さきの

憧憬は終に一つの現實と爲されたのである。空想とは何か。どんなに平板なる企畫と雖も之れが實現の方便を闕いたものの謂である。現實とは何か。どんなに縹渺たる企畫と雖も、之れが實現の方便を具へたものの謂である。現代人は縹渺たる企畫を立てながら、的確なる方便を以て其れを實現しようと努めて居るのである。わたくしが現代人の生活を最深意義に於て理想的である、即ち、現實的であるといふのは、この事實を指すのである。

現代人に取つて生活は征服である。どこまでも個性の經驗と活動とを尊重しながら、其れの滿足と自由とのために、内包的にと等しく外延的に、未知の世界を征服して行かうとするのが現代人の信條の特徴である。そして、藝術の形で之れが指標となり、絶えずわたくし共に未知の世界を征服する動力と希望とを與へて居るものは象徴主義である。嘗てニイチェは生活の覺悟を論じ、其れに三種あるとした。彼れの意見に隨へば、平凡なる事實の發見に滿足して居るのは科學的の覺悟である。安價なる調和に滿足して居るのは文藝的の覺悟である。此等の孰づれも、取つて以てわたくし共の方針とするに足らない。獨りわたくし共の方針となするに足るものは、大膽に理想を懷き、其れが頑强なる現實の抵抗に逢著しながら、なほ其れを突破しようと苦悶するところにある。そして、この最後のものは悲劇的の覺悟と名付けらるべきものであると言ふのである。象徴主義が皷吹する生活の覺悟はニイチェが『悲劇的』と呼んで居るところのものに相當するのである。

大災厄期に於ける歳末經濟觀

――外債・內債問題・年末賞與金問題――

堀江歸一

商業取引の杜絶

或る人は九月一日震災火難の起るや、其影響の餘りに大なるに驚いて、之を以つて國難來であるとした。果して然るや否や。震災を蒙り、火難に脅かされた場所の重なるものは東京横濱であり、他は兩市に隣接する三四の町村近縣に止まる。他の地方に至つては、何等直接の損害は蒙らず、却つて罹災地方の復興に努力し、又罹災民の救恤に援助する餘裕を持つて居るのである。然らば東京市其他の震災火難を以つて、恰も敵國の軍隊に國の要地を襲撃され、占領され、前途の如何を知る可からざる場合と同一視し、之を全國的災害とし、國難來とする說は我國民の動もすれば陷らんとする誇張癖の然らしむる所であつて、私は之に對して其當れることを信ずるを得ないのである。

然しながら震災火難の影響を輕視し、單に之を以つて地方的關係に止まる問題とするのも亦誤りである。今日に至るまでの經過に徵すると罹災地の內に、東京市があり、而して東京市が平生帝都として我國經濟の中心であつたことの爲めに、其災害の影響は全國に波及し、如何なる地方も今日に於ては、假令ひ大小輕重の差はあるとしても、尙ほ帝都壞滅に伴ふ損害を分擔せざるを得ざることゝ爲つた。蓋し帝都として東京市の持つ大なる特色は其消費地たる一事であつた。此事たる、別に東京市民が好んで東京市を消費地たらしめた次第でなく、東京市其ものゝ成立から、自然に消費地と爲つたと云へる。卽ち東京市にして既に帝都である以上は、其處に皇居があり、天皇に直屬する各官廳を始めとして、行政諸官廳、立法部、軍隊が常住する一方に、諸會社の如きも、其事業は如何に僻遠の地に於て、

之を營むに拘はらず、官廳に對して行はれる交渉の必要から、帝都に其事務を設けるであらうし、金融機關の如きも、帝都に必ず設立せらるる中央銀行に對する關係を密接ならしめる爲めに、帝都に本店を置くの必要を生ずるであらう。而して製造事業の如きは、運輸交通の便の普及した今日に於ては、特に地價の高貴である帝都を選んで、其工場を置くよりも、勞働者の吸收さへ容易であれば、地方に之を設けることを利益ありとするであらう。即ち是等の事實は相重なつて、東京市をして文武官僚の住所たらしめ、銀行會社員若しくは商業從業員の居宅たらしめる。間接の生産には與るが、直接の生産には從はないと云ふのが、斯る階級の特色であつて其消費者と呼ばれる所以である。固より之に對しては、例外がある。東京市の一部例へば本所深川の如き、又隣接町村の如きに於て、大小其れ〳〵の規模の下に行はれる製造工業の震災前に存在して居つたことは、事實であり、今後震災前の經營者に對して、國家なり、公共團體體なりの爲す所の處置、宜しきを得たならば、或は恢復するかも知れないが、其れにしても其工業の産出力は大なるものではない。即ち消費地としての東京市に於ては、其産出する物資よりは更に大なる分量の物資が市民に依つて需要されるのは勿論、東京市内に於て全然産出されざる物資も亦需要され、斯くて東京市の市民の生活が維持され來つた次第である。隨つて東京市と地方に於ける生産業者或は東京市と生産地方との關係は頗る密接であつて、後者は前者の消費に供する爲めに、或る定まつた分量の物資を繼續的に供給し、然も之に對する代金は信用取引の下に、其支拂を或る時期の後に繰延べることを習慣としたのである。然るに今震災火難の爲めに、東京市の經濟組織は根本的に破壞され、九月一日を前後の境として、其時まで繁榮を極めて居つた問屋業者は其以後に於ては、見る影もない市井の浮浪者と爲り、バラック住ひの罹災民と爲つた。隨つて彼等は地方生産業者に對して、從來の賣掛代金を決濟することも出來なければ、新に物資の註文を發することも不可能である。地方生産業者にして如何に年來東京市の問屋筋と深い取引上の關係を結んで居つたとした所で、其問屋が店舗を失ひ、商品を燒き、殆ど裸一貫の狀態に居る以上は、之を信用することは、何としても出來得べからざる所である。蓋し從來東京の問屋業者が世間に向つて、大なる信用を繋ぐ源と爲つたのは、實に其暖簾であつて、或る定まつた場所に店舗を構へ、永年地方取引先と同一種類の取引を繰返し、契約の條項に背いたことがないと云ふ此一事が無形の信用を醸成し、商業取引を圓滑ならしめた次第である。暖簾の價値は有形的には之を見積るを得ないと

しても、其無形的に大なることは、論を俟たない。然るに今、問屋業者が店舗財産を失ひ、今後營業を開始する目算すら定まらないとすれば、正に暖簾の破滅であつて、信用の喪失したことも、亦已むを得ざる所としなければならない。斯の如くして、今日地方には物資がありながら、其れが東京に來つて、取引されるまでに至らない。地方は生産過剩でありながら、東京には過度の物資不足を來し、兩者の間に於ける聯絡の缺如すると云ふ病的狀態の生ずることも亦已むを得ざる事實である。然も生産地方に於て、生産過剩の現象に接して居るのは、一時の事相であつて、今日の生産過剩は必ず近き將來に於ける生産減縮を惹起す所以たらざれば已まない。地方の生産業者は東京市に於ける需要劇減の影響を緩和する目的を以つて、關西其他の方面に向つて、販路を擴張する方針に出でつゝあるやに聞くが、其効果は如何であらうか。消費地の壞滅が生産地方全體の苦痛と爲るのは、已むを得ざる所である。

商業恢復の道程

尤も東京市の問屋の內には相當の資産を有する者があり、資産の全部を直接の商業資本とせず、其一部を確實なる銀行の保管預けにしたり、預金にしたり、有價證券の形にしたりして居つた金額も少なからざるものであるやに聞く。隨つて斯る人々の商業上の恢復力は存外早いかも知れない。即ち店舗を再築し、商品を仕入れるだけのことは行はれるであらうが、是れは單に外形の恢復であつて、眞實の恢復を期するには、東京市民全體の消費力が復舊し、日常の生活を營むことの必要から、各種の消費を行ひ、小賣商業を活躍させて、其影響を問屋業に及ぼし、問屋業者の繁昌することに依つて、地方の生産業者を潤ほすに至るの日を待たなければならない。自然の成行に任せて、其日の來るのを待つと云ふことは、甚だ優長であり、迂遠である。茲に於てか金融機關の働きを通じて、斯る機會の到來する勢を促進する必要を生ずる。政府が日本興業銀行、日本勸業銀行の如き特殊銀行を督勵し、又彼等に補助金を下付して、小商工業者復活の爲めに、力を致さしめるのも右の必要に應ずる一端と解することが出來る。然も其効果が如何ばかり顯著なるものであるかは、今日の處一個の疑問とせざるを得ない。現に小商工業者の內で、兩銀行に資金の融通を請求したに拘はらず、規定の擔保品又は抵當品を有せざる爲めに、如何ともする能はざる者があると云ふ。左ればとて銀行をして其融通した資金に依つて、將來計畫され可き事業に信用を置いて、先づ融通を行はしめることも亦困難であり、双方互に違つた立場を守つて居

る爲めに、所期の目的が達せられず、其達せられない結果、小商工業者が以前と同樣の規模に於て、同一の業務に復することは、頗る困難と考へられるのである。然らば相當の規模を備へた商工業者に對しては、如何なる救濟法が講ぜられて居るか。又講ぜらる可きものであるか。今日まで政府や、日本銀行の爲した所を見れば、一般商工業者に對する特殊の救濟策は行はれて居らない。唯日本銀行の市中諸銀行に對する救濟策が効を奏し、市中諸銀行の資力を豐富にし、基礎を鞏固にしたならば、聽て銀行の取引先に對する資金の融通に依つて、一般商工業者の復活を促すに至るものと考へられて居るようである。

銀行の能率を疑ふ

然しながら斯る希望が何時に爲つて、實現されるかと云ふことに就ては、私は種々の點に於て疑を持たざるを得ない。第一市中諸銀行は其業體の然らしめる所と云ひながら、平生に於ても營業上に於て甚だ臆病であつたが、震災後には、特に此傾向が著しく、只管自家の安全を謀るに忙はしく、殆ど他を顧みる能はざるが如くに見へる。固より銀行の内には、其貸付の狀態に依つては、資産に缺損を招いで居るものも少なからざる一方に、預金に對しては、預金者の之を必要とする時には勿論、預金者の氣分一つで如何なる急劇の取付を蒙るか、測り知る可からざる地位に居るとすれば、今日の態度に出ることは、已むを得ざる所であり、隨つて銀行の思ひ切つた援助に依つて、近き將來に商工業の復活を促すに至ることを以つて、空望に過ぎはしないかと考へる。第二假に諸銀行の市場に對する態度が多少緩和され、資金の融通に從うとした所で、取引先は何を擔保とするか、如何なる取引に基いて振出された手形の割引を銀行に求めるであらうか。株式の如き會社の財産、震災火難の爲めに著しき打擊を蒙つた上に、將來の營業狀態の不利であることの想像される爲め、市價に暴落を來たしたものがあり、暴落を來さないまでも、震災前に比較すれば、餘程の下落を示して居る。隨つて銀行に株式を擔保として資金の融通を仰いで居つた者の如き、擔保品の追徵を要求される地位に立つのであつて、新に價格の低落した株式を以つて、資金を借入れようとするが如き、至難の業としなければならない。手形に就ても亦同樣であつて、今日の商業取引の實際から見て、眞實銀行の信用を値する手形が如何ほど世上にあるかと云ふことを考へたならば、銀行に向つて、手形割引に依つて、資金を融通せしめようとしても、其困難を嘆ぜざるを得ざるに至るであらう。

經濟社會改善の望如何

斯る次第であるから、震災以來今日に至るまで、我國の經濟社會は少しも改善の狀況に向つて居るとするを得ない。唯聊か社會の或る方面に於て、繁昌を告げて居るとか、或る階級の人々の間に所謂金廻りが宜しいとか云ふのは、震災以來罹災民救護其他の必要に應ずる爲め、財政の緊急處分に依つて、政府の支辨した國庫金が民間に撒布された結果に過ぎない。此點から考へれば、或は政府の計畫しつゝある帝都復興事業の規模が確定し、實行の緒に就いたならば、或に勤勞を需要することに依り、或は物資を消費することに依り、是等に對する報酬や、代價が、民間に行き渡る爲めに、少なくとも經濟社會の一部に好景氣を刺戟するかも知れない。如何に好景氣を刺戟するかは、復興事業の規模、其行はれる期間、物資に對する需要の内外國孰れに多く行はれるかの割合、復興事業の財源の選擇等に依つて、關係する所大なるものであるであらう。政府が外國債を募集し、其收入を内國に於て消費し、一方に内國に於ける物資や勤勞を盛に需要すると共に、他の一方に於て復興事業の完成期を短縮する方針を取つたならば、其事の終局に於ける利害は兎に角として、一時的繁榮を經濟社會に齎すであらう。世間の一部に於て近き將來に於て、好景氣の現出を夢みつゝある者のあるが如き、畢竟政府が帝都復興を急として、必ず或る手段を以つて、莫大なる財源を調達し、而して之を消費することを想像する結果であらう。政府が帝都復興と云ふことに、非常の重きを置き、國力の多くを傾けて、其目的を達しようとする事實から推察して、斯る想像の起るのも、無理ならぬ所であるが、私を以つて見るに帝都復興事業の財源を外資に求め、其調達の容易であることに乘じて復興事業の規模を廣大にし、又短期間に之を完成せしめんとするが如き、甚だしき暴策であるとせざるを得ない。

帝都が政治經濟文化の中心であつて、其壞滅が全國の運命に影響を及ぼすことの著しき以上は、帝都の復興を行ふに國費を以てすることは、許さなければならない。然し如何なる程度まで國費を以つてするか、自治體の經費を以つてするか、自治體に於て、一時負擔に堪へざる場合には、國家に於て暫く代つて費用を負擔し、後日に至つて、漸次償還せしめることゝするか、是等の點に就て、自ら問題を生ぜざるを得ない。隨つて外國の資金に依賴するに當つても、國債を以つてするか、國家に依つて保護された市債を以てするか、國債を以つてした場合に、斯くて收められた收入の一部を自治體に貸出すに如何なる

條件を以つてするかの問題を生ずるが、更に先決問題として考ふ可きは、外國の資金に依賴する程度の如何であつて、私は此點に就て、復興事業に要する經費中外國に於て購入する材料の支拂は專ら外國債を募集し、其收入に依つて、決濟する一方に、內國の支拂に屬する分は內國に於て財源を調達することゝ爲る位が大體の方針として認められるのではなからうか。果して然らば外國債の募集は假令ひ成立したとした所で、內國の好景氣を刺戟するまでの効果を持たない、唯外國債の收入に依つて、輸入品の代價を決濟し、輸入超過の爲めに、內國經濟社會の脅かされる虞れを杜絕する利益を見るに過ぎない。此利益に對して一方に多少の弊害の伴うことは、吾人の注目を要する所である、如何なる弊害があるかと云ふに、外國債の發行に際して、之に付せられる利子步合の如何に依つては、却つて、內國の金融を壓迫するの一事は吾人の最も注目を要する所であつて、爲めに外國債の發行に對して、大なる懸念を生ずるのである。

外國債の影響如何

外國債と云へば、必ず低廉なる利率の下に、募集されるものとするのは、極めて古風なる考へであつて、利率の如何は外國金融の狀況並に債務國の對手國に於ける信用程度殊に既發公債の市價に依るものとしなければならない。英米兩國共に今日外國債を應募する國としては、適當のものとするに困難である。英國は歐洲戰時餘程の無理算段を講じて、佛蘭西以下聯合諸國に於ける募債の要求に應じた爲め、今や內外國債過多の狀に居り、其消化の容易ならざりし結果、一時外國並に殖民地の募債に應ずること、不可能であつた。近頃に至つて漸く外國並に殖民地の爲めに、金融の便を謀りつゝあるが、其金額は頗る輕微であつて、到底戰爭前に於けるが如き、資本輸出國たる面目を恢復するに至らない。現に近年英國が外國並に殖民地に向つて、幾何の資本を放下して居るかと云ふに、

年	千磅
一九二〇	三九、五二八
一九二一	一一二、八〇一
一九二二	一三〇、一五七

であつて、本年上半季の放資亦八千八百九十四萬七千磅に過ぎない。然らば我國が有利なる條件の下に、英國に於て大募債を行うことの不可能であることは、論を俟たないであらう。又合衆國に至つては、戰時國力の多くを外國募債に應ずることに費したに拘はらず、戰後國債元利金の支拂動もすれば停頓し、資

本案をして聊か外國債に對して、嫌氣を生ぜしめた趣さすらある一方に、近き將來に於て開會され可き國際財政會議が愈々成立し、合衆國自ら獨逸救援の爲めに、努力するに至つたならば、此點に於て巨額の資金を必要とせざるを得たい。即ち是等の事情は當今我國をして外國に募債を行ふに當つて、之を困難ならしめる所以であるが、更に外國に於ける我國財政の信用程度を考へると、益々募債の我國に取つて、不利なる條件の下に行はれ可き事情を解するに苦しまないであらう。今試に震災以前から其以後に於て、倫敦市場に於ける我國債並に市債社債等の市價が如何に變動したかを表示すると、左の如くである。

	八月三十一日	九月四日	九月六日	九月二十日
四分利付公債（一八九九年）	七〇	六五、五	六三、五	六五
同（一九〇五年）	八八、五	八八	八六、五	八七
四分半利付公債（一九〇五年）	一〇二	一〇一	一〇一	一〇一
五分利付公債（一九〇七年）	八九	八六	八二	八三
四分利付公債（一九一〇年）	六九	六五、五	六二、五	六五
滿鐵五分利付社債	八七、五	八五	八四	八四、五
五分利付名古屋市債	八九	八七、五	七五	七八
同　大阪市債	九一	八九	八九	八九
同　東京市債	八九	八二、五	八四、五	八四、五
同　橫濱市債	八七	七二	六五	七二、五

右の表に據れば、震災直後市價の低落した我國の國債市債は其後に至つて、次第に恢復したと云へるが、本來震災以前の價格が餘り高いものではなかつたのであつて、今日の市價は其れよりも幾分か下落して居り、此下落した市價が今後募集される外國債條件を律する標準と爲るものであるとすれば、外國債は餘程高い利子を負擔することに依つて、成立し得るものであると云ふ結論に歸着する。内國經濟社會を振興する目的を以つて、外國債を募集する、少なくとも其募集に依つて、内國の經濟社會を潤ほし、賑はさうとする場合に、其利子が高率であつたならば、右の目的は容易に到達されず、却つて外國債の利子の高いことが内國市場に反映して、内地の金利を高からしめるであらう。私が外國債の募集に就て世人の多くと反對の意見を懐く所以である。

内國に於て財源を調達する結果

然らば内國に於て財源の調達される場合には、如何なる方法が用ひられるであらうか。固より其一部分は内國債の發行に依ることゝ爲るであらうし、其發行が通貨の膨脹する勢を助けたり、又地方の資金を東京に吸引し來る働きを生じたりする場合には、聊か東京の景氣を盛たらしめるかも知れないが、内國

債が東京市民の貯蓄金に依つて應募されたり、又は內國に於て調達される復興事業の財源が一般經費の節約に依つて、充當されたりする場合には、從來行はれた物資や勤勞に對する需要が單に方嚮を轉換するに過ぎない。早い話が一般經費の節約に依つて、或る官廳に於て馘首された官吏が復興院の事業の擴張されるに乘じて、新に其處に出仕の道を求めたのと、事柄に於て異なる所なしとするを得るであらう。復興事業の財源が一般歲計の緊縮に依つて、既定經費の範圍內に行はれるに止まる場合には、單に需要の方嚮の轉換するに止まるのであるが、復興事業に要する經費の大なる以上は、內國債發行の必要に接するは論を俟たない。然も今日の經濟狀態に於て、金融市場の遊資のみを以つて、募債の財源とするが如きは、企て及ばざる所である。復興事業に關聯して、社會に撒布される資金は多く消費され易く應募の財源として、深く依賴するに足らない。隨つて相當金額の內國債を發行する場合には、國民の貯蓄を促進して、應募の財源を作り出すまでに、利子を高率にすることは、已むを得ざる所であつて、內國債の發行と利子の引上げとは相關聯するものとして、豫め覺悟を要する所である。

玆に於てか內國債募集に依つて、右の如き影響を生ずることを少なからしめる爲めに、復興事業以外の方面即ち一般財政に於て、從來募債を必要とした事情を除却するに努めることが當面の急務と爲る。即ち政府亦此意を體し、十二年後の公債未募集高一億二千九百四十萬圓を打切ると云ふことであるが、十三年度以後に於ける公債財源の事業費は如何に之を取扱うであらうか。豫定計畫を以つてすれば、十三年度の募債額は一般會計に於けるもの三千四百五十二萬圓、特別會計に於けるもの一億四千二百四十一萬圓である。後者に屬するものゝ內、朝鮮臺灣等に關する約三千萬圓の公債發行は殖民地統治の關係上、之を打切るに困難であるかも知れないが、其鐵道に關するものゝ如き、將又一般會計に於ける電信電話に關するものの如き、如何ようにも之に斧鉞を下すに苦しまざる次第であつて、其打切りに依つて、一方に復興事業に要する內國債募集の道を開くことを必要とするであらう。

然しながら之を他の一面から考へると、上記の公債財源に屬する事業費は從來政友會が黨勢を地方に張る爲めに、積極政策を實行するに就て、其方便としたものである。本年度に於て、之を打切ることに就ては、財政現下の狀況から判斷して、最も痛切に打撃を覺へる政友會と雖も、之に反對するを得ないであらう。然も明年度に至り、復興事業に要する公債募集の餘地を作り出す爲めに、一般會計並に特別會計に於ける募債の多くを

削除すること〻爲つたならば、政友會の如きは如何なる態度に出でるであらうか。必ず之を以つて帝都の利益を偏重して、地方の利益を損傷するものであるとして、反對するに相違ない。此場合に帝都の復興が即ち日本全體の經濟を振興する所以であつて、隨つて帝都の利益を擧げる爲めには、地方全體の利益は或る程度まで犠牲に供されなければならないと云ふ理由を以つて、能く右の反對論を抑制するを得るであらうか。復興事業進行し、然も國家が國費を以つて、之を遂行することの多きに隨ひ、國費に依つて、復興される東京市と東京市復興の費用を負擔する地方との利害は常に相背馳せざるを得ない。如何にして政府が此般の關係を調和するかも、一個の難問題と爲るのである。

歳末の經濟社會を覗ふ

故に復興計畫が如何に進捗したとした所で、一部世人の考へる如く、商工業の好景氣を誘導するものでなく、單に資金の所在の異動することに依つて、部分的好景氣を惹起すに過ぎないであらうと考へられる。況や復興計畫が事の半途に居り、如何なる時に至つて、如何なる狀態の下に、着手されるか、全然不定である今日、景氣の混沌たることも、亦已むを得ざる所に屬する。斯く面白からざる幾多の狀態を眼前に控へ、震災以來惡化しないまでも、決して良化したと稱されない經濟社會が此災厄の年を送るに當つて、果して無事無難であるを得るであらうか。

東京の歳末は其一大消費地であるの故を以つて、特に著しき變調を商業の上に呈したのである。即ち歳末である爲めに、諸會社諸銀行を始め個人商店は何れも收支を決算して、純益金を計上し、其一部分を使用人に分配する。或は歳末と會社の決算期と出合はない場合に於ても、尙ほ賞與金として、年末慰勞金として、相當の金額を使用人に給與する。斯くて年末の近づくに隨つて、各家庭は上下貧富の別を問はず、迎春の準備に忙殺され、衣服の新調、家具、調度品の買入れ、家屋の修繕等に就て、物資と勞務とを需要すること多く、其代價や報酬の社會に撒布されると共に、商工業に著しき活氣を呈する。不景氣の時代に於ても、不景氣に比例して、相當の費消金のある爲めに、聊か歳末には經濟社會の面目を一新せしめることを恒例としたのである。然し本年の歳末は例年に比較して、如何なるものであらうか。

先づ東京の如き消費地の景氣を左右するに就て、最も與つて力あるものは、市民の勤勞所得に於ける增減である。震災以來銀行と云はず、會社と云はず、商店と云はず、總て多數の人を雇傭する機關に於て、遠慮なく斷行した所は人員の淘汰であ

り、罷免であつて、今や都門には失業者の群集する者數らに堪へざる有様である。幸に馘首の厄を免かれた者と雖も、或は俸給を減じられたり、手當金を奪はれたり、本來の給與の一部分を受けて、辛うじて其地位に留まるに過ぎざる者少なしとしない。例年であれば、下半季の決算に於て、銀行會社の使用人の受けゐ賞與金は俸給の幾個月分に相當するであらうとか、甲會社と乙會社との比較は如何なるものであらうとか云ふような評判は丸ノ内附近に於て、青年會社員の口端に上るのであるが、本年の如きは果して斯る評判の起るやすら疑はしい。賞與金の多寡よりは、自己の地位の今日まで安全であることを僥倖とする次第であらうと思はれる。元來私は我國に於ける銀行會社員の就職に際して、銀行なり、會社なりに提出する誓約書や、其書面に掲げられる條項を以つて、不合理千萬のものと考へる。人が銀行會社に就職して、其業務に貢献し、一方に銀行會社は其人の勤勞に依つて、利益を收めるものとすれば、兩者は正に對等の地位に立つ、隨つて就職の際には、双方の間に於て權利と義務とを相對的に約定す可きものであつて、使用人から誓約書を差出すならば、事業主からも同じく誓約書を差出す可き筈である。然るに我國に於ては、此點に就て使用人だけに偏務の束縛を加へ、誓約書に於て、或は何時解雇されても、苦情申すまじくとか、銀行會社に取つて、不利益の所業は致すまじく、若し致した場合には、總て責任に應ず可くとか、事業主をして使用人に對して生殺與奪の自由を持たせ、切捨御免の地位に立たしめるような馬鹿馬鹿しき個條ばかりが列記されて居る。今回の如き震災火難は一の天災であり、我國在來の耐震防火施設を以つてしては、殆ど不可抗力とも云ふ可き事件が起つたのであから、爲めに生じた損害は總ての人の負擔に歸す可きものであり、若しも之を使用人とか、勞働者とか云ふような一部の階級の人々だけに負擔せしめたならば、大なる不公正を生ずる道理である。然るに我國に於ける雇傭契約は頗る不備のものであつて、使用人や勞働者に何等の過失なきに拘はらず、事業主の命令、一下すれば忽にして解雇されて、失業の憂目に會はざるを得ないこと丶爲る。解雇の際に、當然權利として主張し得る手當金の如きは、當初の雇傭條件に定められて居らず、一に事業主の任意に基くのであるから、今回の如く事業主自身も震災火難に依つて、表面上大なる損害を蒙つたもの丶如くに見へると、其内情なり、實力なりの如何は問はず、殆ど雀の涙にも等しき解雇手當に依つて、阿呆拂ひ同様の處分を受けざるを得ない。我國今日の經濟事情に於て、多數の失業者の生ずることは、已むを得ない。又是等の失業者に授職の道を講じて、彼等

の生活を安定せしめるの困難であることも、亦之を諒としなければならない。然しながら殆ど嚢中無一物であり、又無一物に近い、狀態の失業者跳出して、失業の翌日から彼等をして路頭に迷はしめるに至つては、罪正に雇傭契約に於ける條件の不備に存するものと認める。此大災厄の歳末に際して、無一物の失業者あることの爲めに、如何に社會が慘憺たる狀況に陷るであらうか、私の戰慄を禁ずる能はざる所である。

我國經濟社會の病根

震災後尚に銀行會社商店工場等に於て、以前の職業に就いて居る者は假令ひ俸給引下げの處分に會つたとしても、目前の生活難は之を凌ぎ得られるであらう。然も銀行員會社員等が平生所得の一部、否時には其大部分として依頼して居つた賞與金は今後如何なるであらうか。今日事業界が震災後の影響に依つて苦しめらるゝ事情は種々の點に繫る。第一は事業界一般に不景氣の濃厚と爲つたことであつて、此點に就ては如何なる事業も打撃を蒙る。然も何時に爲つて、好景氣と爲るか、其望みの遠きことは、彼等に取つて、大なる苦痛たらざるを得ない。第二は有價證券市價の低落であつて、證券を財產として所有する者も、之を擔保として、資金の融通を謀らうとする者も共に大なる損害を蒙る譯であつて、殆ど總ての會社銀行は此點に於て、苦痛を共にするであらうが、就中大なる苦痛を感ずるものは銀行保險會社等であり、又巨額の積立金を證券額に換へて居る事業會社も同樣の地位に立つ。斯くて有價證券を財產として評價する場合に、必ず時價に據らしめると云ふ商法の規定を一時中止せよと云ふ極めて橫着であり、又我儘なる要求が橫着者や、我儘者の集團である工業倶樂部から其筋に提出された次第である。斯の如き提議は一顧の價値だも認めるを得ない。之を認めることは、殊更に我國會社の基礎を薄弱ならしめ、平生營業上に於て放漫を極めたものをして、之を更めるの必要を免かれしめ、會社事業の全體を舉げて、不健全のものとするのである。然も彼等が今日此悲鳴を揚げたのに徴して、其窮狀の一斑を知るに難しとしない。第三、金融の緊縮に依つて事業家の苦しむことは、著明の事實であつて、銀行業者の法外に臆病である性癖も無論金融緊縮の勢を甚だしからしめて居る一原因には相違ないが、震災火難の爲めに打撃を蒙り、將來に於ける營業の成否の判然たらざる事業家に向つては、如何に放膽なる銀行營業者が居つたとしても、資金の融通を躊躇し、制限するであらう。況や生來小心なる銀行營業者であつては、事業家に取つて、殆ど金融梗塞の嘆を生ずるのも、已むを得ない所であら

う。或は此際世間の一部に於ては、金利引下げを必要とし、其方便として日本銀行の金利引下げを提唱する者もあるが、今日の如く資金融通上に危險の伴うこと多き場合に於ては、又資金の供給の現實に減少したことの事實である場合に於ては、危險の多いだけ、資金供給の減少したゞけ、金利歩合の上進するのが必然の勢である。此大勢に反抗して、日本銀行が率先金利歩合を引下げた所で、一般市場の狀況を左右する效果を奏せず、却つて市場を攪亂するに過ぎないであらう。第四、銀行が擔保物の燒失、擔保價格の低落に依つて、損失を蒙つたことは總ての銀行を通じて一方ならざる次第であらう。殊に我國銀行業界の通弊として、其出資者の經營に係る或る事業に對して、過大なる資金の融通を爲して憚らない。而して今回の如き大災厄に處しては、銀行は銀行として一般的打擊を蒙る其上に、特に資金を融通した會社の相次いで倒壞したことに依つて、打擊を重くするに至る。銀行が製造業會社に巨額の貸出をしたり、倉庫業や電氣業に資金を融通したり、デパートメント、ストーアの事業を援助したりし、然も是等の諸事業では出資の關係から云つて、銀行に於て切つても切れない緣故を有するとするが如き、銀行營業の安全を謀る所以とするを得ない。即ち今日の銀行業界には所謂死債として、資産の項目中から當然切り棄てなければならぬものが多々あるに相違ない。殊に今回の震災に依つて、此種の死債が增加したことは、當然であるとして、銀行は如何に之を處置するであらうか。彼等の平生慣用する手段から推して考へると、彼等は一擧に死債を切り棄てると云ふが如き、思ひ切つたことは、之を敢てせず、在來通り資産の一部として、或る價格を認めて置き、今後生ずる利益金を以つて、徐々に之を塡補すると云ふ微溫的手段を施すであらう。隨つて死債に伴ふ缺陷は永く銀行の資産に殘る道理であつて、斯る缺陷の續く間、銀行業の利益金として、株主に分配され、賞與金として、從業者に給與されるものゝ減少することは、已むを得ない。第五、火災保險金問題は今日に至つて、尙ほ未解決の有樣であるが、結局會社が保險金の一割を支拂ひ、支拂能力の足らない會社に對しては、政府に於て、長期の貸付金を爲すことに依つて、一段落を告げることゝ爲るであらうと想像される。火災保險業者に取つては、大なる負擔であつて、此負擔に當る爲めに、會社は從來の協定を解き、自由競爭に依つて、大會社自ら小會社を打ち倒すの手段に出るか、其れとも保險料を引上げて、利益の增加を謀るか、何れとも判斷を下すを得ないが、兎に角火災保險業の一頓挫と爲り、斯業の關係者を苦しめるに止まらず、會社の金融的能力の傷けられる損害をも生ずるものと

考へなければならない。

銀行會社員の賞與金問題

右に掲げる如き諸種の病根の震災後に於ける我國經濟社會に存するからには、銀行會社にして其貸借對照表作成上に一大手品を施さない限り、當分の間震災前に於けると同様の利益金を計上することは、至難の業であつて、利益金の削減か、損失金の計上か、二者の一は免かれ難い運命である。随つて會社員銀行員の如きは、生活の糧として、依賴する所最も厚き賞與金の分配には與るを得ない道理と爲る。利益金があればこそ賞與金の分配が行はれる、利益金の無い場合に、賞與金の消へ去ると云ふことは、當然過ぎる程、明白なる道理であるに相違ないが、我國に於て果して此道理が何處までも推し通されるかどうかは、一個の疑問に屬する。蓋し賞與金なるものは、銀行員なり、會社員なりが其卓絶した技能を自己の相當する仕事の上に現はし、利益金を增進した場合に、其功を賞し、且つ將來を勵ます趣意の下に、利益の一部が分配されると云ふ趣意に基くものであるが、我國賞與金制度の實際を見れば、斯る個人の特殊的功勞に對して、與へられると云ふよりは、寧ろ俸給の附加額の如きものであつて、日々出勤した上、大過なく與へられた任務に就いて居れば、俸給の多寡なり、地位の高下なりに準じて、毎半季に給與される。随つて賞與金だけ、俸給の方は聊か低く定められて居る趣きであるとすれば、銀行員會社員の生活を安定せしむる趣意から云ふときは、賞與金は誠に一の邪魔物たらざるを得ない。即ち今回の事變に就て考へても、俸給であれば、減額されることはあるとしても、全廢されることはない、其支拂は會社營業費の一部として、確實に行はれるが、賞與金であつては、利益金の消滅と共に、全廢されることを免かれない。平生俸給に對して、賞與金の率の多かつた銀行會社員は其多かつただけ、大なる打擊を蒙らざるを得ないであらう。斯の如く我國に於ける銀行會社重役に對する賞與金は兎に角、使用人に對する賞與金は其名だけ賞與金であつて、實質に於ては、俸給の附加額と異ならない以上は、震災に伴ふ變動に依つて、賞與金の全廢されるが如き、消費地としての東京市に於て、比較的多數を占める民間俸給生活者に取つては、大なる苦痛としなければならない。毎年歳末の近づくに随つて、會社員銀行員とも見られる夫婦者が兒女を引率して、銀座神田の小賣店や、デパートメント、ストーアを漁り歩き、懐に收められた賞與金を散じて、妻子の歡心を繋ぐの光景は常に私の目撃した所であつて、斯る消費があればこそ、自ら小賣商業に活氣を加

へるものと見られたが、今年の歳末に果して同一の光景に接するかどうか、銀座神田の代りに、神樂阪や、四谷の大通りを賑はすに至るかどうか、銀行會社の重役が重役として彼等の受ける賞與金と使用人に與へられる賞與金との間に、性質上の相違ある所以を認めて、使用人には俸給の附加額たる意味に於て、依然賞與金を與へる額に於て、給與するであらうかどうか。會社銀行が逸早く、其使用人の俸給を引下げたり、手當金を廢したりした方針から考へれば、賞與金の如きも、其性質の如何に拘はらず、大なる減額か、又は廢止かを見るに至りはしないであらうか。斯る場合には其歳末景氣を傷けることの大なるは勿論であつて、今後の景氣をトするに當つて、此一事を閑却するを得ない。

年末の賞與と銀行取付

日本の新年は西洋諸國の基督降誕節に匹敵するであらう。然し私が歐米諸國に於て見聞した實驗から云ふと、成る程西洋人は降誕節に熱中するには相違ないが、其金錢を浪費せざることに細心であるのは驚くばかりである。然るに日本人に至つては、歳末新年に掛けては、總ての人を擧げて悉く浪費者たらしめるの觀を免かれない。正確なる比較を試みる材料は持たないが、西洋人の基督降誕祭に對して費消する金錢と日本人の新年に消費する金錢とを比較したならば、其間の差異は餘程大たるものとなるであらう。家庭の迎年準備として行はれる屋内屋外の裝飾を始め、衣服の新調、宴會の流行、飲酒の接待等數へ來れば、甚だしき煩を覺へざるを得ない。今回の災厄は日本人に大なる覺醒を促し、彼等をして一切繁文縟禮を事とした既往の生活を脫せしめて、更生の人たるに至らしめるかどうか。國民的風俗の一新とか、生活法の改善とか云ふことも、從來屢々唱へられる所であり、今回の如き之を斷行するに好機會であることは、申すまでもない次第であるが、因襲を尊び、行儀を重んずる念の強い日本人殊に東京市民に此決斷があるかどうか、私は彼等に此決斷の鈍いことを感ずる、隨つてバラック内に於て雑煮を祝ひ、酒を酌み交すは勿論、互に回禮を試み、無理算段で、禮服を裝ひ、之を以つて震災前の榮華を偲ばうとするが如き傾きはありはしないであらうか。例年歳末に臨んで金融の緊縮し、資金の動き方の繁忙を加へるのは、歳末を機して、貸借を決済する必要に基くことを重なる原因とするが、他に迎春準備の爲めに市民各自に現金を用意する必要に迫られたことも、確に他の一原因であつたのである。本年は此點に於ける年末の金融に如何なる變を見るであらうか。昨今の金融狀態は一言にし

て云へば、氷の如く凝結して、如何にしても融解の道を得ないのである。モラトリウムが廢止されても、日本銀行の開放方針が聲明されても、銀行の貸出方針の頑强なること、吝嗇翁の財布の口を締めたのと異ならない。斯る場合に、迎春準備の爲めに、小口の資金が銀行に就て、引出されたとして、如何なる結果を生ずるであらうか。小口の引出と云つて、之を十にし、二十にし、三十にした場合には、案外の大金と爲るのみならず、其取付を蒙つた銀行が元來小規模のものであつたならば、果して小口の引出も其銀行に取つては、大なる負擔であつて、之に對して、安全であるを得るかどうかも、疑はしい。昨今東京市内に於て、震災後營業を開始するに至らざる銀行が三十以上あり、其預金も亦數千萬圓の多きに上つて居ると云ふことである。其れ等の銀行の槪して小規模のものであるだけ、預金者も亦薄資の人々である。其人々が銀行の依然營業停止を續けて居る爲め、預金を如何ともするを得ないと云ふことは、誠に慘憺たる話であつて、預金者大會を催ほして、銀行當局者に談判を試みるようであるが、其結果は如何であらうか。餘程政府が未開業銀行に援助を與へ、銀行の方でも犧牲を荷う决心の付かない限り、未開營業銀行は何時までも今日の儘に居り、歲末經濟社會を惡化せしめる一原因と爲りはしないかと想像される。

三十餘の未開業銀行を除き、多數の市中諸銀行が現に仍營業を開始したのは、喜ぶ可き現象とするを得るかも知れないが、開業後の狀態は如何と云へば、極端なる警戒を事とする外、能事なしとするの有樣である。畢竟經濟社會の前途に就て、確乎たる見込みの付かない場合に、已むを得ざる次第であるとも云へるが、同時に銀行の內には自ら其基礎の不安なることに恐れを懷いて居るものはありはしないであらうか。平生の營業狀態に於て、預金に對する金銀在高は頗る薄弱であり、加ふに資金の一部を利用して、金銀在高の不足を補充しようとしても、資產其ものゝ實質の不良である爲に、其目的を達するを得ない。現に過般一部の人士が火災保險金額支拂の要求に就て、運動を試みた際、其理由として、若しも金額の支拂が行はれなかつたならば、多數の銀行亦倒產の已むを得ざるに至ると云ふことが擧げられた銀行業界の事情果して斯の如くであるか、其れとも運動者が目的貫徹の方便として、事實を誇張したものであるか、其斷定は姑く措き、兎に角火災保險金の支拂と銀行業との間に密接の關係あるものとして、上記の說の生じたのは、我國の銀行が火災保險證書を抵當に取つて、家產に對して、資金を融通したことの證據とするに足りるのである。東京の如き大都會に於て、相當の擔保品を求めるに難からざるに拘はらず、銀行の

内に家屋を抵當として、貸出をするもの丶あると云ふ。銀行の營業の不健全なること、亦驚く可きである。而して火災保險金の支拂は如何に解決されるかと云へば、前記の通り、結局政府の補助に依つて、纔に保險金の一割だけが支拂はれるに止まり、然も此一割が見舞金の性質を持つものである以上は、家屋を抵當とした銀行に於て、差押へることを許さないとしたならば、一部人士の杞憂した銀行に大なる打撃を及ぼすと云ふ事實が生ずるのではあるまいか。若しも歳末に臨んで、人々の生活に現金を必要とし、之を調達する方法として、銀行預金に對する取付の起つたときに、現在の銀行は果して之に堪へるを得るかどうか。或る銀行にして日本銀行から寛大たる條件の下に、融通を受ける地位に居り、日本銀行亦斯る銀行を危殆の狀態に陷らしめることを以つて、金融市場全體の爲めに、不利益であると、認めるが如き場合には、其銀行は相當の波瀾に接しても、何等の打撃を覺へないかも知れないが、總ての銀行決して斯の如く安全なるものではない。大阪に於て積善銀行が支拂停止の擧に出でたことの如き、矢張歳末に臨んで、預金の取付の殺到した爲めであつたことを考へると、私は本年歳末に於て、能く金融市場に不祥事なきを得るや否やを知るに苦むのである」。

要するに本年の歳末經濟社會は寂寥を感ずるのみであつて、何等活氣の見る可きものなく、然も一歩を誤まれば、如何なる危險を迎へるか、測り知るを得ない。而して明春に入つて、果して面目一新の歡びを迎へるを得るかと云へば、復興事業の着手、之に伴う資金の撒布に依つて、聊か社會の一部面を賑はす位が關の山であつて、此以上に多くを望み得ない、多くを望んだならば、徒に失望落膽の外ないのであらうと思はれる。

資本課税論

清澤洌

一、狼狽した英國の新聞

資本課税が表面の問題になつた時程、資本主義の社會と新聞とが驚愕と憤怒と敵愾心とを示した事はなかつた。そこには總ゆる醜惡なる文字の羅列があつた。いつもはブツてゐるロンドン・タイムスの如きが先づ「勞働黨の財産沒收策」と馬沓大の活字を使つた。之に續いて英國の殆んど總ての大新聞は「泥棒」とか「掠奪」とか「國家的破滅」とかと云ふ標題を惜氣もなく並べ立つた。世界の内で最も沈重を以て聞えてゐる英國の新聞が斯くの如き狼狽振りを示した事によつても、如何に彼等が此巨彈の前に恐れ、慄いたかを知る事が出來ようと思ふ。

併し資本課税は必ずしも勞働黨の專賣特許ではない。如何にも之れを理論的に編んだ者はシドニー・ウエブ氏あたりであるが、實際問題として、戰時負債を償還するために同様な事を提議賛成した者には、保守黨の代表者ボナー・ロー君や、ロイド・ジョージ内閣時代の自由黨首領サー・デー・マクリーンなどがある。即ちボナー・ロー君は大藏大臣として、一九一七年十一月議會に於て述べて曰く、

富の徴發を行ふべきや否やとの問題は、全然その事が有利であるや否やとの問題に歸着する。而して其關係する所は勞働者でなくて、金を持つて居る人々に對してである。予の考ふる所によれば、之れは彼等のためにも、又國家のためにも
（第一）一般的資本課税を爲して、國債を減ずる方がいゝか
（第二）それとも今の儘で五十年も放擲して、永久に租税の重荷とする方が利益であるかの問題である。或は予は未だ之に關する研究足らずして、玆に明言する資格のないものであるかも知れぬが、併し予一個の感じから云へば、予は國家のためにも、又富有階級のためにも、資本に課税して、國債の重荷を輕減した方がいゝと思ふ。之れは予一個の感じである。

と云つて居る。保守主義者から出た此言葉に殆んど何等の注意を拂はなかつた、英國の社會は、それから五ケ年もして勞働黨が掲げた此同じ文字に對し、今更ながらあの恐怖と狼狽は何故であらうか。況んや資本課税は其程度の差こそあれ、既に伊太利、獨逸、墺太利、ハンガリー及びチエツコスロバキヤ等に實施され、謂はゞ試驗濟みの案なるに於てをやである。我等は此資本課税を中心にする右翼と左翼との大衝突を解剖する前に資本課税其のものゝ由來と、理論とを紹介する必要があると思ふ。

二、唯一の財源は富豪の富

戰爭と云ふ無意義なる猛火に、總ての生產力と人力とを投げ入れて、「愛國」とか「正義」とか云ふ鬨の聲をあげて、自己の燒ける姿を心地よげに眺めてゐた頃迄は、世界は何にも氣がつかなかつた。愈々此炎が已まつて改めて、其周圍を見ると、其處には只荒野の樣に枯れ果てた國家と國民があつた。財源と云ふ財源は取り盡し、租税と云ふ租税は試み盡した後に、まだ其國民には背負ひ切れぬ負債が殘つてゐた。之を如何にして支拂ひ得る?。それはウエルス君が云つた樣に「シヤイロツクの負債」である。其負債を強制して取る事は、即ち其借主を殺して仕舞ふ事である。ウエルス君の言葉を借りて云へば、「ロイド・ジヨージ君は此周圍を燕の如く驅け巡つて、其中心に觸れる事を避けた。ボナー・ロー君はただ昔の理想を夢みて虫の如くに匍ふに過ぎぬ。而してアスキス君は世界の文明の手形が不渡りになつて居る時に、只印紙と紙に其力を盡して居るに過ぎぬ」狀態であつた。

此時に當り露西亞は先づ之を振ひ落とし、裸體になつて、世界と交通を斷つた。併し他の國家に於ては國際信義と云ふチヤンネルを通つて、此問題に打當たらざるを得なかつた。そして國內を隅から隅まで見廻して、そこに枯渇しない財源としては、只富豪の所有する富のみであつた。國家の當局者は、何時もは何よりも懼れる此財產階級の怒りを冒しても、此富の幾分かを徵發するでなければ、國家は只破產の運命あるのみなる事を感じた。殊に其財產家なる者の多くは、戰爭によつて利した者ではないか。國民が擧げて悲慘なる運命に座する時に、自己のみは砲火の外に逃れて、蓄財に餘念なかつた者である。勞働者の所謂犧牲の平等化 (Equalizing Sacrifice) のためにも、此徵税の合理的なるものなる事を感ぜざるを得なかつたのである。

一九一六年、戰爭がまだ何時果つべしとも見えなかつた頃シドニー・ウエツブ君は、「戰爭の費用を如何に支拂ふべきか」と云ふ小冊子を著はして、資本に對し一劃の課税を主張した。前

に述べた如く從來の租稅法が行詰つた時に、個人の手に握られて居る財產のみが、殆んど何等の犧牲を拂はないのを見て、ウエッブ君は此財源に到達する最も近い道を選んだのであつた。

此說はお膝元なる英國に於て勞働者及び社會主義者側の熱烈なる支持を受けたが、正式に議會の問題となつたのは大戰終了後であつた。當時巨額なる國債を償却するために、戰爭によつて得た財產に課稅すべしとの輿論が盛んになり、下院に此問題に關する調査委員を任命した。同委員は一九二〇年の春『戰時中に增大したる財產の課稅に關する覺書』と題し議會に報告する所があつたのである。其要領は「戰時所得財產の課稅は、從來英國で試みられた如何なる他の租稅よりも困難であるが、併し實施する事は可能である」とて、二個の具體案を提出したのである。

然るに此問題が議會に於て可否を問はるゝや、時の藏相は該稅を立案する事を拒絕したため流產し、暫らくは資本課稅の論は姿を隱すに至つたのである。其後昨年の五月、本年度の豫算を討議するに當つて、一勞働黨議員は再び此案を提議したが、藏相ホーン氏は之に對し「若し政府が資本課稅を實行すれば、希臘神話のタンタラスの物語りを繰り返すに過ぎないであらう、卽ち彼が資本なりと認めて、之に課稅せんとする每に、其資本は必らず何處かへ頭を隱して仕舞ふ事は疑ひないからである」とて、同案に反對の理由を說明した。

斯くして一度下火になつた此資本課稅論が、以前にも增して世論の中心になつたのは、昨年の總選擧に於て英國の勞働黨が此問題を綱領の一つにした事と、丁度當時瑞西に於ても此資本課稅を一般投票（イニシアチヴ）に附したからである。エッチ・ジー・ウエルス君は昨年勞働黨の候補者として、ロンドン大學區に於て名乘りをあげ、其政見を發表した時『私は豫言者などと云ふ柄でない、併し私は此事は豫言出來ると思ふ。それは二三年の間に、古い政黨が、何とか誤魔化した形に於てか、それとも其儘でか、此資本に對する課稅案を採用するに至るべき事之れである』と述べた事がある。今や英國の議會には約百五十名の勞働黨員があつて、其懷く政策は決して單なるアカデミツクな學說ではない。今議會では現に、英國議會開始以來始めて資本主義と社會主義との論爭があり、社會主義に反對する人々と雖も、スノーデン君の透徹した議論に傾聽せざるを得なかつたのである。保守黨が躓いて、其政權が勞働黨乃至は勞働黨と聯尾相迎する內閣でも出現する場合――其時期は近いとは云へぬが――之等の政策は無論眞先きに實現せらるべきものである。然らば卽ち我等は此問題を單なる左右兩黨の學究的論爭の

みと見る事なく、實際政治の題目として攻究する必要がある。況んや日本に於ても地租委讓問題から、再び租税に關する議論が盛んになつた今必らずしも他山の石となすに足るものなきにあらざるをや。

三、瑞西に於る同案の敗北

便宜のために瑞西に於ける資本課税案から說き始めよう。瑞西國は戰爭の一員ではなく、從つて其處には戰爭成金はあるが、戰爭債務はない。そして其豫算は大體に權衡が取れて居つて、昨年一般投票に附された資本課税案は、既存する國家の債務整理に當つるものでなくて、新たに施設さるべきで國民の機關に充つべきものであつた。之れが他の國に於ける同案と第一に異なる出發點である。

同法案によると八萬フラン、以上の資本に對しては、會社と個人とのものたるを問はず、一齊に一時税を課する。但し個人の場合は妻子、家具及び個人の用品に對しては除外例を認める。此免税點以上の個人の財產に對しては頗ぶる急激なる累進率を取り、始めの五萬フランに對する八パセントから、三千〇七十萬フランを超したる財產に對しては六十パセントに上るが、但し會社に對しては稍々寬大で一割均等(ストレート)として居る。右財產に對する評價は一九二二年十二月卅一日現在とし、拂込みは一九二三年一月一日より、一時拂ひ、或は三ヶ年以內に完了すべきもので、之には六分の利子を附してゐた。而して斯くして得たる收入(概算十二億五千フラン)は、一般的な社會改良及び教育に用ひ、殊に其大部分を老年者及び勞働不能の者に對する保險金に充當する計畫であつた。尙之が割宛ては、聯邦が六割、殘りを縣と郡とに引渡す事になつて居つたのである。

拂込み及び脫税防止の方法としては、國民は株式、債券、證書及び有價證券等を悉く提示する必要があり、銀行は何時でも當局者の檢査に應じねばならぬ。而して資本の海外に流出するのを防ぐためには、今後總べての證書は―銀行預金に至る迄、其筋のスタンプを要し、之れなきものは一切無効とす、と云ふ規定もあつた。

此案が一般投票に附せられたのは昨年の十二月三日であつたが、之れが敗北は豫定の事實であつて、此案に同情を有する者と雖も、其提出の時期の頗ぶる時を得ざりしを惜んで居つた程である。即ち瑞西が衆議院の總選擧を爲して、社會黨が全票の僅かに二割二分しか獲得し得ざりしは、此一般投票の一ケ月以前の事であつたからである。たゞ之にもかゝはらず、其結果が懸念されたのは、由來瑞西の一般投票が常に意想外の成績を示

して來た一事である。例へば數年前、議會に於て各派妥協の結果成立し、又各派大會に於ても一致して通過した新勞働法案が、一般投票の結果見事に拒絕された事があつた。又昨年、議會は過激運動取締法案を通過したが、此際議會で之に反對したものは社會主義者と共產主義者のみであつた。然るに之を九月廿四日一般投票に附した結果は、自由黨の一部議員と、ブルジョアーの五分の二が此案に反對し、此案は否決の運命に會して社會主義者の勝となつたのであつた。

斯う云ふ前例を有するものであるから、此資本課稅案が規定の三萬人の署名を得て、愈々一般投票に附せらるゝや、瑞西の上下を擧げて非常なセンセーションを起したのは無理がなかつた。例へ從來の歷史から云つて、瑞西の一般投票に否決力(ネガーチヴ・パワー)が强く、且つ此案の缺點が、個人の自由を束縛し、又同國に多い中流階級に不利なものとして、一般に反對の氣勢は見られたが、それでも油斷はならなかつた。加ふるに所謂ブルジョアー新聞の宣傳に反對する一手段として、印刷職工は罷業し、社會主義新聞以外の大新聞は、一時休刊するか型計りのものを出だすの外はない有樣で、社會黨側の運動は氣勢頗るあがらなかつたに於てをやである。斯くして兩方の宣傳戰は同國に於て未曾有の激烈を極めた。ポスターや演說は何處の町の隅でも見られた。大臣連は何れも演說會に出て、此法案に反對した。又印刷職工が共罷業によつて、言論の自由を遮ぎつた事に對し、社會黨に對する反感も相當に見られた。

一方此影響を受けて、經濟界は非常な混亂を呈した。株式は暴落して、ものによつては一分から四割位に下つた。何十億フランと云ふ資本は、同法の到達しない外國に移された。一週間だけで銀行から預金――殊に外國人の預金者に多かつた――の引出されたものが實に二千萬弗に達した。或る大都市に於ては金貨の流通が殆んど停まつた。――如何に資本階級が此法案に恐怖したかを知る事が出來よう。

而かも一般投票の結果は、豫想外に此法案に反對する者多く共比例は約七對一の割合で否決されたのであつた。九月の過激主義取締法案に對しては、全國の投票數六十七萬であつたのが、資本課稅法案に對しては總投票數實に八十四萬票に達したのである。而して注意すべきは普通社會黨に同情を持つ人々にして、之に反對の投票をなした者が多かつた事で、郡部は一の例外ない迄に反對を示した。平常は社會黨と反對黨との勢力伯仲してゐるツーリツヒ、バースル、ベルン等に見ても、ツーリツヒは三萬二千票に對し一萬票、バースルは一萬九千票に對する七千票、ベルンは一萬五千票に對する六千票にて、何れも之

を否決して居る。之等の結果を見ても、勞働者が如何に此法案の採用は、工場の閉鎖、失業者の増加、農業家の家畜賣拂ひ、一般租稅減少の結果官業就職者の給料引下げになる」と云つた同法案反對者の主張宣傳に動かされたかが解るのである。

斯くして問題の資本課稅は瑞西に關する限り、敗北して其影を收めた。

四、歐洲各國に於る同案の現狀

英國に行く前に、今少し各國の此問題に對する情勢を一瞥しよう。

伊太利は强國として此資本課稅を實行して居る唯一の國である。同法が議會を通過したのは一九一九年の事で、當時の首相は自由思想に理解を有するニッチ君であつた。折しも伊太利は左冀黨の運動激烈を極め、之と共に右冀の抵抗も根强いものがあつた。此調和を持ら來さんとして編まれたのが此案で、其課稅率は五萬リラの免稅點以上の財産には四分五厘より、一億リラ以上の財産に對しては五割を課する事になし、特に戰爭中に得た財産に對し、重稅を課するの條項を存したのである。此財産評價の期日は一九二〇年一月一日で、租稅拂込み期限は二十箇年に亘り、其財産からの收入を以て爲し得る樣にした。

此稅法は資本家よりも社會黨よりも攻擊された。資本家は、之れ所得稅の變形に過ぎずと云ひ、社會黨は彼等が編んだ原案に比し骨拔きになつて居ると攻擊した。而かも此法律は過去三箇年實施せられ來り、本年六月三十日を以て終る會計年度に於ては、伊太利の國庫總收入(賠償を除く)の三分八厘に當る豫定で、其前年度は四分四厘であつた。而して之れが納入者を調べて見ると、半額以上は債券類其他個人的財産所有者で、農業を其生業としてゐる者の納入額は非常に尠ない。

佛蘭西　佛蘭西に於ては資本課稅の運動は相當に古いが、實行もされて居らず、又英國に於ける程の實際政治になつて居らない。一九二〇年、下院の財政委員會は數個の資本課稅案を編んで協議したが、右に對し社會黨議員が賛成した許りでなく、他の資本階級を代表する議員も、該案が過激なるものに非ざる限り、フランの貨幣價値を維持するに力あるべしとて賛意を表したのであつた。併し乍ら只彼等が認めて之れが實施の前途に横はる最大難關としたのは、佛國の農夫が傳統的に獨立し、而して其財産權を固執して居る事實に鑑み、斯かる租稅徵集の極めて困難なるは明らかで、之れがため全體が實行不能に陷らざるべきやと云ふ點にあつた。之に加へて該案に對しては藏相も反對し、斯くして一度問題になつた資本課稅案は又表面に現は

れなかつた。

併し議會の問題にはならなかつたが、之を要望する聲は堪へず聞えた。昨年大藏大臣は一九二三年度の豫算案を提出するに當つて、同案に言及して、政府が之に賛成する能はざる理由を述べて「佛國に於ては資本は既に所得税及び相續税等により課税されて居る。之れ以上の重税は問題外である」と其態度を明らかにする所があつたのである。

獨逸　獨逸に於ける資本課税の問題は、過去の問題であるよりも寧ろ未來の問題である。自國に於て資本課税を好まざる佛國の當局者は、獨逸に對しては之れが實行を迫まつて已まない。佛國がルール占領以前に派遣して同地の經濟狀態を取調べさしたダリアツク氏を委員長とする特別委員の、ポアンカレー氏に致した秘密報告書にも明白に此事を勸告してゐる。

資本課税は獨逸には古くからあつた事で、戰爭開始少し前、即ち一九一三年に於て政府は「國防基金」として、總べての財産と收入に課税すべき旨を命令した。其後同國が戰爭に敗れて千三百二十億金麻克と云ふ賠償を負はせられ、此年割宛額を據出する方法としてReichsnotopfer「帝國の必要に對する犧牲」即ち「緊急税」を起した。之によると始めの五萬麻克の課税し得べき資本に對しては一割、それより累進し、一億麻克の資本に對しては六割五分を課税して居る。此外性質は同じであるが、戰時及び戰後に於て利得した財産に對する課税もある。而して之れが收入は、一九二一――二二年は全收入の六分二厘に上り一九二二――二三年には七分六厘を示す筈である。

たゞ茲に注意すべきは之等の數字を漫然として見れば如何にも獨逸の資本課税が資本階級に相當な重荷の樣であるが、併し同國の物價は目まぐるしい程に上騰し、今年五月三十日に獨逸國立銀行頭取ハーフエンシユタイン氏の演說によると、過去一年間に卸賣物價の指數は三六六五から、一四七五〇〇に上つたとの事である。即ち貨幣價値は約四十分の一に暴落してゐる。從つて財産評價が終つて、實際納税する頃は其額は、責任額の數十分の一にも滿たない事になる譯である。之等の事實も聯合國側が、獨逸政府が更に資本に大薙刀を揮ふ事を强ふる理由であつて、最近の獨逸の新賠償提案は或意味の資本課税だと云つてもいゝ。

新小國　新小國とは茲ではオーストリア、ハンガリー、チエツコスロバキア等であつて、之等の國に於ては、資本課税は普通の事として實行されて居る。何れも新興國で貨幣價値の激動から相當に困難が伴つて居つて、オーストリアでは一九二一年十二月卅一日を以て終る年度に、同課税から得た收入は十五億

クラウンスで、全收入の一分に充たなかつた。

ハンガリーに於ける同税は一九二一年に藏相ヘゲダス氏の考案になつたもので、之は他の資本課税の如く納税者の總資本に課税するものでなく、之を構成する種々なる部分に課税するもので、特に土地を所有する階級が最も重い負擔を負ふ樣になつて居る。

最も成効して居るのはチエツコ・スロバキアで、最高を三割とし過去三ケ年實施して好成績を收めて居る。此場合にも戰時所得財產に對しては特に重く課す方法を用ひ、之等の費用は通貨の安定と國債の支拂ひに資して居る。(同國の事は今少し後で述べる)

以上を以て各國に於る資本課税の現狀を一瞥し得たとして、偖て本論の主眼である英國の資本課税を中心にする論爭に移る。

五、資本課税案の底に橫はる思想

エツチ・ジー・ウエルス氏は斯う云つた——

第一に資本課税(Capital Levy)などと云ふ名が、世人をして誤解を起さしめる原因だ。私は寧ろ之れを膨脹した財產に對する課税とでも云ひたかつた。小さい事の樣だが此誤られた名稱の故に、今後此案が、どれだけ迷惑を蒙るか分らないと思ふ。我等は之によつて生產の機關を奪ひ去つて仕舞はうと云ふのではない。我等はたゞ個人的に藏された蓄財を搜り出し、產業の負擔を輕くしようと云ふに過ぎぬ。即ち今現に運轉してゐるビジネスは此資本課税の範圍ではなくて、其適用を受くるものは、個人財產に限られてゐる。

今や新らしい大財產の持主は善良なる社會的傳統を缺くところの人々で、又正直なる產業を經營したる經驗なき者である。彼等の內、生產的努力によつて其財產をかち得たる者は極めて僅かであつて、其多くは極めて不思議なる經路によつて其幸福に座する人々である。彼等は新らしい型の金持である、彼等は經濟的事實や、歐洲に於る狀勢に就いては何等知る所なく、其財產を以て遊戲する事に滿足し、又其金で投機を試みて、遂いに最後の破碇を招くと云ふ樣な經路を踏んで居る。

ウエルス氏が云つた樣に資本課税と云ふ名が祟つたか否か、此問題に就いて英國勞働黨が受けた批難攻擊は嘗て見ない程度のものであつた。我等は先づ此問題に對する勞働黨の立場を見ねばならぬ。

昨年末の總選擧に當つて勞働黨の揭げた政綱は、無論資本課

税計りでなく、大體左の樣なものであつた。

五千磅以上の財産に對する資本課税

遺産相續税及び附加税の增加、二百五十磅以下の收入に對しては免税する事

土地の價値に課税する事

仕事を與ふる事或は失業者を支持する事

農業の改造、農園勞働者が餓飢的給料を受くるのを改良して土地所有者が借地料を犧牲にする事

平和條約を改訂して、總べての國を包含する國際聯盟を樹立する事

礦山と鐵道を速やかに國有とする事

全國に住宅計畫を樹立す、養老金の增加、夫を失ひたる母に對し補給金の給與

丁年選擧權

勞働黨の政綱は斯くの如く多方面に亘つて居つたに係はらず、他は悉く隱れて反對黨の砲火は殆んど資本課税に集中した。それは反對黨が個人の自由と權利を尊ぶ英國人に對して、『個人の財産を租税の形式によつて沒收するものだ』と云つた意味で、批難攻擊するに便宜のためでもあつたが、又社會主義思想に發する資本課税の問題が、實際政治の題目として全然耳新らしいものであつたのは貴重なる理由である。

此勞働黨の立場を最も簡明に書いてあるのは、昨年の春同黨で發行した"Labour Speaker's Handbook"である。同書には先づ英國の巨額なる國債を償還するために、少なくとも該税によつて四十億磅(約四百億圓)を生み出す樣にせねばならぬ』と云ひ、一年二百五十磅以下の收入者には租税を免除すると同時に、『税金のかゝつて居らぬ朝の食卓』と、『商業及び生産を關税、消費税或は印紙税より解放する事』を約し、更に

煙草は今や多數の人に對し、習慣的必需品となつた、現今の率は戰前のそれに比して非常に高く、勞働黨は此半減を適當と認む

餘興税は、昔の「智識に對する課税」と同じ樣な惡税である。演劇、音樂及び活動寫眞さへも、國家が奬勵せねばならぬものである。

と云ひ進んで

前掲した四十億磅の税金を得れば、結局一ケ年二億磅の國庫の支出を節約する事が出來る。……之は五人の一家族に對しては、一週四シリング(約二圓)の支出を減ずる事を意味し、又多くの專門家、商店主、小ビジネス・マン其他は之によつて利する所が多い。

と述べ、續いて『此資本課稅は、啻に產業と商業を利益するためでなくて、それは又社會的正義のためである。何故ならば』と其理由を說いて

「戰爭のために費した驚くべき巨額の金は誰かのポケットに行つた。之等の負債に對し每年支拂ふ利子は其十五分の一のみが勞働者の手に落ち、他の十五分の十四は財產所有者の手に渡つて仕舞ふ。此富裕なる債券所有者の手に落つる賜物は、結局國家の生產の大きな部分を吸ひ取つて、贅澤な方面に使はれる。之れが貧しい母に與ふる牛乳は益々減じ、國民の子弟に對する教育は愈々削減される理由である。」

と云つて居る。

以上の極めて大略な記述に依つても分る樣に、資本課稅の根本的論據は、所謂ソーシャル・ヂヤスチスに出發し、其底には個人生存權の自由平等と云ふ思想が橫はつて居る事が明らかである。既に問題の中心的意義が茲にありとすれば、他の問題は要するに第二義以下のものであつて、反對黨から此案の大なる缺點は、更に明白な具體案が伴はぬ事であるとの攻擊を受くるも又已むを得ないかも知れぬ。即ちそれは政策の問題であるよりも主義の問題である。フイナンシヤル・イシユーであるよりも、モラル・イシユーである。此問題に徹底的ならんがためには、資本主義組織其ものゝ是非にまで遡のぼらねば解決出來ぬ。即ち最近勞働黨のスノーデン氏が、社會主義に關する原則的な決議文を英國議會に提出した時に說明した樣に「今や英國の富の八割八分までは、人口の二分五厘の人々の手に握られて居る。而して英國民の六人の內五人迄は死ぬ時に、一文も後に殘す事が出來ぬ有樣である。之等の事實は資本主義組織——土地組織も含めて——が社會をして天然の富源を利用せしむる事に失敗した事を物語るものである」として、資本主義組織を根本的に否認——スノーデン氏の樣に漸進的にか、又他の一派の樣に急進的にかの區別はあつても——するか否かによつて、定まるのである。

勞働黨が總選擧に於て好成績を得たのは單に、此モーラル・イシユーとしてであつた。そして資本家と其新聞が殆んど常規を逸するまでに騷いだのも、資本課稅案其ものであるよりも、寧ろ其底に橫はる此イシユーに對してであつた。併し乍ら我等は此文の趣旨から考へて、此根本的問題—資本主義の是非の如き論議は暫らく以上を以て定れりとして、專ら實際的方面—フイナンシヤル・イシユーとしての同案を見なければならない。

六、堅實なる經濟的道程への手段

瑞西の資本課稅案が一般投票に附せられ、問題になつた時に

英國勞働黨では早速陳述書を發表して

瑞西で計畫されて居る資本課税案と、英國勞働黨とのそれは何等似通つた所もない程のものである。即ち瑞西案によると、有限責任會社及び產業的會社も、法人として課税される事になつて居るが、英國勞働黨の案は單に個人にのみ適用さるべきものであつて、法人たる有限責任會社や銀行、共濟組合、相互組合商業組合等は資本課税の範圍以外にある。

と世の誤解を訂した。勞働黨の主張は資本に課税する事が、社會的正義である計りでなくて、斯くする事により始めて堅實なる經濟的道程に進む事が出來ると云ふのである。

彼等の主張に從へば、通貨が膨脹した時代に、國家の危急存亡を眼の前に見て、無暗に借入れた負債は、今や通貨が安定するに至つて殆んど共國家の財力を以てして、返還するを得ない程度になつて居る。之は嘗てサー・アルフレッド・モンドが云つた樣に一國に取つて「國債の大海」であつて、之に租税から得た金をつぎ込むのは「大海に良貨を投げ込む樣なもの」である。マンチエスター・ガーデアン紙に從へば、毎年五千萬磅（約五億圓）を支出した、親子四代（約百二三十年）に亘らねば返還出來ねものである。而かも英國內閣の方針は既に決定して、前藏相ホーン氏は約一億二千萬磅を此大海に投げ込み、今年の豫算に於てボルドウイン氏は四千萬磅を之に當てる事になつて居る。翻つて此債券の所有者を見ると、それは極めて一部の少數者であつて、從つて此國債の利子に拂込む金は、多數の納稅者から集めて、此人々の懷中につぎ込むに過ぎないと云ふ結果になる。即ち本年の豫算に現はれた所得稅納入額二千四百萬磅の內、二千百萬磅までは、所得稅を支拂つた人數の四分の一の人々に歸つて行く事になる。英國に於て附加稅納入者は七萬五千人あるが、此人々は一人頭百五十磅づゝを得べく、又一年九千磅以上の所得を有する者二萬五千人は、一年三百磅を得る事になる。而して昨年に於ては此人たちは實に一人頭六百磅づゝを得たのであつた。斯くして經濟的餘力あるものは却つて酬ひられ餘力無きものは益々徵發されると云ふ奇現象が現はれる。

此邊の事に就いて最も明瞭に勞働黨の立場を語つたのは、今議會に於ける豫算討議の際のスノーデン氏の演說である。同氏は「二三年以前には英國產業聯盟の如きが國債減少の意見に傾き、自由黨も强く之を主張し、此の手段として資本課稅をさへ唱へた程である。即ち當時は資本課稅は非常の際に於ける外科的手術として必要であるとの意見が、資本家の間にすら盛んであつた。然るに最近は此議論が一轉して、租稅を減少する事にのみ力を入れる樣になつた。此變化は何故であらうか。恐らく

通貨が縮少して彼等の投下した資本の價値が騰貴し、從つて之等の利子と配當に依倚してゐる人々の判斷を變更せしめたものであらう。併し乍ら國家の立場から見る時は、斯くの如きは其可なる所以を知らぬ」と云ひ、更に

我等は此巨額なる國債の存在して居る間、健全なる經濟的立脚地より減税をなす事が出來ぬ。併し乍ら彼等が減債乃至減税を爲すのは、實際の剩餘金を有する場合に於てのみ可であつて、然らずんば徒らに税源を惡税（スノーデン氏はボルドウイン氏の提案した賭事税案(タツキス・オン・ベツチング)に論及して）に求むるの外はないのである。

我等が減税に到達するに只一つの道がある。それは直接に高い租税の原因に打ち當る事で、それには國債の利子を拂ふ爲めに一ケ年三億磅或はそれ以上を捻出する必要がある。我等は國債を減少する迄は、決して減税すべきではない。世間或は云ふ、所得税の引下は商業を盛んならしめると。大なる引下げは如何にも然るであらう、併し六ペニー位の引下げが何にならう。今日必要なものは、より多くの資本ではなくて、有效なる需要である。そうして今産業に投資せられて居る資本が、更に有効に完全に使用される事である。新發行の諸種の債券が、常に應募超過しつゝある事實に見ても、資本は充分にある事が判る。我等の欲するのは需要を刺激する事である。國債は資本であるが、それは産業に關係なき資本である。資本蓄積の必要を說く者は、須らく此方面に眼をそゝぐべきである。

と述べた。

此巨額の國債につき拂ふ租税に關聯して、今一つ資本課税の論據がある。此論者の說に據ると元來一國が、將來産業の大發展を爲すためには、青年の自由なる活動を必要とする。大した資本を有さない此新しい人々が其向上心の迸ばしる所、如何なる産業上の機會をも見逃がさざるべき事は、一國繁榮の源泉である。然るに若し國債を今の儘放棄し置くに於いては、最も影響を蒙るものは之等の青年であつて、彼等の一生の努力は結局戰時債務を有する者のために盡す事となつて、其結果彼等は生産的事業より手を引くに至るであらう。即ち資本課税を實行せば負擔は現在の財産を所有する者の肩上に落つるのに對し、若し之を實行せざるに於ては今貧困なる青年――國家のため戰爭に赴いて、戰時債務に投資する能はざりし青年の負擔に歸して仕舞ふ事になる。――一見感情論の様であるが、經濟論として亦一顧の價値があると思ふ。

七、同案に反對する人々の論據

最近英國に於て此問題程、火の出る様な論戰を惹起したものがなかつた事は前に書いた。保守黨と自由黨二派と銀行家と商賣人と、殆んど擧げて之に反對した。そこには勞働黨、社會主義者憎しの感情から「ボルシエビキ」とか「泥棒」とか云ふ様な醜い言葉の羅列も見えたが、併し兎角抽象的理論に偏して、實行的には寧ろ未定稿の觀がある此案に對する專門家の意見は、單なる資本主義的辯護論のみではなかつた。我等は其代表的なるもの二三を引いて之に反對する者の論據の何處にあるかを見よう。

前首相ボナー・ロー氏は昨年の暮リーヅに於る演説に於て、嘗て資本課税案に贊成した事のあつた旨を承認し、併し時勢は今や全然變つたとて曰く

商業と産業との發展を促がす一つのものは貯蓄の増加である。然かも若し非常に重く課税せられ、結局奪ひ去らるべきものと感ずれば、此貯蓄果して増加するであらうか。思ふに此案の發案者は資本と云ふものに就き、甚だ曖昧なる考を有し、それは皆な銀行に入れてあつて、小切手を書けば何時でも取れる位に思つて居るらしい。何と云ふ馬鹿な事だ、總べての資本はビジネスと信用と仕事と貨物の中に這入つて居る。そして之を取り出すためには其値段を評價せねばならぬが、値段は絶えず變つてゐる。

元來一國の産業が盛になる根本は信用である。大きなビヂネスは多く信用で運轉して居る。例へば或商賣人が銀行に赴いて、借越手形を切るとする。其場合彼は其パランス・シートと擔保をみせる必要がある。而かも若し資本課税によつて或種の束縛を受けて居れば、銀行家からの借入れは困難だ。

予は必らずしも該案が財産沒收だと云ふ點で之に反對するものではない、財産沒收の點では他の區別的租税も此れと同じである。予が之に飽く迄反對する理由は、目下の狀態に照してそれが全然氣狂ひ染みて居るからだ。

一般聽衆を對手の演説であるから、其說く所は卑近に過ぎる嫌ひはあるが、大體の意志は見る事が出來る。

更に自由黨の領袖グレー卿は昨年十一月五日ロンドンに於る演説に於て、資本課税に言及して曰く

現今の如き時に當つて、勞働黨が主張するが如き增税を行へば齎らすものは、只破綻あるのみである。例へば茲に五萬パウンドの資本を或事業に投資し居る人ありとせよ、而して此人より若し假りに五千パウンドを取去るものとせよ、彼の强

轉資金は減少せられ、彼が其事業を擴張し得ざるは勿論、一杯一杯に事業を經營してゐた人にありては、其縮少は已むを得ざる事となり、失業者は益々增加すると思ふ。更に一時に何人もが五千パウンドを得んとするのであるから、之を如何にして調達し得るか、予は疑なき能はずである。即ち誰も彼もが納税するために銀行の小切手を書き、或は其有する株を賣らんとする時に、何人も買手がないと云ふ場合に、政府としても如何にして其課税を取り立て得る?、予は茲に該課税の正義不正義を論ぜんとするものでなくて、それが實行可能であるや否やを問はんとするものである。

英國の保守、自由兩黨の資本課税に對する態度は以上の如きものである。が然らば實業家の之に反對する理由如何。英國船舶組合長サー・アーネスト・グロバーの説は其代表的なものだと思ふ。

彼等は資本と通貨と云ふものと同じだと考へて居るらしい、併し乍ら此二つは決して同じものではない、若し資本家が其金を遊ばせて置くものならば、其何割かを引渡す事は何でもないけれども、通貨其ものゝ性質として、資本の中には金の分量は極めて少ないもので、資本の大部分は、其富を延に生み出す目的でビジネスに使はれる物質材量なのである。

予の觀る所によれば資本課税案は我國の繁榮の根元に關する誤解から來て居るものであると思ふ。

英國の商業は謂はゞ大なる起重機の樣なもので、船舶、銀行、保險其他の機關(何れも資本に賴るところの)と云ふ幾つもの手を延ばして、最後の平時な年――一九一三年には英國商品の輸出額六億三千五百萬磅、及び外國投資とか船舶とか云ふ如きインビジブル・エキスポーツが三億三千六百萬磅であつた。而かも若し此輸出の手の基礎に進撃する如き事あらば、輸出は減少し、それと比例して輸入も減り、失業は慢性且つ更に大なるものとなり、收支の辻褄は合はなくなるであらう。現今の誤りたる政治的及び經濟的の議論は、多く筋肉勞働者のみが總べての、若しくは主要なる國富の製造者なりとの誤れる前提に出發して居る。彼は手段の一つであつて、必ずしも最も主要なるものではない。何故なれば總べての成否は熟練したる腦力が、前述した長い手を有する起重機を如何に運轉するかにかゝはるからである。

政治家、實業家の資本課税案攻擊と共に、英國の諸大新聞も之を攻擊するに躊躇をしてはゐなかつた。連日其論説で罵倒批難し、又ロンドン・タイムスの如きは讀者欄を開放して、普ねく之に關する意見を蒐つたのである。其内の二三は後章で紹介

するが、玆には學者側を代表する反對意見として、フォートナイトリー・レビュー誌に現はれたるエリス・バーカー氏の說を紹介するに止めたいと思ふ。

同氏は先づ社會主義學者が經濟的事物を見るに、金は富なりと云ふ誤つた觀念から、抽象的に而かも通貨の尺度によつて總べてを量るを難じ

富、資本は有用なものから成つて居る、金錢其物だけでは何等の價値もないものである。國家及び個人の富は、全然有用なる貨物の所有及び管理から成り立つて居るもので、それが交換の目的のために紙幣或は金屬の表象を使つて居らうが、國內に通貨が澤山あらうがなからうが、乃至は給料が高からうが安からうが、大して問題とならぬものなのである。國家の繁榮は通貨給料の率で衡り得ない、それは大なる消費によつてのみ知り得る。食物、衣服、家屋、家材、燃料其他を澤山に有して居る國は繁榮で、之を有さざる國は、例へ給料が高くも貧乏である。斯うして一國の富を通貨で計算せず、物貨で勘定すると、混み入つた此經濟問題も分り易くなる。そして斯う說明すると社會主義者が說く所の國家の收入の三分の一は資本家の手に渡ると云ふ議論の滑稽な事が認められる。

とて、其立場を先づ明かにし、「殆んど總べての通貨、手形、株式其他の如き運搬し得べき財產は、物貨及び他の實在的價値に對し發行せられたものであつて、銀行にある金、及び債務の如きは鏡に映る自己の顏の樣な反影である。銀行の巨大なバランスと貯蓄に對しては、殆んど同額の貸付けがある。結局貯蓄は貸付けを生み、貸付けは貯蓄を生む事になる。從つて銀行が非常なる實際の富を有して居る如く信ずるのは誤解である、彼等の庫中には、云ふに足らぬ金とか寶石とかがあるだけで、沒收し分配し得る實在的なものはないのである」、從つて資本家の持つ土地、家屋、機械其他に沒收的なる課稅をなして、露國に於る如く資本家を追ひ拂ふ事は國家も勞働者なり國民なりのためではないと—云ふのが、エリス・バーカー氏の說である。氏は更に曰く

假りに勞働黨の主張する如くに資本課稅が實施せられて、勞働者階級の家庭が一週四シリングを貯へ得たりとせよ、之れがため需要は盛んになるであらう、併し若しそれと同時に生產が增加しなければ、其事は唯物貨の不足を招致するのみであらう、殊に此不自然なる經濟政策の結果生產が減少した場合には特に然りである。此結果は勞働者は四シリングの餘裕が出來るどころか毎週失ふ所が多い事になる。

と一國の幸福のためには生產が必須のものなる事を述べ、更に昨年十一月四日の社會主義の機關フオアワード誌が

國內收入局は下院に於ける戰時增富に關する委員會に對し個人の手にある戰時富力の增加は、一九一四年に比し五十億六千五百萬磅の增加であると報告した

とあるを攻擊して、「戰爭は決して國家を富ましめず、甚だしく貧しくした、之は紙の通貨を直ちに富力と見做す所より來る誤りで、國家は實際に價値あるものを失つたのみならず、戰前の位置を挽回するために每年巨大なる額を據出せねばならぬ狀態にあるではないか。而して富めると貧しきとの貯蓄と、銀行の準備金其他が戰時公債や他の債劵を形成してゐる。故に資本家は資本課税の如き高率なる税金を支拂ふ剩餘を有さざるのみならず、之を斷行する事は彼等を片輪にする事に過ぎない」と述べ之等總べての誤りは、通貨が富なりとの誤解に出發して居ると結んでゐる。

八、チエ國實施の結果は良好

我等は斯くして資本課税を主張するものと、之に反對する者の論據を見た。そして之等の論爭を辿つて來て特に興味があるのは、始めに感情的に主義として此說を罵倒して來た論者が、多くは長く其陣地を守り得ないで、結局實行難の論陣に立て籠らざるを得ざりし一事である。既に實行難と云ふ點が、此案の前途に橫はる最も大なる障害だとすれば、實行が可能だと云ふ證明が出來て、最も强硬に反對して居る銀行家、實業家等の諒解が得られゝば、英國の如き巨大なる國債を有する國に限り、國內の資本を國外に追ふ事なくして理論は直ちに實行に入る段取りとなる譯である。選擧で沸へ立つた血も頭の方から下つて、一般が其前に橫はる諸問題をメリツトによつて考察する樣になつてから、資本課税の問題も專ら實際的方面から論ぜられる樣になつたのは當然である。我等は結論に到着する前に、今暫らく此實際問題としての同案の論爭を見る必要がある。

債劵取扱ひ業者として相當有名なるサー・アーネスト・ハーベーはロンドンタイムスに寄書して、資本課税の實行は通貨の膨脹を招致すると述べた。その理由とする所は、前に引照したグレー卿も云つた樣に、國民の多くが課税されて皆必要の額を捻出しようとするところから、債劵を現金に代ふるを得ず、銀行の貸出しに賴る外は非ず、此銀行の貸出しは結局通貨膨脹となり、物價の騰貴となると云ふのである。

併し資本課税の辯護者は『右は頗る非論理的で、第一に課税されて直ちに支拂ひ得ない者の數は決して多くない、又該課税額が國債總額の半分だけだとすれば、其大部分は資本家が所有して居る戰時債劵を提出すればいゝ譯である。第二には他の株

券や債券を現金に代へ得ないと云ふ點を餘りに誇大視し過ぎる。何となれば戰時債券の所有者は其資本課税に對する割宛額よりも以上に政府から現金を受け取りつゝあるからである。無論銀行の援助は受けなければなるまいが、併し債券取引所には賣手に對し、同じ人數の買手が、新たに得た現金を以て押し寄せて來るに違ひない。最後に其資本を事業に投じて手一杯に運轉して居る人は、銀行から借入れるに及ばない。政府が若し彼等に割賦拂込みを許し、且つ其利子を銀行より安くすれば、彼等が銀行に驅けつける譯がない、斯くして資本課税による通貨膨脹論は一顧の價値もない』と云つて居る。

我等も此點では後者の説の正しいのを認める。資本課税は通貨が膨張せぬ計りでなくて、それは通貨縮小の役目を勤めるものである。而して資本課税を實施してゐる國では、實にそれが大なる眼目なのである。此好個の例はチエツコスロバキアである。同國に於ける資本課税の成績に關し、最近の報告がエム・ピー・ウイルソン氏の筆により五月十日のロンドン・タイムスに載つて居る。曰く――

チエツコ・スロバキアに於ては資本課税の結果、クローネの對外價値は過去數ケ月間絶へず强固になり、遂いに此二三週間は殆んど倍加した、其結果

第一、政府は對外債務をクローネの原價の約半額にて返濟し得た

第二、輸入はクローネの價値と比例して減少した、之に反して生活費、給料及び債務は右の樣に急遽に引下げ得ないので、國内の生産物は高價のため一時的に海外で賣れなくなり又取引契約はこれが外國貨幣で取結ばれて居つたり、或は外國輸入商と此爲替の變動を避け得られる樣な仕組でなかつたものは殆んど取消されて仕舞つた。此結果商賣と信用の損失は非常に大にして、且つ國内の製造業者と之と取引する國外の同國品輸入業者との破綻した者が頗る多數に達したのである。加ふるに失業者は増加したが、政府の非常な努力によつて給料引下げ、生産費の減少、株券の價値引下げ等により同國は再び海外貿易の勃興を見來たつたのである。

而して以上の事實を比較考慮するに、之によつて得たる利益は個人的損失及び過酷なる方針により生じたる商業上の混亂により失ひたるものよりも確かに大なりし事實を認めざるを得ぬ。

と書いて居る。此報告が昨年より資本課税案に猛烈に反對して來たタイムス紙上に現はれたる事實より見て、我等は之れを共フエース・バリユーに受取つて差し支えないと思ふ。

此例が實驗上から來たものとして、重きを爲すものとすれば、反對者は寧ろそれが通貨縮小を招致し、再び不景氣が來て製造家其他が犧牲となるの運命にある點に反對する方が理由がある。卽ち之を經濟學的に演繹して述べて見ると、資本課税を實施せずして現在の儘に巨額の國債を存置せんか、國庫の收入は到底支出に添はず、永遠に之に支拂ふ元利と其他の政府の經費を現在の物價の標準を以て果す譯には行かない。故に通貨の膨脹は當然の結論でなければならない。殊に英國の産業の將來が、米國に於ける南北戰爭後の如く生産增加を示す見込のない以上は、戰時債券の所有者が、其債券の商品的價値を、現今の物價の標準で維持するのは至難と見なければならぬ。卽ち(一)國債の根本的な整理をなすのでなければ、通貨は膨脹して、物價は高くなり、其代りに債券の商品的價値が下り、(二)資本課税を實施すれば、通貨は收縮して物價は安定する代りに、課税によつて債券の一部が棒引きされて仕舞ふ。斯くて後者の場合に中流階級以下が利益するのは勿論である。

此外この問題に就き課税の評價難、或は市場の影響により株式其他の價値が絕えず動搖して居るのに、其評價の時が一定して居つて之に准じて本年も來年も三年後も同じ額を收めねばならぬ如きは甚だしく不公平だ、と云ふ如き說もあるが、之等は寧ろ第二義の問題であるのと、餘り長くなるから玆には說かぬ。

九、結論――官設委員會設置の提出

極端なる論者は別として公平なる識者は、資本課税に賛成する者と雖も、社會一般の諒解を得ずして、斯かる案の實施を危險なりとするに一致して居る。我等は此種の論の代表的なるものとして、英國の有力なる週刊雜誌ニュー・ステーツマンを引用する――

我等自身としては此課税案に賛成するものであつて、我等は實業家が高率なる所得税が却つて産業的企業に對し重き負擔を與ふるものなる事を思ふて、此案の採用に同意せん事を望むものである。併し乍ら此問題は經濟問題なると同時に、心理的な問題である。之に反感を有する實業社會に此案を實施するに於ては甚だ望ましからざる反動を齎らすと思ふ。加之實業社會の同意は事實に於て必須のものである。我等の信ずる所によれば、(大藏省の最も熟練せる役人の或人々も信ずる如く)該案は完全に實用的な案ではあるが、同時に極めて錯雜した困難な問題であつて、例へば重なる銀行の援助なくして到底實行し得ざるものである。假りに勞働黨議員が下院に五百の議席を有して居つたにした所が、一都市の反抗に遭遇

して、之れが勵行は困難である。即ち稅金は納められず、又之を强要する手段はない――彼等が英國の經濟的組織を直ちに根柢より改造する決心がない以上は。而して彼等に此意志のないのは明白である。

と云つて居る

然らば一般社會の諒解を得る方法如何。資本課稅に就いて最も組織的なる研究をなし、勞働黨の主張の缺陷を指摘して憚からなかつたピグー敎授は、最近のロンドン・タイムスに寄書して、此問題を研究するために特に官設委員會を設くべき事を提議して左の様に論じてゐる――

現今の狀態に於て我國に資本課稅を採用すべきや否やに就き二つの立場から攻究しなければならない、一は主義の問題であつて、他は技術的な問題である。主義の問題は分析的研究であつて、經濟學者を待たねばならぬが、又實際家を必要とする場合もある。例へば國內債務と對外債務との根本的相違を全然無視した議論が少なくなかつたのである。技術的な研究とは評價の困難、課稅を實施する場合に遭着すべき諸種の障害、債券等が無くなる事に對する對策其他である。之等に關しては經濟學者の知る所は、單に間接的であつて、稅務局の役人及び今少し輕い程度で銀行家の意見は必要である。其案が主義として立派なものであつても、實際問題として不可能な點から拒絕せねばならぬかも知れぬ。此點は極めて精細に考慮を用ひねばならぬ。それと同時に此案の內に含まれる主義の問題も研究する必要がある。而して之には政府の任命する委員會を設置して、此委員會に總べての事實と統計を提出すべしである。

と論じて居る。

此ピグー敎授の議論でも分る様に、資本課稅の研究は第一階梯を經た計りであつて、それは精確に云つて昨年の暮から頭を擡げた計りの新しい問題である。そして此案がニュー・ステーツマン誌の述べた如く、果して「銀行家は一九一九年に割引步合引上げに對し猛烈に反對したものであつた、彼等は高い金を好まなかつた事、今資本課稅に反對すると同樣なものがあつた。然も當時ピグー敎授の如き先見達識の經濟學者があつて、利子引上げは已むを得ざるものなる事を豫言したのであつた。今や資本課稅案に反對する彼等が結局同案採用を推薦する事になる如き事はないか」どうかを知らない。併しただ此課稅案が英國其他に於て今後益々問題の焦點となるべき事と、日本に於ても何年かの後に實際問題として議論される日のあらう事だけは我等の安全に豫言し得る所だと思ふ。(完)

(備考) 本文の材料はアメリカン・レヴュー・オヴ・レヴュー、フオートナイトリー・レビュー、ニュー・ステーツマン、スタチスト其他及びロンドン・タイムス、マンチエスター・ガーデアン等から得たが、引照の場合には殆ど總べて出處を明らかにして置いたから玆には一々紙數や頁などは明記しない。

復興七題

法學博士　渡邊鐵藏

一　國難

今回の大地震、大火災に基く損害の復舊及び帝都の復興は、種々の點から見て非常な難事業である。

今回の災害は損害の程度が大きいばかりでなく、突如として起つたのであるから、應急の處置の困難なばかりでなく、復興の事業も最も急速を要する丈け苦心を要する。最近のヨーロッパの大戰爭を除いては、一國が之れ程の人命、物質上の損害を蒙つた例も少い上に、それが一瞬時の出來事であつて何等災害に對抗する準備の出來なかつたゝめに、種々善後策に手違も生じやうし、準備の行屆かぬ點もある。殊に多年政府、學府、民間等に於て研究調査を積んであつた種々の材料の大部分が夢の間に煙と化したのであるから、各種の事業施設の計畫、遂行の上に大支障を生ずることは免れぬことである。此點に就いては單に復興院のみならず、各省共に非常な苦痛を感じて居るやうであつて、即座に知り得たことを數日を費して調査し、又如何に苦心して調査しても手の着けやうのないやうなものもあらう。文化の受けた打撃は此樣な具體的の仕事をする場合に一層切實に感ぜられる。其上既に十月號の本誌に述べたやうに經濟、財政上最も困難な時期に際して、更に復興事業に巨億の資金を必要とし、而も一方職を求めて困憊し、バラックに纔かに雨露を凌いで復興の光明の輝くのを一日も早かれと念じて居る者が數十萬に上るのであるから、復興の事業は最も急速に着手し、急速に完了せしめねばならぬ必要に迫られて居る。損害が大きく、それが突然不用意の際に起り、而も復舊は最も迅速を要するに拘はらず、調査計畫に不便がある上に無い袖を振らうといふのであるから、復興の難事業であることは何人も之れを認めねばなるまい。加之、復興の大方針計畫の如何は罹災者の利害に直接最も重大な關係があるものであるから、平素でさへ此種の都市建設及び經濟上の施設に關する事業は利害の大きい丈け種々の

苦情、鬪爭を起し易く、又政治的の紛爭をも釀し易いのであるから、今回の如く大規模に、短期間に之れを行ふに際しては、此種の利害關係及び政治的の意味から來る苦情、紛爭は固より錯綜するに相違ないことであるから、此意味から云つても復興は難事業である。

復興事業が斯くの如き難事業でありとすれば、之れに臨む責任者は勿論、罹災者及び國民は之れに對して相當の覺悟を以て進まねばならぬ。當局は固より復興の速成を圖らねばならぬが輕々しく一部罹災者の苦痛の聲、輕卒な言論にせき立てられ、影響されて姑息な計畫を立てゝはならぬ。一世紀に一度あるかなしの此大きな苦い經驗を控えながら將來に對する根本的の準備をなすに足る計畫をすることが出來なかつたならば、當局は後世の物笑ひとなるばかりでなく其責任は重大である。罹災者も亦徒らに小康を早く求めんとして將來の安全と、便宜と、子孫の繁榮に害のあるやうな行動は避けねばならぬ。一般市民進んでは國民も亦今回の災害に對しては、單に目前の罹災者の生活の困難に對して同情を表示するのみならず、進んで罹災地の復興に關しても勿論一臂の力を供さねばならぬ。

今回の災害は單に一地方の災害と見るべきものでなく、云ふまでもなく國難である。普通の戰敗より甚しい國難である。日本國の從來受けた最大の國難である。譬え災害は地域的には一區劃に限られて居たにしてもそれが日本國のかなりな部分である。況んや富及び文化の蒙つた損害はかなり大きな割合になる。假令戰爭で侵入を受けたとしても國の全地域に亘ることはない。國富、文化の全部を破壞されることはない。それでも國民何人も之れを國難として共同の責任を感ぜぬ者はあるまい。今回の災害とて同理である。有機的に結合をして居る國家に於て、就中國民經濟的に精緻な組織的一體をなして居る國家に於て其中樞部に大打撃を受け、而もそれが電光石火の如くに襲來したるに際して、一般國民は之れを單に一地方の問題とし、又農村はこれを都會の問題として白眼視して居られやうか。彼の忌はしい朝鮮人迫害問題は突差の驚愕と通信機關破壞のための不安に基いた一種の變態群集心理の出來事ではあるが、其動機には單に暴行者の恐怖心の外に罹災者に對する熱烈な國民的同情が潛んで居たゝめであらう。國民的同情、國民的團結が誤つた方向に發露することは喜ばしいことではないが、彼の大變災の際に單に罹災地方のみならず、國內全般に生じた事件の重大な事に關する恐怖、緊張の心持、罹災地方に對する熱烈な同情は決して之れを忘れることのないやうにありたいものだ。罹災者、罹災地に對する同情責任の觀念は必ず現實に之れを具體化

して罹災地の復興のために進んで積極的に犠牲を拂ふ決心となつて欲しい。斯かることは云ふまでもないことであるが、震災前に於て政爭が極點に達して黨爭の弊が津々浦々まで行き亘つて居たことであるから、或は黨派の利害から說を構えて復興事業に對する國民の同情責任の觀念に水を注ぐ恐れもありはしないかと思へば斯かる言說もせねばならぬ。

過日私の同僚である東京帝國大學經濟學部の教師ベルリーナー氏が復興の財源に關して十五の要項を揭げた意見書を私の手を經て當局に示されたが、其中には今回の災害を當然一國の受けた災害として戰爭に依る損害と同一の財政方針を以て之れに臨む考が表れて居り、殊に災害復舊の資金は租稅に依るべきものとし、國民が一般に之れを負担すべく、政府は速かに國民の所得に對して災害復舊のために要する經費を負担せしめ、國民をして速かに今回日本國の受けたる災害の大きさを其負担の程度に依つて知らしむることが肝要であると述べて居る。今回の災害を全然戰爭と同一に取扱ふこと、國民の所得に一般的の負担を課することに就いては勿論異論があり得やうが、之れを戰爭に準ずるものとして考慮し、一般國民が地方事業の繰延べ生活の緊縮等の消極的方法に依つて之れに對應するのみならず、進んで財政的の援助をなすは勿論、幾分特殊の負担をする丈けの犠牲を拂ふことは、單に國民の同情といふよりは幾分義務ではなからうか。要するに今回の災害が大きな國難であるといふことは是非共忘れぬやうにしたい。

二　新帝都區域

今回の罹災地域は東京府、神奈川縣を最とし、千葉縣、靜岡縣に及んで居るが、帝都復興院が復興區域に含ましめた處は東京、横濱の兩市である。然し之れは其以外の罹災地の復興を閑却した譯ではなく、其他の地方は各自治體及び各省の力に依つて其復活を計り、經濟的、文化的、政治的に見て國の腦髓となつて居る東京、横濱の兩市の復興を特に重大、困難、而も緊急を要するものと見做し、其復興に特種の方法を執つたに過ぎないのであらう。帝都復興院の管轄する區域には横濱が包含されてあるが、今回名に依つて一となつた如く、實に於ても其計畫は統一する必要がある。數年來東京都制案が審議され、震災のため一時中止されたものが最近更に開會されたやうであるが、此機會に於て是非共行政區劃としても東京、横濱兩市を打て一丸とする必要がある。今後經濟的に益々密接して一體となるべき兩市が別の行政區劃になつて居ることは種々の不都合を生ずるのみならず、復興の計畫を樹立し、執行する點より見ても此際

一大英斷を以て兩市を經濟的、行政的に合體することが急務であると考へる。東京自身に於ても災後郊外が異常の發展をなし益々市内と區別し難き狀態に在り、此際市の區域を變更することは益々自然の勢と見えて居る。

帝都復興に際して東京市に從來通りの人口を吸集し、從來通りの區域を復舊せしむる必要もなからう。人口の減少、或地區の產業が他方面に移ることは當然豫期して好い事である。東京市を從來の大商工業都市に復興せんと考へる人もあるやうであるが、帝都にそれほど商工業を集中する必要はない。從來でさへ我國は東京、大阪の二大都市が大に過ぎて萬一此二者が破壞されゝば我國は其兩眼を失つて復た立つことが出來ない。或人は帝都に餘り工業を集中することは勞働問題の益々紛糾する時勢に於ては反つて危險であると云ふ人もあるが、之れも一理あるやうではあるが多少神經質に過ぎる憾がある。然し半面から云へば東京市が產業上優秀な自然的條件を具へて居るに非る限りは殊更に帝都に工業を集中すべしと云ふ理由も立たぬ。獨逸は人口三十萬以上の都市十一個を有し、米國は十九個を有して居る。歐米に於ける工業都市は人口十萬乃至四十萬程度のものである。商工業都市となつて初めて七八十萬以上となるのであるが、產業の發達のために特に數百萬の人口の都會を作り出す必要は毛頭ない。歐米の首府に三百萬、五百萬の大都市があるからとてそれと競爭して東京市を膨張せしめんとすることは單に虛榮心の發露であつて、世界を蔽ふ植民地と、歐大陸を控へたロンドンや、ヨーロツパの核心である巴里、伯林や、廣大な領域を控へた米國の商業を擔ふニユーヨークと比肩する丈けに東京を大きくする必要はない。寧ろ將來は東京市の膨張を止めて中都市の發達を計り、殊に工業の如きは適當な條件を具へる他の都市又は地域へ自然に移る方針を執る方が好いと思ふ。英、獨米、佛、孰れの國を見ても工業都市は首府とは全く無關係の發達を遂げて居るのである。此意味に於て彼の本所、深川の工場地帶の如きは特に專門家が技術上、經濟上、工場地として復活することの可能且つ有利なる事を十分に證明するに非れば在來通りに之れを復活する必要はない。假令其一部は復舊せしむるとしても、寧ろ斯かる危險、不衞生の土地を捨て六郷河畔以西にもつと適當なる工場地域を出現せしめた方が海路運輸との關係上も適當なのではあるまいか。勿論現在の東京市は從來の施設殊に各種の交通機關就中鐵道の設備等のために大なる地域の變動は困難ではあらうが、少くとも東京、横濱間の連絡を完全にして、此間に運河、鐵道、道路を十分に發達せしむれば東京も横濱も新生命を發見するに至るであらう。

既に度々論じたことであるが、東京市には中等以上、殊に專門學校が餘りに集中し過ぎて居る。大都會が特殊の學問を除く外一般に教育上弊害の多いことは云ふまでもないことであるが、都會の繁華に馴れた靑年は學業を終へても地方に出やうとせず、强ひて東京に職を求めやうとする。其ために東京は益々不自然に人口が集中する。此意味に於て將來は寧ろ專門程度以上の學校は東京を避けて他の諸都市に設けた方が好い。現在あるものもなるべく之を整理して教育に適當する他の都市に移した方がよい。文科的の教育、女子教育等は寧ろ都會でない方が好いものもあらう。交通の反對潮流を作つて混雜を緩和するために學校をなるべく郊外に移すといふ說もあつて至極結構なことであるが、一歩を進めて東京市に在る教育機關を一部分他の都市に移すことも適當であらう。

三　防備充實の新な意義

人は太平に馴れると安逸に流れ、平穩であれば不用意に陥るのが常だ。又價値の增進、即ち生産をすること、俗に云ふ儲けて居りさへすれば兎に角生活が出來、又財産も積めるので、知らず、知らずの間に何のために生産するのか、儲けるのかといふ根本を忘れて、働けるために反つて財産を失つたり、命を落すこともある。今度の災害に就いても一面に其樣な觀がある。一般に信じられて居るやうに今度の地震は沖積層のみに其災害が甚しく埋立地に於て最もそれが大である。埋立てて土地を殖やせば樂に利益があるので、我國では私人も政府も昔から盛に之れをやつて居る。西洋人は岡を切り開いて町を建てることを好むが、日本人は沼の葭を拂つて町を作る流儀である。西洋の町とて勿論三角洲や沼澤地に發達したものもあるが、地震國で此流儀を用ふることは自ら深淵に臨み、俎上に立つと同じことである。建築術の發達に依つて幾分地盤の缺點は補へるにしても將來は單に「埋め立てれば儲かる」といふ單純な考で平氣で其方針を續け、貴重な樓閣を砂上に築いて之を一時に破壞するやうな愚な結果を見ない丈けの注意は特に今回の復興に際しては忘れることは出來まい。何事も安全第一である。無暗に彼の不體裁な高層建築を作り、大に經濟的な積りで儲けやうとして居ると再びどんな甚しい危險に逢ふかも知れぬ。之れも安全第一を忘れてはならぬ。消防にしても江戸は火事自慢で威張つた丈けに、德川時代には各戸に消防の用意が行き屆いて居たが、文明の今日、諸事組織立つた今日、水道と消防隊のみに餘りに信賴し過ぎたゝめに裏切られ今回のやうな酷い目に逢つた。德川の政治家が河岸を空地にして柳を植ゑたのは啻に風流のみで

はない。此安全地帶の橋畔の廣場も皆明治になつて經濟利用といふ名目で潰されて甚しきは一部の人士の腹を肥して居る。各戸に用水桶を置いたり、消火器を備へたり、危急の際の特別消防隊を作ることも必要であらうし、經濟上を超越して昔の安全地帶を復活する事も肝要である。大久保彥左衞門が用意の桶で將軍の危急を救つたやうなもので、最初の一桶の水が恐るべき災害の勃發を防ぐ安全瓣となり得るのである。併し何を措いても今回の災害に鑑みて安全第一の守本尊となるものは燃えぬ家壞れぬ建物である。

耐火建築の普及の必要なことは數年來私は口を酸くして論じたので、今更云ふべきこともないが、帝都復興事業の第一の重要眼目となるべきことは耐火構造の徹底的普及でなければならぬ筈であるのに、近來新聞紙上に現れる復興院の計畫には交通、公園等のことが主として論ぜられる丈けで、最も肝要であるべき災害防止の點に關しては未だ我等の期待する計畫の示されないことは頗る不安である。成程防火地區、防火線は制定されるやうであるが、如何に法規を設けて防火地區を强制してもこれを助成する道を講ぜねば實現はせぬ。此事は既に數年前から唱へ來つた事であるが、此際政府が徹底的に耐火構造の普及を助成することは復興の第一事業でなければならぬ。今回の東京市燒失建物延坪數五百四十萬坪中民間の建物を五百萬坪と見ても出來得べくんば其二分の一、二百五十萬坪位は耐火構造にしたいものである。假りに之れを坪平均二百五十圓と見れば六億二千五百萬圓の建築費を要するが、此建築費の二割を補助するとすれば一億二千五百萬圓、四分一を補助しても一億五千六百萬圓に過ぎない。更に補助の程度を大にしても二億に充たぬ。僅かに一億乃至二億の金で帝都が根本的に災害に對して永久に安全になるとすれば何と安いことではあるまいか。我國は維新以來頗る軍備に力を用ひて、軍事費が國費中の最も主要の部分を占めて居る。大正八年度にはそれが歳出中の四割五分を占めて居た有樣である。軍備縮少後の大正十二年度の豫算に於ても陸海軍費は歳出中の約三割六分を占めて居り、其金額四億八千萬圓に上る。軍備の必要なことは云ふまでもないことであるが、若し豫期すべき戰爭もないのに每年四五億の軍事費を支出するとすれば甚しい不經濟なことである。極端なことを云へばあるかないか分らぬ戰爭を豫期して每年龐大な軍備費を出すよりは、軍備を徹廢して國費を節約すれば、假りに戰爭で敗けて償金を出しても損にはならぬとも云へやうが、勿論國家の安危に係る軍備を左樣に算盤ばかりから割出すことは出來ぬ。乍併翻つて何故に國民が巨額の費用を出して軍備をするかと云へば、單に

國威の發揚、外國より輕蔑を受けぬ爲めといふ形式的な事からではなく、何かの事端に依つて國民の生命財産の脅威を受け、國家が實質的に迫害を蒙る事を恐れるからである。然るに此種の國民の生命財産に對する迫害は啻に外國との戰爭のみに依つて生ずるものではない。國民は絶えず天災地變に依つて其脅威を受けて居るのである。殊に總ゆる災害の脅威の最も多い我國殊に大火災のために甚しき脅威を被つて居る我國民は常事此種の災害に依つて蒙る損害に對して十分の負擔をして之れに對する準備をせねばならぬ筈である。戰爭に依る危險は成程今迄十年に一回あつて可なり屢々來るやうであつて、今回ほどの大災害は稀であるとしても大きな災害に依つて國民が財産を失つて居る事は擧げるに暇がない。假りに我國が將來どの國かと戰つて敗北したとしても今回以上の損害を受けるか否かは疑問である。其戰爭に備へるために毎年四五億の支出が出來るならば今回の如き一時に數十億の財産を滅失した時に當つて將來再び此種の慘害を繰り返さしめないやうに徹底的の方針を講ずるため僅かに一億、二億の金を支出して濟むとすれば餘りに安過ぎる防備費ではなからうか。これ程の金ならば軍備に觸れずとも調達出來やうと思ふが、私は此際敵に對する軍備を五年間程思ひ切り制限して災害に對する防備の爲めに五年間十分の國費を投ずべきであらうと思ふ、私は啻に之れを帝都復興のみに就いて云ふのではない。我國の殘れる一眼即ち大阪市の災害防備及び其他の重要都市に就いても同じ問題であると思ふ。東京市の災害防備のために二億を要するとして其他の重要都市とを合せて五億十億を要するとしてもそれは決して高價であるとは云ひ得ないと思ふ。適當な財源を求めて復興の費に充つると共に今より五年間軍備の大制限を行つて、之れに依つて捻出した資金を以て都市の災害防止に與へることは、唯だ人に對する軍備を一部天に對する軍備に振り替へたのに過ぎない。或程度迄豫想されぬ戰爭に對する軍備の一部を割いて常に豫期し得る災害防備に代へるのであつて國民は擧つて之れに贊成をするであらうし、軍事當局もそのため國防上の看過し難い大缺陷を生ずる程の大影響も受けまい。

耐火建築の補助に關して函館市の如きは既に之れを實行して居る。屢々大火の苦い慘害を嘗めた函館市は重 街路を防火線とし、鐵筋コンクリートの建築をなさしめると共に建築費の一部を補助して居り、其本願寺でさへも鐵筋コンクリートの構造をとつて居る。東京市は此例に學べばよいのである。但今や財政上の能力のない東京市には補助金を給する能力なく、且つ初めに述べた如く今回の災害は國難と認むべきものであるから宜

しく政府が之れを補助すべきである。猶耐火建築は一部分に行はれるとしても、之れを以て都市全體を大火災より救ふ城壁となし得るものであるから、勿論共同の安全のために補助の理由はある。加之、東京の如き大經濟都市の建物は國民經濟上の重要な生産資本を抱擁するのみならず、全國各地方から集中した商品を包藏するものであるから、之れを防護することは國民經濟上の必要があり、國民大多數の利益である。空しく財貨を燒盡することは國民經濟の損耗であるのみならず、商品を製造し、販賣を委托した者の眼から見ても相互に財産上の損害を來すことである。此故に帝都の建物に耐火構造を普及せしむることは、局部的の觀察をなさず、之れを全般の利益に考へ、永久の安全のために徹底的に助成すべきである。

猶右の耐火建築助成の外に土地區劃整理、建築事業の遂行、及び建築材料を廉價に購入するために特殊の建築企業組織を政府が援助成立せしめる必要のあることは繰り返し說いた所である。

假りに鐵筋コンクリート構造が最も安全な建物であるとしても其工事にして不完全であれば木造家屋よりは更に恐るべき災害を生ずる惧れもある。今回の地震に依つて丸の内の高層洋式建築の失敗の例は眼の當り人の見た所であるが、一の著るしい例は東京市の四谷見付附近に於て、見渡す限り倒潰した家屋は見當らず、損害と云へば纔かに屋根瓦が破損した位であるが、唯だ一軒見苦るしく倒潰した家がある。それは見付外角の鐵筋コンクリート作りの家である。之れに依つて見ても構造と共に設計工事に就いて十分の監督を怠つてはならぬ。

四　自然化

復興事業の重要な一面は勿論都市計畫であるが、其中今回の災害に關聯して特に考慮すべき點は公園と街路の問題である。從來公園は主として保健の點から考へられて居つたのであるが今回の大火災に依つて其安全地帶としての效果の顯著なことが深く印象されたやうである。災害後のことであるから公園に注意する者は或は安全地帶としての意義のみを強く考へるかも知れぬが、火災に對する安全は勿論主として耐火建築を待つべきものであつて、防火のために多くの自由空地を設け、街路を廣くする考は頗る消極的な舊式な考である。從つて公園は事實安全地帶の役目はするが、之れを擴張增設する際の主たる根據は矢張り保健であらねばならぬ。公園は或は庭園式、或は野趣を帶びたもの其他樣々の樣式があるが、此外に運動場の設置を考へる必要がある。公園と運動場を混同することは誤りで、公園

内で運動をし、殊に危險な野球などをするのは勿論間違つたことで、大公園の一部に特別の區劃を設けて運動を許すなれば兎に角、兩者を混ずれば甚しく公園の効果を害することになる。東京市の計畫に就いて云へば、多くの專門家の主張の如く此際增加すべきものは寧ろ三萬坪乃至五萬坪の小公園であつて、從來公園のない各區に少くとも一つ位は此種の公園を設ける必要がある。東京市内の公園面積は私の計算では約五十三萬坪であつて、東京市全市面積に對して二・二%に當る。此中には勿論淺草公園は除外してある。淺草を公園と名づけるのは大阪の千日前京都の京極を公園と名づけると同じで、此流儀で行けば東京全市公園と云つてもよい。今外國都市の市内公園面積の市全面積に對する割合を參酌して、凡そ東京市内にどれ位の割合の公園があればよいかと云へば、東京市には公園以外の之れに類する空地がかなりある故、先づ四%、理想としては六%もあれば好い。四%に滿足しても差支ない。東京市の人口の密度は割合に高い故、此數字では公園一單位面積に對する人口密度は、勿論外國の大都市より高いのであるが、將來市内密集區域を整理すれば幾分此缺點は緩和される。さて東京市内公園面積を市の面積に對して四%とするためには今後一・八%の公園を增加すれば好い。其中三分の二卽ち一、二%を今回增すとせば約三十萬坪も公園を增加すれば最少限度の要求は達せられるやうである。

此外公園と公園の間、又は河岸、濠端、其他適宜の場所を選んで公園式散步道路を作れば公園の効果を發揮する點に於て最も有効である。公園が諸方に散在し、散步道路の存在することは、都會生活の雜閙に身心を痛める多忙な市民にとつて、僅かの時間を利用して特に電車を用ふる煩もなく、散步、休養する機會を與へるものである。殊に不幸な都會に住む子女の健康にとつてどれ程よい効果があるか知れぬ。中流以上の人は、殊に庭園を持つ家庭では、公園の必要といふことに對して理解が少く同情がないかも知れぬが、大多數の市民にとつて健康上これほど大切なものはない。文明都市の身心に與へる害毒の烈しいことは今更茲に云ふを待たぬが、其害毒を幾分でも緩和するためには都市の中に自然をとり入れるより外はない。文明化した都を更に或程度まで自然化することは都市に對する新らしい政策でなければならぬ。彼の大阪市の現狀を見れば何人と雖も直ちに大阪市の都市計畫に最も大切なことは之れを自然化することにあることは異存がない。今回の如き災害が假りに大阪市に起つたとすれば、其損害の絕大なことは思ふだに慄然たるものがある。大阪の船場、島の内の如きは幸にして今日まで大過なきを得たが一朝大災害があれば勿論今回の東京以上の慘事を演ずる

ものと覺悟せねばならぬ故、安全地帶の意味から云つても大決斷を以て公園を少くも現在の十數倍の面積に增加する必要がある。東京市は幸にして官有地にして之れを公園に開放、又は改造し得べきものが多いから、公園の增加は財政的にも割合に容易に出來ることであらう。

近來我國の靑年、少年の間に運動熱の盛なことは甚だ喜ぶべきであるが、此機會に適宜な場所に運動場を設置することは必要である。但し從來は學校には運動場を有たないものは少なかつたが、一旦社會に出たものは殆ど運動をする場所がない狀態であつた。此點に注目して一般市民の利用し得る運動場を數個設ける必要がある。從來各學校が運動場を專用して居たやうな狀態は將來之れを繼續することは困難なる事情を生ずるであらうから、共同運動場の設置を考へる必要もあらうし、殊に彼の少人數で廣い面積を利用する野球のために學校が市內に運動場を有する如きことは漸次之れを廢止せねばならぬと思ふ。

公園運動場等の休養機關は唯だ日曜ばかりでなく、毎日利用出來るやうに適當な區域に散在せしむる必要がある。都人士か日常眞似事ながらも自然に親み、靑春の士女が容易に身體を鍛錬する機會を與へられるならば、どれ程國民の保健にとつて著るしい効果があらうか知れぬ。

五　交

都市計畫の中心をなすものは交通であるが、今回の災害に際しても東京市は多年市區改正を行つて來た結果として幾分避難の際の混雜を救はれたところもあるが、大體に於ては矢張狹隘な道路のために避難者が混亂を來し、火足の早い猛火に追ひかけられて悲慘な運命に陷入つた者が無數である。假に此災害があの道路の狹い大阪市に起つたとすれば其混亂は極點に達し、恐らく大多數の者は群集と荷物と車のために身動きも出來ぬ間に猛火に包圍されたに相違ない。火災に對する安全卽ち防火避難の點から云つても、道路の幅員は相當の廣さを必要とするが路幅に依つて防火せんとするは固より姑息な考であつて、勿論耐火の根本策は耐火建築に依賴する外はない。乍併木造建築が一般的である間は勿論相當の路幅を防火のために必要とする理由もあるが、路幅は根本的には勿論平素の交通を基礎として定むべきものである。

今回の復興計畫の中にも勿論新道路系統、道路の擴張の計畫が含まれて居るが、東京市在來の道路面積は市總面積に對して僅かに一割一分にしか當らず、之れを外國諸都市と比較し、又我國都市の特種の事情を參酌しても猶少きに失する。少くも二

○%の程度の道路を有することが必要であらう。然らば將來增加すべき割合は九%であるが、假りに此中今回の復興計畫に於て新設擴張すべき割合を全市面積に對して六%とすれば此際約百四十五萬坪の道路敷を擴張することを要する。道路系統、路幅等の復興計畫は未だ新聞紙上で知るのみで詳細を知ることを得ないが、復興院參與會議に現れた道路系統、路幅擴張面積等は大體に於て適當と思ふ。但し主要道路二十四間を三十間にせよとい說もあつたやうであるが、外國の例に見ても、東京市の現狀及び將來を考慮しても、左樣な廣い道路は不必要であらう。横町線の二十八間すら私は甚だ廣きに失すると考へる。況んや今回の震災の經驗に依つて高層建築を制限するとすれば猶更三十間道路の如きは不必要である。北海道の札幌市は道路の廣いことを誇りとしてゐるが、北海道であり且つ道廳所在地であつたゝめに財政上あれ丈けの計畫が出來たのであらうが、交通上それ程の必要もなし、又防火にも完全な効用をなさぬのに、將來之れを鋪裝して眞の意味の近世式道路としやうとすれば忽ち財政に困難する。現在でも路側に草の生へて居る場所は多くある。大阪市のやうに道路が、餘り狹すぎても不便且つ危險であるが、餘りに廣きに過ぎても不利益である。之れと同じ理由で其街路の主要道路としての利用、兩側の建築物の規模、用途等を正確に考慮せずして、平素自働車で街路を馳驅する人が單に瞬時を惜む意味でなるべく街路の廣いことを欲するといふ單純な考方で、三十間といふやうな廣い路線を設定する如きことがあつては、開設費に巨額を要するのみならず、將來の鋪裝其他街路の設備、維持掃除費等に無用に多額の經費を費さねばならぬことになる。其程度が甚しければ却つて鋪裝費をすら之れを經續し得ぬ恐れもあらう。

外國の例を見てもロンドンの重要商業地道路は、勿論現在交通輻輳のため甚しく困惑して居るのであるが、大抵八十尺、即ち十三間若くはそれ以下のものであつて之れ以上のものは殆んどない。伯林は最も交通系統が完全で、路幅の廣い市であり、彼の中心のウンテル・デン・リンデン街の如きは數丁の間三十二間半の路幅を有するが、商業街として又交通のためにも全然斯程廣い必要はなく、寧ろ間の拔けた裝飾的の街になつて居る。同市のシャーロッテンブルヒの有名な廣いビスマーク街には廣い左右の人道の外に電車道、荷車道、自働車專用道が各々左右にあり、中央に乘馬道、花園式植樹裝飾地帶があつて、これほど完全な贅澤な設備をしてさへ其路幅は二十六間に過ぎない。將來東京市の建築物は地震國に於ける地震都市として固より一般的にはロンドン、ベルリン以下の高さに制限せねばならぬと

思ふ故、三十間幅の街路の如きは斷じて其必要を認めることは出來ぬ。公園式散步道路ならいざ知らず、商業街交通路に徒らに廣い路幅を與へることは注意して之れを避けねばならぬ。日比谷、神田橋間の路幅は二十間であるが、一等道路として大抵あれ位で間に合ふことゝ思ふ。況んや防火の意味で四十間、五十間道路を唱ふるに至つては批評する價値さへない。

交通機關の系統、設備の良否如何は市民の經濟的活動、生活の便宜のために最も重大な關係のあることは云ふまでもないが、東京市の交通機關、殊に市內電車の混雜は殆んど拾收すべからざる狀態に在つたのであつて、之れを救濟する道は高速度鐵道を設けるより外ないことは當局者及び輿論の一般に認むる處である。私も數年來之れを主張し、自らおせつかいながら路線まで提案したことがある。帝都災後の復舊に當つて是非共此問題は同時に解決したいものであるが、今や大地震の脅威を受けて地下鐵道の可否に就いて一部に種々の疑惑が生じて居るやうであるが、東京市に安全に地下鐵道を建設し得るや否やは勿論專門家の決定すべきことであつて我々の容喙すべき限りでないが最も焦眉の急に迫つて居る此際少くとも地下鐵道の能否は迅速に之れを決定する必要がある。帝都復興院參與、評議員等の中に各種學術專門家の數が小いことは遺憾のやうに思ふが、或は政府當局の手のみで自信ある決定をなし得るとしても、萬全の策として地下鐵道問題に就いては少くとも速かに內外の專門家の意見を何等かの方法で蒐集協議して安心の出來る決定を與へられたいと思ふ。

高速度鐵道の路線に就いては品川、上野間の速成を希望する者もあるやうであるが、既に鐵道省が上野、萬世橋間の連絡を急ぐとすれば、私は寧ろ市の中心と郊外を連結する放射線を先にして、省線との並行線は後にすべきものと考へる。或は省線輸送が完全になれば品川、上野間地下鐵道の如きは不必要となるのではないかとさへ思ふ。

高速度鐵道の運賃は建設費の關係上市內電車よりは幾分割高になる傾がある。從つて其經營には十分の注意を要するが、高速度鐵道の財政を調和するために其郊外終點に於て之れに附帶して大規模の土地を所有し、直接又は間接に住居地又は田園都市を經營することが有利である。然らずんば高速度鐵道の開通に依つて郊外終點附近の土地所有者に徒に不勞利得を與へる結果ともなる。寧ろ逆に云へば郊外に廣大なる土地を所有する者か田園都市を計畫して之れと市內との連絡を計るために自ら高速度鐵道を架設しても收支償うほどのものであるから、將來何人か東京市の高速度鐵道を經營するとしても、其郊外終點其他

の地點に對する適當の土地政策を講ずることを忘れてはならぬ。

六　舊本丸の開放

私は曾て本誌上に寄せた論文の一節に東京市土地整理論と云ふのを書いたことがあるが、今回の災後の帝都復興計畫の遂行に際しては都市計畫の上からも、復興財政及び市の將來の財政の上からも益々其緊要なことを強く感ずる。當時大手町、神田橋間の官有地及び文部省附近の官有地を整理して、將來官衙を他に移轉せしむると共に之れを市に下附し、市は之れを現在の丸の内の三菱街と同樣の近世式の商業街敷地として之れを貸付け、永久的の財源となすべきことを論じたが、幸か不幸か今回之等の地上の建物は全部烏有に歸した故、此際此の約十三萬餘坪の土地を市に下附すれば、丸の内一帶は完全な最新商業地帶と變じ、東京市の經濟的活動を最も有効ならしめるのみならず、市は三菱と對等の大地主となつて將來財政上に於て益する處が少くない。内務省、大藏省其他の官衙は既に議のある如く一部を霞ケ關に移し、他の一部は舊本丸内に移せばよからう。

江戸時代將軍の居城である、大名旗本の屋敷の集中して居た東京市は勿論其儘では近世式商業都市たるには適しない、其後徐々の變遷は遂げて居るが猶未だ維新當時に大名其他より奪取したものを甚だ不經濟的、不合理的に使用されて居る部分もないではない。此意味に於て東京市内に於ける陸軍の占領地の過多なることは論じたことであるが、今回私は東京市の交通系統を最も有効に改良する意味に於て又新な公館區域を設定する意味に於て舊本丸の開放を主張したいと思ふ。舊本丸には數個の官廳があるやうであるが、其大部分は徒らに放擲されてあるのである。東京市の最も貴重な中心地點に於て廣漠たる土地を閉鎖して、之れを十分に利用せざるのみならず完全な交通系統の成立に障害を與へることは何としても遺憾千萬なことである。今此土地を開放するとしても皇居に對して決して御迷惑相かけることもないやうに拜されるし、殊に設計及び設備に十分の注意を加へれば其恐れは益々なくなるやうに思はれる。即ち江東深川區、永代橋、呉服橋を通過して大手町に至り、大手町にて行き止まりになつて居る街路を眞直ぐに延長して本丸を通過し五番町に出で丶四谷又は市ケ谷見付に連絡せしむることゝすれば、外濠を迂廻するために日比谷、小川町、九段等の地點に於て電車其他の交通を輻輳せしめ、從つて東京市全般の交通に與へる不利益な影響を之れに依つて大に救濟出來ることゝ思ふ。而て本丸を通過する此道路の兩側に適宜に官廳其他の公共的營

造物等、例へば博物館を配置して之れを新らしき公館區域とし其建物の用途及び殘餘の土地を公園式に裝飾すれば玆に立派な美觀區域、公園道路若くは小公園が現出して貴重なる土地が十分に利用されるのみならず、市内の交通に益する所頗る多大であると感ぜられる。切角復興都市計畫を樹つるに際して此點に考慮を拂はれることを切望せざるを得ない。

七　美觀

都市計畫を論ずる人の中に努めて美觀といふことを避ける人があるが遂に其意を解せぬ。之れは恐らく都市計畫の目的の一つが美觀に在ると云へば都市計畫全體が贅澤なものとして、或は不必要なものとして排斥されるといふ惧れを抱くことに原因して居るのであらうと思ふ。然し美觀を除外しては眞の都市計畫といふものは其意義の半を失つて了ふ。英國の都市計畫は不衞生地の整理に淵源し、米國の都市計畫は主として交通の混雜に原因して居るやうであるが、獨逸の都市計畫は都市の美觀及び交通に起因して居る。英米と雖も今や都市計畫の目的の中に決して美觀を忘れては居ない。我國では都市計畫を廣く解して上下水道其他の總ゆる都市設備を包含する場合もあるが、嚴格な意味の都市計畫の最も主要點は交通、營造物の配置、美觀にある。獨逸の如きは最初より、又最近に至つて益々美觀に最も周到な注意を拂ふやうになつて居る。其建築規則に美觀に關する種々の規定を設けるのみならず、千九百十八年の住宅法に基く規則の中には重要な建物の外面の設計を市が提案してもよいといふ程まで美觀を重んじて居る。

美觀と云へば直ちに贅澤な、無駄な裝飾をするやうに考へて且つ同時に巨額の費用を要するやうに考へる者もあるかも知れぬが、經費と美觀とは必しも兩立しないものではない。特に多くの經費を掛けずとも着眼次第で十分に美觀は表現出來る。假りに或部分に對して美觀の目的のために一割二割の多くの經費を必要とした處で決して之れを躊躇すべき理由はない。人間が美、藝術を要求することは今更云ふまでもないが、今度の大災害で全市の大部分が荒寥た廢墟に歸し、悲慘な哀話の充滿して居る間に、僅かに數十日の後に市民が慰安を要求して止まず種々の娛樂が盛に擧行されて居ることを見ても、如何に緊張した際でも人間は永く慰安を求めずして居られないことを語つて居る。平板な無趣味な生活は人間を神經衰弱に導く。今更藝術美術の必要を說くでもないが、街路がセメントの塊で被ひ盡されたならば、面壁幾年の達摩の如く人界に背く聖者ならばいさ知らず、自然に背いて多忙な事務生活に過勞して居る市民は殆

んど眼を慰め、心を休ませる暇もなく索漠たる生活に苦しむに相違ない。如何に焼け跡の復興とは云へ、財政困難とは云へ餘りに窮窟に考へ、切り詰め過ぎて永久に取り返しの付かぬ殺風景な計畫設計をされては市民の落膽失望は甚だ大きいに相違ない。趣味と慰安のない生活の無意義な如く、慰安と美觀の備はらぬ都市も亦甚だ索漠たるものである。歐米の都市計畫事業には必ず美術家が其委員に參加して居るが我國では之れを顧みもしない。美術國とは名のみで骨董國だ。どうか都市の美觀といふことを忘れずに居て貰ひたい。帝都復興の際殊更に此感を深くする。



整腸消化劑ビオフェルミン

ビオフェルミンは本邦嚆矢の糖化菌含有乳酸菌製劑にして整腸と消化の兩作用を兼有し、諸般の腸疾患の治療並豫防に對し賞用せらる。

ビオフェルミンに對する知名醫家の實驗報告二百有餘に達し殊に小兒の消化不良、綠便、下痢に應用し卓効あり。

粉末及錠劑あり、全國有名藥店に販賣す

製造元 神戶市二番町 株式會社神戶衛生實驗所

發賣元 武田長兵衛商店 大阪市東區道修町

神經衰弱 ヒステリー 不眠症 特効 カルモチン

カルモチン錠 二十錠入(金九拾錢) 百錠入(金貳圓四拾錢)

安意に且つ容易に服用し得らるる鎮靜催眠劑にして神經衰弱、ヒステリー、神經性不眠症等に應用し確實に奏効す。

醫學博士山田鐵藏先生、醫學博士佐多芳久先生、醫學博士矢尾板四郎先生、醫學博士荒井恒雄先生の實驗報告集あり、郵呈す。

◇全國有名藥店に販賣す

發賣元 武田長兵衛商店 大阪市東區道修町

關東代理店 小西新兵衛商店 東京市日本橋區本町

戰禍の試練に遭うた歐洲と天災の試練に遭うた日本

戰爭及び革命の社會的影響と震災のそれ

杉森孝次郎

歐洲戰が歐洲及び廣く國際的社會に及ぼした、及びなほ及ぼすべき影響と、今回の大震災がその震災地、日本、及び廣く國際的社會に及ぼす全影響とは、質に於いて、すなはちそれの惡影響及び善影響に於いて、及びその兩種影響のおの〳〵の量に於いて、殆んど比較にならぬほどの大小の差を示す。

歐洲戰には、それの惡果または惡影響と見るべきものが著大であると同時に、それの善果または善影響と見るべきものも決して絶無ではない。わが大震災の場合に於いても、同樣の判斷が成り立つ。

歐洲戰の餘殃は、ヴェルサイユ條約の强制と佛獨間の確執不底止とにそれの現在の尖頂を示す。けれども、いはば想像の天火一とたび佛獨兩國民の理性に着燃して、その兩國間に、二十世紀的新意思に滿ちたる聯邦關係または一國關係の如きものが勃然として産まれいでば、それの發展は殆んど奇蹟的に渾圓球上の各中心と各隅とに迅速に波及傳達して、わたくしのいはゆる友人主義的國際聯邦の隨處出現、先づもつて接壤諸國間に於けるそれ、また諸聯邦間の聯邦といふやうに、眞に駭心驚目の、いな實に蘇心開目の景と情とを始めて新たに現實にしてくるだらう。問題は、いふところの想像の天火が恐らくはついに佛獨兩國民の理性に着燃するの時なからんことだ。佛獨兩國民の理

性が死灰同然になつてしまつたからではない。人類の、諸國民の想像が現にあまりに低く、淺く、狭く、薄く、弱く、細く、輕く、小さいからだ。現代人の想像力を培養し、想像本能に點火し、または羽翼づけることが、かくして現代人自身の一急務だ。

しかしながら、たとひ佛獨聯邦が急先鋒をなすが如き最捷道を、歐洲戰の餘慶として期待しえないとしても、なほかつ、われらは、歐洲戰が機會となり、原因となつて、國民主義の反省と、國際主義の發達とが、要するに人類社會に獲勢し來たり、增進し行くことをば精確に認識し、冷靜に期待しうる。國際聯盟及び華府會議を單なる氣まぐれ、浮はごころの仕事及び外面如菩薩内心如夜叉の事績とのみ看過し去るなかれ。そこにも一道の光明因はさがしあてられる。友人主義的國際聯邦への現代的新社會本能と必要とが底流してゐなかつたなら、あれだけの善行も惡爲も成らなかつたにきまつてゐる。しかるに、その底流的意識は、歐洲戰によつて保育され、覺醒され、解放された部分を大きく持つ。

各國と各民族の外的關係が、歐洲戰に感謝すべき改進的影響をうけたのみならず、多くの國々の内的組織が、それの制度と慣習とそれらの基礎觀念との上に、歐洲戰に感謝すべきいく多の善影響をうけた。なかにも、社會價すなはち生産生活に對する認識及び評價の發達と人の本質及び存在に對する認識及び評價の發達とは、最も特筆して、大書される。一九一八年中に於ける英國が參政權を男子に改與し、女子に新與したこと、またその年の十二月の總選擧の結果として勞働黨がその國未曾有の大勢力をち贏えたことの如きは、むしろそれの些細なる例に屬する。同じ國の同じ年の八月に發布された義務敎育大擴張令といへども、それの最大の見本ではない。

露、獨、墺及びなほその他にも見られた國家組織上の政治的方面に於ける多少根本的な、原則的な變改は、すなはち善意義、進歩的意義、改善的意義に於ける政治革命は、すくなくとも道徳的及び哲學的利益、興味から考察して、すなはち生活の深絶にして且つ高絶なる目的から考察して、恐らくは大戰爭の影響中の最尊、最貴、至聖なるものであつた。それは實に人の本質と存在に對する認識及び評價の一飛躍的進化を意味する事柄であつた。無論、さばかりの變改は、實は、疾うのむかしになされなかつたことが、すなはちそれが最近までも實現されずに來たことが、理性にとつて不愉快きわまる話ではあつたのだが、大戰爭がなかつたならば、なほも不實現の時期がだらくと續いただらうと考へられるがゆゑに、遲蒔きながらも、その

變改が實現されたことは、そしてそれが戰爭を偶發因、催起因、促進因として實現されたことは、今日及び後世に及んで、人々が、大戰爭の善果の一として忘れえないものでなくてはならん。ついでながらに註釋して置くが、いはゆる人の本質とは、人はいかなる共通性を有する實在かといふ問ひに對する正しき答へを豫想するものであり、人の存在とは、その如き實在は現代に於いてどれだけあるかといふ問ひに對する正しき答へを豫想するものだ。これを最も縁遠い方面に例說するならば、教祖も人以上ならず、信徒も人以下ならずといつたやうにだ。

大戰の善果の著大なる一が貧乏勞働階級の組職的擡頭であり、それと對聯して、富貴遊惰階級のあるひは急轉的な、あるひは漸落的な崩壞であることは、甚大の注意をあたひする。勿論、その急轉的な場合はロシヤに見られ、その漸落的な場合は歐米及び東洋の產業力高き二三國に特に見られる。この變化は、社會價に對する認識及び評價の發達をそれの本質とする。及びそれと共に人の本質及び存在に對する認識と評價の改進を意味する。勞働者も人だ、勞働界にも人はある、人だらけだといふ事實に對する認識と評價は後者であり、他人を益し、萬人すなはち社會を利する行爲は生產行爲だけであつて、消費生活は、それだけでは、その消費者だけを滿足させるものだといふ原理に對する認識及び評價は前者だ。

劃一的、權力統一的共產制は、その社會に於ける供給力がにわかに減絕し、需要力は勿論依然たる場合に、及びその社會の秩序一般がにわかに信賴と威力を失墜し去つた場合に、最賢策だ。ロシヤの一九一七年から數年後までのあひだはすなはちその一例であつた。あだかも、大震災後の數週間が東京を中心として罹災地の大部分に小規模ながら戒嚴令、暴利取締令、暴利制裁的自治體行動、自警組織、及び來たるべき土地收用等の諸形式をとつてそれを例示したやうにだ。

一社會に於ける經濟的供給力が或る程度以上に健在しまたは恢復し、またその社會の秩序一般が或る程度以上に健在しあるひは恢復してゐるにかかはらず、なほかつ嚴にして一徹至極なかたちの公有制及び公營制を採用することは、決して最賢策ではない。ロシヤの數年間の實績を見て、ひたすらにそれを絕對的、普遍妥當的理想制だと認識し且つ評價する如きは、一種の錯覺だ。妄信だ。淺察だ。幼稚なる英雄崇拜的心理作用によつて自己催眠に落ち入つた一事實だ。ロシヤ革命または革命のロシヤといふ社會格的英雄の悽痛無限、悲壯無限、純熱無限、誠意無限をまのあたりに望見して、これに心打たれに打たれ了して、あはれにもヒプノタイズされた一事實だ。みづから

は失心して乘り移られた多少の人々が、その事實の身證者だ。かれらは御幣かつぎの一種にすぎない。政治組織に關する反動主義者は時間的に古昔の偉業雄績を偶像崇拜的に現に崇拜し、一部の經濟組織觀者は空間的に隣邦的社會の英雄的殉理想的心事と行動とに對してさうする。兩者の間には本質的共通弱點がある。

英は前記の通り一九一八年八月に義務敎育大擴張令を發布した。これは、一九一七年八月に、時の文相フィッシャー氏が議會に提案し、ランカ州を中心とする、また綿業者を中心とする資本家階級の極度の反抗についにめげずして、一週年にして、案を令と化しおほせたものであつた。一九一八年の敎育令といへば、すくなくとも英國の敎育行政史上に、未曾有大の、もしくはすくなくとも最大先例に劣らないだけの位置を一般に認許されてゐる。フィッシャー氏は、一九一六年の十二月に、ロイド・ジョージ氏が組閣にあたつて始めて民間から擢き擧げた敎育者であつた。一九一七年から一九一八年の夏へかけては、英國として、四年越しから五年越しの久しきにわたる連戰連敗的苦境のどん底に置かれてゐた時期であつたことを、そして、義務敎育擴張案が猛烈に反抗されたわけは、それが有產階級の納稅負擔を增すがゆゑであつたことと、及び最も直接的には、英國隨一の產業たる紡織業に雇用されてゐる莫大の數に達する少年男女勞働者を、その十四歲以下なるをば全部、その小學校卒業後十八歲以下なるをばすくなくとも日中强制補習敎育が割除するだけの時間にわたつて、新法令は雇主の手から解放するがゆゑであつたことを、英國の一九一八年の敎育令の誕生苦を知るためには、覺えてゐなくてはならん。それは、要するに、國家的に、財政及びその他の多くの點に於いて、英國として最も苦しい境遇に窮迫され切つた際に却つて勃然として產まれいでた英雄兒であつた。親が英雄親であつたのだ。產婆役のフィッシャー氏も、後援者のロイド・ジョージ氏も、肝腎の國民も、さすがにジョン・ブルの名をいまなほ朽ちずに唄はれる深謀遠智の大氣力者であつたのだ。

明日の英國が馬鹿にならんといふ判斷が成り立つ最大材料は、實に、かれの外交力にも、富力にも、一般デモクラシイにも存せずして、新時代の英雄國らしくも、國民敎育に費用を吝しまぬ意氣と態度と行動と觀念とに存する。それはあだかも、明日の北米合衆國が、普佛戰後の獨と同樣の轍をふまないだらうと觀測される有力なる一材料が、一八七二年以來の獨は、麥酒の莫迦飲みをはじめたに反して、參戰成り金のヤンキーの國は、最も好景氣な瞬間に、英雄らしい贅澤振りを惜しげもなく

發揮して、ともかくも禁酒令を發布したに存するが如くにだ。外來的に自由が許し與へられた時に不自由を選び行なひ、外來的に不自由が强制された時に自由を内發的に創造するところにこそ、個人の實力も、國民またはその他のいかなる團體もの實力も、及び眞の道德力も、また一種の英雄的贅澤心も、證據立てられる。

國民教育の大伸暢を、のんきな時の僞善業となし、虚榮業となし、窮厄に見舞はれては蒼惶としてこれを蔑視し去ること弊履をぬぐが如くなるは、よそ目には見苦しいだけでなく氣の毒だ。その國自身としては、勿論、氣の毒ではなく好んで反目的の死地におもむく無智無勇の行爲だと省知して奔避すべき誘惑だ。この誘惑は、小人をのみ誘惑しうる。

轉じてロシヤを見れば、そこにては、英國とはまるで桁ちがひも及ばぬ財政的及びその他の百千萬種類の大窮厄に置きすくめられたにかかはらず、文相ルナチャルスキ氏を當局として、レーニン氏その背後に、勿論、ロイド・ジョージ氏が教育の新時代的位置に對する理解及び識見に比してははるかに、はるかに萬邁にして純眞なるそれらを持して、殆んど力の限りを盡くして助け働いて來た。かくして、革命直後のロシヤは、他のすべての點に於いてよりも、國民教育に於いて、最も讃歎措くあたはざる成績をさへも實證した。幼少年者以外の國民は、頗に菜色あり、衣に積垢と粗薄とが顯著なる際に、幼少年者だけは、順風順雨に生ひ育つわかば、蕾花そのものの如き幸福狀態を一見明白に示しえたといふ。忙中おのづから閑あつたわけではない。太忙中の至急務がなんであるかを革命ロシヤの中心人物は見あやまたなかつたのだ。

曾つて勃興の獨は大奈翁によつて慘敗と屈辱を甞めつくさせられ、深省して國民教育にそれの新努力を傾注しはじめた。そして第一にそれの力によつて同じ世紀内に普佛戰勝を見るをえた。歐洲英國に於ける蘇國の位置は、いまだ全く從屬位を脱却しないけれども、貧世帶にかゝはらず、いな實に貧世帶なるがゆゑに、國民教育に捧げ來たれるその國の努力に於いて、すでに久しく英本國を凌駕した。蘇國に於いては、十四歳までの學齡は、英本國に於いての如く有名無實ではなく、有名有實に保護されて來た。最近時、歐洲英國に於ける實業方面をはじめとして、學術、政治、軍事、宗教等の諸方面に於いても、實力と實權が滔々として蘇人の手に移りつつあるの概と現實とは、そも〳〵、國民教育に對する英蘇兩國の熱の大小によつて說明される部分を大きく持つ。教育にもよる。愚な、まちがつた教育は、これあるはこれなきに劣り、これの多大なるはこれの少

小なるに劣る。迷信なき教育なら、いな實に、すべての迷信を調伏し、すべての眞信を保成するかたちの教育なら、それの存亡と興廢とは、ただちにその國家なり、國民なりの存亡と興廢とを原因づける大實在だ。大作用だ。遠慮なければ必らず近憂あらんといふ古語は孔子の言だが、現代の國民教育と國家との關係に對する警告としても劃切だ。

大道路、大公園、運河、耐震耐火建築、交通、保險、いづれも等閑に附してよい事柄でも問題でも決してない。しかしながら、東京が全燒した、そこで時を移さず市の外形とそれの商工業的內容を復舊するはおろか、進化的に再生させる意思旺盛にして、國民教育をば、たかの知れた延長案までをも、好機會とばかりに抹みつぶす文相、主相、諸閣員、及び議會と政黨と國民とは、故ノースクリッフをしてこれを目耳聞踏せしめたなら、日本恐るに足らずといふ判斷を裏書きする第二證を見いだした悦びに微笑をほころばすことだらう。ついでながらに想起するが、かれの既知の證操件は、日本人は模倣者であつて獨創者でないといふ知識であつた。ただこの模倣主義を想ふとき、すなはち現代日本人の過去模倣主義と遠近隣模倣主義とを想ふとき、われらは、擴張せらるべき國民教育は、眞正の意義に於けるそれであつて、現存通りのそれでは決してないことを特に注意しないわけにはゆかん。

戰爭と革命とは それが災であるかぎりに於いて、社會災に屬する二種件だ。震災は自然災に屬する事柄だ。兩者の間には、方法の上に、內發的と外來的との差がある。戰爭と革命とは、意思をそれの原因及び實體とし、震災は物力をそれの原因及び實體とする。戰爭と革命とは意思の作用に屬する事柄であるがゆゑに、それの餘慶、餘殃ふたつながら價値保存の原則にもとづく成長性、發展質を有する。震災は物力の作用に屬する事柄であるがゆゑに、譬ふれば延燒もついには熄み、餘震も次第に低減し行くが如くに、機械的に、したがつて比較的急速にそれの精神的影響をゆるめ、薄め、弱めて行く。フランス革命や獨立戰爭や南北戰爭が、いまなほ、時あつてか未曾揚の精神的感激、興奮、啓蒙、暗示を揭ぐるが如き永久的生命をば、物力に原因する社會變は決して持ちえない。

新東京は、想ふに今後十五年を待たずして、實に十年內外にして、再び盛觀を呈するに至るだらう。自然災としての震災が與ふるかぎりの破壞と脅威をば、人は、物力的にこれを補償し、且つその再來を防止する方法を知り、持ち、信ずるにしたがつて、自然に、また當然に忘れ去る。

怪我として慘死した被服廠迹構內數萬人の場合をよりも、一

種の故殺によつて落命した一、二、三人の場合を、現に、日本の最近の社會も、したがつて新聞紙も、重大問題視したではないか。自然災と人爲災との間なるその各自の影響の差別はおよそかくの如し。そこには、前述したやうに、原則的說明が可能であるのだ。

日本は、それゆゑに、歐洲が甚大の慘禍と犧牲とを拂うて達成しえた、または獲得しえた戰爭または革命の體驗と結果とを、比較的に社會秩序、社會存榮を維持しつつ實現しえたなどと、途方もない考へちがひをしてはいかん。

由來、天祐といふ思想は、天災といふ思想と共に、眞正なる文化主義、道德主義の敵であり、賊である。暴風が偶然にも蒙古來を敗却せしめたことに誇りを自覺するやうな怯懦にして吝嗇なる哲學を有するがゆゑに、幕末に至るまでも、アジア大陸に日本人の眞生命を繁榮しえずに終はつたのだ。暴風が敵船を追ひ拂つたことを痛快に思ふよりも、艨艟巨艦海洋を獵歷し、とくすでに大砲なり飛行機なりを發明して大陸狩りを敢行した方が、あの時代の日本人の異民族觀から考へて、どれほど痛快であつたか。天祐を賴むこころは、天災を招くこころだ。

瓜の蔓に茄子はならん如くに、また一羽の雀子をも理化學術で製作することはできない如くに、震災は震災の因果的鎖網を持ち、戰爭や革命は戰爭や革命のそれを持つ。日本が、いはゆる手段としての戰爭や革命を避け、いはゆる結果または目的としての飛躍的進化なり、必要的改造なりを達成せんと欲するならば、震災は震災としてそれの善後策と有意義化策とをはげみつくすと同時に、別に大いに反省し、思索し、敢爲決行するところがなくてはならん。

維新の革命、日淸、日露兩役に於ける日本はまじめであつた。討獨はすでに名を對英盟誼と遼東還附雪辱とに借つたといへども、自發的に、卒先して、全責任を敢て負ふ覺悟をもつて企てた業では無論なかつた。國際聯盟加入も、華府會議參贊も、眞に、加入とひい、參贊といふだに誇辭にすぐる被强制的、阿附的、追隨的性質のものであつた。戰時中の好景氣は歐洲戰がもたらした倖運にほかならなかつた。それは實に「天祐」であつた。大正九年三月十五日に於ける株の暴落以後の不景氣は、さきの出超が天祐にすぎなかつたが如くに、この入超は實に「天災」にほかならなかつた。人災なきかたちと意義に於いての無戰爭や無革命は祝すべきだが、「人祐」なき社會的無不安は、いかにその目的を達しえても、それにかけては、人はついに草木に及ばず、土砂の類にはなほさら及びえない。人の人らしいありかたは、人祐主義にある。人祐主義のための人災は、主義

たるべき位置をば要請しえないが、時あつてか犠牲として、人はこれを避けるわけにゆかん。われらは、日本に人災なきことをこひねがうてやまない。同じわれらは、日本に人禍多大ならんことを最も根本的に希求する。

大戰後の塞白佛英と震災後の日本

法學博士 米田實

一

我が九月の大震災及其慘憺たる暴威の跡を思ふと共に回顧せねばならないのは、歐洲大戰及其殘酷なる人と財との損害である。而して更らに一大問題として吾人の前に現はれ、吾人の解釋を求むるものは、歐洲戰後の歐洲人と震災後の日本人とが、如何に其慘害に對し反撥的回復力を示す乎若くは示した乎、又此苦い經驗の中に如何なる貴い新獲物を收め得る乎若くは收め得た乎であらねばならない。自然は往々人を征服した觀を呈する、然かも人類進步の歷史は、人類が却つて自然を征伐した歷史なることを忘れてはならない、此點で今日我國民の覺悟と奮起とを熱望する予は、翻つて大戰後の歐洲人を回顧し度いと思ふ、而してそれが聊かでも同胞の刺戟剤とならば、幸ひ甚しである。

言ふ迄も無く一九一四年から一九一八年に亘つた大戰爭は人爲であつて、自然の業では無い、然かも其慘状酷苛は自然の禍患に勝るとも劣ら無かつた、此悲境の中から歐洲人は如何に復活し、如何に奮起した乎、又た彼等は其慘害から如何なる貴重な教訓を學び、禍を轉じて福とするに至つたのである乎、

二

回復の前には先づ回復を要する程の慘害を述べねばならぬ、四年半の戰爭終了當時の歐洲は如何なるものであつた乎、獨逸墺地利等戰敗國の分は他人に讓つて、專ら聯合國側を眺めて見度い、蓋し獨墺は最終に敗けて屈服したけれども、之は

物資戰、經濟戰に負けたものである、其領土が敵軍に蹂躪せられ、古都新市、焦土に歸した慘狀は、寧ろ專ら塞爾比、白耳義、佛蘭西に在つたからである、無論獨逸も戰死百六十萬、負傷三百七十萬を出し、戰費八百億圓を費した外に、有形無形の損害を受けて居り、歐洲全部で戰死一千萬、負傷二千萬、戰費三千五百億圓を數へる同戰の事とて、予も各國、各方面に損害あつたことを否認するものでは無いのである。

先づ塞爾比から見やう、塞爾比は世界大戰の端緒を造つたと言はるゝ面積三萬七千、人口四百萬の小邦、最も早く(一九一四年七月二十八日)墺地利から宣戰を布告せられ、一九一四年(大正三年八月十三日)から墺洪軍に侵入せられ、八月末一時墺軍の撤退を見たが、同年十一月から再侵入を見、十二月には首府ベルグラード迄一時之に占領せられた、其後墺軍退去したが、一九一五年十月から墺洪軍は新らしい味方の勃牙利軍と相應じて塞爾比を席卷し、爾後三年間同國は敵軍の支配下にあつたのである、從つて其慘害の多いのは勿論だけれども、旅行者は此處では佛蘭西、白耳義に見るやうな大規模の破壞的光景に遭遇し無いのである、それは何故かと言ふに、塞爾比は西歐羅巴程に文化の發達が無く、大厦高樓相隣りするの大都市が無い、首府ベルグラードは人口九萬と言ふが、その次ぎのニッシュは人口三萬であり、其他數千乃至一萬、二萬の小市である、全國人口の九割以上は農民であり豐穰な土地に大麥小麥、燕麥、果實等を造つて居り、商工業の國とは違ふからである。併し目立つ程度が少いと言つて巴爾幹の農業國民の損害を輕視してはならない、彼等は戰爭で四萬五千の死人、十三萬の負傷を生じた以外に、度々勃牙利軍の爲めに國外に移動せられ、强制勞働に服し、其間病死等の非運に會したものも少く無かつた、又た小さくても彼等に大切な住家やら小工場やらが燒失若くは破壞せられた苦痛は幾何であらう。

だが、之位ゐなら猶善い、彼等が蒙つた禍害が內容的に佛白兩國民にも過ぎて居ると言つて善いのは、戰爭終了後直ちに同國に入つた米國赤十字團の報告でも分る、之に依ると、戰爭後の同國には、一の銀行が無く、一の小學校も開かれて居らず、醫師が無く、病院が無く、流行病到る處猖獗を極めて居た、衣類が無く、薪炭油等燃料が無く、工場も開かれて居ず、交通機關(鐵道、馬、自動車、荷車)は殆んど姿を見せず、又た人民の中に三歲以下の兒童と言ふのは殆んど無い有樣であつたと言ふ、是れ豈佛白以上の慘狀ではなかつたらう乎。

然らば東歐羅巴より一轉して西歐羅巴に入らば如何、吾人は茲に白耳義と佛蘭西とに於て、恰かも我大震災に於けるやう

な大規模な物質的損害を見たのである、先づ白耳義から言ふと、同國は戰鬪者では一萬三千人の死者、四萬四千の負傷者を出したに過ぎ無かつたが、戰時中獨軍の占領と蹂躙とで、非常な苦辛を嘗めたのである、同國は誰も知るやうに四回破壞の大波を喰つた、一九一四年八月三日獨逸軍が突如白耳義の中立を犯して侵入し、八月七日リエジエを陷落し東部白耳義を蹂躙したのが第一であり、當時獨軍は到る處放火を敢てしたこと世人の記憶する所であらう、テルモンド、ヂナン、ルーウアン等はその主なる犧牲者であつた、第二はその後間も無く獨軍の計畫したオスタンド前進策之に伴へる獨逸對佛英の對陣であり、此時分白耳義內獨逸戰線二十三哩とその奧地とは五分乃至十割の大壞破を見たと言はれて居る。第三は一九一八年春、第四は一九一八年末、獨逸軍退却の頃である、白耳義政府の報告に依ると、之が爲めに破壞せられた家屋數は八萬六千三百四十八と言はれて居るが、工業が盛大な白耳義の事とて、大工場の損害多く、又た宏莊な歷史的構築物の燒失は、實に千古の憾事と言はねばならない、又た戰爭中及戰後に於ける白耳義人の苦境——食料と衣類との缺乏に泣いたその苦境は、言ふに忍びざるものがあつたのである。

佛蘭西は如何と言ふと、戰爭が重に同國內で行はれたのと、獨逸が最も甚しく之を敵視して居たのに依つて最も大規模の慘狀を呈したのであつた、戰爭經過日子等は面倒だから略し、唯だその損害を數字に現はすに止むると、先づ大戰に於ける佛國の損害の第一は、その少い人口の中から百二十八萬の戰死者、四十四萬の負傷者を出したことであらねばならない、併し之は姑らく問はぬとして、又た戰爭に依る生產休止其他間接損害にも之を說かぬとして、ドウしても我等が酸鼻の想をなさざるを得ぬのは、獨逸軍占領地域に於ける損害、戰線附近に於ける損害であらねばならない、即ち一九二〇年ブルッセル財政會議に提出せられた佛國代表者の報告に依ると、被害地域は殆んど一萬二千方哩の廣さに亘り、佛國の最も富んだ十縣を荒廢に歸せしめたのであつた、其住民數は四百七十萬と言ふから、佛國全人口の一割二分が悲慘事の堝中に置かれたと思つて宜い、此地域は佛國鑛產總額の九割二分、石炭產額の七割四分、木綿製品の七割、毛織物類の八割を產する佛國の寶庫であつたのである、又たその他の報告を總合すると、農園では約四百五十萬英町が滅茶苦茶となり、都市約二千六百が破壞せられ、全壞家屋三十萬、半壞三十六萬と稱せられた、殊に言ふに忍びぬのは、其悲慘な光景である、予の如き戰爭中アラス其他の實狀を目擊して、悲淚禁ずるを得無かつた一人である、數世紀來尊敬せら

れて居る大寺院、大建築物が砲彈に碎かれた有樣は、幾多人家が灰燼に歸して柱のみ殘れると相對して、亡國の景の如く思はれたのである、思ふに戰爭中若くは戰後、此等都市を歷訪したものは、恐らくは震災後の東京の光景と相似たるもの多きを感ぜねばならなかつたであらう。

三

然らば上記の如き戰禍に苦しめられた塞白佛の三國民は果して何物を戰爭から得た乎、又た如何なる新發展の現象を示して居る乎。

予は四年有半の鋒火に鍛はれ、死生の巷に出入した彼等が、試練の結果、孰れも其新抱負と新理想とを固持し、毫も落膽失望の色無く、其養ひ得た不屈不撓の精神を以て、戰後の新天地に活躍して居ることを特記せねばならない。

先づ塞爾比人を見ると、彼等は悲慘なる犧牲の報酬として今や多年の南スラヴ民族統一の素志を成就し、人口一千一百萬のユーゴスラヴイア國（セルウオ、クロアト、スロウエヌ國）を建設したが、新建國の爲め幾多困難な政治問題が彼等の前に蝟集して居る、それを彼等が樂天的に處置し行く勇氣と自信とは先づ何人も指摘せねばならぬ美點であらう、即ち彼等は戰爭の苦難の裡に、新國家と新生活の基礎を造つたのであつた。併し彼等の努力は政治のみでは無かつたのである、戰爭終了すると、彼等は夙夜黽勉、荒廢せる農園の回復、都市の改修に力めたので、今や面目を改め戰爭の痕跡を絕つた塞爾比が現はれて居る、そこで彼等は今や衣食足つて禮節を知るの譬へで、人民の苦痛を除くよりも、人民の快樂を增す目的の經濟組織に移りつゝあるのである、善く之を反映して居るのは、蓋し一九二二年度の同國豫算であらう、同豫算は前年度の三十四億ヂナルに對し六十二億ヂナルに增加し、その內には軍備費以外に、新たに交通費、衛生費を增加し、否それればかりでなく、所謂社會政策的費目として巨額を支出して居るのである、吾人は此間に塞爾比人の意氣と向上心とを看取せねばならないのである。

白耳義人は如何と言ふに、之も塞爾比人若くはそれ以上の努力を復興事業に示した外に、又た大戰の際斷然志を決して參戰した意氣は其國際政治にも現はれて居る、先づ復興事業の方から言ふと、政府も一九一八年末の休戰以後殆んと極端なる困難に堪えて、外國人の或程度の援助をも得つゝ之に努力したのであるが、人民の奮勵はそれ以上であつた、即ち政府は最初荒廢地帶にバラツクを建造し又た農業及び工業の回復準備が出來る迄避難民の故鄉に歸來するを差止めんと力めたのであつたが、人

民は之に應せず、急速歸來し、一分をも空費せず右復興事業に當つたのであつた、爲に今日旅行家でも再建都市の再建なるを知らずに戰痕少きを卿つものがある程、白耳義は美觀を回復した部分が多い、次ぎに政治的方面を言ふと、大戰爭後、白耳義は從來の列强の保障に成る永久中立國の地位を離れて、猛然完全なる獨立國として列國馳騁の國際政治の渦中に投ずることを聲明したのである、之は白耳義人の稜々たる氣骨と精神の復活でなくて何であらう、

然らば佛蘭西人は如何、予は同國民の損害多大なりしに顧みて、同國民が戰後の回復に美績を擧げ得たのを驚く一人である、何ぞや同國は休戰後一年有半、講和條約成立後一箇年にして驚く可き復興の成績を示したのであつた、荒廢地帶から拾てねばならぬ堆積物の四割一分は一九二〇年七月迄取り去られた、卽ち四千二百萬方米突の堆積物の内一千七百五十萬方米突を掃去したのである、同時に同じ時期迄に、一萬方哩の荒廢農地の内、約六割は回復、耕作開始せられ、從來の工場の七割七分は業務を再始し、又た破壞道路五萬三千〇三十八喜米突(キロメートル)の内二萬二千八百七十喜米突は回復した、又た戰爭中失つた牛五十三萬二千頭に對し十一萬四千頭を新たに獲得し、同しく失つた馬豚類三十六萬七千頭に對し二十萬八千頭を新たに獲得し、牧畜も回復の緒に就いたのである。僅かに一箇年以内に於て右の如くであつたことは、誰か佛人の復興力絶倫なりしを示したと言はざるを得やう。

右の外、最も戰爭の慘禍を蒙つた佛人が、毫も屈撓せず、幸ひに戰爭中に養つた犧牲的精神と人生觀とに鞭韃せられ又た新たに同國が鐵産地ローレンを回復せる外阿弗利加等に領土を獲得し(名義は委任統治にあつても)たのに刺戟せれて、大に歐洲に、世界に大國としての新活躍を敢てせんとしつゝあるのも、誰か顯著な現象たるを否認し得やう、

四

併し予の見に依ると、世界大戰で最も貴重な刺戟を受け試練を經たものは、實に異常な大覺醒振りを發揮して之が爲めに「午後三時」と言ふ下り阪に在つた國運を挽回したる大英國であらねばならぬと思ふ、乞ふ少しく之を述べやう。

歐洲の戰爭に於ける英國の努力と犧牲と、それは洵に偉大であつた、加奈陀濠洲諸植民地を除き英本國だけの兵士召集數實に四百九十七萬、内死人五十四萬九千、負傷者百六十四萬を出し、戰費八百八十億圓を支出した活躍振り、誰か推賞を禁じ得るものがあらう、唯だ國土海島であつて、敵軍の砲火に脅かさ

れず、寒白佛三國に見るやうな廢頽荒凉の慘景を呈せなかつたのは、自然聯合國の羨みの的となつた、從つて英國には佛白等に見るやうな復興事業の必要は無かつたから、此方面の現象は見えぬが、然かも大戰から最大の精神的獲物を收めたものは、實に此英國民であつたのである。

何故ぞ、彼等は砲火の聲で、老大國に共通な遊惰的氣風、退化的、沈滯的弊習から猛然として醒め、四年半の戰爭中に新生活を造り出したのである、蓋し英國は領土世界に洽く、富力も充實したので、近頃は自ら油斷が出來て居たのであつた、思ふても見よ、英京倫敦は一千三百萬方哩の世界英國各地植民地から集る富みがあつた、此上に世界の航海業を支配する同國の事とて、多額の運賃が雨集して來た、それに世界金融の中心とて、世界爲替の手數料が倫敦の收入となつた、斯くして富んだ倫敦人は、人類の弱點として自然緊張を缺き、遊惰を思ふに至つたのも、何の不思議があらう、卽ち彼等の生活を見ると、所謂週末の休暇と言ふのが非常に擴張せられた、日曜ばかりではない、土曜ばかりではない、金曜から遊びに出て月曜に歸るやうな上流、半上流の偸樂的生活は、斯く言ふ予なども驚かねばならなかつた所である、否な之のみで無い、彼等は平日も一日に五度食つた、食ふと言ふのは遊び樂むの謂である、朝飯、晝食、午後三時の茶食午後七時の夕食と就寢前の飮食である、斯く遊んで居て加ふに長い週末の休みを執つては、何時に仕事が出來るだらう乎、戰爭中獨逸人が「ヒンテンブルグの倫敦侵入なる著書をなした中に「英人は獨逸人の勤勉を恐れた、此勤勉な人民を此儘にして置いては、英人の週末の休みも、茶刻(ティータイム)も無くなると言ふので、戰爭を始めた」との意味を書いて居る、此議論の正否は之を措き、唯所謂週末の休みと茶刻(ティータイム)の評に至つては、穿ち得て妙と、思はず微笑せしむるものがあつたのである、コウ言ふ具合だが、戰前英國の事業界も形體頗る大であつても、萬事舊式であり、缺陷だらけであつた、工業界も飽く迄保守的で、海外の新發明を至急採用する米人のやうな機敏が無く、又た能率も低く且つ組織と言ふに足る組織が無かつた、否な之は政府にも、陸海軍にも、教育界にも、あらゆる社會にも及んで居た共通の缺點であつた、換言すれば英人、世界を支配してより已に二百年自信が自負となり、驕る平民たるの感があつた、玆に於て乎具眼の識者は、英國が「午後三時」の國となり漸く頽勢に近づきつゝあるを看取せざるを得無かつたのである。

ところが世界大戰は實に衰落に先ちて英國人の惰眠を醒す警鐘となつたのである、彼等は之で駭然大に悟り、新英國を造り

出すの一轉機を發生せしめたのである。

蓋し戰爭開始せらるゝと、兎も角も能率高く、組織完備し且つ新進の知識を集め且つ利用した獨逸と接觸して、英國は最初事毎に敗者の地位に立つた、その缺陷は遺憾なく暴露せられたのである、彈藥武器の欠乏とその劣等なこと丈けで無く、一切の組織と能率とが大距離あることを示したのであつた、軍隊のみで無く、政府も、民間工業も、否な民間の社會も之を示したのであつた、故に於て乎、覺醒した英人は、戰爭中からその過ちを改め、新らしき面目を啓き、その事業は遂に戰爭終末期に於て完美の境に達し、遂に獨逸を壓倒し得るまでに及んだのである、その範圍は軍隊、商工業界ばかりで無く、一般社會に及んだのであつた、之を一言に言ふと、何でも無いが、其成効を見る迄の英人の覺醒振りと倫備なる努力とは幾許であつたらう、戰時中の此覺醒と努力との間に得た英人の精神的試練は、その收め得た結果と共に、實に絕大なものと言つて善い、之が爲めに英國は復活し、「午後三時」的國家より「午前十時」的國家と變化したのであつた、此點から見ると、世界大戰こそは、實に今後數百年に亙つて英國を救つた恩惠となつたと評しても、過言では無いと思ふ、

五

以上で世界大戰に於ける英佛塞白諸國の試練振りは、略ぼ之を述べ得たと考へる。

顧みるに我日本は大戰に參加したけれども、戰爭の痛苦を味ふには至らず、從つて試練どころか、却つて淺薄な成金連の跋扈で良俗を損した位ゐであつた、然るに今回の震災……之は極めて不幸事であつたが……に依つて始めて大戰當時に味ひ得なかつた慘苦と試練の機會、覺醒の機會とを得たのである、殊に予の如きは帝都今日の光景が佛白戰地の荒涼たる情形に髣髴たるを見て此感を深うするものである。

然かも我國民が之より受くる試練、覺醒は如何であらう乎。非常なる緊張振りを以て迅速に物質的復興に成功し來つた佛國人のそれを望み得るであらう乎、或は一朝俄かに悟つて、「下り阪」の國勢を既往に還したのみか、猛然永く世界の覇權を握るの堅き基礎を建つるに至つた英國人の精神的覺醒のそれであらう乎、孰れにしても、我國民が大禍災に際して、自然の前に眞面目となり、緊張的氣分を造り新らしい大國民的生活に入る機會を得ん乎、是れ禍を轉じて福となすもの、邦家の幸大なりと言はねばならない、事之に反せん乎、帝國將來の運命、それ

遂に言ふに忍びざるものがあらう。

再生の歡び

林癸未夫

重い病氣をわずらつたことのある人は、誰しも經驗されることゝ思ふが、いよ／＼危險期を通り越して、徐ろに恢復期に入る頃には、丁度寒い暗い冬が去つて、暖い明い春が近いて來る場合と同じやうに、何となく活き／＼と蘇つて行くやうな「再生の歡び」とでも名くべき一種清新な心地を覺えるものである。そしてこの再生の歡びは、病氣そのものが重ければ重いほど、一層深く感ぜられることは勿論である。

知らず大戰の試練を受けた歐洲は、いつ此再生の歡びを感じ得るであらうか。そして又、震災の試練を受けた我日本は、いつ此快感を味ふことができるであらうか。

○

大戰終了後直に英國では、復興省なるものが新設せられ、復興大臣が任命された。併しそれは、何等仕事らしい仕事もしない内に、僅か一年經つか經たずに、行政整理で廢止されてしまつた。復興省などを置かぬ方が、却て復興のために必要な事と認められたからであらう。併し爾來五年、英國は未だ尙復興の緒に就いてはゐないのである。獨逸も亦戰後復興省を設け、復興大臣を置いた。そして今尙これを存續してゐるが、復興の曙光は更に認められないのみか、國步艱難は層一層の甚しきを加へつゝある。佛、伊、墺の諸國いづれも氣息奄々たることと英獨と同一である。彼等は平和の克復によつて、とにかく一應命だけは取りとめた譯であつた。併しながら彼等は長い間の大病によつて、疲勞衰弱の極に陷つたまゝ、今以て病床に呻吟してゐるのである。昔日の活氣は愚か、轉地療養に赴くだけの力さへ未だ彼等は有たぬやうに見受けられるのである。

中でもとりわけ悲慘なのは墺太利である。辛うじて命だけは

助つたといふもの丶、大外科手術で、手も足も切斷されてしまひ、到底自分獨りでは食物を取ることも歩行することも叶はぬ始末なので、他人がスプンにすくつて口の中に入れてくれる重湯くらゐで、漸く露命をつないでゐるのである。併しその重湯を食べさせてくれる看護人なるものが、自身頗る空腹を訴へてゐる者どもであるから、何うせ大した滋養分などを、あてがつてくれる筈はない。しかのみならず――譬喩を棄てゝ言ふと――佛蘭西や伊太利が、なけなしの財布から無理算段をしてまで墺太利に金を貸して其破産を救つてやつてゐるのは、元來舊敵國たる墺太利に好意を有つてゐるからでは毛頭なくて、金を貸しても其獨立を擁護してやらなければ、それが獨逸に併合されて、憎みても尚餘りある獨逸に、新しい力を附與させる虞があるから、それを未然に防遏しやうとする苦肉の謀計に外ならないのである。

死せる孔明生ける仲達を走らせたためしもあるが、戰敗に次ぐに革命を以てし、半死半生の間に在る廢殘の獨逸が、今尚佛蘭西に對して一大脅威を感ぜしめる程の潜勢力を有つてゐることは、佛蘭西の憶病を嗤ふよりも、寧ろ獨逸の强味を讃ふべきである。番附面では勝星を貰つても、最早頽齢如何ともすべからざる老大關の面影が佛蘭西に在る。そこへ行くと獨逸は、たとへ負けても新進氣鋭の壯年力士である。いかに蹴落されても、踏みにじられても、その體内に有つ自然の活氣は、必ずいつしか勇壯活潑な發育力となつて現はれるに相違ない。それが佛蘭西の本能的に獨逸に感じてゐる恐怖である。そこで佛蘭西は飽くまでも獨逸から、その自然に有する壯年の活氣までも奪ひ取つて、將來の發育力を根絶すると同時に、その奪つた活氣を、自身の體内に注射して、若返り法を行ふとするのが、現在の佛蘭西の肚である。而して、さうはさせじと死力を竭して抗爭してゐるのが、目下の獨逸の立場である。

○

そこへ行くと英國も亦氣の毒な立場に在る。彼は老來英氣次第に銷磨し去るの狀、蔽ふべくもないのであるが、それでも多年張つて來た横綱の貫祿だけは、何處までも維持して行かうとする。その貫祿を維持するがためには、佛蘭西も獨逸も、彼を凌駕し得る程度にまで强くならないことが、彼に取つて第一の要件である。從つて彼は佛蘭西が獨逸の脂肪分を營養として、餘りに若返ることを妨げないと同時に、獨逸が其活力を蓄積して餘りに健康體に恢復することをも虞れてゐるのである。そして此兩者が、いつまでも英國の自尊心を傷け得ない程度に於て、その益友であらんことを望んでゐるのである。さういふことの

餘りに虫の良すぎる算段であることは云ふまでもないが、併し寛濶にして案外老猾なる彼は、食はねど高楊枝の格式だけを辛うじて維持しつゝ、あてにならぬ米國からの助舟の到來を、心ひそかに待ち望んでゐるのである。

戰爭と革命と饑饉とによつて、幾度か發狂又は危篤を傳へられながら、よく九死一生の裡に其正氣と生命とを取留めたのが露西亞である。彼は一時最も危險な症狀に在つた。藥劑も滋養分も、絕對に求めて得られない窮境に陷つて、惡意ある舊友環視の只中に、無殘な橫死を遂げるの外はあるまいかと思はれてゐた。所が案外にも彼は如何なる肉體的苦痛にも抵抗し得る程の根強い精神を有つてゐた。この精神は彼が生來の痼疾であつた「專制的官僚政治」といふ癌の切開手術に成功した結果として、彼に與へられたものであつた。形骸は元の露西亞でも、靈魂は新しい露西亞であつた。この新しい靈魂が瀕死の狀態から其肉體をも救つたのである。今夏彼は農業博覽會などを開催して、今や病氣の恢復期に入つたことを中外に披露してゐる。彼が果して近き將來に、活力充實の健康體にまで、順調に恢復することが出來るか、何うかは、尚疑問であるけれども、とにかく歐洲の何れの國よりも最も重症であつた彼が、却つて最も速かに恢復の曙光を認め、徐々に再生の歡びを感ずるに至つたことは、彼のために祝すべきことである。

彼に較べれば英佛獨墺伊の諸國は、今や慢性化したる其病氣に、思ひ切つた大手術を施すの勇氣もなければ、又いつか手に入るだらうと卒頓みにしてゐた起死回生の妙藥も發見できず、徒に舊式の醫術と醫師とに身を任せつゝ、熱の一上一下に心を惱ましてゐる樣は、笑止千萬といふべきである。彼等が再生の歡びを感得するの日は、よし到來するとしても決して近い將來に在らうとは思はれないのである。

○

大戰に見舞はれた歐洲諸國の苦痛が、慢性的な內臟の疾患であるとするならば、震災に見舞はれた日本の苦痛は、急激に四肢に受けた外傷の如きものである。皮膚を貫き、筋肉を破り、あまつさへ骨の一部をも傷けて、流血慘々たりし情景は、一時人をして驚心駭魄に堪へさらしむるものがあつた。併し確に急所は脫れた。決して致命傷ではない。致命傷でない限りは、外傷の癒着は案外迅速なものである。唯併し此際最も肝要なことは、負傷に對する手當の最も機敏にして、しかも細心でなければならぬことである。若し手當が緩漫であれば、患部に黴菌などが入つて、化膿發熱し、手のつけられぬ重態に陷るの虞がないとも言へぬ。又その手當が疎略に失すると、よし平癒して

も醜い傷痕を殘したり、悪くすると永久不具の體になつてしまふかも知れない。此點を十分に心して、取扱に大なる遺漏いない限りは、必ず本復疑ひないのである。

震災後の日本に於ては、早や既に恢復の徵候歷々たるものがある。種々なる非難があるとは言ふもの丶、災害直後の政府の手當は相當機敏であつた。餘りに機敏であることに焦慮したゝめに、馬鹿々々しい過失もあつたには相違ないが、併し先づ大體に於て大過なかつたものと認めて然るべきである。問題は寧ろ今後の加療方法如何に在る。これは前述べたやうに最も細心熟慮を必要とする。そして用意周到な實行手段をも必要とする。其點に就ては、獨り政府の畫策のみに依賴しないで、學者も、實業家も、勞働者も、共に最善の貢獻を心がけることが必要である。

併し何にしても此大震災が我國民に精神的の打擊を與へなかつた事だけは、私は確實であると思ふ。成程直接罹災者であつた不幸な人々の中には、一時悲歎の極、意氣頗る沮喪した者もあつたに相違ない。併し罹災地の住民全體としては、日本國民全體としては、決して長く悲歎してゐなかつた。一旦沮喪した意氣は忽ち恢復した。吾々國民は此自然の苛責に對し、勃然として英氣の一新するを覺えた。そして破壞された過去の生活よりも、總べての點に於て優越した新生活を再建すべく、既に雄々しき努力の第一步に入つて居るのである。此意氣さへあれば――然り唯此意氣さへあれば、事既に半ば成れりである。かく觀じ來ると、再生の歡びは吾々國民の體内から、油然として湧出づるを覺えるではないか。

戰爭の試練を受けた歐洲と天災の試練を受けた日本

法學博士 堀江歸一

歐洲諸國は四年數個月に亘る戰爭の慘禍を受けて、民生の上に悲痛なる幾多の事件を生じた。其際我國は經濟社會に意外の繁昌を告げ、國を擧げて、成金氣分と爲り、戰爭の害惡などに對しては、殆ど之を念頭に置かなかつた。然も今や時勢は一轉し歐洲諸國中の或るものは依然戰爭に伴ふ社會的秩序の混亂に苦しめられて居る、が他の或るものは次第に恢復の曙光を仰ぎ得るに至つた其際、日本には帝都を始め二三の地方に大地震と大火難とが並び起つて、殆ど前古に比類なき損害を蒙るに至つた。戰爭と云ふ人禍に苦しめられた歐洲と地震と云ふ天災に艱された日本と孰れが能く恢復的能力を發揮するを得るであらうが、抑も亦歐洲諸國が戰役の災禍恢復に對して、施した政策の内で、我國の取つて以つて範とするに足るものがあるであらうか、共に興味ある問題である。

戰爭と地震火災と孰れが其慘禍を逞うしたかと云ふことに就ては、種々の見方がある。同じ戰爭に關係したと云つても、(一)白耳義、塞耳比亞の如く國の要所を焦土としたものもあり、(二)英國の如く世界金融の中心たる地位に多少の損害を蒙り、又莫大の戰費を費消したが、有形上の方面に於て、必ずしも大なる損傷を受けなかつたものもあり、(三)獨逸の如き戰爭中の損害の比較的少なかつたに對して、戰後經濟組織の頽廢を來すまでの壓迫を受けつゝあるものもあり、殆ど千差萬別の狀なきを得ない。隨つて震災火難を蒙つた日本の損害は右三者の孰れに當るか、正確に其一を取つて、日本に擬するを得ない代りに、今日の日本は上記三種の場合に於ける損害の幾分かづゝを受けたと云へるであらう。即ち東京市や橫濱市の重要なる商業區域や、住居區域が燒き拂はれて、一場の燒野原と爲つた所は白耳義や、塞耳比亞に似て居り、商業も工業も一時停滯して、莫大なる富の空費された點に於ては戰時の英國を回想せしめるし、更に今後東京市の復興事業を計畫するに就て、一歩を誤まつたならば、經濟上の働きに混亂を招いで、日本をして第二の獨逸たらしめる概念が全然存在しないとは、斷言するを得ない。

唯今日の日本と戰時の歐洲諸國と比較して、日本に取つて有利と考へられる幾多の事實がある。

第一、東京橫濱其他二三の地方は大なる災禍を受けたに相違ない、而して其内の東京が帝都である一事は此災禍の影響を大ならしめた次第であるが、一方に何等の災禍を蒙らない大阪其他の都市の存在し、繁榮しつゝあることは、歐洲戰爭の爲めに、交戰諸國が其國の全體に戰爭の災禍を蒙つた事實に比較して、大に事情の異なる所である。

第二、戰爭は其一度び起るや、何時に爲つて、終熄するや、

測り知るを得ない爲めに、其災禍も亦無限大に增長する。少なくとも其增進するかも知れないと云ふ掛念を國民に懷かしめるが、震災に伴ふ損害は正確に其數量を知り、隨つて之に對する善後策の案出も確實に行はれる。

第三　戰爭も震災も人命を殺す點は同一であるとしても、前者に於ては、兵員として多數の國民に不生産的勞働を强制するに反し、後者に於ては總ての人をして復興復舊を目的とする事業に勤勞を提供せしめ、苟も復興計畫が冗漫に流れない限り、勞働を爲す者は總て富の生産に貢獻することゝ爲る。

唯歐洲戰爭に於ける英國の立場などから云ふと、成る程軍事費として四年十一個月の間に、八十六億一百萬磅の經費を支辨したことは大なる負担であつたに相違ない、又一方に經濟機關の運用に大なる停滯を來した爲めに、國民所得に缺損を生じたことも他の負担であつたのであるが、勞働力なり、資本なり、將來又資本の組織なりに破壞を受けた範圍は軍事費其ものゝ大なるに比較すれば重いものではなかつた、而して戰前英國が最も劇烈なる競爭を國際經濟上の關係に於て爭つた獨逸の經濟力の破壞されたことの如き、確に戰後に於ける英國經濟の恢復力を盛ならしめる一原因と爲つたことは、爭ふ可からざる事實である。一時は輸入超過が莫大なる金額に上り、如何にして之を決濟する道を得るかと云ふことに就て、疑の眼を以つて、眺められた英國に於て其超過額が次第に減少し、近年に至つては、債權收入額の一部分を以つて、之を決濟するを得ることゝ爲つた事實の如き、一に英國經濟の恢復の速かであつた證左とするに足る。然しながら震災火難に依つて、打擊を蒙つた、我國の經濟力は果して斯る有利なる狀勢の下に、恢復する望みがあるかと云へば、私は其然ることを信ずるを得ない。現に我國の外國貿易の如き、今後如何なる趨勢に赴くであらうかと云へば、國內に於ける生産力の減退に加ふるに復興材料輸入の必要を以つてして、多大の輸入超過に接することは、免かれ難き所であつて、對外債權の收入を以つて、之を決濟することの困難と爲る結果、勢外國債の募集を必要とする。恰も戰時英國が對外債務決濟の必要に迫られて、外國に募債を試みたと同樣の狀況が震災後の我國に於て、幾年かの間繼續して發生するものと考へなければならない。換言すれば英國の如き戰時に於てこそ軍需品を外國の供給に仰がざるを得なかつたのであるが、戰後に於ては次第に其必要を免かれ、必要の減じただけ、經濟の立て方を安易ならしめるを得たのであるが、震災後の我國に於ては復興事業に要する材料の輸入に依つて、苦しめられざるを得ない。此點に於ては、我國は白耳義や佛蘭西の如き、戰爭の爲めに、經濟組織を破壞され

た國と類似すると云ふことが認められるであらう。

四年十一個月に亘る歐洲戰爭は交戰國の多くのものの通貨制度を破壞し、通貨價値の低落に依つて、經濟社會を苦しめ、又其復興の機運に大なる妨害を來して居る事實の顯著なるものがある。獨逸の如き其最も甚だしきものであり、佛蘭西、伊太利の如き程度に多少の相違ありとするも、尙ほ同一の歎を免かれず、英吉利と雖も、磅の價値に低落を告げたもの少なしとしない。今日我國は大なる天災に依つて、經濟組織に非常なる損傷を蒙つたが、其結果として通貨制度は果して如何なる狀態と爲るであらうか。通貨の價値が確實であると、低落すると、孰れか一に依つて國力の恢復に重大なる關係を及ぼすことは、私の絮說を俟たざる所であつて、我國の內外に所有する正貨が豐富であり、一方に內國に流通する銀行券の分量亦適度を得て、其價値の確實を保つことは、最も希望す可き所である。而して此希望が實現されるかどうかは一に復興事業の規模の大小、其完成される期間の緩急に依つて、定まるのであつて、若しも復興計畫の規模が餘りに大であり、而して之を短小の期間內に完成しようとすれば、勢當時の國民の應募力に超過することの大なる程度に於て、公債を募集する必要を生じ、其大部分は國民の貯蓄に依つて、應募されずして、中央銀行の銀行券增發に依つて、其引受に歸することゝなり、斯くて通貨の膨脹を惹起さゞるを得ない。更に通貨膨脹を惹起す導火線と爲るものは外國債の募集であつて、若しも新に募集される外國債が外國市場に就て買入れる復興材料の代價を決濟するだけの金額に止められずして、遂に之を超過し、而して其一部が內國に回收されたり、或は外國に在る正貨を準備として、日本銀行に於て銀行券を發行し、之を政府の用に供するに至つたならば、通貨の膨脹は求めずして來さゞるを得ない。斯くして一時經濟社會の人氣を誘うようなことはあるとしても、結局其反動として恐る可き影響の來るを免かれざる道理である。

戰爭と地震とは其及ぼす影響に其れ〱相違があり、之を脫する道にも亦自ら異なる所なきを得ないであらうが、唯兩者を通じて、殆ど一貫されて居ると見る可き災害對抗の方法は國家並に國民の浪費を節約して、資本の供給を豐富ならしめる一事あるのみである。英吉利が比較的早く戰爭の災害を脫するを得たのも、(一)政府が非常の決心を以つて、經費に大節約を行ひ、(二)國民亦奢侈を避け、浪費を制し、以つて資本の增殖に勉めた結果であつて、生產業の恢復したのも、輸出貿易の振興したのも、要するに如上二個條の働きの然らしめる所である。故に我國をして天災の試煉に堪へ、天災の齎す國民的危機を脫せしめ

るには、矢張り節約の必要を叫ぶことを急務なりとしなければならない。

從來我國に於て諸方面に節約論が唱道され、殊に近年物價調節の方策として、其必要の叫ばれたに拘はらず、毫も實效を見るに至らなかつたのは、國内に於て最大の浪費者である政府自身が少しも節約の方則を守らず、濫費のあらん限りを敢てした爲めに外ならなかつたのである。然も今日と爲つては、如何に濫費を事とする政府と雖も、節約の一途に出づるの外、他あるを知らないであらう。現に明年度の歳計に於ては、震災の結果として生ずる經常收入の減額は二億圓を下るまいと云ふことである。然らば此金額だけ當然經費に削減の加へられない限り、收支の均衡の維持されないのは、當然の道理であるが、更に歳計上に餘裕を付けて、復興事業の財源を作り出す爲めには、結局將來の歳計に於ては經費十億圓と云ふ所を標準として、大節約を行ふ可きであり、民間の消費亦斯く財政に加へられた節約と步調を一にするに至つて、復興の到來する機運を速かならしめるを得るであらう。

唯私の恐れるのは、日本人の健忘性である。歐洲交戰諸國の內で、獨逸人の如きは、祖國の覇業の破れた失望に加ふるに、ヴエルサイユ條約の壓迫に堪へずして、自暴自棄に陷り、濫費を事とする者もあり、風俗風儀なども、餘程廢頽したやうに聞くが、着々經濟上に恢復を收めつゝある英國人の如きは、戰後剛健質實の風に赴いたと云ふことであり、而して戰爭終熄の當時から數年に亙つて、此風の持續されて居ることは、殊に偉なりとす可きである。我國民は今日こそ震災の餘響を恐る可きことを體驗して、諸事に戒愼を加へつゝあるやに見へるが、消費節約の如き、一面から云へば、消費の行はれる目的物の存在しない結果已むを得ざるにいづるものであるとも見られる。随つて今後復興事業が進行し、其必要に應ずる爲めに調達された財源が社會の各方面に分散するに當つて、國民に向つて、能く浪費の惡風を刺戟せざるを得るかは、一個の疑問に屬する。割增金付債券を發行して、斯く濫費に供される資金を回收し去らうとする政府の計畫も左ることながら、モツト根本的に國民に勤儉の風を植付けない限り、復興事業の進行を助成することを得ない。今日の如き天災に依る一大試練に會しながら、我國民に遊惰、放逸、奢侈の惡風の拔く可からざるものがあつたならば、我國の將來遂に憂ふるに堪へたりとす可きである。

最後に私の一言したいのは、我國民殊に東京市民が此機會に於て、自暴自棄に流る可からざることである。獨逸の現狀を以つてしたならば、國民が失望落膽して、再起の勇なきに至るの

も亦已むを得ないとされよう。然しながら日本の事情に至つては、自ら異なるものがある。震災の齎した損失は如何に大であるとしても、大體世人に依つて計算された數量に止まる。而して其金額は相當に大なるもの〻ようであるが、其内には經濟學者の所謂消費者資本なるものが多分に含まれて居る。書畫骨董、什器の如き、料理店待合遊廓の建物の如き、其燒失したものに就て、其價格を計算したならば、莫大の金額に上るであらうが、其價値ありとされるのは、所有者其人に取つての話であつて、社會の全體から見たならば、是等の富は寧ろ存在することを要しない、存在することに依つて、却つて害毒を社會に流すものであると云へるかも知れない。然らば斯る富は社會上の見地に於て震災に依つて倒壞された消費者資本の如き、決して之を復興することを要しない。萬一復興の必要ありとしても、其れは我國の經濟的能力に大なる剩餘を生ずるまでに發展した暁に讓る可きである。唯眞實急速の復興を要するは生産者資本に過ぎない。單に燒失し倒壞した富が、百億圓以上に達するとした所で、其内に上記の如き消費者資本の存するからには、金額の大なるを見て、敢て驚くに足らず、又金額の大なるが爲めに、復興至難なりとする説も亦當らないのである。

彼はチフス患者、我は手足挫折者

水野廣德

歐洲戰爭の損害と過般震災の被害とを數量的に具體的に比較評論するとは極めて難事である。前者は五個年の長日月に亘り、全國的に、漸次的に受けたる損害で、後者は一二晝夜の短日時間に、局地的に、瞬時的に被りたる損害である。縱令直接物的損害の大體額は或は之を比較し得るとするも、彼に在つては戰爭の爲めに促かされたる各種の發明、諸種工業の發達、技術の進歩等、破壞の中に建設あり、消費の中に生産あり、戰後に益する處尠なからざるに反し、我に在つては純然たる破壞と消失

とのみにして殘る處のものは唯灰と燒石とばかりである。

單に統計に現はれたる數字のみを擧ぐれば、歐洲戰爭に於ける英米佛伊獨の直接戰費總額は二千六百四十八億圓（米國イリノイス大學教授アーネスト、ボツカード氏調査に依る）にして、一九二〇年七月に於ける前記五國の國富は六兆八千五十億圓（エドガー・グラーモンド氏調査に依る）である。之を國別にすれば

國名	國富（百萬圓）	戰費（百萬圓）	比率
米國	七〇〇、〇〇〇	四五、三五〇	〇、〇六五
英國	二四〇、〇〇〇	七〇、六八〇	〇、二一一
佛國	一八四、〇〇〇	四八、五三〇	〇、二四二
伊國	七一、〇〇〇	二四、八二八	〇、三一六
獨國	一六六、〇〇〇	七五、五一〇	〇、四三

となる。素より國富は戰後の調査にして戰費は戰爭中の支出なるが故に、前後の物價に相違あるのみならず、統計者を異にせる爲め、上記の比率は必ずしも正鵠を得たるものでなく、唯其の概畧を示すに過ぎない。

先般我國に於ける震災の被害總額に關しては未だ正確なる報に接せざるも、經濟家の言に依れば大畧百億圓と云ふのが定評であるらしい。而してクラーモンド氏の調査に從へば一九二〇年に於ける我國の國富は四百七十億圓である。故に被害額を百億圓と假定すれば、國富に對する比率は二割一歩餘となり、畧ぼ英國の戰爭被害率と同一である。併し他の方面の調査に依れば今日我が國富は七百乃至八百億圓に達するとの說もある故、之に從へば損害比率は一割二三步である。何れにしても米國の戰爭被害率よりは遙かに多く、我國としては頗る重大なる損害と云はねばならぬ。

歐洲戰爭は人類空前の大破壞であつた。而して其の最大破壞の行はれたるは北佛の戰場である。ボカード教授は戰爭五年間に於て交戰國の損失したる陸上財產總額を約六百億圓とし、內佛蘭西全國の損害高を約二百億圓と計算して居る。之に對し英國の經濟學者キーンス氏は北佛に於ける物質損害をば最大限八十億圓を超過しないと論斷して居る。兩者何れの計算が正しきやは經濟學の門外漢たる自分には判らぬが、兎に角我國震災の物的損害は畧ぼ北佛戰場の損害に匹敵すべきものであると云へる。左れば北佛の破壞に依つて佛國の受けたる經濟上の打擊は東京の燒失に依つて我國の受けねばならぬ打擊である。而かも我國の富力は佛國よりも低きだけ、其の被むる打擊は一層大でなければならぬ譯である。殊に北佛の復舊には幾分なりと獨逸よりの賠償金を搾り取ることが出來る。我が東京の復興は一層

一柱悉く國民の汗の雫に待たねばならぬのである。之を思へば東京の復興も中々容易の業ではない。此の難局を切り抜くるには政府も、國民も、餘程の努力と覺悟とを要する。英國が戰後國力の回復を圖る爲めには千年の久しき間握つて放たざりし海上優越權すらも放棄したる程の大英斷が無くてはならぬ。補助艦船建造延期の一年二年を爭ふべき秋でないと思ふ。

之を人體に譬ふれば、歐洲戰爭は恰かもチブス患者の如く、其の衰弱は全身的なりしも、我國の震災は恰かも手足を挫折したる負傷者の如く、其の疾患は局部的である。病患の程度と苦痛の大小とを比較することこそ困難なれ、其の人間の活動を阻害する點は同一である。而して之が回復の遲速は病傷の輕重と、治療の適否と、體力の強弱とに依つて異なるのである。縱令病症は重くとも、治療適切にして體力強健なれば回復は速かである。之に反し負傷は縱令輕くとも、治療宜しきを得ざるか、或は體力虚弱なれば終生の不具者となるかも知れない。歐洲戰爭の病菌はベルサイユ會議の荒療治によりて漸く驅除し得たるも、療法宜しきを得ざりしが爲め病後の衰弱甚だしく、動もすればブリ返へさんとする危險狀態にある。我國震災の重傷を速かに治癒して不具者たるを免るゝや否やは、復興院なる醫師の手腕と國民の覺悟とに依つて決するのである。

○

歐洲戰爭の齎らしたる間接戰費はボカード氏に從へば、戰爭及惡疫等に依つて喪失したる人員の價格、海陸に於て喪失したる財産、生産上の損失、戰時救護費等を合し約三千五百三十三億圓にして直接戰費の約六分の五に達して居る。震災に依る我國の間接損害が果して幾何なるやは、今日尚ほ豫測を許さゞるも其の額は數億若くは十數億にも達するであらう。災害直後に於ける應急救護費のみにても既に一億圓を超へて居る。

震災に依る物的間接損害よりも尚ほ大なる形而上の損害が二つある。即ち其一は國防上に於ける弱點の暴露で、他の一は國民性の缺陷の暴露である。現代の空中攻擊力を以てすれば東京の如きは一夜にして灰燼に歸することが出來るとは、外國飛行家の傲語であると共に吾人の屢々警告したる處である。然る處今回の震災に依り外人の傲語と吾人の警告とが不幸にも事實として顯現した。吾人は平和を熱望し、戰爭を語るを好まない。併しながら國家として戰爭を豫想し海陸の軍備を整ふる以上、我國政治經濟の樞軸たり國民文化の源泉と云はるゝ帝都の防禦を忽にすることは出來ない。消極的防禦策としては道路を廣め、公園を設け、溝渠を通し、地下鐵道を開くも素より可なりである。併しながら家屋にして石造化せざる限り、一たび敵の空中

攻撃を受くれば折角復興の東京も亦第二の焼野原となるを免れない、之を防ぐには積極策として大に空中防禦兵力を充實するの外他に途はない。併し如何に空中防禦兵力を増大充實するも勇敢冒険なる敵の飛行隊に對しては絕對安全を期することは出來ない。左らば我國より進んで空中攻撃廢止を國際會議に提起することが最も賢明なる策である。六個師團の大兵を動かし漸く帝都の治安を維持し得たりとて鼻をうごめかす間に國防の大本を定むべきである。今回の震災により將來の戰爭が如何に恐るべきかを國民にして覺るを得ば、是れ震災の齎らしたる唯一の効果である。

個人の性格が突發の事變に際し赤裸々に發露する如く、國民の性格も亦然りである。過般の震災當時東京を中心とせる各地方に於て行はれたる殺傷掠奪の暴行こそ、我が國民性の裏面に隱れたる缺陷をば遺憾なく暴露したるものである。流言蜚語に惑はされて常規を逸したる其の狼狽、其の殺伐、到底大國民の襟度もなければ文明國民の教養もない。世間或は國民の輕擧妄動を以て官憲軍憲の煽動使嗾に依ると說く者もある。若し然りとすれば國民の無知無節制や素より憫むべきも、斯かる官憲軍憲を有することが我國として一層太なる不幸不名譽と云はねばならぬ。何れにしても、震災當時に顯はれたる我國民性は、一面に於ては同胞愛の極美を示すものありたるも、他面に於ては粗暴殺伐の蠻性を發露したるものである。單に混雜の際と言ふのみを以て許さるべきではない。從來博し得たる戰場に於ける日本人の勇敢は眞の勇敢にあらずして狂的心理とさへ疑はしめるものがある。其の如何に國家の威信を傷け、國民の名聲を傷つけたるか測り知ることが出來ない。殊に治鮮の上に投げたる暗影の如きは容易に拭ひ去るを得ざる國家の大損害である。

歐洲戰爭に依り交戰各國民は、或は義勇奉公の精神を發揚し、或は剛健敢爲の氣性を練磨し、或は平和平等の思想を啓發する等、國民性の鍛成進步に益する處尠くなかつた。然るに我國は過般の震災に依りて國民性の缺陷を暴露したるのみならず、國法無視の惡風をさへ生じた。物質の損害は財力を以て復興することも出來る。唯精神的の損害に至つては短日時間に之を癒することが出來ぬであらう。

戰禍と天災

文學博士　三宅雪嶺

世界戰役は、戰死七百萬人、戰費三千八百億圓と稱するが、關係せる國約三十箇國、平約一箇國死者二十餘萬、戰費百餘億となる。日本は交戰國の一であり、或る點で效果を認められたにせよ、損害は平均數より遙かに少く、啻に死者が少いのみでなく、戰役にて得た所が失つた所を償ふに餘りあり、十幾億圓も餘分に入り込み、米國と較べものにならずとも、之れに次ぐの成金國のやうに見られた。米國は歐洲の黃金を吸收するの觀あつても、相應に多く費し、且つ歐洲と密接の關係があり、見掛け程利益があるまいと思はれたが、日本は取る丈け取つて好い氣になつて居るとて、何處でも憎まれ者となるの傾向があつた。

所で關東の震火災にて、失ふ所、人命二十萬、資産百億と稱し、正に交戰國の平均數に達して居る。それ許りでなくても、世界の憎まれ子となり、到る處に排日熱の高つたのが、忽ちにして世界の同情を博し、前に憎んだ國程後に憐れむの形がある。日本では明治維新以後の戰役を悉く合せたよりも損失多けれど、一應厄落したと云へぬでない。世界戰役の損害は戰費のみでなく、其の外に間接の損失多く、平均百億圓所でないとしても、損害の計算は到底明白にする事が出來ず、戰費とても計算で區々になり、震火災の損害高も人によつて見積りが違ふ。大體に於いて歐洲で未曾有の損害を蒙つたと同じく、日本に於いても未曾有の損害を蒙つたとしても措けば宜い。

其處で損害の比例は略ぼ相當るとし、佛や白や獨や墺や、平均高を超ゆること遠く、金額上英が最も多いとせられるが、損害は實に莫大の損害ながら、四年半の久しきに渡つて居り、日數に割れば割合に少なくなる。日本に於ける震火災の損害は、僅かに三日間の出來事によるのであつて、一日の割合が、歐洲に於ける戰役の幾倍に昇る。歐洲で屢々驚くべき激戰が演ぜられ、悲慘とも何とも云ひやうのないのがあるが、三萬坪の被服廠跡で三萬幾千人が一度に燒死にしたやうな事があるか何う

か。隨分立派な都市が破壞されたものの、少くとも面積に於いて東京の燒跡程なのがなからう。燒跡を悉く合せば、東京所の話でなければ、一箇所で之れに似たのがなからう。地震に基く損害は、戰役よりも激しかつたとせねばならぬ。戰役で鰥寡孤獨が著しく增加したとし、震火災で家族の消滅したのが幾何もあり、鰥寡孤獨は勿論の事とする。

それで震火災の損害を戰役の損害を如く看做さぬのは、何に由來するか。天災と云ふ所もあり、區域の狹く局限せられた所もあり、時變の期間が餘りに短い所もある。戰役ではかねて武裝的平和の心得で準備し、愈よ火蓋を切り、各々自國の運命に關するとし、爲し得る限りの事を爲すに努めた。先づ常備軍が出發し、豫後備が出で、新兵が出で、國民皆兵の實を擧げやうとし、津々浦々まで戰時氣分が漲つた。口實を設けて出ずに置けば置けぬでなければ、祖國の爲に盡さねばならぬと思ひ、自らも振つて進み、家族も涙を呑んで之れを奬勵した。英國は佛國と違ひ、飛び入りの姿であつて、それで貴族富豪が戰線に仆れたのがいくらあるか知れぬ。前首相ボナー・ローはたださへ陰鬱の色を帶びたのが、戰場で二子を失つたので愈よ陰鬱になり、遂に病歿したと云はれる。一時に損害を被る事、被服燒跡の如き無いにせよ、四年半も專ら戰爭に從事しては、多少共の影響を受けずに居れぬ。國によつて影響が違ひ、能く復興する勢あるのがあり、其の勢ひないのがある。約三十箇國中、名義のみ參加したのもあるが、多少の損害を受けても、餘力の豐かなのは、復興氣分が盛んであり、何とかして疲弊を恢復し、前よりもよいやうにしようと努力し、損害が甚だしきに過ぎ、殆ど餘力無いのは、如何に復興すべきかを知らず、如何に其の日を過すべきかを考へるに專らになつて居る。米國は何程の損害あつても、愈々益々繁榮を期しつつあり、英國は今こそ米に劣れ、既に財政案を定め、行く行く植民地と共に世界に飛躍し得るを望んで居る。佛國は兎も角も戰勝を得、復興氣分の盛んであつても、如何に着手すべきか、順序に惑ふ嫌ひがある。獨逸は國民に忍耐力があり、損害の割りに屈しなくても、復興の希望が次第に薄らぎ、一日だてか、革命か、革命に次ぐの革命か、玆で人の經驗し得ない所を經驗しようとでも、心に慰めようとするに過ぎぬ。墺太利に至つては、之より更に甚だしく、個人として或ひは安全、國家として復興するの希望ありさうも無い。露國は既に革命を行ひ、成功か失敗かを世界に尋ねて居る。戰後に苦しんだ國々は善いのもあり惡いのもあり、善いのは困難なる試練を以つて前に優らうとして居り、惡いのは、自暴自棄に陷るを免かれぬ。遠き將來には疲弊を極めた者が再び力を得て

興るかも知れぬけれど、幾十年かの間、不幸なる國民として憐まれ或は侮れるであらう。

日本で震火災の損害を受けた者は、死者は致し方が無く、丸燒けになつたのは、能力ない者は絕望し、能力ある者は息の續く限り振ひ興らうとし、所謂燒け肥りを實現したりするであらう。火災每に多少の燒け肥りを見るの習はしであつて、平素恃みにした財產を失ふ事が、頭の中に潛んで顯はれぬ能力を發揮するの機會を得る事になつて居る。多くの人は自ら供へて居る能力の幾分一を使用するに止り、他は其の儘にし、自らも別に能力あるを知らず、人も之れを認めて與れぬ。一度び災難に遭ふと共に、吾れ知らず潛んで居る能力を發揮する事がある。幾十萬世帶の燒け出されたうち、燒け肥りする者が相應にあらう。燒け細りするものと何の比例になるかが明かでないが、今の狀態で前者が多からうと思はれる。

其處で災難に遭はぬ人々が、如何にならうか。歐洲で戰禍を蒙つた國々は多少幸不幸の差別こそあれ、一般に特殊の試錬を經、何程か前と異なる氣分になつて居り、戰前と戰後と區別し得られる。日本の震火災は激烈の程度に就いて、戰役に優るとも劣らぬにせよ、三日間に關東の或る部分を通り過ぎて終ひ、他の地方では一時驚き周章て、日數を經るに從ひ、殆ど忘れたやうになる。帝都全滅の報道の傳つた際、全國の人心が緊張し、大覺悟を極めねばならぬとしたが、幾程もなく平常に復し、損害を蒙らぬものは、損害を以つて人の事とするやうになつて居る。人事でなく、やがて自分の頭に振りかゝる損害にしても、其處まで考へて居らぬ。大阪では地震の順番といふので、警戒し準備しようとするが、他で餘り變つた事がない。帝都復興とて東京のみに重きを置くのが宜くないといひ、不平を抱いたりする。東北の果、西南の果、かの震火災を何程まで感じて居るか。日露戰役は震火災に比して死者も少く、損害も少いけれど何年間か戰時氣分が存續して居つた。震火災が絕大の損害を與へたに拘らず、罹災區域を除いて、多く感ずる所ないかに見えるのは、復興事業として強ひて景氣を煽る所もあるとし、天災として諦らめ、其の天災が僅かの期間に通り過ぎたのによる。民心の動揺せぬのは結構なやうなれど、全體に損害を被りつゝ、之れによつて何者かを得なくては、頗る物足らなく感ぜずに居れぬ。景氣を煽り、人氣を高める必要あるにせよ、絕大の損害を蒙り、從來のまゝにして居れず、新に振ひ興らねばならぬといふ氣分で希望が涌かば、損害も損害のみで終らぬ。戰役は或る點で天災よりも不幸とし、他の或る點でさうでなく、國によつて人心を振ひ興す所がある。天災はさう行かぬが、天災で振ひ興

る國民は、自ら幸を得、併せて世界に福を齎らすであらう。實際何の狀態であるか、事實をして事實を語らしめる外無い。

戰爭と天災及び戰爭文明と天災文明

長谷川如是閑

一

天災は屢々戰爭と同列に見られる。この二つは實際、多くの類似點を有つてゐる。都會や村落を全滅に歸せしむることも、人命に對して無遠慮な破壞を試みるとも、さうして人間が數千年を費して作り上げた文明に對して少しも假藉しないといふやうなことも、戰爭と天災とはよく似てゐる。近代に至つて戰爭に對していろいろな約束が定められ、各々相手方の平和な文明を尊重するといふやうな事が、所謂戰時國際法の觀念となつてゐるが、最近の世界戰爭のやうな大戰になれば、天災がそんな約束を無視すると同樣に、戰爭がそれを無視する。戰爭と天災との差は、相手方が自然であるか人間であるかといふだけの違ひに止まるやうである。

戰爭及び天災の破壞力がそんな風に似寄つてゐると同じやうに、その文明に與へる效果の點でも、いろいろ似寄つたところがある。自然に抵抗する人間の生活手段の豐富になることが文明の一つの要素であるが、戰爭は人間をして、特にその目的の爲めにする努力によつて一種の軍國的文化を生み出させる效果を有つてゐる。或る種の國家は、たゞこの目的だけで成立したのである。從つて或る種の文明は全く戰爭文明であつたといふことは、古代國家殊に東方文明を生んだ諸國家の歷史を研究する者の氣着いてゐることである。自然に對する人間の努力が成し遂げたと同じやうな仕事を戰爭に對する努力も成し遂げてゐるのである。

社會進化の上から見ても、戰爭と天災とが同じやうな仕事をしてゐる。社會の進化は生物のそれに似てゐて、種の混合が社會

的集團の進化を持來すのであるが、天災は人間の各種の集團を混合させる働きを有つ。

或る生物が自然の威力に抵抗して生存する爲めには、必ず群の生活に依らなければならない。天災は人類間の群の意識を强めると同時に、群と群との間の結合を生ぜしめる。民族大移動の如きも、自然に對する一つの生作法であるが、それは丁度戰爭と同じやうに混合を惹き起すものである。

戰爭はある意味では全く民族混合の一つの過程である。一面から見れば戰爭は分解作用を働いてゐるやうであるが、この分解は畢竟合同の他の一面であると見なければならない。古代國家の帝國主義は、戰爭の標本的な合同作用を示したもので、エヂプト、ギリシヤ、ローマ等の帝國主義は、人類合同の尤も早い現はれであつた。古來多くの國々の間で行はれた戰爭のどれもは、大局の上からは必ず合同作用として働いてゐたのである。昔から軍國的思想は必ず統一的傾向を有する哲學を生み、之れに對して非軍國的思想は、必ず分離的社會觀念に一致する傾向を生んだことは、即ち戰爭といふものが社會進化の上で何ういふ働きを有つものであるかを思はせるに足るのである。

或る生物に於いては、生殖に戰爭を伴ふものがある。——人類進化の或る時期に於いてもさうであつた。結婚が戰爭に伴つたり、戰爭が結婚に伴つて起つたりする現象は、太古より近代に至るまでの歷史の上に顯著に表はれてゐた——。生殖は合同の必然の形式であるが、それと戰爭とが一致するといふ事は、戰ひといふ事が人類を孤立的にする働きでなく、結び着ける働きであるといふことの一證である。

天災もその意味で、都會村落を離散せしめ、家族をバラバラにするやうな暴威を揮ひながら、同時に人類を合同させる働きを有つてゐる。洪水の傳說が東洋にも西洋にも同じやうにあるが、その傳說の何れもは、それぞれ一つの合同事業を成し遂げた事を語つてゐる。ノアの傳說は洪水によつて只一つだけの集團が殘されたといふのであるが、これはその合同の作用を極端の空想で語つてゐるのである。支那の洪水の傳說は、今少し歷史的事實に觸れてゐるものであつて、支那大陸の自然地理から云つても、一つの系統の洪水が、大陸の大部分を犯すといふことが有り得たのである。その洪水の系統が一つであるといふことは、一方から云へば其系統の範圍内に生存する人間をその天災に對して共同に抵抗しなければならないといふ共通の境遇に置くことなのである。そこから多くの異種族が一つ系統に統一されるのである。禹といふ一人の聖人が、その洪水を治める全體の計劃者であつたといふが、この一個の土木技師は、同時

に支那帝國といふ一大國家の完成者だつたといふのである。卽ち此場合は天災が戰爭と同じやうに一大帝國建設の動機を爲したのである。ナイル河が一つの系統の汎濫を年々繰返すといふことの爲めに、その流域に一大國家が現出したといふのも、亦支那帝國發生の傳說と同じ性質を有つた史實なのである。天災が古代に於け人類の大集團、卽ち大帝國を建設する自然的動機であつたことは疑ふべからざる事實である。

二

戰爭と天災とが人類に取つて同じやうに作用を働くとは、其外觀上の一致を見ると一層眞らしく思はれる。獨逸軍が佛蘭西國內の戰線で行つた破壞行爲の跡は、丁度今度の東京その他の都會村落の慘狀の通りである。又東京その他の都會村落を恢復するに當つても丁度戰爭によつて破壞された地方の復興と同じ仕事をしなければならない。それ等の破壞が社會的に影響して、その地方の產業の全滅狀態を生み出し、多くの失職者を生じ、いろ／＼の意味の救護を社會が負擔しなければならなくなつたことも同じである。

のみならず、戰爭が社會的に惹き起す混亂と似寄つた狀態を大天災は必ず持來すのであつて、その二つの災害が人間に與へる心理的効果は殆と全く同じやうな形で現はれる。天災は相手方が「自然」であり、戰爭は相手方が人間なのであるから、人々の心理的對象は異る筈であるが、それが同じ樣な結果を産むといふのは、相手方は人間であらうが「自然」であらうが、混亂の爲めに惹き起された不安は一つであつて、而かもこの不安の形式が似通つてゐるので、心理的聯想はこの二つのものを結び着けるのである。古代人が太陽の暗くなるのを見ると、忽ちそれと結び着いて人格的魔術者を聯想したのと同じやうに、今日の社會人も亦、天災の爲めに惹き起された心理的混亂の結果、聯想が病的となつて原始人的心理に似寄つて來る。卽ち今の文明人は、古代人が自然的災害に結びついて聯想する人格と同じ人事的動因を自分達の民族的存在のうちに潛んでゐる不安な關係に求める。古代人はそれをただ空想したのであるが、文明人はそれをもつと事實上の根據を有つところの民族生活に內藏する動因に求める。今度の震災でも日本人は、自分達が古代から遺傳的に有つてゐた一つの民族的對立の相手方であるところの朝鮮民族にそれを求めた。殊に朝鮮民族が日本民族に混同したところから、日本人は今度の天災によつて惹起された心理的混亂の結果、魔術者をこの朝鮮民族に求めたのである。そして之れに對する恐怖心と、天災に對する恐怖心とを結び着けて

猛烈に民族的反感を起したのである。それは丁度戦争の時に於る敵愾心と同一のものである。かようなことも亦天災と戦争とが共通の點を有つことを證するものである。

戦争と天災とが上述のやうに同一現象のやうな形を具へてゐるといふことは、つまり此の二つを現象それ自體として考察するからである。天災といふもの、戦争といふものの現象自體が似通つてゐるといふのである。從つてこれを一定の社會生活の進化に關聯せしめて考察する時には、必ずしも共通のものとはいはれない。

第一に戦争と天災とが社會的性質に於いて異なる重大な點は、天災に於いては禍が「自然」の手によつて人間に加へられてゐるのであるが、戦争に於いては、禍は同じ人間の手によつて人間に加へられてゐるのである。戦争に於いては、禍を下すところの人間の集團があるのだが、天災に就いてはさういふものがない。凡ての人間は天災に對して被害者である。これに反して戦争に於いては、天災に於ける「自然」と同じやうな地位を占める人間的集團がある。それは即ち征服者である。前に云つた戦争文明は即ちこの征服者の間に發生する現象であるこれに反して天災の場合には、「自然」に抵抗しようとする努力から生れる文明は、被害者の文明である。即ち被征服者の文明である。

此の重大な差は、右の二つの災害の社會的效果を非常に異つたものたらしめ又此の二つの災害が生み出す文明の形式を全然違つた範疇のものとする。軍國國家の文明は、謂はば「自然」の恩恵に基く文明である、戦争の勝利者は「自然」を最も有利に利用した「自然」の寵兒である。故に自然の災害が人間を殘酷に征服するところに於いては決して戦争の勝利者は産まれない。即ち戦争文明はさういふ土地には起り得ない、起り得ても大自然の威力が一朝にしてそれを撲滅せしむることがある。つまり軍國文化は「自然」の寵兒の間に榮える文明である。

これに反して自然の威力に對する人間的努力から生れる文明は、全く被征服者の努力に似通つてゐる。天災に於ては人間的勝利者はない。凡てが敗者としての地位にある。これは「自然」の威力が強いほど明白に表はれ、極端にその威力の猛烈なところには、從つて人間的文化の極端な昂揚は有り得ない。人間の生活は次第に自然の威力を征服して行くことであるといふが、それにも限度がある。酷熱酷寒の地にも漸次に人間的文化が斬り込んで行きつゝあるとはいへ、それは「自然」が人間の生存に適ふ地方のそれに較ぶれば全く消極的である。「自然」は人間

をそれに適應するやうに進化させるのであるが、有機體としての人間は、常にそれが發生及び生育した環境に順應して作られてゐるもので、丁度水に沸騰點と氷點とがあるやうに、人間の堪へ得る環境の差異には限度がある。今日の人間は凡ゆる天然の環境に堪へて、赤道直下にも兩極近くにも人類は棲息してゐるが、そこに出來上つた文明は、數萬年を通じて甚だ微弱な進化を遂げてゐるに過ぎない。自然の恩惠の豐かな溫帶、又はそれを中心として、天然的に又交通的に甚だしく隔つてゐない地方に生育した人間の文明が、最高度の文明である。そこに生れた文明の空氣に生育した人間は、極度の文化的素質を働かして、如何にせば熱帶にも寒帶にも堪へ得るかといふことを發見してその設備を以つて酷熱酷寒の地に移動しつゝあるが、然しまださういふ地方に最高の文化を組立てるほどの成績を上げることは出來ない。それは自然の力が嚴格に人間の身的及び心的發育に對し、條件を付してゐるからである。從つて天災は人間文明の發展を或る程度に於いて極限する性質を有つてゐる。卽ち天災は、戰爭が「自然」の恩惠によつて發育した社會的集團を異常な程度にまで發達せしむるに對して正反對の社會的効果を有つものである。

此のことは單純な文明の時代を顧るとよくわかる。戰爭は、古代國家に於いては、その勝利者をして、天災に於ける「自然」と同じ樣な地位に置いてゐるのである。前にも云つた如く、戰爭には勝利者があるが、天災には人間の勝利者はない。然るに、戰爭は人間の勝利者を天災に於ける勝利者卽ち「自然」と同じ樣な地位に置くといふ一種の變態を人間の社會生活に持ち來してゐるのである。何れの國の歴史を見ても、勝利者は——觀念的に——天災に於いて暴威を振ふ「自然」と同一の地位に自分を置いてゐることが窺はれる。古代史に於ける征服者の記錄を見ると、彼等は必ず一種の精神病的發揚性を以つて、自己と「自然」との合一の世界を創造してゐる。此の想像の世界が合理的な宗教、哲學に表はれるのは後のことであつて、第一次的にはそれは征服者の「自然模倣」の行動となつて表はれる。後代から見れば何の意味とも分らない宗教上、政治上の儀式は多く自然の威力を象徵したものであるが、それは征服者が自分を「自然」の地位にまで向上せしむる過程である。又象徵的な大土木工事を起すのも同じ理由である。軍國文明の最初の表はれは、必ず自然の偉大を模倣する大土木工事であつたのである。古代の東方文明の遺物がそれを證明してゐる。

かやうな征服者の心理は、更に神話及び傳說の上に明かに發つてゐる。如何なる國の神話でも、必ず征服者と「自然」との

混同が創造されてゐる。山や海が人間の父母であつたり、山同士が戰つたり、人間が暴風や雷電と共同で征服事業を行つたり凡ゆる自然物が人間のやうに軍國的に行動すると同時に、征服者は丁度天災に於ける「自然」と同じ働きを示してゐる。人間が「自然」であり、「自然」が人間であつたのである。

此の自然と人間との合一といふことが、歷史上の國家文明即ち征服が生んだところの軍國文明の特徵を形造つてゐる。これは人間が「自然」の威力によつてたゞ全く被征服者の地位に押へつけられてゐるところでは、生れることの出來ない文明である。支那やエヂプトの大洪水が、たゞ人間に禍するだけの天災であつたならば、支那エヂプトの古代國家は決して生れなかつたのである。その天災は、同時に廣大な平野を作りその上に永久の沃土を持ち來すといふ人類繁殖に最も便宜な自然狀態を作り上げたことが、その古代文明の發展を促したのである。文明は常に「自然」に抵抗する努力であるには相違ないが、その抵抗力が有効に働く爲めには、「自然」がそれを可能にするだけの恩惠を與へてくれなければならなかつたのである。此の恩惠を「自然」が拒絶するやうなところには、決して今までの形式に於ける最高文明は成立たないのである。

三

戰爭と天災とは、此處に於いて正反對の効果を人類の發展に及ぼしてゐると云へる。戰爭の兒は彼自らを萬能の自然の地位にまで向上せしめ得るほどの「自然」の寵兒であり、天災の兒は、彼自らを「自然」といふ暴君の奴隸として忍ばなければならないほどの「自然」の繼子である。戰爭は被征服者の側から見た時だけが天災なのであつて、天災は敗北だけしかない戰爭である。が、戰爭の社會現象としての性質は、被害者の地位だけから見るべきものではなく、それと同時に征服者の地位からも見るべきものである。これに反して人間は天災の性質を「自然」の側から見ることは出來ない。それほど戰爭と天災とは社會事實として本質的に異つた性質のものである。從つて戰爭に榮える國と天災に脅かされる國とは、本質的にその文明の形を異にしなければならない。軍國文明と天災文明とは、その理想に於いて、その心理に於いて、その形式に於いて、即ち兩者の宗敎、哲學、文藝、美術及び衣食住に至るまで、殆ど對蹠的のものでない譯に行かない

かくの如くにして戰爭に惠まるる國家と、天災に脅かさるる

國家との民族的生活には、著るしい差異があるべき道理である。前者は「自然」の嚴びしい教訓を受けない爲めに思ひ上つた空想——寧ろ幻想——から生れた怪異な形相及び濃厚な色彩を有つてゐるが、後者は人間的精神の發揚が常に嚴しい自然の教訓の爲めに萎縮して、前者に見るやうな思ひ上つたケバケバしい外觀を有つことは出來ない。それは丁度赤道直下の野蠻人の文明は、その酷熱が彼等の發展を萎微させてゐるにも拘らず、簡單な生活資料の豐富な爲めに、あの花やかな身體裝飾並びに猛烈な軍國的精神、戰鬪的精神の發揚を有してゐるに對して、さういふ恩惠を有たない北極のエスキモーがヂミな、さうして極端に平和的な文明をしか有つてゐないのと同じである。帝國的な支那大陸の文明と、帝國主義的大規模の心理を有しない日本の文明との形相及び色彩の相違を見ても此のことはよく見分けられる。

極度の軍國文明を有つことの出來る民族と、そんな風の發展を遂げ得られないそれとの間には、その文明の形と色とに於て著るしい相違がある。支那の文明と日本の文明が或る程度までその對照を示してゐる。支那大陸は、世界の一部でありながら、それ自身で殆ど第二の世界を構成する位の廣い地域が、全世界の持つてゐると同じやうな複雜な自然條件の下に存在し、しかも天然の恩惠の多いこと、及び天災の比較的少いこと等が、其地域に一大帝國を作り上げた所以である。從つてその文化は軍國文明の特徴を極度に備へてゐる。日本はそれに隣して常に支那文化の影響をうけたにも拘らず、形と色とに於て支那のそれとは頗る違つた文明をしか産み得なかつたのである。日本は人間の棲息に適する地域が極めて少く、又局部的に區劃され、一大統一を持ち來す自然條件は全く缺乏してゐる。從つて帝國建設の條件たる廣大な地域を缺き、大規模の軍國文化を産み出す資格がない。加ふるに古代から週期的に天災に襲はれ、自然に抵抗する科學的能力の乏しかつた時代の日本人は、さういふ自然の下に於いては、勢ひ極めて消極的な文明を作り上げるより外はなかつた。大陸的な支那の文明は、それほど長く日本の接觸した所であつたが、遂に日本の文明の本質を如何ともすることは出來なかつた。アリアン系の文明も支那大陸には一種の色彩を發揮したけれども、日本民族に對しては極めて微小な影響を與へたに過ぎない。氣候の上からは、日本は少くともその南部に於いては、それほど自然の虐待を受けず、又かなりな恩惠を與へられてゐるのであるが、自然條件は、廣い接觸と大きい統一との機會を缺いてゐる爲め、偉大な軍國文明を有つことは出來なかつた。その自然條件は日本人の生活に對し物質的にも精神的

にも一種の制限となつて、日本の文化を極めて遠慮勝ちな、昂奮の度の足りないそれに止まらしめた。大規模の人間的昂奮を生み出す働きを持つた大々的軍國生活といふものを、日本民族は古代から有つことが出來なかつた。隣りの支那が大軍國々家となつてからも、日本は、久しい間分權的な小部落に分れてゐて、それが有史以前の日本の特質を爲してゐたのである。而して、此特質を作り上げた自然條件は、恐らく日本人の民族的生活を決定するについて、永久に有力な條件を爲すものであらう。

かやうな事實に立脚して考察する時は、日本民族は決して軍國的、帝國的最高文化を組立てるに適した民族ではない。個々の日本人は、體軀は小さいけれども氣性が精悍で軍國的民族に適したもののやうに云はれてゐるが、建國以來大規模の軍國的事業を完成したことは未だ曾て一回もなかつたといふことによつても、民族が本質的に軍國文化の建設者ではあり得ないといふことを思はせる。

或る民族が軍國文化を生むに適するものであるかどうかは、個々人の素質を個的に見て決するとは出來ない。それは自然の環境が大いなる統一を生み出すに適した條件を爲してゐるや否やに繋つてゐるのである。大軍國民族たるには、日本人の樣にい

ら立しいピリピリするやうな小さな興味を有つてゐなければならないか何うかは、問題ではないのである。偉大な軍國的精神は要するに世界的大規模を第一條件とする。支那古代國家もエジプト、中央アジア、印度等のそれも、つまり世界的規模がその帝國的文化を完成するに最も根本の條件であつた。然るに日本民族はこれらの條件を大規模に有つことが出來なかつた。のみならず、日本に對する自然の條件は生活を昂奮させるよりは寧ろ控へ目にさせる働きを有つたものであつた。氣宇を宏壯ならしめるやうな大自然を持たず、人類の接觸と活動とを自由にするやうな交通を持たず、さうして一定の年月の間努力して造り上げた生活を、突然根柢から破壞されるやうな天災を週期間に有つてゐたのである。日本人の衣食住――その殊に根本的なものは、家屋であつて、何時まで經つても木材の家屋の外を有たないといふ、世界の文明國で類のない結果を生んでゐる――の形式を見ても、世界の何れの軍國國家のそれとも非常に異なる組立てを有つたものである。凡ゆる軍國々家の末である國の住居は、一個人のそれでも必ず城郭式である。さうして又都會が亦全部を城郭にしてゐるのである。それは日本以外の凡ての國が、まるで云ひ合はしたやうに取つてゐる形式であるが、日本の家はそれと正反對に全く軍國的一樣に意識の缺乏した、さう

してその意識の象徴的に殘つてゐるといふやうな部分さへもなく、全くただ生活本位の家である。かやうな開放的な家を有つた民族は、少くとも文明國といはれるもの丶中には見ることを得ないのである。單純にこのことを考へれば、度々地震洪水を食つてゐるので、何時でも身體一つで逃げ出すに差支へないやうな形式が發達したと考へてもい丶やうな種類の形式である。何れにしても、日本の民族の生活形式は、日本に特有の自然條件――を征服するといふよりは、寧ろ――に征服された形のものであることを思はせるのである。それは畢竟日本の自然條件は、日本人をさういふ風に消極的にしてしまふ性質のものであつたが爲めである。

けれども如何に自然がさういふ性質であつたにせよ、他の條件が日本民族を强制しなかつたならば、恐らくそんな風に許り發達することは出來なかつたであらう。他の條件とは、もつと人爲的な環境であつて、例へば甚だしく軍國的に發展した國民と、もつと密接な接觸を保つてゐたとか、又自分自身の住む天地に、今少し軍國國家の條件を具へてゐたならば――その中央にでも片隅にでも、そんな條件をもつてゐたならば、――物質的にも精神的にも、從つて衣食住に於いても、日本民族は他の凡ゆる軍國國家の生活形式に近いものを有ち得たであらう。例へば石造の家屋位は造ることになつてゐたのであらう。

要するに日本民族の軍國的に發達しなかつたのは、日本に對する「自然」の態度がさうさせたのであつて、而かも日本がその「自然」の態度に從順であつたのは、それが一番よく日本民族の生活に適した生き方だつたからである。しかもそれには日本が、その頃はまだ世界の交通路として發達してゐなかつた東洋の海上に孤立してゐた島國であつたことと、その島國に對して隣の一大帝國の手が充分に伸びなかつたことの結果である。

四

日本民族の文明は、此の意味からいへば、自然條件に柔順な點で世界無類であつたといはねばなるまい。それは西洋人が屢々日本に就いて言つたことでもあるが、西洋の、又支那民族の文明の反自然的の程度から見れば、日本人の生活は殆ど自然其儘の生活であると云つてもい丶。家は自然の庭園を有つ一個の亭に過ぎない。食物は支那や西洋のそれに比べれば殆ど生のま丶を食つてゐるやうに思はれる。衣服も、世界の凡ゆる民族の衣服に見る筒袖式に發達しないで、日本の氣候に適すやうに、ただの布切れを羽をつてゐるに過ぎない。最も反自然的な構造を有つ

等の城廓の如きでさへも、日本のは出來るだけ自然を尊重して見越の松を庭園式に水に臨ませたり何かして、支那や西洋の城に較べれば遊園の如き外觀を有つてゐる。かやうに、日本人は自然に抵抗するといふよりは、自然に副ふて自分を拵へ上げるといふやり方を採り來つたのである。それが凡ゆる日本文明の容態なのである。つまり日本人の生活は、それほど自然に柔順にしてゐて差支へなかつたのであつて、しかもその安易の態度が日本民族にとつて最も安泰なさうして最も幸福な生活を持ち來したのである。

日本民族に關する以上の事情は、決してただ過去の歴史に於いてのみ眞實であつた事柄ではなく、若し他の條件が妨げないならば、日本人は永久に此の條件の下に發達すべき民族なのである。

近代文明は、世界の凡ゆる民族の生活の形式並びにその精神狀態を統一に導きつゝあるが、然し、凡ての民族は、此の世界的統一に對して一樣の反應を呈するとは限らない。或る民族は生活の或る方面に就いては全然世界的に同化するが、他の方面に於いては依然分化的であることもあらう。さういふことは日本民族の古代からの二重生活によく現はれてゐる。支那大陸と接觸の結果、幾分日本の自然條件の産んだ固有の日本風に變化を來し、生活の或る部分に於いては極端に支那化したのであるが、然し他の部分に於いては、もう此の程度以上に支那化しないといふ限度を有つてゐて、その同化が停止してしまつたのである。古代の日本が支那文明を受入れた時には、日本の支配階級の生活形式の大部分は全然支那化したが、又輸入された産業の結果、工匠の生活が幾分外來的形式を取つたが、農民の全部は依然として日本的生活を續けたのである。而して此の日本特有の自然條件の産んだ生活形式が意識的に保存されなければならないといふことも、啻に民族的偏見からのみでなく、もつと生活の上の意義をもつてさう思ひつくことも多くある。日本の生活形式は強ち意識的に保存されたわけでなく、必然的にそれを保つたのであらうが、然し民族が自己の生活を意識し出した結果、科學的に又趣味的に自分の生活を組立てるといふ傾きが強くなる。近代に於いて殊にそれが強くなつて、自然のままに發達した都會村落といふやうなものまでが、意識的に計劃されなければならなくなつた。殆ど無意識に定められてゐた道路の線とか幅とかを、何う延長せしめ何間幅にしなければならないかといふ樣なことを意識的に決定する時代となつた。空地、空氣植物等が生活に對してどれだけの比例で要求されるかといふや

うなとは、つひ近代までは無意識に決定されてゐたのだか、今日では科學的方法や意識的な審美的感覺やでそれを決定することとなつた。さう意識的になると、日本人の生活形式が何うしてかういふ風に發達したかに就いても意識的になる。從つて科學的感覺や美的感覺や論理やが、今後の日本人の自然條件に對する態度を決定することになる。その場合に恐らく日本民族は今まで日本人の生活を條件づけてゐた「自然」に就いて、非常に意識的となり、從つて自然を取扱ふ態度並びに自然の暴威に對して備ふる態度――それは今までの日本人は動物的遺傳である本能によつて取扱つてゐたのである――に於いて意識的に今日までの民族的經驗を尊重することになるに違ひない。從つてそれは又自ら西洋風な反自然よりは日本傳來の自然に副ふて育つて行くといふ形式を尊重することとなるであらう。

五

戰爭と天災とが人類の生活に與ふる差異は上述の如くであるが、日本民族は本質的に戰爭の影響を受けて思ひ上つた文明を造るよりは、自然の威力に順應して、極めてヂミな小規模な文明を生むに適してゐるといふことが、戰爭と天災の本質上の差別から結論されるのである。

けれども此の小規模なヂミな文明は、今日の世界文明の帝國主義的競爭場裡に於いては、極めて消極的な地位に甘んじなければない物であつて、若し軍國的に又は第二の軍國主義たる資本主義的に民族の生活を抽象して――個人を犧牲として民族を完成するといふ風に――考へたならば、甚だ花々しくない民族生活である。そこで日本民族の文明をもつと世界的の軍國的又は資本主義的文明として造り上げなければならないといふ有力な傾向がある。

けれども、日本民族を世界文明に一致させるといふことに異議はないにしても、その世界文明なるものの性質が、現代に於て一大進化の過程にあることを心得なければならない。それはこゝで言ひ及ぶには餘りに複雑な問題であるが、本論に關係した點を簡單に云へば、前に述べた戰爭の社會的性質が現代に至つて一頓挫を來したことである。

歷史的事實として、戰爭は既述の如く人間を「萬能の自然」にまで昂騰させる征服事實であつた。それは天災に於ける「自然」の地位と同じ萬能の地位を、人間の征服者に與へるものであつた。ところが此の事實は現代に於いて初めて一大頓挫を來たした。人類は二十世紀に至つて初めて、古來から動かすべからざるものとなつて戰爭の積極的効果は、絕對の事實でなかつ

たといふことを知らしめられたのである。征服によつて思ひ上つた人間を、神にまで昂騰させるといふことは、人間の歴史に於ける一定期間の事實に過ぎなかつたことを漸く悟りかけた。

此事を科學的に豫言したものは、既に十九世紀時代にポツポツあつたか、――非科學的に豫言したものは古代からあつた、――二十世紀に至つて歴史的事實の上で、戰爭が一人の絶對的勝利者をも生まないこと、戰爭によつて「萬能の自然」にまで向上する一個の人間をさへ生むことは出來ないといふことを教へられた。――あれほど偉大な大戰爭を行ひながら。――無論廿世紀の戰爭に於ても、勝利者と敗北者との間には其享受すべき運命に差異はあらうが、然し其勝利者は、數千年來定まつた典型を以つてゐたところの「征服者」とは、似ても似つかぬ慘憺たる勝利者であつた。二十世紀の戰爭に於いては、勝者も敗者も、共にたゞ少しばかりの程度の差を有つた被害者であつた。即ち戰爭は全く天災と同じやうに、凡べての參加者が悉く被害者で、前代までの勝利者が占めたやうな、天災に於いて暴威を揮つた「自然」と同じ地位にまで思ひ上ることの出來る勝利者を一人も生み出さないものとなつてしまつた。

此の事は數千年の歴史を有つところの軍國文化の終りを告げるべき時期が來たことを暗示してゐるものである。戰爭が人類に取つて一樣に禍であるといふ、現代に至つて人間が初めて經驗せしめられた新たな事實は、今後の國家文明を、その形相と色彩とに於て古來のそれとは著しく違つたものたらしめるであらう。

そこで軍國的發展が生み出した文化形式を憧憬する精神は、もう前途が見えてゐる。人間を、天災に於て暴威を揮ふ「自然」と同じ心掛けにする哲學は、永久に崩壞する。民族的にさういふ哲學を有つことの出來ない民族が、却つて人類の永久の生活を生きて行く素質を有つてゐるといふことになる。さういふ素質を有つてゐる點で我が日本民族――如何なる國家の軍國文明よりも一番みじめな軍國文明しか有ち得なかつた日本民族――の將來はやや樂觀することが出來る。

然もかく樂觀すべき事情を、今日の日本の所謂支配階級の人々及び識者といはるゝ人々の多數は、却つて悲觀材料としてゐる。彼等は日本人が一大軍國文化、一大帝國文化を生み得なかつたといふことの故に、日本民族の將來を悲觀してゐる。それが爲めに、日本民族を大陸民族の過去の軍國的生活に倣はしめるやうに教養しやうとしてゐる。これは現代に於ける文明の進化に對して全く顛倒的の態度である。

大正十三年一月一日發行

菊版 八百頁

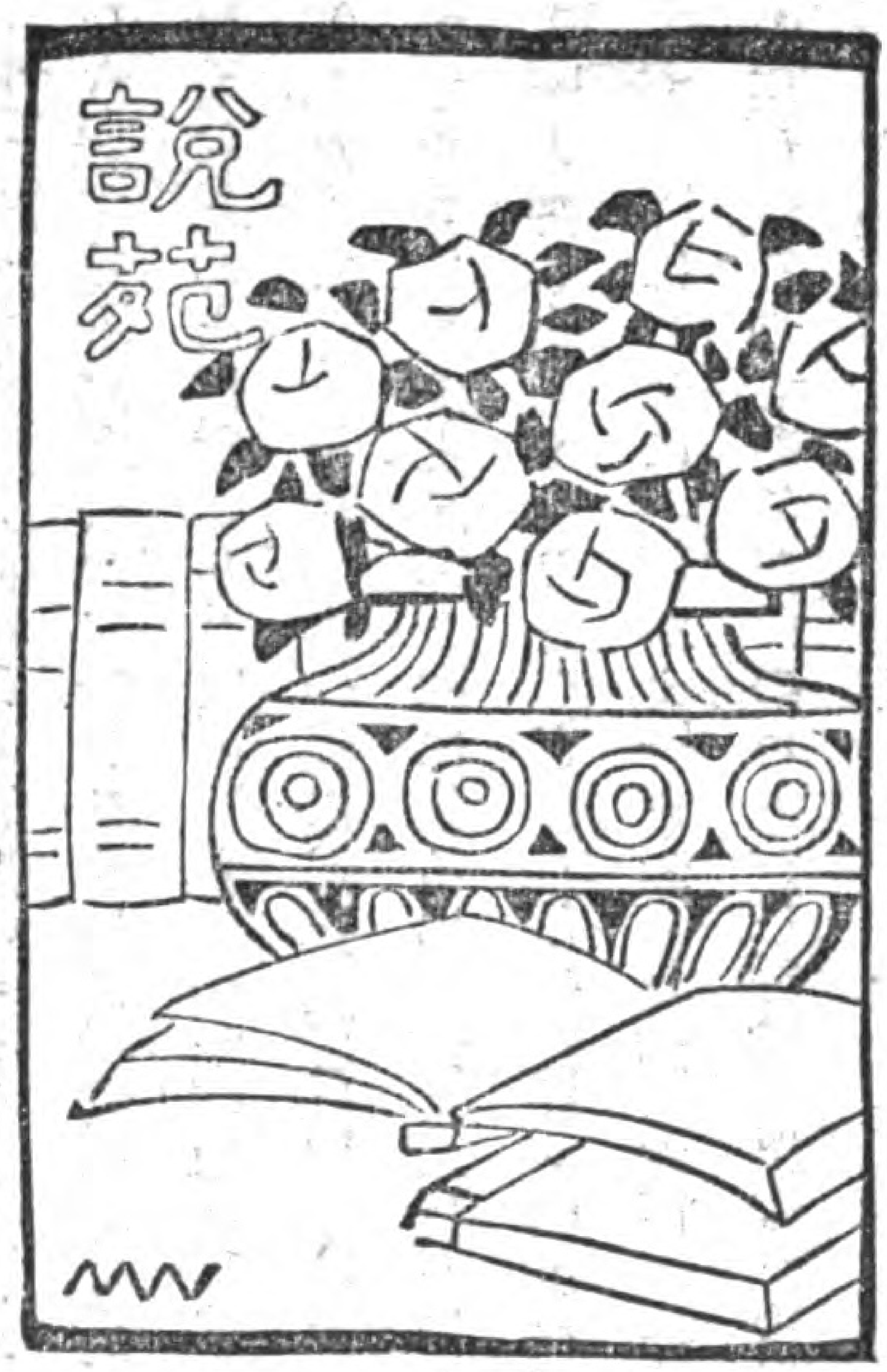
中央公論

新年號

大正十二年十二月廿日發賣

定價一圓八十錢

(郵稅五錢)



圖に乘つて怎んな馬鹿を見た「大泉黒石」！

（「大泉萬歲！黒石萬歲！」續篇）

大泉黒石

まへがき

仙臺は峩々の溫泉から出て來た願人坊主の平口萬之助が、クリスチヤンとは嘘のやうな話だ。この萬之助と俺とが、三河島の屠牛場で牛殺しの見習ひをやつてゐる頃、鹽漬けの生皮を向島の染革工場へ回漕したことがある。屠牛場から車で運び出した荷物を、白髯の渡しで小傳馬船に積みかへて、小松島へ漕ぎわたる其の船の中だ。「もしもこの舟が引つくり反つたら、君はどうするか？」と願人坊主の萬之助が言つた。「いきなり泳ぐよ。」と俺は答へた。「泳げなかつたら？」「そのときや往生さ。」「從容として死につくことが出來るかい？」「君はどうだい？」

「そりや出來るとも！僕には信仰があるんだ。僕は、神の子・クリスチヤンだ。」と柄にもなく突飛なことを言つた。「ひらけたもんだネ。仙臺の山奥から出るものは、孫太郎虫ばかりかと思つたら、クリスチヤンも出るやうになつたか？」すると萬之助はムツとして「嘘だと思ふなら、何でも聞きたまへ。一一、卽答してやらア」と云ふところを見ると、これでもクリスチヤンなんだらう？信用さへしなけりやいゝと思つて「それには及ばない」と言ふたら、すつかりクリスチヤンになつた氣で「おい」と云ふのだ。「君は、シユライエルマツヘル・フリイドリツヒ・エルンスト・ダニエル先生を知つてゐるか？」

「そんな長い奴は知らん」

「ダニエル先生を知らないのか？ふうん。さうだらうな！先生は十八世紀末の、有名な獨逸神學者だよ！よく覺えて置きたまへ」

と、いやに偉さうな風だ。安直に凹んでゐると、ます／＼人を輕蔑する癖の男だから、「神學者なんか知らなくつたつて、不自由はしはないが、どうだい、ニコライ・ニコラエウイッチ先生なんさ、知つてないと幅が利くまい？君。知つてるか？」すると萬之助が狼狽しながら「あゝ。それは何だつけかなア」と、聞いたこともないくせに痩せ我慢を張るのだ。「知らないのか？」「知らないよ。」「さうだらうな！ふうん。さうだらうとも！ニコラエヴイッチは俺の死んだ祖父さんだ！よく／＼覺ひとけ。」と稱しつけてやつたが、天國にゐる百姓のニコライ爺さんも、驚いたらう。すると萬之助が口惜しまぎれに、「君のやうに不眞面目な男も、たんとはなからうな？」と云つた。「不眞面目も眞面目も卒業したんだ。」「それが君の魂に、信仰のない證據さ」しかし此處でウンさうかと云ふと圖に乘る男だから「信仰はあるとも！」と押し返してやると「どんな信仰だい？」と馬鹿にした調子だ。間に合せに「禪だよ」と云ふたが、實は禪のお寺に先祖の墓がのこつてゐるだけのことだ。それ衆生の心中には、金剛の佛性ありて、猶日輪の如く廣大無邊なりと云つたやうな達磨の説法と來ると、廣大無邊で寄りつけない。すると萬之助が小鼻の上でニヤリと笑ひながら「へえい！禪か？いやだよ君。ありや山師ぢやないか。失禮だが、君にもその氣味があるところは爭へないもんだナ！」と云ふのを切つかけに俺を罵倒した。その態度が、心から俺を嘲弄してゐるやうだ。癪に障つたから舟べりに腰かけてゐるやつを、出しぬけに河の中へ突き落した。泡くつて這ひ上らうとする萬之助の襟をつかんで、水の中へ押し込みながら「どうだ！今云つたことを取消してあやまるか？」と俺も本氣だ。アプ／＼藻搔きながら「何のこれしきのことで！」と痩せ我慢を張つたかと思ふと、隙を見て俺を水の中へ引きずり込んだから驚いたが、信仰はないけれども泳ぎは達者だ。萬之助に負けてたまるものかと散々やつつけてやつたが、強情な山猿は到頭降参したと云はなかつた。いつまでも怯む景色がないので、持てあまして舟に押し上げてやると、頭から汚ない雫の垂れる顏に、ぼろ／＼涙を零し乍ら「これしきの事で、一度言ひ出したことを取り消すやうな俺と思ふのか！」と芝居がゝりで武者ぶるひしたが、水の上では勝目がないと諦めたのか、手向ひもしなかつたことがある。萬之助のクリスト教なんか鼻の先であしらつてやる俺も、命がけの強情つ張りには一目置いたもんだ。以來たび／＼この手でやられた

が、なかんづく始末に困つて手古摺り果てたのは、俺とこの男とが、同行二人で西伯利亞へ出かける道中のハルビンへついたときだ。ハルビン藝者の顔を見なければ承知が出來ないと頑張つたのだ。お蔭で飛んでもない憂目を見なければならなかつた事件だ。この一篇の紀行は、先づこの邊から前篇(「中央公論」大正十二の十)と、甚だ密接な關係をもつて來る。前篇をお讀みにならなかつた諸君のために、前篇の尻を二三枚、この篇頭に再錄する必要があるだらうと思ふが、さうすると、原稿料の二重取りになるし又面倒で不體裁だから見合せた。

一

藪醫者の話によると、バイカル女史と云へば、ハルビンでも有名な藝者ださうだ。この有名な藝者が、俺の舊友・久留米五十五郎を下ノ關にうつちやつて逃げた細君のお君さんに違ひないのだから意外だつた。だから、汽車がハルビンにつくと、車室の口へ出た俺は、バイカル女史のお君さん、こゝに隱れてゐるのだナと思ひながら、顔を突き出して見ると驚いた。驛の構内は物と人間で埋まつてゐるのだ。赤軍に追ひまくられて、北の方から逃げて來たやう恰好なの、露西亞人の男や女が、荷物を抱えてまごついてゐるかと思ふと、どさくさまぎれに掻つ攫つて行くものはないかしらと云つた目つきの支那人どもが、血眼で跳び廻つてゐる。處々で、日本の兵卒が鐵砲の先に劍をつけて突つ立つてゐる。この人波から盜めきあがらうとする泣くんだか怒鳴るんだか解らない聲のために、アーク燈の光までがボツと霞つて見ゆるから凄いもんだと思つて車室へ引つ返すと「線路の上は全で山つなみですなア」と仰天して見せたら、「こゝは乘り替へ場だから、いつもあの通りですが、しばらく待つと、少しは片づきますタイ」と藪醫者の返事だ。「お君さんも大變なところで有名に成り澄したもんだ」と云ふと「ウン。そのお君さんについて、相談しやうと思つてゐたところだ、落ちついて坐りたまへ。」と萬之助が妙なことを云ひ出した。「ね、君。久留米君の依賴は兎に角、一度バイカル女史に會つて見やうぢやないか?」「會つてどうするんだい?」「君のためには、久しぶりだから話もあるだらう?」「君のためには赤の他人だから、話がなくてつきるまい?」「大いにつまるさ!バイカル女史は藝者だぜ!しかも、ちやんと身の上を聞いてゐる藝者と來てゐるのに、君は不人情にも、素通りをするつもりか?」と、おかしな處で力瘤を入れたもんだ。「失禮ですが、あなたは女史を御存じかネ」と坂本龍馬が尋ねるから、俺は一と通り話をした。すると意外にもこの龍馬が乘り出して來るのだ。成るほど

ナ！私なら飛んで行きますヨ！」「へえ。そんなものでせうかネ。しかし、飛んで行くにも金ですからナ。」「いや。ところがですタイ！土地の藝者は、どんな一流のはやりつ子だつて、宿屋にも行けば、饂飩屋にも行きますよ。お客さへありやネ。輕便で安いものサ。」と萬事のみ込んでゐるのだ。「まさか、饂飩屋からも呼べまい？」すると、しみつたれの癖に萬之助が「何も饂飩屋から呼ばなくつたつて、ちよつとした小料理屋にあがるだけの金は有るんだから、兎も角も出掛けることにしやう」と獨りで決めて了ふのだから、勝手な奴だと思ふと、「その小料理屋ぁです」と藪醫者がはじめた「新市街の遊女屋町に限ります。支那ピイや露西亞プロ專門の店だと、安値でよろしいが、馴れぬとボラれますからね。お二人さんの前ですが、この邊でチヨイと持てたら、たまりませんタイ。ヘツヘ。」「どうも有難う。」と萬之助がよろこんだ。親切は親切だらうが、餘計なことまで敎へて萬之助を唆かすものだから、格別見たくもないお君さんの顏を見るのに、寒い風の吹き晒しに遭ふ始末だと思つて碌々挨拶もしなかつた。おまけに、ちよつと小料理屋に上つたかと云へば大違ひだ。と云ふのはかうだ。坂本龍馬と萬之助と俺とは、一と塊りになつて群衆を押し分けながら、迚も鼻もちのならぬ汚ない停車場へ下りて、廣場へ出た。坂本龍馬の住居は舊市街に片寄つた坂の上にあると云ふので、「では、さやうなら」と別れた。別れぎわに「お二人さんはおひろひですか？馬車ですか？」と坂本龍馬がたづねるから「さあ。おひろひにしますか。馬車にしますか？」と曖昧な返事をすると「あゝさうですか。しかし、うつかり支那人の馬車に乘ると、法外にボラレますケン、充分お氣をつけなさい。もつとも、そんなときに奴さんドンの腰の骨を、一ツ蹴とばしてやる氣ならば、なあに、あなた、一里や二里はロハでも乘れますがな。ハツハ」と云ひながら、釣鐘マントを頭からスツポリ被つて坂をこそ〳〵とのぼる恰好が何となく泥坊みたいだ。慓悍な醫者もあるもんだと思つたが、折角ながら、支那人の腰の骨を蹴とばすよりは、おひろひの方がよからうと思つてさうきめた。東京市の柱廊を探し廻つた、あの了見なら一里や二里は何でもない。だから、東支病院のわきをぬけて、陸橋へ這ひ上つた。そこからブリスタンの窪地へおりやうとすると、支那の兵隊と土手ツ原でぶつかつた。中華國民の雇ひ兵を見るのは始めてだから一寸妙だ。何しろ、五十人ばかりの先登にサーベルを下げて立つてゐるのが、め組の若い衆に救世軍の帽子をかぶせて見たやうな一人の將校で、一列につゞくのが、葬式の穴掘の人足みたいな兵卒だ。垢だらけの首に、太鼓と喇叭をブラ下げたのが尻にくつつ

いてゐる。ガラ〳〵ピイ。ガラ〳〵ピイで此の行列が兎に角まつ直ぐに行くのだから、やつぱり兵隊だナアと感心した。ところが、先方の身になると、これが何よりの自慢だと見えて、支那人のおかみさんや娘が通りかゝると、この將校がサーベルをひつこぬいて何とか號令をかける。行列が止つて足踏みが始まる。太皷と喇叭がヤケに鳴り出す。兵卒の中には、おかみさんや娘の顏を眺めてよろこんでゐるのもあるが、そのおかみさんや娘は此の末賴もしい兵隊さんの威風に打たれてすつかりチヤームされると云ふ段取りだから氣取つたもんだが、おかげで俺と萬之助は寒い土手の上に十五分ばかり通行止めを食はされた。さうかと思ふと、すり切れた旆を逆さまに押し立てたやうな白楊が並んでゐるから道路には違ひないが、實際はどうやら賽の河原を迂路ついて行くやうなゴロ石の上を、風に吹かれてモストワアへくだると、前からと後ろからと、支那人の馬車がダンスをしながら鞭の音をのこして往徠するのだ。乘つてゐる客がドシン〳〵彈ね上る。今に引つくり返つて落ちなければいゝがと心配しながら歩いてゐるうちに、どうした間違ひなんだか、龍馬に敎はつた遊女屋町の見當が外れて、いきなりプリスタン街へ突き當つて了つたから、足の早いのも考へもんだ。前は埠頭で、その突つかゝりに一軒の丸太小屋が雪の中に立ちすくんでゐる。低い軒の廂にブラ下つてゐる八角洋燈を見てやつと氣がついたのだ。赤い文字で「東京料理・プリスタン亭」と書いてあるのを、げつそり眺めながら「どうだい。萬公。今來た方角へ今一度引つ返す勇氣はあるかね?」と聞いて見ると、「今朝から飮まず食はずだ。腹がへつて寒けがすらア。ところで君。あの家は物を食はせるだらう?僕はあそこで我慢するとして、一杯やつてからのことにしやうぢやないか?」と、ひもじさうな返事をしながら、例の獨りぎめで丸太小屋の「プリスタン亭」へ傾いて行くから俺もついて行つた。扉を押してあけて入ると驚くべき東京料理屋だ。掃除の惡い內地の洋食屋とめし屋が同居してゐるやうな薄暗い天井の下に、垢びかりのする卓子とチヤブ臺がソレ〳〵、仕切つた土間と疊の上に列べてある。ペーチカの溫みがムツとする。殺風景なうちだと思つて卓子につくと、奥の帳場から、無愛想な十四五の娘が現はれて「今日は鷄と鴨のおつゆしか出來ません。酒はいくらでもあります。」と云ふから「その鴨にしやう」と俺が云つた。「よろしうございますが、お二人さんだけでは片身ですから、もうお二人さんが來るまで待ちなさるか?」「そのお二人さんは何時來るんだい?」「サア。いつ來なさるかノシ」と云ふ挨拶だから心細くなつて鷄にした。大根と人參と鷄の皮のスウプで、性の知れぬ

正宗を呷つてゐると「おい君。」と萬之助が眼を据ゑて云つた。「こゝへお君さんに來て貰ふことは出來まいかね？」「いくら何でも、こんなっちへ呼べるかい？」だつて、餛飩屋にさへ參りますつてえぢやないか？」と狡るさうにかまへるから「それはやめて貰はう。」と斷つた。「何故？」「だつて、きまりがわるいぢやないか？」「贅澤なことを云ふなよ。」「しかし、初めの約束がさうなんだからネ。」「約束は約束で君。大丈夫だよ。杏花樓へ行つてサ。私は久留米君の舊友の、大泉と申すものであります。ありますがダネ。このたび、スペリヤへ赴任の途上におきますて、そなたが此の街にゐると聞きダネ。なつかしさのあまり一目あひたく、わざ〳〵下車して此處にゐるゆゑト。いゝかね。三味線もたずに、チヨと來てはくれまいか？これだけ云やア解るこつた。ねえ。姐さん。聞いたかい？」「聞きましました。」「バイカルさんを知つてゐるかね？」「時々來なはります」「そうれ見ろ。時々來なはりますと云ふ位だ。君の顏にかゝるやうなことはしないから、僕に任せて酒でものみたまへ。」と萬之助は小娘へ向き直つた「すまないけど、今、云つたやうなわけだから、杏花樓のバイカルさんを呼びに行つてくれないか？」と云ひなが五十錢の札を一枚握らせたところを見ると、よつぽど會ひたいのだらうと思つたから、俺はうつらうつら云つて聞いた。小娘は承知して出かけたが、やがて息を切らしながら、頬つぺたを眞つ赤にして戾つて來ると、「ヂキに伺ひますと言ひなはりました」と報告した。そして帳場へ引つ込むと十分ばかりで、サク〳〵と雪の上を軋つて來る馬車の音が聞えたかと思ふと、扉の外でピタリと停つた。「來たよ。來たよ。馬鹿に早いところを見ると、君の名まへを聞いてびつくりしたんだアね。ヘツヘ！有望々々」と獨りでニコニコと笑ひ出した萬之助の笑顏が、一時間もつゞいたかと云へば、たつた三十秒で、サツと消えて了つたと云ふことになるのだ。と云ふのは「只今は、お使ひをいたゞきまして、大きに有り難うござりまする」と云ふ丁重な物腰で、一ゝとわたり部屋の中をジロリと見廻してから、いとも靜々と入つて來た藝者らしい女を見ると、お君さんの祖母さんにしては少し若いけれども、たしかに、一本や二本の白毛(しらが)はあるかも知れたい眉を、三日月の形に黑々と塗りかため、おまけに、唇は玉虫の羽根みたいに口紅をなすりつけ、この邊の女にはよくある凍瘡の痕が、見苦しく焦げついてゐる耳たぶを、白髮染めで胡麻化した鬢の毛でもつて旨く抑しかくしてゐるのだ。もつとも、此處へ來るまでには、こんなお婆さんをいくらも見た。燃え立つやうな緋縮緬の腰卷を蹴とばしながら、昆崙山脈から吹き下ろす風に嘯きまわつてゐるのだ、この邊のお婆さんたんだっ、だ

から一向驚くには當らないとは云ふものゝ「久留米さんのお友達と仰有るのは旦那でござりまするか？妾はバイカルの伯母で、やはり杏花樓に永年つとめて居りまする桃千代と申しまするが、この度は、わざ〳〵お立ちよりあそばしまして、お初にお目通りいたしまする。」と云ふ重々しい調子だから、おや〳〵と思つて萬之助を見ると、蒼くなつてゐる。度膽をぬかれたんたらう。いゝ氣味だ。默つてゐるのも變だから「私がその友達の大泉ですよ。寒いのに御苦勞さんでしたね。だが、お君さんは？」「さあ、お君でござりまするが、申し譯のないことには、今日丁度、陸軍の宴會がござりまして、實は今朝ほどからお座敷へ詰めて居りまするので、お伺ひ出來ましても、おそくなるだらうと云ふので、ホヽ、妾がお詫びがてら、それまでのつなぎに參りましたやうな次第でございますから、どうか、惡しからずお待ちを願ひたいのでございますよ。ホヽ。て、こちら樣のお方もやはり故郷の何でござりまするか？」「いや！仙臺の平口です。どうかよろしく。」と萬之助がヨロ〳〵立ち上つて「さて此の度は、我々兩人、ツタのスベリヤ新報社へ、主筆ならびに編輯長として赴任の途中、はからずも此の男の舊知が、あなたの姪御さんとは知らないバイカル女史だときいて、紹介を望んだわけです」と、どこかの全權大使が王樣に申し上げるやうな切り口上で、得意さうに宣言した。お婆さんがびつくりして敬意を拂ふかも知れないと思つたんだらう。大袈裟な男だと思つてお婆さんの樣子を覗ふと、目つきが少々怪しくなつて來た。「へエイ」と言つたつきりだ。毒々しい萬之助も拍子ぬけの體だから、俺はすぐ坂本龍馬のハンケチから話を切り出して「その顏がお君さんそつくりで、聞いて見るとさうらしいのです。やつぱりお君さんでしたかね。同窓の久留米五十五郎とお君さんとが一緒になつたと聞いてたのに、どうしてハルビンにゐるんだか不思議でたまらないから、ついで久留米のことをも聞かうと思つて、大變失禮ですが、此處へ御光來を願つたわけでさ。その時分のお君さんと云へば、あの洗ひ粉屋の店頭にチンと坐り込んで愛想のいゝが評判だつたもんだ。學校の行き戻りに見た、あの可愛いゝ顏がでスナ。今もつて私の目にチラついてゐる位だからネ。」と煽てゝやつた。久留米の五十五郎が釜山の洋食屋で低迷してゐることとなんか噯にも出さなかつた。釜山での話は、小娘の云ひ草ではないが鴨の片身のやうなものだ。すると案の掟、桃千代婆さんの物語は久留米の漫罵だ。「おやまあ、さうでござんしたか？あのころのことを考へますと、ほんとに夢のやうでござんすよ。旦那の仰有る通り、あの店が流行る時分には、お君　幸福せでござんしたが、あの久留米と、あんなこ

とになつてからと云ふものはもう散々でござんす。」と云ふ風に、桃千代婆さんの言葉は、だん／＼とイケぞんざいになるのだ。はじめの「久留米さん」が、いつの間にか「あの久留米」なんて呼び棄てになるのだから、この調子では今に「あの野郎」と來るだらう。謹聴してゐると桃千代婆さんは、いよ／＼達者に辯ずるのだ。「さうでござんすね。そのころも矢張り今の名まへで、妾はあの港の檢番にゐましたよ。妾の兄にあたるお君の父は中風で寢たきりだし、あとは番頭に女中ぐらいなもんだから、自然、お君の監督は妾の役目になつてゐましたのさ。だから、久留米との一件を嗅ぎつけると押つとり刀で掛け合ひに行きましたネ。あの意氣地なしを前に据ゑて置いて、お前さんはお君を嬲りものにするやうな男ではないだらうと思ふから云ひますがネ。そりや、あの子を一生安樂に養つて行けるだけのお金がありや、お前さんが假令泥坊であらうと、やらないとは言ひませんが、問題は金でさア。何はサテ置きお金だよ！お金がないとあつちや、どうも仕方がない。お氣の毒でも、お君のことはブッツリ諦らめて貰ひませうよ。妾の方でも、身分だけの支度は持たせて嫁にやるつもりなんだが、お金はビタ一文もつけてやらないことにしてゐるんですよ。ところで、久留米さんとやら。當節は何をするにもお金サ。これがなくちや何も出來ませんやネ。ですから、折角ではありませうが、お君をあげるわけには行きません。とまつ向から云つてやりましたのさ。生木を割くやうな眞似をしたかアありませんけど、可愛い姪の行末を考へますと、これまでの緣だと諦めて貰つた方がいゝのですからね。」「全くです」と萬之助が合槌を打つと「ネ。さうでござんせう。旦那。ところが、書生ッぽの久留米が、あなた。かう云ふたもんです。それはさうかも知れないが、金と情愛とは別もんだ。自分と君チャンは相愛の仲だつて、ネ。これは又妙なことを仰有る久留米さんだ！つまらないことは言つこなしにしませうヤ。フン！夫婦の情愛が生活の足しになりますかネ。かう云つちや何だが、その情愛が深ければ深いだけに、生活はかゝりますよ。やれ着物。やれ指環。やれお芝居と云ふ具合ですよ。どこの御亭主が、惚れて貰つた女房にさ、オペラバックや腕環の一ツもあてがはずに、ボロを着せて澄し込んでゐますかい？すると世間知らずの久留米が、耳の根つけまで赤くして、恥かしさうに、伯母さん。僕はオペラ・バックや腕環には氣がつきませんでしたが、伯母さんは、たゞそれしきのことで僕たちが思ひ切れると思ひますかつて、男らしくもない、しく／＼ベソを掻いて云ふのですよ。呆れたもんでさア。だから、そんなにお君が欲しけりや、誰かの財産でも相續するか、

富鬮でも貰つて、一と儲すればいゝと云ふと、自分も一度は財產を相續する身分だけど、それが何時になるか解らない。と云ふのは、故鄕で百姓をしてゐる獨り者の伯父が、死んだら財產をスツカリ自分にゆづることにしてゐる。とかうなんです。一體その高は？とたづねると、畑や竹籔を合せて、いくらとか申しましたから、そんな當がありゃ結構ですけど、伯父さんが何時死ぬんだか知れたもんぢやないし、待つてゐるうちにお君の方がお婆さんになつちや、可哀相でござんすからね。へゝゝ。これが正氣の沙汰と申されませうか？旦那。申されないだらう。同じく久留米の方でも左樣考へてゐるに違ひない。「この婆さんは正氣でないナ！」と。「それから、どうしました？」「それから段々聞き合せて見ると、學問と來ちや、カラ馱目な癖に、あの役者づらを餌にして彼方此方の娘さんを釣つて歩るく色魔とでも云ふのでござんしやうな。いゝことは爪の垢もない奴でござんすよ。大變な毛蟲がついたと思つたので、因果を含めてお君を戶口から一寸も出さずゐますと、根がおとなし屋のことですから、妾の云ふ通りになつてゐましたが、番頭や女中の手引きだつたかも知れません。と申しますのは、ある晚のこと、お君が紐にくゝつた梱を倉の窓から下ろしてゐる、路ばたで色の生ツ白い男が受とつてゐる。と云ふ近所の人のしらせに、お座敷から飛んで歸りましたが、もうそのときには、二人ともゐないからびつくりして家の者にたづねますけど、一向存じませんの申し譯がありませんので埒があきませんから、警察へ屆けましたが、到頭解らずじまひで、お君の父は心配するし、家の中はごたつくし、何のかんので一年ばかり立つうちに、店は寂びれました。ところへ、番頭と女中がぐるになつて店の金を持つて逃げる騷ぎで碌なことはありませんの。そんなこんなでお君の父の樣子はぐつと惡くなりました。親の死目にも會はずに、馬の脚みたいなやくざ者とちゝくり合つてゐる不孝者のお君なんか、どうでもいゝやうなものゝ、やつぱりさうは行かないもので、ふつと、その時分、お君が下ノ關にゐると云ふ話を小耳に挾んだので、まあ、探しに探して、やつとこすつとこ居處をつきとめましたから、丁度、久留米が出雲の山奧へ出掛けてゐるのを幸ひ、無理に連れて戾りました。親子と云ふものは不思議なものでござんすネ。今まで行衞知れずのお君の顏を見ると父は亡くなりましたよ。妾もお君の父が手剛く商つて來た洗粉屋の看板を外したかありませんけど、女の手一つで切り盛りも覺束ないから、思ひ切り他人にゆづりますと、すぐ惡い評判が立ち、妾の稼業まで面白く行かなくなり、港にも居づらいので一層何處かへ行つて了ひたいと思つてゐますと、御承知で

はございますまいが、杏花樓の御主人と云ふのが港の檢番の弟さんでして、今度ハルピンで開業するが一緒に來ないかといふ話。そこでお君にも得心させて連れて參つたやうなわけでござりますが、お君にしても根は馬鹿でないから、この年をした伯母の姿が、旅の空まで稼ぎに出なければならなくなつたのも自分のせいだ。久留米のやうな奴と一緒になつて心配をかけて全く申し分けがない。このさき伯母さんのためなら、どんな苦勞も厭はないと、涙を零して後悔したといふもので、ほんとに見違へるやうな了見の娘になつたのを見ると、すつかり安心はいたしましたが、何分、遊ばせて置ける身上でもなし、親方のすゝめもあるので、一と通りのことを教へますと藝者のおひろめをさせましたのは、半年ほどまへになりまッせうか？」と云つた風に滔々と辯ずるのだ。仁木彈正の五十五郎も此のお婆さんにかゝつちや形なしだ。穴へでも入るだらう。「いや。大きによく解りました。昔は昔。今は今。お君さんが偉くなつて何よりお目出たいです。」と嘘をついてやつたら桃千代婆さんは、汗を拭きながら、自分の姪が滿洲の皇后殿下にでもなつた氣色で「有り難い仕合せでござります」とお辭儀をしたかと思ふと忽ち姪の自慢が始まるのだからいゝ氣なもんだ。「お蔭樣で此の節はマア三百からの藝者のなかで、バイカルと云へば、女學校出の流行つ兒と、皆さんの方で御存じなりましてネ。お君ならば、軍用自動車にでも將校がたと一緒に乘せてくれますし、兵舍の中にも自由に入れますよ。妾には解りませんが、お客さまの仰有るには、バイカルはミリタリズム藝者だ。バイカルの三味線は、司令官の號令よりや餘つぽど士氣をコブりますさうで、旦那も御存じの〽アンガラーの—流れも—淸き—イルクツクーつて、この頃大もての鴨綠江ぶしも、實はあの妓が器用にこしらへたんでござりますよ。すると守備隊の司令官さまが大層お氣に召して、バイガルと云ふ藝名をつけて下さりました。ホヽ。」と來るのだ。この邊でやめて貰ひたいから「いや！大出來だ。ところで、話は後へ戻るが、久留米との關係はそれきりなんですか？」と俺が云ふと「勿論のことでござりますとも！」とお婆は澄してゐる。「すると、お君さんが此の土地にゐることも知らないわけですね？」と白ばくれて聞いて見ると「勿論のことでござりますとも」をくり返したから天下は泰平だ。今にノコノコとやつて來たら目を廻すかも知れない。このお婆さんの話が眞個だとすると流石に五十五郎が氣の毒になつた。眞個だか嘘だか、本人のお君さんが來たら早速きいて見やうと思つてゐると、桃千代婆さんは、少々饒舌りすぎたと云ふ形で腕時計を見たが、相手になつてゐたつて一文にもならぬと思つたん

だらう。「妾。お座敷へ參る時間ですからお暇させて頂きます。」と、尻を立てゐと逃げ腰だ。「お君はそこに居りますから、妾と代つてゞゃ、すぐ伺ふやッに申しつたへませう。ほんとに、どんなに喜ぶことでございませうか？」と云ひながら失禮にかゝるのだ。だから、お君さんも忙しからうが框げて一ッ御足勞を願ひたいと俺は取らないと云ふ車代を無理に押つけた。敬々しく一圓札をいたゞいた桃千代婆さんは、竹内栖彌の顔をチラと見て「おやまあ。珍らしいこと！」と仰山な目玉をグリ〳〵動かした「この節から云ふお札はたんとございませんよ。朝鮮のならいくらもありますが、それもハルビンどまりで、一と足北の方へ參りますと、ルウブルでなければ通用いたしませんものですからね。」だから、そいつは厄介なことになつたもんだ。實は兩人とも迂然(うかり)してゐたが、日本の札しか持ち合せない。たんとはないけれども、今のうちに兩替して貰はなくちやなるまいなアと云ふと、桃千代婆さんもそれがよろしいと贊成したから、この邊に兩替屋がありやいゝと心配したところが、桃千代婆さんは中々氣が利いてゐるのだ。兩替屋なら掃くほどあります。傅家甸(フーチャテン)街の支那人なんか、それで生活してゐますが、何分遼くもあるし、胡麻化されるといけないから、少しぐらいでよろしければ、妾がお取り替へいたしませうか？只今、持ち合せはございませんけど、杏花樓へ戻るとございますんださうだ。「おや取り敢へず小使ひを五十圓だけお願ひしますかネ。」と萬之助が辭いて大束なことを云ひながら、有り金をのこらず出した。桃千婆さんは豪勢だ。「これだけでよろしっございんすか？」よくもなからうが、兩人ありつたけの財産だと云ふと、「御冗談ばつかり」とニヤ〳〵笑ふのだから氣がひける。その五十圓を帶の間にねぢ込み、釣鐘マントを引き廻して「しばらくお待ち下さい。使ひに持たせてお屆けいたします。そのうちには、お君も參りませうから」と出て行つた。外に待たせて置いてあつたらしい。また馬車の軋る音がした。ところが、そのうちにバイカル女史は來ないけれども、藝者の志願者みたいな小粋な娘が、桃千代婆さんの使ひに金を持つて來て「先刻は小母さんがお邪魔でございました。どうぞお調べになつて下さい」と云ひながら、懐から大きな紙包を出してくれた。そして帳場から酒をもつて來た小娘と、猛烈な九州辯で、ペラ〳〵饒舌るのだ。白粉の匂ひが、プンと鼻に來る紙包を解くと、くしや〳〵に揉まれて皺だらけになつたオムスク政府の紙幣が、黄色い一ルウブルと、緑色の三ルウブルと、桃色の十ルウブルと、合せて十五六枚バラ〳〵と出て來た。物珍らしさうに眺めてゐる萬之助が「一ルウブルは、日本の金のいくらにあたるんだい？」と云ふから「一

圓と五錢三厘が通り相場と決つたもんだ。しかし、よつぽどの金高なら兎に角、大低の場合、面倒だから、五錢三厘は切り棄てるんだ。」と說明しながら勘定すると、ザット五十圓ありさうだ。ところが、手垢だか糊だかわからないもので、ピタりとくつついたまゝ、二枚重なつてゐる中の桃色を、ペロりと舐めて剝がした俺は、實に驚いた。二枚だと思つだのは三枚で、まん中に挾まつてゐるのが、汚れてこそゐるが、正に水色ぼかしの一千ルウブルだからドキンとした。見つめてゐると、息がつまりさうで、手の先がブル〱顫えるのだ。いくら滿洲がゾロツペイで、だらしがなからうと、いくら桃千代婆さんが太ツ腹でも、眼が惡からろうと、こんな間違ひがあるもんぢやないと思ふから、念のために、俺の眼玉をくつつけて見ると、札の上段には、Государственный. Кредитный. Билеть のおきまり文句があり、Б. Т.027378 の番號の下には、オムスク政府會計吏の署名もある。四つの隅には1000と云ふ凝つた數字がはつきり見えて、裏をかへすと二頭の大鷲が翼をひろげて踊つてゐるのだから、まぎれもない一千ルウブルだ。札の數字に氣がついたと見えて「こりや！君。一千ルウブルぢやないか？」ど萬之助がびつくり顔で水色の札を引つたくつた。「だから僕も不思議に思つて見てたんだ。」「變だね」「どうしたんだらう？」するど萬之助が忽ち眼を光らせた「いや。解つた！こいつド偉い間違ひだぜ！こんなボロ〱だから、あのお婆さん、忙しまぎれに慌てくさつて、知らずに寄越したのだ。いや。それに違ひない。よくあることつた！」「さうかも知れないね。」「確かにさうだよ。こんな大金をくれる道理がなからう？ときに、どうしたもんだ？」と云ひたがら、使ひに來た女の方を、チラと見た。「まさか、猫ババも出來まい。注意してやらうぢやないか、今ごろは氣がついて騷いでゐるかも知れないぜ。取り返しに來られて出すのは見つともないからね。」萬之助には贊成の樣子がないけれども、俺は使ひの女を呼んで「今の兩替に間違ひはないか、桃千代さんに聞いてくれないか？」と言つた。「おや。さうでございますか？」と云つたきり、用を足してくれさうな樣子がない。面倒なのか厭なのかと聞くと、「妾はこれから湯屋へ行つて、髮結ひに廻つて、何とかサンの招待で電氣芝居へ行くのだから杏花樓へ歸るのは夜なかになります。桃千代小母さんは名古屋ホテルにゐます。名古屋ホテルまで半道もあります。では、サヨウナラ」と云つたかと思ふと小娘を見て笑ひながらサッサと逃げ出した。電氣芝居も結構だらうが恐ろしく不親切な女だ。「そいつは困つたね」と萬之助の佛頂面を見ると、あまり性のよくない狡るさうな眼玉が、いやにギロ〱と光つてゐるのだ。「さう慌

てることゝならうと思ふんだ。」と云ひながら、その眼玉で部屋の中を見廻した。それから落ちつき拂つて惡い相談を持ちかけやうと云ふのだ。「おい君。金のことは默つてゐやうぜ。泥坊とは違ふ。向ふが飛び込んで來たのだ。つまり運だ。遙々滿洲まで來て、この位の恩惠がないとあつても困らうぢやないか？僕は此街につくと直ぐ、そんな氣がしたんだ。いゝから僕に任せて置きたまへ。」と一千ルウブルを貰つた氣で財布の中へ入れて了つたから呆れた男だ。しかし俺だつて欲しくないことはない。いつか正直すぎてお巡りさんに笑はれたことがある。俺の「穢多時代」の中にも一寸紹介した通り、東京は月島の自働電話の中で三百圓ばかりの現金を拾つたから、失禮して貰はうと思つたが、怖くなつたので交番へ屆けると、あとでお禮を五圓もらつた。それで染め絣を一反買つた。あんまり物足らぬから交番のお巡りさんに言ふと、默つて持つてゐりやよかつたですなア。二十四時間たつて落し主が出なければ、大島絣でも十反は買へたのに惜しいことをしましたなア、と俺の心狀を察してくれた。もつとも落し主は眼の色をかへて十五分以内に現はれたが兎に角、正直にしてゐると、死ぬまで木綿の染絣りかも知れない。今度拾つたら二十四時間取つて置かうと心掛けたもんだ。だから、萬之助にさう言はれて見ると成る程俺も少々考へた。

友情の神様のお考へはどうだか知らないけれども、貧乏をすると人間は要領よくなるもんだ。まかりまちがつたつて、罪はこの仙臺の野郎にあるのです。全くいゝ了見の奴ですと云へば、悶着はないやうだ。何しろ一千ルウブルと云へば、一千圓にあまる大金だから、俺の前途も洋々としてゐるが、そこまで漕ぎつけるには一生かゝるかも知れない。そこで桃千代婆さんは旨いことを云つたナ！何はサテ置きお金です！これさへあれば、船でも山にのぼりまさ。船は後廻しだ。差し當り、こんな惡い街の中を、案山子の野晒しみたいな恰好で迂路つき廻るのさへ止めることが出來れば澤山だ。と思ふと、水色の札が有り難くなつて來た。萬之助の氣持もよく解る。だから「ねえ君。君がその氣なら反對はしないけれども、このまゝ使つちや、足がつくから、お婆さんにきいた傅家甸街の兩替屋に行つてこまかくして貰つたらどうだらう？」と俺は同意してやつた。すると萬之助がそわつき出して「さう決つたら早速出かけやう」と立ち上つた。「愚圖々々してゐると婆さんがやつて來る！兎に角、泥坊したんぢやないから心配することはないさ。」と心配しながら、"ブスタン亭"の勘定をしに出かけたが、目を圓くして戻つて來ると「恐ろしく高い！二十七ルウブルは法外にボツたもんだ！」と帳場に響きわたるやうな聲で怒鳴つた。「だから、こんな家は

駄目だと云つたんだよ。だが、驚いたね。二十七ルウブルとは！」と俺も面喰つた。しかしお君さんと會ふのが本來の目的なんだから、折角一と目會つてからにしやうと云ふと、冗談ぢやない！この際ゆつくりしてゐられるものか！お君さんは此の次でもいゝぢやないか？我々兩人はチタへ行くんだから、機會はいくらもあらア！と云ふのだ。察するにバイカル女史よりも水色の札が問題の中心になつたのだ。もつともな事だと感心して萬之助のあとから「プリスタン亭」を飛び出した。飛び出すや否や萬之助と俺とは、雪の往來を小さい物哀れな小園の方へ一散に驅け出したもんだ。だから「有り難うござります。またいらつしやい」と云つたやうな小娘の聲なんか、大袈裟に言ふなら、一里ほどさきで聞いた筈だ。その位熱心に走つた。はじめ、公園の入口で擦れ違つた商人風の日本人をつかまへて傅家甸街の方角をたづねた。それから一丁ごとに道をきいて、傅家甸街にしちや、少し汚ない支那人町の關門に辿りついたときは、一合一圓見當の正宗の醉ひは醒めてお了ひになり、手と足は他人の借りものみたいに感覺を失つてゐるのだ。一千ルウブルの兩替なんか二度とやるもんぢやない。おかげで上の唇と下の唇とがカチ〳〵になつたまゝ凍りつかうと云ふのだ。關門に立つて手近かなところに兩替屋はないかと思つて見た。餘計なことを云ふやうだが、この關門がふるつてゐるのだ。第一てんぺんに唐園みたいな赤つぽい笠をかぶり、ほゝづきのお化けみたいな大提灯を、一つづゝ首に釣して雪の中にポカンと突つ立つてゐる二本の石塔なんだ。中へ入ると、横濱の南京町を、金槌の頭で戸別に叩きつぶしたといふ體裁だ。窓から人間がハミ出て、路ばたにこぼれてゐるから淺ましい景氣だと思つた、とりつきの家から何軒目かに兩替屋が一ツうづまつてゐた。一千ルウブルの兩替でもしたら、翌日は暇で困るだらうと思はれるしみつたれな硝子戸の嵌つた滿洲づくりだ。「Минато」と洒落な露西亞文字で看板がかけてあるから、飛び込んだ。日本語の旨い主人が出て來て此の大金を見ると馬鹿にしたやうな風で取替へてくれた。見かけはケチでもこの通りだ。萬之助が財布に納めると其處を出た。いよ〳〵本氣で婆さんの金を着服するのだと思ふと、例の正直な怯えがやつて來た。君。大丈夫かい？僕は知らないよ。と俺が云ふと、「變なことを云ふなよ。あの婆アのことだ。この金だつて何處からふんだくつて來たんだか解りやしないよ。萬事僕が引受けるから、氣を大きく持ちまへ」と、いつの間にか腰をきめてゐるのだ。こんな手合ひと三年も交際つてゐたら、一度や二度は新添へくつて監獄へぶち込まれるだらう。ひどい奴だが、からなると俺も行く處まで道連れに

ならうと肚を据えて、この金をどう處分するつもりか萬之助にきいて見ると、まだ考へはつかぬけれども、チノ〳〵行きは止めにして一層この儘内地へ戻つて、然るべき商賣でも始めやうと云ふ話だ。俺も考へてゐたことだ。心當りの商賣でもあるかといふと、萬之助の返事はからだ。「ウン。一寸した計畫はある。僕が月島の傳兵衛さんの家で、君と落ち合ふ少し前、一文なしで淺草公園をブラついてゐると吾妻ばしのビール會社に勤めてゐる國の先輩に、十二階の下でポカリと行き合つたから、いよう！暫く。ところで何かいゝ金儲けの口はありませんかと聞いたんだ。そのとき大將から僕はこんな相談をうけた。アノ、ビール瓶の頭にかぶせる麥藁帽子があるだらう？あれを拵へて來たまへ。自分の手をへて會社に引取らせてやると云ふんだ。麥藁帽子一個金五厘の割合で、一年に一千萬本位は充分に間に合つてゐるけれども、元來あいつは、百姓の手内職なもんだから、極く極く小口で納めに來るから、會社の方でも面倒なんだ。ところでその先輩が云ふには、もしも君が、あれを一と纏めに一年一千萬本だけ請負つてやらうと言ふ考へがあるならば、及ばずながら、自分が責任をもつて便宜を計つてやるが、一つやつて見ちやどうだい？と云ふわけだ。實に嬉しかつたね。聞くところによると、麥藁帽子一本の賣價は二厘で、工賃が五毛だから半値さ。引きうけてやれば僕の懐中には一萬二千五百圓づゝの純益金が、毎年入つて來る勘定だ。一朝にして藁帽子成金とは豁いたらう？え？人の運はどこにあるか解らないもんだネ。で早速やりますと云ふと、大將もよろこんだもんだ。僕の任務は、百姓を歴訪して出來上る品物は、自分が一と纏めにすることになつたから、ぢかに會社へ送らずに置くやうに命ずればいゝのだ。麥藁帽子聯盟だネ。あとは先輩の智慧で片づけると決めて、僕は毎日々々飯も食はずに田舍の川市を駈けづり廻つた。金がないから足が資本だ。そして五六日目に深川の砂村火葬場裏で、へと〳〵になつてぶつ倒れた。寒さと空腹で立ちぐらみしちやつたんだアネ。通りかゝつた「やらずの傳兵衛」が僕を助けてくれなかつたら、あの川市の中で僕は消滅したかも知れなかつたんだ。しかし、あの商賣は君、迚も儲かるぜ。どうだらう。東京へ戻つてやらうぢやないか？」だから「それもやらう」と俺が云ふと、「他に然るべき思ひつきがあつたら、遠慮なく申し出たまへ。金は我々兩人のものだから。仕事は共同だ。」萬之助は一千ルウブルを我々兩人の所有ときめてゐるのだ。詳しい相談は停車場がいゝ。しかし、人に顏を見られるのは、安全でないから夜ふけまで場末に隱れてゐた。そして暗くなるのを待つて停車場へ向つた。その建物の見える四ツ角だ。

眞つ直ぐに通りぬけやうとすると、路次の暗やみから、三つの黑い影が、俺たちの前にパッと躍り出た。見ると三人の支那兵だ。支那兵が鐵砲をもつて俺たちの行手を遮つたのだ。一人は棚ざらしの天狗の口みたいな鼻、一人は破れ靴の先みたいな鼻の男、一人は土鍋の尻みたいな額の男だ。貴まの連中だかどうだか知らないけれども、今見ると實に凄い。この三人の兵士が代る代る、俺たちに向つて、早口で頻りに何か言ふんだが、ちつとも解らない。しかし、その得心のない様子から察するに、俺たちを捕へて、どうしやうと言ふのではないらしい。ことによると、西伯利戰爭の避難民や火事場泥坊が、盛んに流れ込む時節だから、夜警に立つてゐるのかも知れない。俺たちはその非常線に引つかゝつたのだらう。夜ふけにフラ〱歩いてゐるから、今ごろ何をしてゐるのか？と誰何するんだな？いやに騷々しく脅かしやがる。出しぬけに飛び出したときは、度膽をぬかれて立ちすくんで了つた位だ。一千ルウブルで充分怯えてゐる矢先だから、全くぎよつとしたもんだが、夜警だとすれば、安心だと思つて萬之助を見ると、外套のポッケットの中で、しつかり財布を握りながら、蒼くなつてゐたが、たちまちペコ〱とお辭を始めて「えゝ。我々兩人はツタの新聞社員です、怪しい者ではありません」と申し開きをするのだ。生憎兵士の方でも

萬之助の云ふことが解せないと見えて、同じ文句をくりかへすばかりだから、君も何か一言云ひたまへ。曲者と見られちや絶滅だよと情ない聲で救ひを求めるから、とり敢へず「イ・シャン・シャオ・チエン・ラー」とやつてのけたら、兵卒どもが目を圓くして驚いたところを見ると、隅には置けないと思つたんだらう。實は此の土地へ來る汽車の中で、支那語みたいな言葉を五ツ六ツ覺え　のだ、こんな時に使へと思つて皆つかはうと云ふ魂膽だ。支那人同志が出會ふと「イ・シャン云々」と云ふのだ。「やア！」と云ふ挨拶に違ひない。だから兵卒どもに喰はせたが、あとで坂本龍馬にきいたら、成るほど「やア」に違ひないが「やア。その後はトント御不沙汰してすまぬ。ときに、景氣はどうだい！」と云ふ意味ださうだ。詳しいことには頓着せずに勇ましくやつた。棚ざらしの天狗が「イターナル・ライ」とぬかした。面倒だから「チョワン・ホ・チン・ライ」と答へた。言葉の意味は兩方ともわからぬ。坂本龍馬が說明したもんだ。「イターナル・ライ」は「何處から來たか？」。俺の返事は「窓から逃げて來た」となるさうだ。すると破れ靴の鼻が感服して糺問した。「ニン・ツエシー・ラーマ」俺の快答は「ウオ・エ・ナモ・シャン」だが矢張り通じたらしい。これも後で聞きたゞすと、問は「そんならお前は泥坊か？」答は「どうもさうらしい」

となるんださうだ。一一平仄が合つてゐるのは上々の首尾だが、よく氣狂ひだと思はなかつたもんだ。もつと言ひ合つたが、あとは滅茶々々で記錄にならぬ。この經驗は俺に大いに得るところがあつた。なんでもこんな奴につかまつたら第一落ちつくのだ。それから出放題なことを云ふのだ。慌てゝ逃げると後ろからやられる。これはずつとあとのだが、東京の大地震に提灯人があばれると云ふので戒嚴令が敷かれて提灯人は斬棄御免の最中だつた。俺の村に食ひ物がなくなつたから、一里たらずの池袋までビスケツトとサイダーを買ひに行つた。歸りに線路をつたつて來ると、八幡神社の踏切に兵卒が戒嚴の歩哨に立つてゐるのだ。頭のてつぺんから足の爪先まで西洋人で通用する俺のことだから、默つて通すだらうと思つて關所へさしかゝると意外にも「止れツ」と來たものだ。だからこの邊の兵隊さんは西洋人と提灯人の見さかいがつかないのだらうと思つて神妙に立ち止ると、俺の顔をぢろりと見ながら此の二人の二等卒が「やつと云ふ掛け聲もろともに銃劍をそろへて突き出した。その切つ先が、俺の下腹に五分ぐらいのところでギラ／＼光るのだから、流石に驚いた。少しでも怪しいやつは、片つ端から始末をつけて了へと云ふのが、戒嚴令の鼻息だ。火事場から逃げて來る途中か、提灯人と間違へられて頻りに引導を渡されてゐる此の郊外だ。ついでに此奴も片づけてやらうか、と云ふ調子で突殺されたつて、一言の文句も云へない物騒な去月今日だから、内心大いにビク／＼してゐると、俺よりも餘つぽど提灯人に近い眼玉のぐり／＼した二等卒の一人が、俺をつかまへて檢問に取りかゝつた。「お前は何處から來たか？」と云ふから正直に答へると、今度は俺の行先から名まへから商賣まで五月蠅く聞くのだ。その應答があまりハツキリしてゐるものだから、眼玉の二等卒は忌々しかつたと見えて俺の手にブラ下つてゐる靑い瓶に因緣をつけた。「そりや何だ？」「サイダーです。」二等卒は、いやに疑り深い目つきで、瓶の底を覗きながら「嘘だらう？」と變に絡まつて來た。そのころ、提灯人が郊外の井戸に石油をまいて歩くと云ふ噂があつたので、なるほどさうかと思つて「嘘ではありません」と云ふと、相棒の二等卒が分別顔で「おや、飲んで見ろ！」と俺に命じた。子どもに持つて歸るのだから厭だと云ふたら、それ見ろ。石油だらう？と云ふ調子で下腹を突くかも知れない權幕だから、止むを得ずに踏切のまん中に立ち飲みをやつて見せると、どうやら得心が行つたものと見えて、「よし。早く行け」と怒鳴つた。これで命だけは取り止めた。だから行かうとすると「おい。ちよつと待て！」と後ろから呼び止めた。「お前はこの邊で人相の惡いやつに會やしなかつ

たか？」人をつかまへて散々脅かして置きながら、二等の愚卒め！物をきくならきくやうな作法で來るがいゝ。その人相の惡い奴とはお前たちが探してゐる提灯人のことなんだらう。そんな者に會ふものかと思つたが、あんまり業腹だから「さうです！たしかに其人相の强い奴と會ひました！」と云ふと、二人とも驚いて、「ど、ど、どこで會つたか？」と眼の色をかへて來るのだ。だから俺は卒直に「今こゝで會つたばかりのあなたがたがさうです。さようなら」と云つてやつた。そして呆れてゐる愚卒に構はずサッサと歸つたことがある。同じ愚卒でも日本人なら言葉がわかるけれども、支那人と來ては兩方で通じないのだから始末に困つた。

お了ひになると支那兵は此二人を何と見たか、外套から上衣のかくしにまで手を突込んで、身體檢査をやるのだ。萬之助の財布が出た。こいつは失敗つたと思つたが、何とも言はないから、いゝ鹽梅だと安心すると、財布の中にあつた坂本龍馬の名刺に目をつけて文句を列べるのだ「これはお前のか？」と云ふのだらうと思つてゐると、天狗が先に立つて歩るき出した。こいつが財布を握つてゐるのだ。持ち逃げされてはたまらない。俺と萬之助は狼狽した、財布を返してくれと交る〲嘆願するんだが、まるで要領を得ないから、一體どうするんだらう、とテク〲ついて行くと、横手の路次へ入つて、突き當るペンキ塗りの家の戸口で止つた。天狗が扉をドン〲叩くと、家の中から「誰だ？」と怒鳴る聲がした。天狗が何か言つた。すると扉の蔭から、ぬつと顔が出た。出たかと思ふと「イヨウ！」と云ふのだ。これが坂本龍馬だから意外だつた。何處をどう歩るき廻つたか覺えないけれども、これが藝術者の住居だとすれば、ハルビンの街も、案外狹いもんだ。今朝、停車場の前の通りで別れた、あの坂の上に來てゐるのだから、知らない土地では、迂濶に悪いことも出來ないもんだと思つて、恐ろしくもあり、嬉しくもあつた。坂本龍馬が「どうしたんですか？え？今ごろ何處を迂路ついてるんですか？え？バイカル女史とお會ひになりましたか？さあ。ズッとお入んなさるがヨカ。外は寒いでせっがナ」と云ひながら、呆れた樣子で、ポカンと立つてゐる支那兵をチラと見た。そして鹿爪らしい顔つきで突劍に物を云つた。すると支那兵は、勿體さうに萬之助の財布と名刺を、龍馬の手に渡しながら、顔中泡だらけになつてペラ〲まくし立てるのだ。話の中ばで龍馬がゲラ〲笑ひ出したのはよかつたが、萬之助の財布の中から一ルウブルの札を二三枚ひき出して、支那兵にやつたのには驚いた。支那兵は妙た敬禮をのこして路次の外へ立ち去つた。俺たちは家の中へ入つた。支那兵の

云ひ草は、俺たちが龍馬の金を持つて逃げるんぢやないかと思つて、いゝ鹽梅に龍馬の家が側だから一應照會に來たんださうだ。大きにお世話だ。つまらないことをするな。財布の金は桃千代婆さんのもんだ。坂本龍馬がバイカル女史の話ばかり持ち出すからヒヤ〳〵した「ゆつくり話が出來ましたか？」と云ふから、出來ましたよへゝゝと胡麻化して置いた。嘘がバレて酷い奴だと思はれたつて構ふものか、すぐ此街とはお別れだと云ふ氣だ。戸外ではそんなでもないが、家にゐると、婆さんの手が廻つて來るやうな氣がして、落ちつかないから、上り口に腰かけてお茶一杯のむと、早速ながら龍馬に別れた「それでは御大事になさい。道を歩るくにも氣をつけないと、この頃は露助の奴が、後から來て、針がねで首を絞めますタイ。脊中にかついで逃げるうちに、息が絶えますタイ。この邊にも毎晩五人や十人の被害者が、往來の雪ン中に死んでころがつてゐますケン。充分、足もとにも目を配つてお出なさい。」と龍馬が云ふたから、外套の襟に首をすつこめて、足もとを見ながら歩るいて行く行く「兎に角、内地に引つ返すことにしやう。」と俺が云ふと「さう決つたらビール瓶の麥藁帽子に取りかゝらう」と萬之助が言つた。「チタの方はどうするか？」「さあ。問題はそこだ、しかし、僕等でなくちやいけないと云ふのでないから、

内地へ戻つて代りを探せばよからう。」「君に金を出してくれた陸軍省の人が怒りやしないか？」「そんなことはないよ。いやになつたら、何時でも歸つて來いと言つたんだもの。チタの新報社には長春あたりで、詳しい手紙を書くさ。」と勝手にきまつた。そして破れかぶれの支那人の馬車が一杯たかつて露營してゐる停車場へ來ると、俺と萬之助は、群衆の中に割り込んだ。乞食みたいな支那人や、ボロ服の露西亞人が、だゝつぴろい待合室の煖爐のまわりにどよめきながら、汽車の到着を待つてゐる。世界中で一番汚ない場所は何處だと尋ねるがいゝ。いつでも此處だと答へてやる。此處で長春行の時刻をきくと直ぐ出るのだ。俺と萬之助とは、列をつくつてゐる客の尻にくつついた。ところが容易に順番が廻つて來ないのだ。じれつたくなつて脇を見ると、今朝、坂本龍馬の信玄袋を持つてあげませうかと云つた露西亞人の警部がゐたから、手招きをするとニコ〳〵やつて來た。俺は奮發して一ルウブルつかませた。警部は萬事のみ込んだものだ。尻に手を廻してルウブルを握つたかと思ふと、こつちへ來いと云ひながら、俺と萬之助を列の鼻へ引つ張り出して、そこに立つてゐる先客をドンと突きのけた。その跡へ俺たちを入れるのだ。馴れてゐると見えて誰も苦情を　はないのだ。便利な警部だが、亂暴をしやうとは思はないので、氣

の番ですねと俺は突きのけられた客に謝りながら、窓口から東京行の三等を二枚くれと云つた。係りの役人が壁に貼りつけてある紙の上の數字を見て「東京行三等は、ロマノフ札ならば、三百七十四ルウブルです。オムスク札ならば七千四百四十ルウブルです。」と云ふのだ。實は二人で百二十ルウブルそこ〳〵だらうと思つてゐたのだ。萬之助もそのつもりで財布から出してゐた。念のために聞き直したが、それに間違ひはありません、日本の金六十圓の二つです。一圓の相場が昨日の午後七時までオムスク札の二十一ルウブルです。午後九時に六十二ルウブルとなりました。夜があけたら百ルウブルまで落ちるかも知れない、と親切に教へてくれた。俺の見つもりとは丸で違つてゐるから、「一ルウブルは日本の金一圓五錢三厘ではないのですか？」とびつくりして聞いた。金モールの肩章をつけた係りの役人は、チヨツキのポケツトに兩手を突つ張りながら反り身になつて言つた。「さう云ふ時代もありました。西伯利戰爭によつて、ルウブル相場に變動が來たのは、三週間まへからです」俺はこの驚くべき事件を萬之助に取り次ぎながら、汗びつしよりで言ふた。「どうも君には相すまない。僕の早合點から、こんなことになつたのだが、一圓五錢三厘の知識が三週間だけ古くなつてゐるとは知らなかつたよ。」「さうだ。念のためにアノ場で聞きやよかつたんだ。ぢや、東京へは歸れないのか？」「朝鮮までも行けないよ。」讀者諸君よ。尊敬すべき理論によると、一生のうちに二度と再び見ることの出來ない悲劇がある。さうだ。哀れむべき實驗によると、一生のうちに二度と再び見ることの出來ないのが此の刹那に於ける萬之助の悲劇的であつたのだ。俺もやつぱりさう見えたらうが、失望と落膽と疲勞に打ちのめされて、今や將に泣き出さうか笑ひこけやうかと云ふ面妖な亂ッ面のクライマックスは、いかなる超弩級の形容を持つて來たつて追つつくものではなかつた。萬之助は混亂と悲哀のドン底から云つた。「仕方がないさ！これも運だ！露助の泥棒に針がねで首を絞められたと思つて諦めやうぢやないか。此の街についたときから、僕はそんな氣がしたよ。しかし、このことは君と僕とが死ぬまで、誰にも言はないことにしてくれたまへ。紳士としては實に見苦しい恥だからね！」俺はこの時ふき出さうかと思つたが、相手がこの通り眞劍だから、一緒になつて言つた。「勿論だとも！どんなに貧乏したつて、日本の文士にならうとは思はぬけど、まちがつてなつたところで、このことだけは斷じて書かないよ。安心したまへ。そして早く忘れやうぢやないか」かうしてこの、破れかぶれのセシル・ローズ二人は、善後策を講ずるために、ごたついてゐる待合所の片隅へ悄然と

して避難した。時は流るゝ。ベンチの上。夜は明ける。雲の空。と云へば白梨天のまがひものになるが、その穴を捉まへて何を見たかと云ふと、法外に馬鹿を見た水色紙幣の惜しい夢だ。浮び來るのは、紳士萬之助の御宣託だ。桃千代婆さんがくれた金は、一千と五十のルウブルだから、婆さんに間違ひはない。水色の札はアノ紙包の中にあるべき筈のものだと云ふことを知らずに、有頂天となつた俺はかう云つたもんだ。「なァおい。鼠小僧の受け賣りをするが、藝者風情の金をふんだくるのは、あんまり名譽ぢやないよ。」ところが萬之助の氣焔と來ては亂暴なもんだ。「ふん。慎んできゝたまへ。クリスチヤンの僕は藝者が大嫌ひだよ。いゝかね、その藝者に耽溺する奴は猶のことだ。奴らは多分、幸福を求むるために金をまき散らすんだらう。幸福が快樂である以上はだ、そりや個人的の欲望滿足に過ぎないよ。何等超人格的の價値はないさ。苦い酒、野鄙な唄、ダンスや博奕に於ける快樂と寢床の中の四部合奏や、佳人との美術會話に於ける快樂とはだ。迚も比較にならぬ二様の、人間存在の特質があるんだ。だが、氣をつけたまへ。以上の欲望滿足は、依然として超人格的に價値のあるものとは別物だからね。名譽や權力や財産や美に對する欲求の滿足には絕對的價値がない。輕蔑してやりたまへ。」だから、そんな不心得な奴の金は引つたくつてもいゝと云ふ結論になるんだらう。ビール罎の麥藁帽子製造はどうだい?と伺ふと「そんなことが、本に書いてあるもんか」と云ふ挨拶だから「今の奇説は、君の發見ぢやないんだね?」「さうさ。ユーゴー・ミュンスタルベルグ先生の、有名な「永い價値」にあつたんだ。覺えて置きたまへ。」と例の「覺えて置きたまへ」で頭を掻いた。これがお君さんの顔を見なければ納まらぬと駄々をこねた萬之助だから、飽くまで人を舐めてゐる。寢床の中の四部合奏やビール罎の麥藁帽子なんざ。どうでもいゝ。ルウブルの相場が絕對でなかつたのが當面の問題だ。價値の下落は昨宵の三倍だ。お天道樣が出たら、その二倍になると先刻の役人が警告した。兩替しなければならぬから替へたんだが、まごまごしてゐると、マッチのペーパより安くなりさうだ。ずつとあとで、命からがら東京へ逃げて歸つたときに、銀座通りをブラつくと、路ばたに新聞紙をひろげて此のオムスク札が賣りものに出てゐた。大小七色取まぜて一千に近いルウブルが金十錢なんだ。なるほど、こんなものかと思つたが、先刻の役人に申し渡しをくつた時は全く信ずることさへ出來なかつた。だから、最初の五十圓が十五六圓になり了つた今と云ふ今、十五六圓がロハにならないうちに、兎も角もチタへ行かうと俺が云つた。「さうだ。チタへ行かう!」と萬之

助も言つた。さうして俺達は心の中で、念佛をとなへながら、「流れも清き─アンガラの─と桃千代婆さんに聞いたアンガラ河の姿を指して、ガラン／＼と汽罐車の釣り鐘の響をのこして飛び行く列車の北上線歩廊へ出た。かくて二人は、チタの新報社へ向つたのだ。だから、お君さんのバイカル女史が、「プリスタン亭」へ行き損をして、どんなに憤つたか、がつかりしたのを知りもしなければ又、ビール瓶の麥藁帽子製造にだつて、また手がまわりかねてゐる。と云へば、まことに呆つ氣ないかも知れない此の話にも、尻のくゝり目がつかうといふもんだ。（完）

あとがき

大地震から一と月にもなるが、まだ／＼天地は混沌としてごたついてゐる今日この際だ。僕ひとりが落ちつき拂つて呑氣な話をするのも氣がとがめる。僕だつて、一と通りは、地震を食つたのだ。實はその前の日、芝で借りた提灯と下駄を返さうと思つて、僕の村から町へ出かけたところを、グラ／＼とやられたのだ、提灯と下駄は他人のものだから棄てゝ逃げた。三里ばかり跣足で走ると村になる。見かけ倒しの僕の住居も、一列に手酷しくやられてはゐたが、落城には及ばなかつたと見えて、押し潰されては始末に困ると思つた家族と鷄と、お互にしかと抱き合ひながら、芋畑のまん中へ避難してゐた。それから一と月だ、僕の親愛なる讀者諸君が御承知の通り、萬障繰り合せて貧乏してゐる僕にとつて、金は始めからないのだ。今さらないのに不思議はないけれども、少しぐらいはあつた筈の兵糧までなくなり、半年がゝりで書き上げた小説の原稿九百枚と、小さい研究物の草稿とは、どさくさまぎれに行衛不明となつた。かくて僕のために只一ツあるものは、日本政府のくれる消化不良の玄米と、一と口で恐れ入る鯨の罐詰のまへに兜をぬがざるを得ざるの止むなきに到つた空腹にすぎないのだ。贅澤だと云ふなら一ツ如何です？とは云ふものゝ、とは云ふものゝだ。よござんすか？あの痛快な露西亜革命のみぎり、國外へ逃げそこなつた僕の同業者のレオニド・アンドレエフやアルツイバシエフなどが、一切れのパンをつくるために變身をやつして麥粉を探し廻つた實際から見れば、樂も大樂だ。そのアンドレエフみたいに兵隊から附狙はれる心配もない。もつとも、あの奇怪なるアナアキスト夫婦が殺されやうとするとき、「この村に、かう云ふ社會主義者が居る筈だが、家はどこか？」と尋ねて村の駐在所へやつて來た騎兵大尉どもがあることはあつた。騎兵大尉どもは、この一篇を讀んで大いに悟れ！兎角その素敵にいゝ頭で判斷して、本人の僕には一言のことわりもなく社會主義者にした

のだらう。Kと云ふ駐在所の主人が「大泉さんは、この際そんな活躍するやうな文學者ではありません」と云つたので引揚げたさうだ。通りかゝつた「毎夕」のＯと云ふ記者が心配して報せてくれた。そこへ駐在所がやつて來て、例の騎兵だか憲兵だか此の四五日、お宅のまわりを角袖でブラついてゐるやうですが、と言つた。角袖だらうが、振袖だらうが、お宅のまわりをブラつく分には差支へない話だから、せい／＼ブラつくがいゝでせう。この際もあの際も、おしなべて此の娑婆で活躍しやうとは思ひませんと言ひに行かうかと思つた。わざ／＼下町くんだりまで燒け死に出かける元氣もないが、かうして生きてゐるのも、あんまり光榮ではなからうと云ふのが、大體、僕の持つて生れた傾向なんだ。生きてゐると食べる。食べると生きてゐる。こいつ何とかならんものかしらと云ひながら今日まで盛んに生きてゐる僕の傾向なんだ。これは僕ひとりだと思つたら、もつと急性なのに鉢合せして、オヤ／＼此處にもゐるぞと思つたことがある。と云ふのは、今日といふ今日。一圓でもよろしい、現金がないのだ。勿論小切手も爲替もないのだ。日頃から平民文學者で澄し込んでゐる僕にはまた僕で、いくぶん摺り減つてはゐるが、昔とつた杵があるのだ。それも長くはつゞくまいけど、あの下町の燒跡を引つ掻き廻す仕事に行かうかと思ひながら、一應、社會局の様子を見に出かけた前の滿員電車の中で、僕の隣りに一人の商人が腰かけてゐる。前には一人の勞働者が、釣革にブラさがつてゐる。電車がゆれて勞働者が商人の足を踏んだ。話は平凡だが注意すべき點は、商人の足袋が白の穿き下ろしなもんだから、通り一遍の挨拶位では納まりかねて遂に猛烈な喧嘩が始まつたと思つて下さい。「足袋なんざア、どうでもいゝ？手めえみてえな害蟲は、生かして置いちやタメにならねえ！愚圖々々云はねえで、サア、外へ出ろやい。間ぬけめ！白足袋なんぞ穿きやがつて、騒々しい禿頭の毛虫野郎！」と、お了ひには勞働者の方で怒り出した。だから、禿虫ツてな手めえのことだらう！俺を知らねえかよ！本所の工廠で、親子兄弟から親類朋輩まで燒いちまつた左官の勝を知らねえかよ！俺アな？もうこの世に樂みもなけりや仕事もねえ。と云つて一文もねえ。かうして電車に乘るつたつて、煙草一ッ買ふつたつて、燒け跡の灰を引つかき廻して俺の端足金を見つけなくちやなんねえ始末だ。見ろ！」と勞働者は腹掛けの丼から、燒け錆びた銅貨を掴み出して、驚いてゐる商人の鼻先につきつけながら怒鳴るのだ。「今になつて見りや、俺もあのとき一緒に焦げちまやアよかつたと悔んでゐるんだ！俺の關係は一人もゐねえ。皆知らねえ顏ばかりだ。生きてゐたつて仕様のねえ體になつち

まつたんだ！いつ死なうと思ひ殘しや、ねえんだが、一人で死ぬのもつまらねえと連れを待つてゐたんだ！手めえを一緒に連れて行つてやらア！なア。燒け出されのお可哀さうな仲間の誰彼に、高えものを賣りつけちや、闇に乘つて儲けやがる暴利商人でナ。きつと手めえのやうな毒虫野郎だらう！サア。承知出來ねえ。叩つ殺してやるから、外へ出ろ。禿虫め！」と云つたすでに厭世や悲觀を通り越して、お祭氣分だ。

同情していゝんだか、笑却していゝんだか、立ち場に困るだらう。少し大ざつぱな話だが、僕の知つてゐる一人の青年畫家が、燒け出されて東京を飛び出すや否や、筑波山の近所まで逃げ落ちた。もう大丈夫だらうと、はじめて後ろを振り返ると、東京全市は水底に沈み去り、水天髣髴の間に、十二階の頂きが二寸ばかり水面に現はれてゐたので、やれ／＼と思つたさうだ。これなんか力作の方だらう。筑波山の近所から霞ヶ浦でも眺めたのではないかと思つた。ところが間もなく信州の新聞が屆いたので見ると、やつぱり此種類の話があるから妙だ。何とか山に登つて東の方を見渡すと、東京は海嘯に襲はれて白い波が渦を卷いてゐるとあつた。顚倒性も烈しく、ピントも、あまり狂ひ過ぎる。だから、この際、思想も主義も文藝の主潮も美術の傾向も大いに變るだらうと云ふ說に對して、大きに尤もな顏つきで、それを肯定してゐる今日の所謂職業思想家や職業作家の群には反對も反對だ。地震ぐらいでグラつくやうな思想や主義なら、始めつからない方がよかろし、火事場から拾ひ上げた顚倒性のバラック思想や、出來心の感激主義なんか、長持ちのするものでもなければ、左程のスタビリチーがあるべき道理はないからだ。打擊を喰つて降參するものもあれば、これは神樣が地上にお與へなすつた試練だと解釋して奮ひ立つものもあるだらう。だからそのどつちかに戶籍を置かなければならぬと云ふ理屈なんか僕にはないのだ。只今のところ、文化の中心地は擧げてセンチメンタル・ペシミズムと、思ひ出したやうなインコンプリヘンシブル・ヒロイズムに、多少は國家觀念に災されたミリタリズム崇拜とが入り亂れて一種不可思議な大災氣流が出來上つてゐる。この中に昔から超然としゐるつもりのデスペレイト・オプチミストを以て自ら任じ、風來山人を以て自ら氣取つてゐる僕は、もとより銀座街道に草が生えて狸の巢窟にならうと、昔のやうに繁昌しやうと一向どちらでもいゝ流儀なんだから、立ち場も頭も變らない。他人の文句ばかり引用すると僕の影が薄くなるから厭だが、「苦しきものを多く味へる者は、甘きものを欲す。古き道德に包まれ、また我等が諸々の點に於ての無罪てふ自負と確信の雲霧をすかして、互を見る我等は、この

理を悟り得ざるなり」「パレエス」」と云つた調子で、「大泉萬歳！」も「黒石萬歳！」も背く氣になる。「息の詰るやうな力作」と廣告に吹聽されるやうな力作は、どうも僕には向かない。この際は成るべく息はつまりたくない。僕の主義主張は、昔も今も變らない。單簡に云へば、"Nihil nihil, vere, in vita, nihil est!" だ。"Vitae satietas me cepit!" だ。哲學的に云へば、そこには一物をも存在せず、いや、存在するとしても、吾々は是を認識することが出來ない、いや、認識することは出來るかも知れないが、吾々は是を第三の者に傳へることの出來ないと云ふやうな宇宙の非實備論や、ツェノンなどの懷疑說を直ちに讃美するまでもなく、僕の經驗は卽ち、天地不仁にして萬物を以て芻狗となす位なことは直接僕に敎へてくれる。僕は一個の厭人主義者だ。僕は一個の煮え切らない「ペチョリン」だ。世の中は最初から決して「樂園」でなかつたことを創世紀の作者に訂正して貰はうと思つてゐる。この精神だから、讀者は迷惑かも知れないが、實を云ふと、これは一體、戯作だが本作だか僕にも分らぬやうな、この物語が生れるのであつて、而もこの精神が變らぬ限り、綿々として續くであらう。取り敢へず、これを我が「自叙傳」第九回とする。物語は第十回がその頂點に達する豫定であるども序に豫告して置きたい。（大正十二の十）



文人趣味提唱

笹川臨風

一

『妻は舊債を償ひ了り、兒は新衣を着し成る、貧家希かに酒掃し、燈火もまた明かなるを覺ゆ、合家相喚びて座し、杯を擧めて聊か相傾く、一病死せず舊顔面、又梅花と重ねて相見る』

文政六年も暮れて、今宵は除夜である。底冷えのする寒い京都のことゝて、比叡颪は吹き、鴨川のせゝらぎの音も絶え入るやうであるが、流石に除夜のことゝて大路小路には人足も繁く、祇園の社では大般若經の轉讀もあり、削掛けの神事もありて、此あたりの武どもは手に〳〵削掛けを持つて、夜半過ぐるまで人の門を叩き歩く。一代の才人頼山陽は前年三本木に山紫水明處と命名した草堂を構へたる新居の水西莊に悠々自適して、『新居歳除に逢ふ、土木粗々事を竣る』と詠じたが、此歳の元旦にも『新居元日に逢ふ、戸を推せば晴曦明かなり』と風して得意であつた。しかし此歳の冬には病に打臥して牀中に除夜を送つたのである。山陽此時には四十四歳。男の大厄を踰えることニ歳であつた。『一病死せず舊顔面、又梅花と重ねて相見る』とは、實際そんな心境であつたのである。

けれど、病中に怱忙として歳を送つた文政六年は山陽に取りて極めて趣の深い一年であつた。愛宕のあなたに日が落ちて東山三十六峯に暮色が逼り、煙光凝りて、暮山紫となる切は、山陽が伊丹の名醞を酒杯に汲んで陶然たる時であつた。ほのぼのと明け往く曉に水明かなる時は、有明の燈かき立てゝ靜に書を讀んで會心の笑を漏らす共折であつた。『東山何ぞ靄々たる、夕陽紫色を發す、鴨水微瀾を收め、縈回白玉を展ぶ、鳧鷺日の暮るゝを知り、相喚んで汝が宿に歸る、吾亦吾が書を收め、妻を戒めて尊酪を開く、河鮮自ら蒸るべく、竹筝自ら剛るべし、吾が東軒の下に就いて、一杯聊か相屬せん。』と云へるものは、山西莊に於ける、夕暮の情趣であつた。窮陰盡くる頃には、前

栽の寒梅先づ綻びて、暗香浮動し、春雨靜に屋を繞りて軒の玉水糸よりも細い時に、海棠の姿は殊に艶であつた　雪後には酒に對して「羨ます低歌の人の醉を侑むるを、杯中三十六瑞簪」と負け惜みを云ひ、繪日傘の影三々五々、鴨川堤の柳陰に見えつ隱れつする暮れ行く春の日を獨り欄干に倚りて眺めた夫子は、漫に詩興を動かしたのであつた。山陽は杜少陵を氣取つてゐたが、少陵の浣花草堂には、此風流は缺けてゐたのである。浣花草堂は『郭に背いて堂成り白茅に蔭す、江に緣りて路は熟し青郊に俯す』の閑境で、『幽窓打着す閑吟の士、管せず鄰地阿鵲の場』の水西莊とは同じくない。三本木は木屋と接してゐる。其地には清輝樓もあり、信樂もあつた。祇園の粉白黛綠が日夕出沒して、絃歌の聲も聞ゆれば、喃々たる嬌語も漏れるものがあツた。東山に對し鴨川に臨んで自然美を飽かず眺めてゐた風流外史は、又脂粉の香にも接してゐたのである。『岸に對して看るを呼ぶ紫翠の山』は實境であつたが、『隣を成して接するを嫌ふ笙歌の市』とあるのは、夕陽黄葉村舍主人でなくとも、『嫌の字は喜の字の誤に非ざるを得んや』と云ひたくなる。とにかく水西莊は風流の新居であつた。狹斜に近いなどを彼是れ云ふのはそも／＼野暮の骨頂である。

新居に移つた翌年、即ち此文政六年には、佳友の西より來るものがあつた。即ち舊知の田能村竹山が入洛し、六年目の舊遊を續いだのである。竹田は其の竹田莊師友錄に水西莊と山陽の人となりとを評して『居を三樹坡に卜して言ふ、仰いで叡嶽を望み、俯して鴨水に臨み、此地は京師山水の勝概第一となすと是に於て晨夕對坐し、往を悼み來を感じ、弔古詠史の作、斐然爵出し一時傳誦す。蓋し子成（山陽の字）は氣魄の大、才藻の華、記識の强、文章の贍、其比ある罕れなり』と云つてゐる。彼と山陽との交情は洵に唯ならざるものがあつて、文事の友、會心の友であつた。雲仙山卷の終には『此卷末の後、山陽を除くの外、他人の一語を着くるを容るさゞるなり』と云ひ、亦復一樂帖の後に書しては、『予資性迂濶、綺事を僻愛し、苦辛事に從ふこと、殆んど五十歲、這裏得るところの消息を知るものは唯山陽一人のみ、故に平生稱して畫中の知己第一となす』と推稱してゐる。或は『余の畫成る毎に、輙ち山陽を得て與に評賞せんことを憶ふ』と推許の深きを示し、或は『余の山陽に拳々たるものは、其の言語文字が前人の未だ書き到らざるところに書き到るを以てなり。山陽の予に拳々たるものは其の點染位置前人の未だ寫し到らざる所に寫し到るを以てなり、其の業とするところは、彼此大小類せざるも、然も前人の未だ到らざるところに到りては則ち均し、此際神契い、爾我相知るは、知らさ

るものに對して言ふべからざるなり』と彼此相許すの情の如何にりなるかを叙べて餘りがある。

山陽は曾て、備後の鞆津にて竹田に會ひ、其後西遊して岡城に邂逅し、今玆伊丹に相逢ひに別後の情を叙べたが、やがて竹田は洛に入りて東山の雙林寺前に寓した。竹田詩集に『七夕、清輝樓より醉うて歸る、小石秋岩予を送りて、二條橋に到る』の注に『時に予、雙林寺の前に寓す』とあるから、眞葛ヶ原に旅装を解いてゐたのである。洛中の文人畫家が此九州の名家を歡迎したことは無論のことで、就中山陽が之に傾到したのは言ふまでもない。七夕の清輝樓には『樓を下りて餘興更に猶あり送りて二條に到る無限の情』と、千鳥足の上機嫌も思ひやられる。斯くて竹田は山陽の水西莊にも數日の間淹留して、風流韻事に日を送つた。自畫題語に『余山陽の家に寓すること數日、山陽一日早起し、書室を掃除し、花を插み香を焚き、呉春坡の山水幅を掛け、自ら鴨水を汲みて之を古磁甌に貯へ、古端硯を洗ひ、程氏墨を磨り、佳筆紙を陳ぶ、並に平日の愛藏して妄用せざるところなり、其他、研屏筆架、諸具悉く稱ふ、一々親しく辨じて、敢へて童婢を頤使し、それをして手を觸れしめず、既に畢りて余を招いて曰く、今朝供養結構此くの如し、請ふ余が爲に畫けよと、余即ち白描の蘭竹沒骨の牡丹及草筆の水仙梅花三頁を作る、今頁中に收むるところ是れなり、昔は危大僕、袁清容諸家の雲林、大癡を待つことも亦恐くは此に過ぐる能はず、殊に慚愧を覺ゆ、姑らく錄して辱知の渥きを記す』とあるほどに、山陽は竹田を優待し、竹田は之が爲に其毫を揮つたのであつた。之れで見ると、竹田は蘭竹牡丹の他に梅花水仙の草筆畫を描いてゐる。梅と海棠とを水西莊に植ゑてゐた山陽が梅花を好んだことは云ふまでもないが、水仙に於ても之を愛賞してゐたのは、山陽の著述が多く梅花水仙の花咲く嚴冬初春の頃に脫稿したからである。竹田が『賴山陽嘗て余に語りて曰く連年著述績を成すは、多く梅花水仙の時に在り、通議、樂府六十六闋の類皆是れ、蓋し此時なり、歲時將に除せんとし、風寒雜り至り、人家多事なるに、家居清適、門に過客なし、研北方に此二物を挿み、幽人意を得るは、此際に過ぎず、故に然らしむるなり』と記したのは其實況であつた。山陽は又或時、竹田に蘭花二莖を贈つたので、竹田は之に竹枝を配し、花瓶に挿みて、愛玩措かず、之を寫生して二絕句を題して山陽に寄せた。『喜ぶ他の愛苦を割いて分ち送るを、證し出す交情香、花に似たり、(一に「證し出す廿年の交は蘭に似たり」に作る)』とあるは其一絕句の轉結であつた。

三本木は丸太橋と荒神橋との間、鴨河に臨んだ閑雅の小巷で

あるが、水西莊の北に淸獅樓あり、南に信樂があつた。月波樓は山陽當時にあつたか否やを詳にしないが、之れ亦往日の一酒樓であつた。中秋の旣望には、鴨河べりの一酒樓に竹田は呼び入れられた北上に、『天下誰人か君を識らざらん』と見も知らぬ老妓に朗々たる吟聲で歌ひかけられて少からず面喰つた。此徒らをしたものは外ならず山陽等であつたのである。此無邪氣の興は盡きず、遂に雙林寺の住職月峯和尚を先達とし、一轉して素人劇を催さうとしたが、事漏れて、官の禁ずるところとなり再轉して淸獅樓に引揚げて、此にて、三味線拔きの風流讌遊となつたのである。

山陽を環つて陶に隱れた木米あり、畫に隱れた浦上春琴あり、浮屠に隱れた月峯和尚あり、儒に隱れた篠崎小竹があつたが、いづれも韻事を解して詩酒徵逐し、其樂極めて悠々たるものであつた。其中に在りて竹田の風流は一座を傾けたが、自ら兒女の情多くして風雲の氣少しと云つてゐたとのことである。之を山陽の字々風霜を帶びたのに比すると、竹田の温雅にして超俗であつたのは、流石に孤鶴淸唳の感がないではない。

山陽は詞壇の豪で、竹田は畫界の仙であり、其他彼等を環つて風流相樂んだものは、いづれも其道の達人であつた。利害に依りて離合聚散することなく、黨同伐異に依りて出處進退するものではない。詩文書畫に依りて互に其心を許し合つた友垣は結んで解けなかつたのである。

渡邊崋山は嘗て會約を作りて、『總て世の人の樂と申候うちにも、酒は美はしく、女は面白く候、さりとて朝に夕に盃を逍かでありなんには、病狂の人に同じくて、終には命も永かるまじく候、ましてや、春の雪間の花より、迷ふものは戀草にて、家を賣り、身を失ふたるためし少からず、されば酒食は後悔の前供、名聞は誹謗の主人、利慾は爭ひの媒人にて、樂あれば苦みあり、うき世とは申しながら、皆底欲のきづなに亦かるゝこゝろの迷にて、眞の樂とは申し難く候、只其苦樂を忘れ、性情によりて、書畫を樂み候半には、彼の藝に遊ぶといへるにも背き申まじく候、昔し賢き人達の心淸める折ふし言捨てたる言草、描き捨てし筆の跡に候へば、その匂ひの移り來りて、斯く有らまほしう思ふものから、終には學びもし、務めもして、善き人の數にも入らば、其心がまへは、實に類あらん友がきの遊びとも申すべく候、さりながら、吾も人も昨日に今日に、移りごゝろの添ひ行く習に候得ば、今はともあれ、後には只酒色の爲めと成り行き候半も計り難く候まゝ、此約を立候事にて候』と云つてゐるが、書畫を樂むは昔人に取りて卽ち藝に遊ぶ所以であつて、之に依りて學びもし務めもして善き人の數に入らんと庶幾したのである。

斯くして文人畫家は世俗の外に立ちて塵界以外の別天地に逍遙してゐたのであつた。獨り京洛と云はず、江戸と云はず、到る處の詞人墨客は此趣味に耽つて名利の外に超然たるものがあつた。

二

文人畫はもと南畫より出てゐる。南畫は王維摩詰を開祖と稱してゐるが、輞川の別業に隱れて水木琴書を伴侶とした王維は臺閣の氣風と異りて自ら高士逸人の襟懷があつた。此風格は南畫を通じて見られる現象で、大李小李（李思訓と其子李昭道）の金碧青綠ものとは、そこに大なる差異があつた。王維は詩を善くして又畫に長じ、詩中に畫あり、畫中に詩ありて、詩畫一致の境に游んでゐた。されば其流を汲むもの董源巨然よりして米芾父子を經て、元季の四大家（黄子久、倪雲林、呉仲圭、王蒙）に至るまでいづれも胸に邱壑の情ありて野鶴閑雲の趣があつたされば其派に屬するものは、いはゆる文人氣質を有するものであつた。明に入りて文徵明は先づ此派を代表して文人畫を提唱したのである。董其昌、陳繼儒の輩も皆文人畫の呼號家であつた。

文人とは讀書子を指す稱號である。即ち學者である。然も士大夫を以て任ずる學者を稱するのである。されば文人畫は之を士夫畫と稱してゐた。此派の言ふ所は人品の高きを第一條件としてゐる。文徵明は其米點山水に題して『人品高からざれば、墨を用ふるも法なし』と唱へた。されば其の斥くるところは形似であつて、其の取るところは性靈であつた。考槃餘事に、畫を論じて『意趣前に具る、故に畫成り神足り、莊重嚴律、工巧を求めずして自ら妙處多し、後人は刻意工巧、物趣ありて天趣乏し、花を畫けば、趙昌の意は似するに在り、徐熙の意は似するにあらず、畫に高きものに非ざれば似不似を以て其高遠を第する能はず、蓋し意似するに在らざるものは、太史公の文に於ける、杜陵老子の詩に於けるなり』と云つてゐるのを見ても、其派の主張するところが明かである。

此士夫畫は江戸時代に一方は渡來の明人伊孚九に依りて、一方は舶載の畫冊に依りて我邦に將來せられ、到る處に流傳したのである。古へ緇徒の間には方外の交あり、儒林の間には斯文の誼はあつたが、文人趣味なるものは南畫傳來の後に起つてゐる。即ち詩畫一致の境に於て始めて此趣味は現はれ來たつたのである。竹田山陽の交遊の如きは、偶々其一例に過ぎぬ。彼等は同じく詩を作り同じく畫を描き、同じく書を揮毫してゐたのである。然も其交りは文人趣味を以て終始してゐる。

池大雅は曾我蕭白と蕎麥粉の馳走を忘れて語り合せた。其妻を識別せずして厚く之に挨拶したと云ふことである。之れ大雅獨得の天真で、いはゆる天衣無縫、些の潤飾なく、些の衒氣匠氣なく、他人の模倣を許さゞる天地である。此等は餘りに浮世離れ、否寧ろ人間離れしてゐるが、文人趣味の特色は其名利を離れ、權勢を離れ、富貴利達を眼中に置かないところに存してゐる。尤も中には岸駒のやうな文人趣味のない俗悪極つたものもないではない。從五位下越前守を眞つ向に振翳してこけ嚇しをするを見ても、彼が如何に衒氣稚氣に富んで鼻持のならぬかを知るに足りる。彼は堂々たる邸宅を構へ、室内の裝飾に意匠を凝らし、其の人に接する時は自ら厚綿の蒲團敷物に座し、應對の言語は倨傲を極めた。揮毫を依嘱するものあると、先づ其人の携へ來た絹素は粗惡にして、筆を下し難しと稱して必ず之を却け、自家用の品を購入せしむるを常とした。又之を表裝すべき金襴までも西陣に誂へて之を織らせた。即ち白地白茶地淺黄地の各種に雲形と長方形にて同功館の文を織出したものである。彼は斯くして表裝の手間賃までも利得するをつとめた。又暇ある時は一幅双幅三幅對などを揮毫し置き、之を表裝して貯藏し、揮毫を請ふものある時は、先づ一應は拒絶し、さて強ゐて乞はるゝに當り、某の諸侯某の堂上方より表裝までも一任せられて恰も出來上りたるものあれば、其方に延引を乞ひ、若し聽容あらば譲るも差閊なしとて、巧に貯藏の品を賣付けるなど、殆んど風上にも置けぬ俗物であつた。彼が錦衣を着て故郷金澤に歸りたる時の尊大ぶりは云ふまでもないが、其の京都を出發する時、松村景文、岡本豐彦等は送らざるもいかゞと思ひて見送りした。岸駒は駕籠の前後に四人の門弟を扈從せしめ、槍挾箱旅荷物等を持つもの數人を從ふ。之を送るもの門人、平生出入の商人等百人ばかり、宛として諸侯の東下と異らない、ゆゝしい有様であつた。景文等は其後に隨ふを屑しとしないで、遙か引下つて送つた。すると京を離れて蹴上に近かんとする時、駕籠脇の門弟窃に駒に云ふやう、諸先生の京より送り來れるものが數人ございます、いづくまで行かるゝも同じことですから、どうです此邊で暇乞をなされてはと。岸駒聞いて、如何にもさうぢや、早く此事を告げて來いと云ふ。そこで駕籠舁に命じて駕籠を駐めさせ、後れて來る景文等に此旨を通じた。景文等も以何にも尤もと、各々足を早めて駕籠のあたりに近寄る途端に、駕籠の戸がさつと開く、「いや、大きに」と云つて、僅か頭を下げると見えたが、駕籠の戸ははたと鎖されて、直に舁き出されたので、一同は明いた口が塞がらなかつた。

岸駒は厚い潤筆料でなくては斷じて揮かなたつか。心ある人

々之を惜みて、其頃では大金であつた二十四兩で屛風一双を依賴すると、そこは現金なもので早速に出來上つたので、いよ〳〵之を惜み、一日申合せて、岸駒を東山の也阿彌に招待した。酒酣になると、「これは暑い、どうや浴衣に着換へようぢやないか」と皆々衣を更めた。「これでも暑い」と又々裸になると、一人が「あんたの其下帶はなんどすか」と急に氣付いた體で訝ねる。「これどすか」と廣げて見せると、これは如何に、この間岸駒の畫いた屛風の一枚、「あんたも〳〵」と各々下帶を廣げると、いづれも岸駒の畫ばかりである。流石の傲慢無禮傍若無人の岸駒も悄氣返つて、其儘ついと座を立つて我家へ立歸つたが、腹が立つてたまらず、所司代の侍へ此事を内々相談すると、「それは唯で書いた畫か」、との尋ね、「いや謝儀を貰ひました。」「そんならあきやへん」で、取上げられなかつたと云ふ。尤も此話はどうやら作話らしいが、岸駒の倨傲は到るところに此やうな種を蒔いてゐる。岸駒が貨殖の道に長じたのは、獨り潤筆料のみならず、裒攻道の妙手で、これでも多くの利得を占めたと云ふことである。今なら相場と云ふところだ。當時京童の諺に「今時山師の魁たるは、田村か、越前、其次は一條殿内難波彈正、其次は岸越前介」とあつたさうである。然し江戸時代の藝術界で岸駒のやうなものは希有であつたと見えて、幾多の香ばしからぬ逸話を殘してゐる。若し夫れ岸駒一流のものがさらにある世がありとすれば、さてどんなものであらう。

岸駒の多貧なるに反して、吳春の如きは、文人趣味の畫家であつた。始めは蕪村に從ひて文人畫を習ひ、後應擧に勸められて寫生畫を學び、遂に四條派を起した。獨り畫技のみならず臨池の技に精しく、俳諧を善くし、三絃吹笛の如きものさへも能くした。恬淡の性は貪らず、俗人の金帛を以て厚く謝するを厭ひ、我が好むものには薄謝と雖も喜んで之を與へた。されば畫は行はれたが甚だ貧しかつたと云ふ。其の多藝であつたことは斯う云ふ逸話を傳へてゐるのでも分る。大佛の宮は殊に吳春を寵し、之に畫法を問うて善く畫かれた。或時宮の許で亂舞があつた時、宮は吳春に向つて、「そちは多藝であるが、今日の技は知るまいな」と仰せられた。吳春は「若年の頃、笛を少しばかり吹きました」と申したから、「それなら吹いて見よ」とて、手づから笛を渡された。吳春は其笛を取上げて、口にあてたが暫し暇取るを見て、宮を始め其座に居合せた人達は、「吳春めいらざる笛のことを云ひ出して、困つてゐるではないか、笑止なことだ」とどつとばかりに笑ひ興じた。吳春は之を物ともせず、やがて吹き出したが、喨々として一抑一揚、序破急に叶つて、深の殿も舞はんばかりであつたので、一座は感に堪へたと

云ふことである。彼の多藝多能なる、すべて器物の好みなど、最も妙を得て、仙洞の御烟草盆までも命に依りて意匠を凝らしたと云ひ傳へられてゐる。

多藝多能は必ずしも文人趣味ではないが、綽々として餘裕ある多趣味の點に、其床しさがある。豪奢を衒つて酒色に沈湎する輩とは其選を異にする。殊に其貧に安んじて營利に汲々たらざるところに其人品が窺はれるのである。

浪華の木村蒹葭堂は古名蹟の收藏家であつた。彼を環りて幾多の文星畫仙は集つて益する所が多かつたのである。田能村竹田が生前に一たび彼と會はなかつたを、いたく遺憾としてゐたのでも彼が此方面に趣味の深かつたとを知るに足りる。桑嗣粲、長町竹石の徒皆彼に依りて其文人趣味を助成せられたものが多かつた。蒹葭堂は又畫を善くして、洒脫逸宕の趣を得てゐた。

桑嗣粲嘗て大雅に會ひたる事の序に「畫事は如何なる所爲し難きにや」と問ふ。大雅答へて「唯紙上に一物もなき所こそ爲し難し」と云つたさうな。此うなると禪坊主の問答のやうだが靜に之を味ふと言外に餘味の存する如くに覺える。法に入つて法に囚はれず、筆墨以外に氣韻の横溢する所が卽ち紙上に一物のない點であらう。中林竹洞は猶之を切言して、或は『まことに丹青の妙處は、無心にして意會するにあり。卽ち畫中三昧とて、此道の悟道なり、皆禪意に同じ』と云ひ、或は『山水を畫く者は、胸中別に一世界の妙境を備へざれば、其意味の淸逸深遠なる事を知らず』と云ひ、遂に近代畫家を論じて、『古への人は志厚うして、學ぶ事皆つとめり、故になす事神妙ならざるはなし、今の人は正路を踏まず、名利に奔りて、志動き易く、心のみさきゆきして、學に厚からず、斯る心にていかでか神妙を得べき、されば今の世にては好きわざはならじと思ふめれど、さにあらず、善きも惡しきも已が心の置きどころにてこそ神妙に至るべけれ』と評してゐる。文人趣味のあつた時代にも名利に奔るものは少くなかつた。文人趣味の缺乏した世に名利心の跳梁するのは當然であらう。

雪舟が揮毫するに當りては、伴器の酒を酌みて、或は尺八を吹き、若しくは和歌唐詩を吟じ、後揚々として紙絹に臨んだと傳へられてゐる。松花堂昭乘は天王寺にて老法師に逢ひ、「心虛すれば筆墨虛なり、一字の觀に身を投げてましかば、おのづから筆墨に神ありなん、畫圖も亦然り」と教へられ、『心虛の手妙に筆を走らしむるに、膠水をひかず、正紙に畫すれども、壁煙の心あり、げにも凡畫の及ぶ所にあらず、梅花を畫くに香ひあるが如く、人形を圖するに、眼動くに似たり、書は曹喜羲之にもたちつゞくべく、繪は和尚梁楷にもかきおくれじとぞ見えし』と

稱せられた。心爐しとは即ち超俗であり、名利を離れたことであり、富貴利達を眼中に置かず、物外に超然するを云ふのである。此點から云ふと、大雅は最も善く心爐の三昧に入つてゐる。

假名世說に依ると、大雅は脫俗の風、輕薄の習つゆばかりもなかつた『かつて予に語て曰く、我若かりし時、馬術をならふ、其師のいはく、そこもと武士にあらずして、騎馬の術を學び得ても益なし、されど旅遊などせられ、足疲れなば、輕尻馬にも跨るべし、落る術を習はざれば、怪我すべしと、我是れを是とし、學ぶ、所謂輕尻、乘かけ、二寶荒神、三寶荒神などまで、こと〴〵く其落ちかたを習ひ得て、危難を遁れし事度々ありしと又曰く嘗て和州に遊びて、行脚せし頃、宿を取失ひ、すでに夜に入る、一寺へ行て、書牒を投じて宿を乞ひしに、寺僧許さゞれば、とある所の、竹林の中に入て、趺座して曉を待つに、夜もすがら何やらんがさ〴〵とせしが、夜明けて見れば、蓑にも笠にも、小蛇幾筋も集り居たりと云へり、又債を人に贖ふ事は甚だ正しく、債を人に求むる事は甚疎にして、かつ許し、是れ尋常異人と云はるゝものゝ、眞似にも及ばざる所なるべし、若かりし時、二條樋ノ口に居す、畫扇並に石印を彫刻する事を業とす、債を求むるの簿帳を篆書す、一とせ旅行して臘月に及べども家に歸らず、老母一族など集り、世にいふ書出しなるものを調べんとするに、正文と云ひ、ことに篆書なれば、更に讀めず、亀屋太助と云ふものを賴みて、やう〳〵そのなかばをとゝのへしとぞ、他日一族ども此事を戒めたれば、是より後篆書をやめて楷書す、譬へば中等扇三柄、某先生携帶、估直既濟とか或は未濟とか書す、是れすでに老母及一族の理會せざる所を、いはんや是を篆書せしをや、大雅が書畫は逸品に入るべし、畢竟一點の俗氣なし』とありて、彼の超俗的氣象は殆んど奇想天外より落つる槪がある。或時書店の下男の遊蕩して金を費ひ、其主人に放逐せられたる者偶々大雅に逢ひ流涕して別を告げた。すると大雅は之を不便に思ひ、已が藏する所の書畫什器を賣つて其金を償ひ、主人に謝して、再びそこの奉公人とした。閒居してゐる時は三絃を彈じて古曲を歌ひ、妻玉瀾は琴を彈いて之に和した。其肖像の題詩に『鶉衣蓬髮意怡然、言語は禪に近く、形は仙に肖たり、世を避けて仍ほ世を濟ふの志を懷き、山を賣れども山を買ふの錢を蓄へず、襪材屋に滿ちて纔に膝を容れ、川字腔を成して、時に絃を弄す、至竟深心誰か會すべけん、空しく姓字をして藝中に傳へしむ』とあるものは、道ひ得て甚だ普い。

『大雅は胸襟磊落、能く俗塵を脫す、故に其の畫くところの山水は、皆逸品高格、人の能く及ぶところにあらざるなり』と評

せられたのは、大雅が最も多く文人趣味を有してゐたからである。謝無村は嘗て書畫戲之記を作りて、『我に妻子眷族無し、書畫をもて妻子眷屬とす、我に朋友無し、書畫をもて朋友とす、我に金錢無し、書畫をもて金錢とす、我に衣服無し、書畫をもて衣服とす、我に家藏田地山林川等無し、書畫をもて家くら田地山林川とす、吾遊所へゆかず、書畫交易俳諧をもて遊所とす、吾に無レ師、古今の名書畫をもて爲レ師、吾地獄極樂を知らず、書畫をもて地獄極樂とす、予天下の法を守りて、佛神の像畫を安置すといへども、あへて祈らず、我心體をもて神佛とす。花七日物食はずとも書畫の會、長き日を書畫に迷ひて十二月』と云へるは、彼の俳趣味に文人趣味を混和した處世觀であつた。

祇園南海が詩文に長じて、書畫を善くせる、服部南郭が經書に通じて詩文和歌書畫に長じたる、いづれも南畫の鼓吹者で、又實に文人趣味提唱の先驅者であつた。柳里恭は其の善くするところの技藝十六種ありと稱せられ、寛潤洒脱の風格は恰も齊の孟嘗君の如く、客を好みて門下に鷄鳴狗盗あるを辭さなかつた。此等の先覺者に依りて文人趣味は鼓吹されたのであるから當時の畫家に文人趣味の風格を有するものが輩出したのは決して怪しむを須ひないのである。

三

江戸時代にては文人仲間に書畫會なるものが流行した。その起源はいつの頃であらうか。近世名家書畫談には斯う述べてある。『近世盛に行はるゝ書畫會の式は、於菟（安西氏、近世名家書畫談の著者）按に、寛政の比鎌介の熒熙とへる俳より始まれりと聞傳へたり、この俳向きに長崎に遊び、清商程赤城に書を學びたりとて、江戸に來り、自筆の扁聯を製作し、又單帖に、何月何日某の酒樓に於て、書畫の筵を開き、諸君子の賁臨を待と記し、これを豫じめ四方に賜り、さて當日諸客を酒樓に迎へ、書を作り畫を作り、杯を傾け高說互に起り、會主は是に多少の潤筆を得たりと云、この後、畫家牛山もこれに倣へり、これよりこの擧、ますく盛に行はれ、今は、書畫家者流、この雅會を設るのみならず、やゝもすれば、儒流詞客、此定式に倣ひて、高會を催し、詩賦書畫の興たけなはに及べば、これにつぐに絲竹管絃をもて是を助く、實に昇平の樂事にして、山陰蘭亭の會にも勝ること一籌と云ふべし』とあるから、先づは寛政頃より行はれたものと見える。寺門靜軒は江戸繁昌記に其狀を敍べて詳かである。『當今文運の昌なる、文人墨客會盟して社を結ぶ、人苟くも風流にして胸中に墨あり、才德並び具るもの一たび盟

に與かれば、衆推して先生に拜し、聲は四海に流れ、滿消皆盈ち、油然の雲沛然の雨、人の欽慕せざるなし、予は盟に與かるを得ずと雖も、亦嘗て末筵に列なるもの數回、其盛事の如きは略々觀て諳せり、其地多くは柳橋街の萬八河半の二樓を以てす會に先つこと數月、日をトして一大牌を掛け、書して曰く、晴雨に拘はらず某月某日を以て會す、四方君子の顧臨を請ふと、且つ大書して先生の姓名を掲ぐ、是に於てか人、世に先生あるを知らざるはなし、蓋し漢朝の及第放榜のことと略々同じ、榮知るべし、觀者聚り、肩を摩し踵を累ね指點して曰く、某は畫人なり、某は詩人なり、某は儒流某は書家、彼は挿花師(生花の師匠)の始めて名を宣する(名披露め)なり、此は清本氏(淸元)の女の初めて場に上るなりと、停立して牌(看板)を仰ぐ、又法場(刑場)にて罪人の加木(高札)を讀むが如し、一樣に未だ會せざるの間、先生鷄にて起き、孜々として奔走之れ務む高門縣簾敢へて往かざるなく、亦内熱の恐を省みず、當日先生儀裝曲拳、儼然として上頭(上座)に坐す、坐後に欄(手すり)を施し、案(机)を居え、計人(番頭)二位(二人)筆を簪して簿を守る、乃ち賓主の相揖する、恰かも質客の年を典舖(質屋)の頭に拜する(迎へる)が如し、劍を掌る(佩刀を預る)ものあり、飯を管する(飯の支度)ものあり、酒監茶令手を並べて職にあり、客漸く麕至す、主人左に接し右に應ず、其の詩金(祝儀)を拜する、推讓暇あらず、豈獻酬に遑あらんや、客互に主となり、盃を舉げて相屬す、名妓數名を聘し、賓に充てて酒を佐く、調弄紛譁(からかつたり、戲談を云ふたり)、絲竹管絃の娛みなきも、一笑一盃亦以て醉狂を發するに足る、紅拂(藝妓)は李公(旦那)を稠人の中に認め、周頭(通客)は問答を醉舌の上に取る、紅氈數席地を畫して場を設け、諸先(先生達)は代る〲登る、只見る紙上に龍走り、筆下に鳳翥がる腕中に神あり指頭に鬼あり、一抹の墨は萬金もて購ひ難く、寸楮の册は千載にも傳ふべし、觀者堵を傾け、人の爭ひ乞ふは坐中の指揮すべし、淨粧冶服、艶發人を射るものは、いはゆる近來流行の女先生是れなり、纖手筆を拈り、墨を屛にして態を成す、人麗に高顯なり、衆賓圍繞して蟻の如く附き、蠅の如く着く、隨ひて謝すれば隨ひて乞ふ、嚴師傍に在りて熟視するも、亦それをして別なきの教を守りて手親ら受授せざらしむるを得ず、酒流れ殺崩れ、喧聲雷轟き、塵埃雲蒸す、千筵の坐間、寸も虚白なし、然も主人の心猶一銖の滴りが盛會の海を助けんことを望む、雜杳漸く收まり、樓頭燭すべし、幹人(周旋者、今の幹事)銜へて曰く、ト、夜に及ばず、晝間だけ)と醉客已むことを得ずして起つ』。斯の書畫會も一種の弊が伴つたことは爭

賢である。同じ書の前段の次には之を嘲る詩ありて、其末に、『昏夜哀を乞ふは猶忍ぶべし、白日哀を乞ふは如何なる醜ぞ、恥の人に於ける尤も忘し、利に奔り名に走る君が爲に愍む』と見え、又『乞食境界の募緣簿、方便相傳へて法燈を繼ぐ、利鉢名衣別に道あり、人間呼んで在家の僧となす』の詩を載せて之を痛罵してゐる。蘭亭の高會、桃李園の淸興、西園の雅集はいづれも風流の文人趣味の會合であつたが、書畫會の多くは名利に奔る紛々たる俗集合であつた。會其物は風流を旨とすべき文人趣味のものであるが、多くは之を惡用した氣味がある。然しそのうちには、まんざら風流の集會もなかつたではない。然し江戸の末期から、明治の初期にかけて猶盛んに行はれてゐた。依田學海翁の新柳情譜を見ると、柳橋の妓房八なるものは、書畫會には必ず無くてならぬ妓なりしが爲に呼んで書畫會藝者と稱した、とある。今を去ること十餘年前、偶々此老妓なるものに會見したことがあるが、當時房八、年八十許りで、大分老耄してゐたので、往日のことを問うても何の得る所がなかつた。然し此等を見ても書畫會の盛んなことを推測するに足りるし、又同時に弊害の尠からぬことをも看取するに難くない。今日の畫會も此脈を受け繼いだもので、其發會式には席畫や景物やらを餘興とししてゐるものが少くない。

渡邊崋山の藩主三宅侯の領邑であつた三河の田原で、椿椿山が寫生した書畫會の圖を見たことがある。正面の床には華山の畫幅を掛け、めい〳〵が揮灑やら斡旋やらをしてゐるところを描いてゐる。酒の燗番をするもの、茶の接待をするもの、恰かも江戸繁昌記に云ふが如きものがある。そこには椿山と記名されたもの、霞厓と署せられた人達の締姿もあつた。多分は崋山追悼の催であつたらう。

書畫會起源の動機はどうあらうとも、それに伴ふ弊害を除けば、一種の文人趣味の會合である。蘭亭西園の風流はなくとも悠々として一日半日の閑を淸雅なる會合に暮らすといふところに掬すべき韻致がある。今日の畫家は南畫家或は少數の人達を除いて、他の多くは自ら藝術家を標榜して、輕々しく筆を執らぬを以て誇としてゐる。されば席畫の如きは全然之を賤めて、苟くも藝術家のなすべきものでないやうに呼號してゐる。然しさりとは窮屈千萬のことどもではあるまいか。しかも此藝術家も流石に御前揮毫だけはいとも畏しと制に應じてゐる。けれど興に乘じて筆を下すことは必ずしも不可ではない。權門富豪の頤使に甘じて命のまに〳〵大道藝人流の所爲を敢てゐるは唾棄すべきであるが、趣味の會合に揮灑して彼我相俱に樂むは之れ亦風流韻事である。席畫は決して致すまじと目に稜立てるは、

文人趣味のない所以であらう。斯く云へばとて敢へて席畫を奬勵するのではないが、今の藝術家と稱する人々は餘りにゆとりが無さ過ぎると思はれる。然らばそれほどに自己の藝術を尊重するかと云ふと、必ずしもさうでもない場合が少からずある。

明の莫是龍は、其の畫說に於て、『畫の道はいはゆる宇宙を以て手に在るもの、眼前生機にあらざるはなし、故に其人往々多壽なり、刻畫細碎して造物の役たるものに至りては、乃ち能く壽を損す、蓋し生機なきなり、黃子久、沈石田、文徵明は皆大に耋す、仇英は知命、趙吳興はたゞ六十餘、仇と趙とは品格同じからずと雖も、皆習者の流にして、畫を以て寄となし、畫を以て樂となすものにあらざるなり、樂を畫に寄するは黃公望より始めて此門庭を開くのみ』と云つたのは、多少の眞理がある。如何にして獨創の天地を開かうかと苦心し工夫するは、畫家の當然のつとめであるが、畫を樂むの餘裕がなくてはならぬ。造物の役たるに孜々たるは畫家本來の能事でない。畫を樂んで、眼前の生機を捉へるところに悠々たる天地があるのではあるまいか。

名の爲に利の爲に營々とし、展覽會の爲めに焦慮するのでは、到底畫を樂むの餘裕があるまい。近人の畫が刻畫細碎些の餘韻なきのを見ても萬事が察知されるのである。畫家自らが畫を樂んで描かないのに、どうして鑑賞家が之に依りて樂むことが出來ようぞ。郭熙は山水畫を說いて、『君子の夫の山水を愛する所以のものは其旨安くにかある、丘園に素を養ふは常に處るところなり、泉石に嘯傲するは常に樂むところなり、漁樵に隱逸するは常に適するところなり、猿鶴の飛鳴するは常に觀るところなり、塵囂韁鎖は此れ人情の常に厭ふ所なり、烟霞仙聖は此れ人情の常に願ひて見るを得ざるところなり、直に太平の盛日、君親の心兩つながら隆んなるを以て、苟くも一身を潔くするは、出處節義斯にかゝる、豈仁人の高蹈遠引し、世を離れ俗を絕つの行をなして、必ずしも箕潁（箕山の水、潁水の陽、之れ高士許由の隱れたる處）と素を埒うし、黃綺芳を同うせんや、（夏黃公、綺里季、いづれも秦時代の隱者）白駒の詩（賢者の去るを留めんとする詩）、紫芝の詠（夏黃公、綺里季、東園公、角里先生を四皓と稱す、四皓に採芝歌ありて云ふ、曄曄たる紫芝は以て饑を療すべしと）は、皆已むを得ずして長く往くものなり、然らは則ち林泉の志烟霞の侶は夢寐にあれども、耳目斷絕す、今妙手を得て鬱然として之を出し、堂筵を下らずして、坐して泉壑を窮め、猿聲鳥啼、依約耳にあり、山光水色、滉漾目を奪ふ、これ豈人意を快にし、實に我心を獲さらんや、此れ世の夫の畫山水を貴むゆゑんの本意なり』と稱してゐるが如く、

鑑賞家は畫圖に就いて暫く塵俗の境を脱し、邱壑林泉に游んで樂まうとするのである。されば釋萬里が啓書記の山水畫軸に序するや、『余、宿醒未だ解けず、老眼を摩沙し、之を展べて之を卷き、之を卷いて之を展べ、是くの如きこと數回におよぶ十日の水あり、五日の石あり、山あり、溪あり、橋あり、船あり、堂あり、琴あり、梅あり、竹あり、綠樹あり、烟樹あり、蘭若（寺）あり、浮圖（塔）あり、豆人十六ありて、寸馬一なきなり、飛瀑萬丈吼ゆるが如くして波湧く、余已に坐忘して、假畫眞境の二を辨ぜず、高聲に小船を呼び、晩流を截り、數峰深き處に就いて茅（草屋）を結ばんと欲す、傍に茶を煎るの童子あり、苦笑して云ふ、假畫にして眞境に非ざるなりと、余茫々として一嘯に付するのみ、心既に醒めざるが如し、而して細かに眼を着くれば、則ち畫者の印あり、文に祥啓氏曰ふ』とあるものは、鑑賞家の心が畫圖の裡に遊んで其眞假を辨ぜざる一例である。故に東西の畫史中には往々同じ様な挿話を載せてゐる。花々畫けば蝴蝶が來て宿らんとしただの、葡萄を畫けば、禽鳥が之を啄はんとしただの、牡丹花に戯るゝ蝶を猫兒が覗いたの金岡の馬、兆殿司の龍、皆此類である。いはゆる畫に魂が入ると稱するものは、之れを云ふ。

胡麻化した新様ぶりの畫は破綻百出する、舊に依りて胡廬を描くものは二目と見られない。滿幅の糊塗畢竟何するものぞ。金泥をふんだんに使ひ、綠青群青代赭で塗り上げたものに何の餘韻があらう。微細漏らさず、全幅に寸地を餘さゞるも終に無益の努力に過ぎない。あらゆる顏料を用ひて足らず、或は珊瑚末を塗り、或は水晶末を用ひ猶工夫を凝らして裏箔を使ひ、背箔を用ひて、一時の目を昧まさうとしても、多くは手づま使ひと選ぶ所がない。斯くして成つた畫の生命は唯に一時であつて、永遠の藝術ではない。つまりは展覽會で瞬間の名聲を博さうとする狂言から出てゐるのである。鬼面人を嚇すの類か、然らずんば西施の顰に倣ふ醜女のお化粧に外ならないのである。

芭蕉は『西行の和歌に於ける、宗祇の連歌に於ける、雪舟の繪に於ける、利休の茶に於ける、其貫通する物は一なり、しかも風雅に於けるもの、造化に從ひて四時を友とす、見る所花にあらずといふ事なし、思ふ所月に非ずといふ事なし、像花にあらざる時は夷狄にひとし、心月にあらざる時は鳥獸に類す、夷狄を出で、鳥獸を離れて造化に從ひ、造化にかへれとなり』と說いたが、獨り俳諧のみならず、和歌のみならず、連歌のみならず、茶道のみならず、藝術も亦自然に從ひ自然に歸らねばならぬ。末世の諸藝は盡く是れ人工の粉飾に過ぎないのである。和歌の德は天地を動かし鬼神を感ぜしむるにありと云はれてゐ

る。天地を動かし鬼神を感ぜしむるに先ちて、先づ人間を感動させねばならぬ。人間を感動せしむる至純至誠は即ち天地を動かし鬼神を感ぜしむるものである。今の多く間に合せの藝術が、どうして人間を感動せしむることが出來ようぞ。

　自然に從ひて自然に歸るは、自然を師とし、自然の精神を會得するに依りて始めて得られるのである。自然を觀ることが出來ないものに、自然の精神を會得される筈はない。名畫に對して、畫裡に逍遙するは、畫家が自然の精神を會得し、自然を師として、自然を描いたからだ。名畫と凡畫との差別はそこにある。

　いはゆる文人は今で云ふ文士とは異つてゐる。學殖あり、識見ありて、其襟懷風格の欽すべきものがあり、名利を趁はず、富貴利達を願はず、野人逸民を以て居り、自然を愛し、自然に親んで、之を透徹する眼を有してゐるのである。其趣味は多きに渉るも、衒はず、强ゐず、悠々自得してゐるのである。文人趣味は此等の士夫文人より發してゐる。されば其の筆端に現はれて畫圖となるものは、後世の南畫文人畫などとは全然異つて、宇宙の氣魄造化の妙機自然の精神を捉へてゐる。もとは南畫に源を發するとは云へ、斯うなると、北畫、土佐畫、四條派と南畫との區別はない。

繪事鄙言に、獨り南畫を讃美して『すべて南宗にては、畫上の習氣を避けんとて、種々の變格をも爲せるなり、固より畫を作る意は、歌詩と同情にて、或は高貴に居て林泉村落の幽趣を像想し、或は貧賤に居ながら蘭竹の清操を翫び、其興情を寫して、自修を務く、其半間を慰むも徒然の事には非ず、故に世々の名賢も、是を翫で無聲の詩と云ひ、養心の術とも云ふ、如此雅趣を以て造りたる所ゆへ、自ら其風韻筆墨に出現して、品格も高きなり、故に先賢南宗の畫を貴せるなり、彼北宗の如き、或は賤工と巧を爭ひ、又は名利の爲に作る所、如何ぞ君子の文房に容れんや』と云へるは、餘りに好むところに偏してゐる。文人趣味はもと南畫に端を發するものではあるが、南畫家獨占のものではない。偶々南畫家に此趣味が多かつたから、南畫家特有のもの丶如くに見られたのであつて、必ずしも南畫家のみが特り有する獨得の趣味ではない。文人趣味はもつと廣義に解釋するを至當とする。

　然し繪事鄙言の著者桑嗣燦は、光琳派に就いて『近世にては宗達光琳など又一種なり、宗達が花草は色を設くること重しといへども、甚だ古意あり、又其沒骨の法を爲すもの愈々簡妙なり、是れ皆眞に就いて其法を伺ひ、氣韻を以て畫となす者なり、光琳が人物花草は咸く古拙を以て旨とし畫家の徑蹊を避ける事

甚し、其水墨を以て花草を寫せる、簡略奇態を爲すといへども、其迎風承露の形、生意を盡さゞる所なし、且つ其家法少くも俗眼に諂ふ所なしといへども、却て世に賞せられし、事奇とすべし、是れ必ず當世に於て具眼の士に逢ひたる餘響なるべし、今世の珍賞は耳鑒のみなり、嗣燦竊に思ふに、近衞公の戯墨惺々翁宗達光琳などは、本朝の南宗とも云はんか、古今の名家にて造れる源氏の事跡或は神祠佛院の縁起、或は狩獵古戰場の圖、其外俗間の事實を描けるもの、其屛障卷冊を披く時は、忽ち其境に到るが如く、視る者をして其興情を起さしむること奇々妙々と謂ふべし』と評してゐるが、光琳派を本朝南宗と云つたところは破顏微笑を禁じ得ぬ。光悅光琳の多趣味にして、しかも宏懷濶達なる、まことに文人趣味の三昧に入つてゐると云つてよい。光悅の如きは、鷹ケ峰に信仰と藝術とを標幟とした文化町を組織して、後代に香ぐはしき趣味の高潮を示してゐる。禪味と茶味とを以て一代の文化を作つた東山時代の藝術家も、亦廣義の文人趣味を宣傳したものである。

此等文人趣味を有した名家は、自然を透徹してゐるから、從つて其の畫く所のものは、山水と云はず、花卉と云はず、人物と云はず、翎毛と云はず、自然の精神を捕捉して之を其毫端に寫し出してゐる。鑑賞家が之に對し、坐忘して、畫と我と冥合する所以のものは偶然でない。

名畫と凡畫との區別、眞と贋との差別は、其畫幅を取りて之を壁間に掛け、一日二日靜に之を見てゐるに依りて、自から判明する。初めは或ひは昧然として區別のつかぬものも次第に見てゐるうちに、よいものは愈々よく、惡いものは次第に其缺點が見えて來る。名畫の眞あるものは、見れば見るほど自我を沒して畫圖の裡に冥合するやうになる。名畫の名畫たるところ、眞物の眞物たるところはそこに存する。彼の絢爛たるもの、彼の塗抹するもの、彼の模倣するものゝ如きは、漸次其醜を暴露して、興味索然たるに畢る。絢に魂のないものは、すべて斯くの如しである。

畫を樂んで描かぬ今の藝術家は餘りに餘裕が無さ過ぎる。少くとも此等に對しては文人趣味の何ものなるかを知りて藝に遊ぶの心事を希望せねばならぬ。眞劍努力は固より向上の途ではあるが、精神の修養と並びに文人趣味を理解して貰ひたいものだと思ふ。

四

文藝家の使命は絶大のものである。予は三十年來の舊友で、駐外使臣中最も令名ある某氏と嘗て排日問題に就いて語つたこ

とがある。其時某氏は予に斯う云ふ話をした。

米人の一部には排日論者もあるが、又一部には徹底した親日論者がある。其徹底したところが、飽くまで米國式である。殊に華盛頓にゐる數人の老婦人の如きはいづれも地位あり財産ありて上流社會の人達であるが、大の親日論者である。其一人は屢日本に游び、一より十まで日本を謳歌してゐる。例令へば米人がチップを與ふる時は、直にポケットから銀貨を掴み出して渡すを常とすれど、日本人は可愛らしい模樣のある日本紙の小さな袋（所謂ポチ袋）か若しくは日本紙に包んで之を與へる。何と床しい、美しい國民性ではないか。予は日本の京都若くは奈良の尼寺に入りて晩年を送りたいものだなどと云つてゐる。其一人は華盛頓會議の始まらんとするや、憂慮措かず、詩の國錦繡の國世界に二とない美しい國民性の日本を惡魔の如き國々が聯合して迫害するのであるから、予は之を視るに忍びないと會議前に英國へと往つてしまつた。然し華盛頓會議の結果が必ずしも日本に不利でないと見て、漸く安心して又華盛頓へ歸來したのである。

此等は親日論者の尤なるものであるが、米國には中々に親日論者を少しとせぬ。然し此等親日論者は何の故を以て日本を愛するかと問ふに、殆んでラフカヂオ、ハーン（小泉八雲）の著書に依りて日本を理解したためである。米人は常に某氏に責めるに、日本は何故にハーンを優待しなかつたか、フェノロサの如きは日本の美術を紹介すと稱すれども彼は之に依りて少からず其私腹を肥やしたので、決して日本の忠實なる紹介者ではない、獨りハーンは何の求むる所なく、日本の眞相、日本國民の精神を其同情ある靈筆を以て世界に紹介したもので、世界各國民が日本なるものを眞實に理解したのは、全くハーンのお蔭である然るに日本人は此恩人に酬ふるの途を其生前にも其歿後にも講じないではないかと云ふのである。現に某氏が其駐外國より歸朝の船上にても、一米人より之に就いて手嚴しき質問を受けたさうな。此米人はハーンの遺族を絶えず扶助し、今度も其遺族を見舞はんが爲めに遙々日本へ渡來するので、夥多の土産物を持ち來つたのだと云ふ。

まことにハーン氏ほど熱き同情を以て日本を世界に紹介したものはあるまい。古日本を見んが爲に交通の極めて不便であつた八雲立つ出雲に入りて、松江中學の教鞭を執つた如きは、氏ならでは出來ぬ藝當である。殆んど外人を見なかつた、此日本海沿岸の夢のやうな國に氏を迎へた松江には固より此天才を識別したものはあるまい。斯くして氏は松江に於ける風俗人情を見、お伽話のやうな傳說に耳を傾けて『グリムプセス、オブ、ア

ンフアミリアル、ジヤパン』二卷を著したのである。其後熊本に移りて後も、松江に對しては依々戀々の情に堪へなかつたと云ふ。

一日、氏の松江の舊廬前に車を駐めて徘徊顧望する一外人があつた。往つたり來たり、如何にも去り兼ねる有樣だつたので、其家の持主の娘は之を舊廬の主人ハーン氏なりとは心附かずに其家に請じ入れた。氏は非常に喜んで、舊廬のさまを心ゆくまで眺めて辭し去つたと云ふことである。今日でも此家の持主はハーン氏の舊廬として之を保存し、氏が滯松中の逸事を印刷物として、來訪の人々に頒ちゐると云ふことで、如何にも床しい感心な心掛けではあるが、松江市は何が故に市の名蹟として市自ら之を買ひ上げて保存しないのであらうか。松江市はとにかく、東京市は當然氏の奥津城ある牛込の瘤寺を保存すべきもので、國家が氏の遺族を扶助するは固より、氏の銅像も宜しく形勝の地に建設すべきである。米國の親日論者は無論之を期待してゐる。氏が『コツトー』、『コヽロ』を初め、夥多の著書は一に氏が趣味より出發した日本研究のものでないものはない。氏は名の爲めに著したのでなく、利の爲めに起稿したのではなく日本に寄せた滿腔の愛と同情と趣味とから、此等の名篇を遺したのである。日本に渡來した外人は少くないが、彼れほど善く日本趣味日本國民性を理解したものはあるまい。之れ畢竟彼の趣味が日本趣味を理解し得たからである。百の政治家千の外交家よりも、ハーン氏の燃犀の眼と、精妙の筆とは米國に夥多の親日論者を作つたのである。

米國の水師提督ペルリの來航するに當りて、ペルリは米國政府より日本若し應諾せずんば之を砲擊すべしとの特別命令を受け取つてゐた。幕府が依違として決しない時、ペルリは遠慮なく之を砲擊すべきであつた。然るにペルリは偶々日本の繪畫を見た。果して如何なる繪畫であつたか、それは不明であるが、ペルリの遠征記中、此記事の邊に廣重の板畫を複刻して挿みたるところを以て見ると、恐らく廣重の錦繪であつたのではあるまいか。又ペルリは馬の日本畫を見たと云ふことである。此等の繪畫を見たペルリは、いたく驚嘆し、斯る藝術を有する日本は決して野蠻國に非ずして、文明の國民なれば、砲擊すべきものにあらずと、極めて寬大なる態度を以て開國を慫慂し、隱忍したのであつた。日本をして黑船の砲擊より免れしめたものは井伊直弼でもなく、堀田正篤でもなく、幾多の幕府有司でもなくして、日本の藝術であつた。文藝の力は斯くまでに偉大である。

日本の風土にあこがれたハーン氏は何等求むるところなく、

自己の趣味に依りて悠々自適して幾多の名篇を著した。アヂソンを環りて趣味の人々が集團を作つたと違つて、彼は彼一人で趣味に生き趣味に死んだのである。然し彼の趣味に依りて作られた篇什は其の影響するところ甚大で、日本の眞價を世界に吹聴したのである。廣重は市井の畫家であつたが、自然を愛好する趣味は彼をして羈旅の藝術家たらしめた。猶西行が羈旅歌客であり、芭蕉が羈旅俳人であるが如く、彼は旅の情景を寫すを專らとした。雨に悩む行旅のうら淋しい姿、月明き夜に村人のとぼ〳〵と歩む有様、雪の夕に歸りを急ぐ豆人寸馬の風情を面白く其才筆に描き出した。彼の趣味は又文人趣味であつたのである。然も此趣味から出發した彼の畫圖は祖國の憂患を拯ふほどに成功したものである。

ハーン氏は樂んで其著作を自己の趣味に依りて作つた。廣重も樂んで畫圖の上に自然の情景を寫し出した。ハーン氏の著作を讀めば引きつけられる力あるを覺ゆるとともに、のび〳〵したいい氣持となりて、著者とともに詩の國歌の國錦繪の國を逍遙する思ひがある。廣重の畫圖を展じ行くと、身も江戸時代の行旅の人となりて東海道中仙道を旅する思あるとともに、どことなく、ゆつたりした氣分になる。今の文藝が齷齪として、感情をいら〳〵させ、若しくは倦怠させるのとは、全然別殊の感興を覺えるのである。

之れ必ずしも時代の罪のみではない。女役者が女優と改名し芝居が劇場とむつかしく呼ばれ、取上げ婆さんが助産婦となり小僧が小店員と早變りしたが如く、畫工は藝術家となりて、藝術の神聖を呼號し、藝術家の天職を提唱してゐる世の中である。獨り名利に營々とし、時代の順調に掉して、王公貴人も啻ならざる如き、豪奢の生活を營み、鼻息の荒いのみならず、黨同伐異を事とし、離合聚散常ならず、畫策宣傳を其能事と心得てゐる。どこに藝術の神聖、藝術家の天職が存在しようぞ。斯くの如くにして出來上つた作品は一時無識者の目を眩することを得るとも、いかでか永く識者の鑑賞に値することが出來ようぞ。時代は物質文明の進歩著しき世である。萬事が機械的の世である。さらぬだに神經がいら〳〵する世の中に、姑らく休息して無我の境に逍遙せんとする藝術國まで、此有樣では、現代人の安全地帶は抑も何くに求むべきであらうか。

芝居に行けば、多くは現代人の心理描寫である。明るい場面よりも暗い方面のみを寫して之を以て劇の能事としてゐる。刺戟され抜いて疲勞した神經は又々此れに刺戟されざるを得ない。小説を讀めば多くは階級の鬪爭を主題にしたものか、然らずんば社會の暗黑面を描寫したものゝみが多い。之に依りて何

の慰安が得られよう。其上胡麻化し藝術、糊塗藝術、鬼面嚇人の藝術を見せつけられては、現代人は殆んど八方塞りの體たらくである。

然らば現代人の行くべき安息の地は獨り自然であらねばならぬ。然るに到るところの自然美は人工に依りて破壞せられ、若しくはされつゝあるのみならず、物價の高値は容易に自然美を探らしむるを容るさない。昔は可愛いゝ子に旅させよと云つたほどに旅は困難でもあり、又從つて安價であつた。今の旅行は餘りに贅澤であつて、貧乏人のなすべき道ではない。

今の文壇を見ると世間の殺伐な風は此神聖なるべき領土にまで侵入してゐる。畫界に於けると同じく、眞劍努力の態度は稱すべきも、餘裕のないのは之れ亦同樣である。或はプロ文藝と稱し、又はブル文藝と稱して、詆罵痛擊措かず、殆んど眞劍勝負のやうな趣があり、階級鬪爭は此まで及んで其殺風景なること言語道斷である。人心の荒さびて血腥き風が到る處を吹く今日文藝を擧げて、更に綽々たる餘裕の掬すべきものがない。文人趣味の復興を提唱するのは、必ずしも文藝それ自らの爲めのみではなく、社會人心を拯ふに於ても必ず多少の功果があらうと信ずるからである。

偶々此稿を草すること半にして、東京及其隣縣は大地震の災害を蒙り、之につぐに火災を以てして、東京は其三分の二を焦土となし、錦の如く花の如くありし繁華の巷は一場の大夢醒め來りて烏有となつた。有史以來の慘禍にして、日本の災害史中斯くまで慘害を極めたものはない。江戸時代にて明曆の大火は最も範圍の廣かつた火災と云はれてゐる。明曆三年正月十八日、本鄉丸山本妙寺より發火した火は駿河臺、鷹匠町邊の大名旗本の家を燒き拂ひ、鎌倉河岸に及び、一石橋鞘町邊に飛火し、傳馬町に及び、北は柳原、南は京橋、東は佃島、深川牛島新田に至りて熄んだ。然し翌十九日には再び小石川鷹匠町より失火し、北は駒込を限り、南は外郭に及び、郭內諸大名の邸宅を延燒し、數寄屋橋內外日本橋、京橋、新橋を燒き、南の海濱に至つた。此日夜半麴町より三び失火して、雉子橋、一橋、神田橋を燒き拂ひ、大名小路の邸宅は一宇殘さず、西城下櫻田に至りそれより火は二手に分れて、一筋は通町、一筋は愛宕下より芝浦まで燒き盡し、江戸城をも延燒した。此兩日の火に、本城幷に二の丸三の丸を始め、諸大名の邸宅其大なるもの五百軒、士民の家屋は算するに遑なく、神社佛閣三百餘宇、倉廩九千餘、橋梁六十、市井八百町、此道程を縱橫に計ると、二十二里八町に及んだと云ふ。然し其時代の江戸は今日の東京に比すると、幅員も狹く、人口の稠疎が異り、建物の大小高低が違つてゐる。

今回の災害は江戸時代の江戸を全く燒き盡したのみならず、本所深川の新開地をも烏有に歸してゐる。若し其道程を計れば二十二里餘ぐらゐの短距離ではない。まことに明暦以上の大火と云ふべきである。元祿十六年十一月二十二日に關東の大地震があつたが、江戸の震災で最も大なるものは安政二年十月二日の大地震であらう。震災の程度から云ふと、今回のは、安政に比して大差ないやうであるが、火災の被害は安政の幾十層倍である。安政震災の記錄は諸書一致しないが、燒失の範圍は遙に狹く、死傷者の數も少く、經濟上の打擊は遠く今回に及ぶべくもない。猶遡つて考へると、應仁の大亂は花洛を雲雀啼く燒野原にしたが、其頃の京都は今日の東京と比較にならぬほどに狹小であつた。今回の災害を以て開闢以來の大災害と稱すべきは固より異論がない。

日露戰役を以て國民興起の絕頂期とすれば、それより以後は總べて下り坂であつた。薄ッぺらな上ッ調子の、惰氣滿々たる現代國民を如何にして緊張さすべきかは、識者の齊しく焦慮したところであつたが、事實如何とも出來なかつたのである。此形勢は、帝都の市民は固より、政治上に經濟上に、宗敎上に文藝上に彌漫して、到底拯ふ能はさる狀態であつた。質素の風は地を拂つて、上下昏々として豪奢虛榮の夢に醉つてゐたのみならず、輕薄なる皮相の西洋文化を取入れて、得々としてゐたのである。若し今回の大災害を人心頹廢のどん底なりとすれば、國民は敢然として奮起し、此に健全なる國民性を振興すべきである。十餘萬の生靈を泯し、數百億の財貨を烏有に歸したのは、餘りに高價ではあつたが、國民振興の機とならば、未曾有の禍を轉じて、至大の福となすことが出來よう。

惰氣滿々として、浮薄驕奢を事とし、國家と公共とを忘れ果てゝゐる國民を反省させるには如何にすべきや、唯已むなくんば外國と戰つて遺憾ながらも敗北し、少からぬ打擊を蒙むるより外に途はあるまいなどと云ふ說を唱へるものさへ少からずあつた。今回の災害は如何にも甚大であるが、戰敗國となるに比すれば優ること萬々である。國民が目覺め反省し振興する機會は今日を措いて他に求むべきものはない。獨り帝都の市民のみならず、日本全國民が一齊に反省して力のあらん限り振起すべき秋は方に目前にある。

五

日露戰役に擧國一致の實を示した日本國民が此大災害に面して、又擧國一致の實を擧ぐべきことは信じて疑はない。皮相の惡傾向を一掃して、日本國興隆の光榮ある運を開拓せんことは、

國民が刻下の決心であらねばならぬ。之れ十數萬の無辜の靈に對し、數百億の消耗した財帑に對して酬ふべき唯一の途である。

政治家は積年の黨爭より覺めよ、私利私欲にあこがれた人々は反りて公共の精神を振ひ起せ。虚榮の婦人は失つた其本心を取戻すがよい。極端に個人主義を尊重したものは目覺めねばならぬ。行詰つた文藝家は新しく正しい道を開拓すべきである。

物情騷然とし、人心洶々たる間であつたから、無理ならぬとは思ひながらも、今時の災害中に在りて著しく遺憾に思ふのは國民の訓練が甚しく不十分なることを感じた點である。非常時は非常時に相違ないが、東京市民が餘りに常識を缺いてゐることに就いて、予は少からず浩歎してゐるのである。畢竟之は時代の罪であつて、國民が一般に神經衰弱に罹つてゐる證據ではあるまいか。殊に都會の居住者は餘りに神經を使ひ過ぎてゐたから、端なく今回の變事に於て其弊が現はれたのであらう。流言蜚語紛々として、其の無稽なることは常識を以ても優に判斷し得られるのであるに、相當の知識あるものすらも、眉昂り血走つた眼で之を確信してゐたのである。殊に町々に組織された自衛團なるものに於て此現象は繰り返されたのである。然し時代が餘りに神經を過敏ならしめ、人心に餘裕なるものを無くした結果なりと思へば、今後は國民教育に一大刷新の要を感ずること極めて切なるものがある。

生きんが爲に人々は努力しつゝある今日及今後、美術工藝の振はないのは當然である。餘りに順調に帆を上げ過ぎて、いゝ氣になつた藝術界に取りても、又とない善い鑑戒である。胡麻化し藝術が亡ぼうとも、糊塗藝術が亡ぼうとも、模倣藝術が無くならうとも、輕薄藝術が無くならうとも、藝術に取りて有利ではあるが、一害はない。此等の惡藝術は此機會に一掃して、自然を師とし、自然に歸るべき新興藝術の出現を望まねばならぬ。貴族的虚榮藝術は滅亡して、民衆的性靈藝術は此に振興すべきである。

應仁の大亂ありて後、東山藝術は光輝を發した。明治維新ありて後、新興狩野は樹立された。大正十二年の大災害ありて後、まことの性靈藝術は起るであらう。今日の藝術家は需要のない今後に於て十分に修養して、其素を作るべきである。

修養の第一として、予は依然として文人趣味を提唱しようとする。こせ〳〵した黨同伐異、御殿女中式の狹心を去りて、其精神氣魄を練るべきことを勸告する。驕慢になり切つたる、順調時代に之を說くとも或は其詮がなからう。然し藝術界の不景

氣其極に達せんとする今日に於て之を提唱すれば或は多少の功がないとも限るまい。今日までの藝術家は餘りに修養が無さ過ぎたのである。艱難時に際する藝術家は修養を積むべきよい機會ではあるまいか。

百萬長者は一日にして無資産となつた。藝術界に幅を利かせて驕奢のあらん限りを盡くしたものも顧みられなくなるであらう。人は赤手にして立つべきである。智あり力あるものが努力して成功すべき氣運に際會してゐる。應仁の亂後は戰國となり、階級もなく門閥もなく、人々は其力に依りて立身出世したのであつた。田舍侍の伊勢新九郎は風雲に乘じて一朝にして小田原北條の基を開いた。草履取りの木下藤吉郎は躍進して位人臣を極むるに至つた。大正の大變事も一面の觀察を以てすれば、氣運回轉の期でなくてはならぬ。

當局者の施設宜しきを得ば、天下の騷亂を醸すことはあるまい。國民が一齊に緊張すれば禍を化して福に轉ずべきであらう徒らに物情の騷然たるに災せられず、虛心坦懷にして國民としての大努力を盡すべきのみならず、各々精神の修養に力を致すべきである。文藝家の如きは帝都復興の新時代に當りて健全なる文藝の樹立に就いて自家の修養と民心の慰安とを心がくべきであらう。

帝都復興の新時代には、國民の神經過敏を拯はねばならぬ、國民をして神經衰弱の症狀から恢復させねばならぬ。暗黑なる文藝を去りて明快なる文藝を作るがよい。郭若虛の『古人必ず聖賢の形像往昔の事實を以て、善を含み惡を命じ、製して圖畫となすものは、要するに賢愚を指鑒し、治亂を發明するにあり』と云ふが如きは、或は古人の意を用ふる所であつたかも知れぬが、固より藝術本來の目的ではない。但し同じ人が『夫れ士必ず忠醇徹究を以て公に盡瘁し、然る後任に稱ふべく、朝に爵すべし、夫の邪佞以て苟くも進むものに至りては、君子の誅も免れず、藝は必ず妙悟精能を以て重きを世に取る、然る後文に著すべく、留に寶とすべし、夫の眩惑して以て名を沽るものに至りては則ち醫士の藥を免れず』と云へるは、首肯するに足りる。妙悟精能の域に達するには技巧のみの善くするところでない、精神的修養ありて始めて能くすべきである。今日の藝術界は、餘りに眩惑して名を沽るものが多過ぎる。

妙悟精能のものが綽々たる餘裕を胸中に藏して、樂んで畫描いたならば、觀るものも樂んで之を見るであらうし、姑らくは塵境を去りて自然に遊ぶ忘我境に到達するであらう。時代に疲れ切つた神經衰弱の病者は暫の天地に逍遙して其病症から元氣を恢復し得るであらう。文人趣味の功果は始め此に現はれる

のである。明の沈顥が、『古來の豪傑、志を明に得ざれば、則ち漁か樵か、隱れて出でず、然れども嘗て意を柔管に托し、有韻の語、無聲の詩、借りて以て日を送る、故に毫を伸べ、景を構ふるは、自家の面目を拈出するにあらざるはなし、今人の漁樵耕牧の題を畫くは此意に達せず、個の穢夫傖父を作り、釣絲に傴僂し、樵斧に戚施し、略々坦適自得の致なく、識者をして絕倒せしむ』と云へるは、素人畫の貴まれる所以である。然し畫家にして善く畫の精神を會得したならば、其妙は素人畫に勝れること幾倍であらうか。

文人趣味とは必ずしも詩酒徵逐する謂ではない、書畫會を開催する意味ではない、席畫を描く意味ではない。文藝家が胸中に餘裕を有し、宏懷なる襟度、洒脫なる風格を藏し、名利に齷齪せず、遠く俗世間に超えて、風流自ら樂むの趣味を云ふのである。禪に禪味あり、茶に茶味あり、俳諧に俳味あるが如く、文藝にも文人趣味を希求するのである。しかし禪は機鋒頴脫の卽興に墮し、茶は茶博士の窮屈なる形式に墮し、俳諧は宗匠の點取に墮するが如く、文人趣味も墮すれば放縱無賴か、酒色沈湎に至るのである。畫道金剛杵に文人趣味の畫道を辨じて『近世の人、放蕩酒狂の徒、亂雜無法の漫畫をさして、氣象よき人氣象よき畫など云ふは、多くは誤れり、古へに云ふ氣象とは一がいには云はれねど、多くは靜かにして氣高く、自然と骨力生氣のあらはるゝを云ふなり、王摩詰、董北苑、石田（沈）、徵明（文）など皆大家なり、放逸無法ある事を聞かず、米狂などいへど、今時の人のしわざに異なり、皇國も昔時の畫工は今時にことなり、さて畫には、槃礴といふ事あれど、それは放逸とは別の事なり、これらのことは、云ふべきにもあらぬ事なれど、今の世の人は多く心得違へたるゆゑかく云ふなり』とあるが如く、墮すればつくね芋山水になり畢る。猶同じ書に『古人も、畫は高業と云ひて、ことに氣高くめでたきしはざなるを、今の人此道をもて人に媚びへつらふたねとして、幇間など云ふ者にも異らぬ、何の事ぞや』と云へるは、いつの世にも適する苦言である。

支那の晉時代にあつた淸談の徒は、同じく超俗ではあつたが、韜晦して一身を潔うせんとするのであつた。されば其行は奇矯に奔りて頗る常軌を逸してゐた。劉伶の酒に於ける、阮籍の哀泣する、寧ろ自暴自棄の狀態であつた。人の世に處る、虱の褌に在ると同じと喝破したのは此徒であつた。酒に沈醉して醒めざること數十日なのも亦此徒であつた。固より文人趣味の彼我相樂んで社會の福祉を增さんとするものとは異る。

血腥い物騒な、やゝともすると昂奮せんとする行詰つた日本

國民は、此大災害で一轉回して貰ひたい。內質を問はずに外面だけ見得をしようとしてゐた日本社會は質の自然に歸るべきである。奮起する國民は勤倹力行の他に、心中の餘裕が欲しいものだ。新しい文化の先驅者は宗教家學者と文藝者とであらねばならぬ。此等の先驅者に胸中の餘裕がなくして、どうして國民に宏懷の襟度を持たせることが出來ようぞ。

例令へば帝都復興の如きも、震災火災に堪え得られて、帝都の安固を期するとともに、都市の美觀を考へねばならぬ。今までの帝都は餘りに沒趣味で、趣味の破壞をのみつとめてゐたかの如くに見えた。さらぬだに神經の鋭敏となり、やゝともすると神經衰弱にならうとする市民を慰安すべき趣味に缺けてゐた。慰安すべき娛樂機關さへに餘りに神經を刺戟するのみで、日頃暗黑になり勝ちの市民心は、之に依りて一層暗黑の裡に漂つてゐたのである。すべてのものは價さへ高ければよいと、勝手次第に暴利を貪つてゐたのである。藝人などが贅澤千萬を極めたのを見ても事は明瞭である。然し今回の大災害は彼等をして天上より奈落に急轉直下せしめたのである。市民の娛樂機關は是より大に安價に市民を慰め得るであらう。

更に帝都復興の議に參する人達はよろしく市民に藝術味を與へるやうに新帝都を計畫すべきである。市民をして生活の疲勞から回復させるやうに都市に趣味ある設備を講ぜねばならぬ。公園なり、遊園なり、乃至名蹟の復興、河川兩岸の美觀等に就いても考慮すべきである。嘗て不忍池を埋めんとする計畫さへ立てたものがあつた。若し之が實行されたなら、下谷の火の手は決して岩崎邸にて止まらなかつたであらう。浮薄なる文化論者は遺憾なく其ぼろを露はしたではないか。

文藝家も此際に當りて、徒らに悲觀して逡巡すべきではない。帝都復興に就いて其意見を開陳するもよからうではないか。藝術味ある帝都を新設して範を中外後世に垂るべきは、現代人の務めであらう。之が爲には獨り政治家のみならず、文藝家の如きも擧國一致の態度を執り、如何にして帝都を復興し、如何にして新國民を導くべきかに思ひ到らねばならぬ。

新帝都は明快であらねばならず、今後の國民は明快なる心事を有さねばならぬ。暗黑なる神經質の、狂的動作には飽き〳〵してゐる。眼前に展開された大暗黑の場面から、心を轉回させるには、文藝も亦明快とならねばならぬ。明快なる文藝を作らうとするには、文藝家が先づ自ら明快なる胸襟を有することが必要である。眞劍なる血でも降らしかねまいとするやうな態度を一掃したらばよからう。御殿女中式の陰謀暗鬪を掃ひ去つたらばよからう。宜しく宏懷の襟度を養ひ、八面玲瓏の風格を修

むべきである。

文人趣味は南畫家に依りて唱道され實行されたが、南畫家のみが獨占すべき趣味ではない。文徴明、沈石田、董其昌の襟懷に就いては我等の學ぶべき所が多々ある。竹田、山陽、大雅等の風格に就いては、後人の範とすべきところが少からずある。其光風霽月の態度、其野鶴閑雲の情趣はまことに掬すべきものがあつた。之を取りて推し弘むれば、文藝界の時弊を拯ふばかりでなく、社會人心を益するに於て必ず餘師があらう。殊に舊帝都の破壞し、新帝都の建設されんとするに際しては、更に痛切に之を提唱するの理あるを覺えるのである。

鴨長明は天災の頻りに起るに無常を感じて、方丈の室を日野の奥山に築いて世を避けた。眼前の景に打たれて無常迅速の感を起さざるものはなからう。さりとて遁世隱棲するは餘りに心弱い。經世濟民の急は我等一同の面前に横はつてゐるではないか。

（九月十七日）

新帝都の植樹計畫

栃内吉胤

都市植樹の代表的なものは、言ふまでもなく、街路樹木であるが、植樹計畫といふ範圍には、公園並に廣場の植樹、其他道路植込地（橋臺地、街頭便所、巡査派出所、材料置場、揚水場等）の植樹を含むものである。

帝都の街路樹は、明治四年に、松、櫻を銀座通りに植栽したのが始まりで、明治八年、墺都博覽會の際、偶々歐洲都市の街路樹木の美觀を認め、刺槐、及び神樹の苗木をとりよせて試植した。明治十一年には、宮城濠端に柳の挿木をなし、其後年々柳を主として、梧桐、櫻、槐等を植ゑたが、植栽方法並に監理の不完全なため、追々衰凋に傾き、或ものは、却つて風致を害するようなことになり、識者が等しく憂ふる所であつた。當時市の囑託長岡安平翁は、これを遺憾に思ひ、歐米先進國の實

例を引き當局に勸說した結果、遂に、明治四十年、道路樹木改良の議が起り、故子爵福羽逸人、白澤林學博士等の意見に基づき、適當なる樹種を選定し、植栽方法をも研究して、苗木を養成、明治四十三年以來、新計畫の下に植栽した樹木を植ゑつけ、爾來三年に約三千本づゝ植ゑて、大正八年に略々第一期計畫を了り、現今道路改良に伴ふ少數の新植の外は、補植を主として居る所である。

災害前、帝都の街路樹木の總數は、二萬四千八百四十八本、その樹種に割りあてゝ見ると……

公孫樹(いてふ)	五千四百六十一本
篠懸樹(すゞかけのき)	五千八百二十六本
三角楓(たうかへで)	一千八百六十一本
百合木(ゆりのき)	一千一百三十六本
梣(とねりこ)	一千三百〇十一本
柳	一千八百六十六本
櫻	二千三百五十八本
梧桐(あをぎり)	二千九百〇十四本
七葉木(とちのき)	九百六十六本
槐(えんじゆ)	二百二十〇本
其他	六百三十五本

右の外、少數の三葉楓、神樹、八重櫻をも栽培してゐる。

植栽個所は、普通街路にあつては、幅員十四間以上（三等道路以上）の步車道の別ある道路に、境界線から一尺五寸乃至二尺離れて四間を標準として植栽することになつてゐる。

今度の災害で、これらの樹木の燒失したことは夥しいもので、その數約二萬餘に達してゐる。街樹中の最良のものとされてゐる公孫樹の如きは、市役所前、馬場先、芝口等の一小部分を除いて、神田區須田町……九段下……芝口……銀座……上野……淺草等主要街路にあるものは殆んど全滅の姿である。次いで芝區芝口、永代橋通りの篠懸樹、神田區鎌倉河岸、雉子橋通りの槐、飯田橋通りの梣、其他三角楓、百合木、櫻等、燒け焦げ、折損し、幕のやうな樹姿を名殘に留めてゐる。

街路樹木の苗木は、市の管理する苗圃に於て培養するのであるが、現在、市の苗圃は、羽根澤、雜司ヶ谷、三河島、多摩墓地の四ヶ所で、總坪一萬餘坪、育成中の苗木は、二萬餘本ある。而して、高さ十二尺、目通り周り六寸位の大きさに達して始めて街路に移植される。それまでに要する年限は、樹種によつて異なるが、最も晚きものは槐と公孫で十年以上を要し、最も速いものは、篠懸樹で、五年を要し、梧桐はこれに亞ぐ。

災害に於て、市は二萬本以上の街樹を燒失し、それが補植用

として二萬餘の苗木を有して居るから、一寸考へればよいやうなものではあるが、災害後の帝都新計畫の街路施設は如何に改造さるゝであろうか、聞くところによれば、幾多の大街路が大規模に企畫されるといふ。そうなれば勿論、大街路の延長は著しく增加するし、其他新規の大公園、廣場、所謂道路植込地等植栽個所も增加するのであるから、現在の苗圃では、到底、その新しく生れた需要に應ずることが出來ないことになる。故に、今から、それが對策を考究する事が必要である。

樹木がシヴイック、エセテックの立場から、都市裝景に大なる効果あるばかりでなく、衛生上の效果が高唱さるゝに及んで、近時世界いづれの都市も植樹を一層重要視して來た。卽ち、街樹は、都市の景觀を美化し、各都市に特有の風格を附與するものである。又諸種の建造物から來るギゴチない感じを柔はらげ、新綠の季節には、言ふべからざる凉爽の感を與へ、夏季には、陰路樹（シェードトリー）の名ある如く、樹蔭を造り、かの鋪道の上に、綠の茂り葉を通うして來る光と影との舞踏を見ることは、言ひ知らぬ慰樂である。衛生上から觀れば、汚濁した空氣を淨めるに効果あることは改めて言ふを俟たない。エヂンバラ社會學會に於て、フイーヌ博士は「北向きの家に住んで居る人々にとつては、ギラ〳〵した日光の直射は眼に有害である。けれども、光線が樹葉を通うして來ることによつて大いに調節さるる。昔視力の衰へた患者には、綠玉石（エメラルド）を覘かしめたといふのも一理ある」といひ、紐育醫學會は『街樹の適當な培養によつて、夏季は炎熱をやはらげ、小兒の死亡率を減少せしめ得る』と發表してゐる。其他乾燥する地方にあつては、空氣に適當な滋潤を與へるものとされてゐる所である。

今より十數年前までは、英國の都會も、植樹といふことについてはあまり耳を傾けなかつた。かのテームス河岸堤に植樹をする案を立てた時の如きは、いつも市會で握りつぶされた。其後、歐米大陸の各都市が、その街路に廣場に、競ふて植樹をなし、著しく都市の美觀を形成しておるのを見るに及んで、間もなく倫敦植樹計畫といふものの確立を見、漸く植樹を實行するやうになつたのである。

街樹管理の方法は、各都市によつて異なるが、ワシントン市に於ては、市の特別委員の監督の下に置かれてある。或る都市には、林務官（フオレスター）、若しくは看守（ワードン）の役が管理することになつてゐる。又或る都市では、公園委員が其一切を管掌し、我帝都では、市の公園課の所管に屬してゐる。ロチエスター、スラキユース、アルバニー、トロイの各都市に於ては、千九百年制定した法律の條文の中に、植樹に關する條文が記されてゐる。紐育

市の如きも仍り同樣の法律案を通過させることにつとめつゝある。又この法規をば、例へば、ボストン市のコンモンウエルス、アヴエニユーの如き、特種の街路にのみ適用してゐる所もある。

巴里市は、街樹の總數約十萬、一年の豫算額約十二萬圓、二十メートル以上の幅員を有する街路には、凡て列樹を植栽、大街路には、中央にも樹列を造る。有名なシヤンゼリゼーには、幾條もの樹列が見られる。其他公園、廣場等で、列樹の影を見ない所はなく、樹下には市が一萬からのベンチを備へつけてある。勿論これは無料であるが、この外に貸ベンチもあり、これは二錢さへ拂へば何時でも占用することが出來る。又樹木の病院まであるといつた具合で、實に巴里市は全市が一つの公園の如き性質を備へてゐるのである。

戰後疲弊の獨逸の都市は、今尙昔日の繁榮あるかどうか疑はしいが、かのデユツセルドフ市の如きは、千八百八十年頃から異常な發達を遂げ、世界都市の模範とされてゐる。市の中軸をなすケーニヒスアレーは、恰も巴里のシヤンゼリゼーを小型にしたような列樹の街路である。その他扇の骨のように放射した大街路には、中央にも植樹されて、その下の芝生には、灌木や草花が配され、ベンチを備へてある。市の外方には、市有の山林が欝蒼として天然のまゝ、山も小流も何等人工を加へずに保存され、この森林の處までは、樹園式の大道が來てゐる。市は又殖林をして、その樹木を賣つて收入の一助にもしてゐる。道路の幅員は二十間乃至三十三間位で、步車道の區別は勿論あるが、人道は、我國の街路のように、直ぐに店舖や其他の建物の軒下に接するやうなことなく、人道と建物の間にも樹園や花壇が設けられてゐる。其他ライン河岸の列樹の如き、平凡陷り易き河岸の殺風景を巧みに矯救して居る所である。

ワシントン市は、佛國の陸軍技師ランフアンの計畫によるもので、商工の中心としてよりも、政治的活動の中心としての都市にふさはしい威嚴を保つ點に於て世界無類であらう。その道路は、格子形の街衢に中斜線の大街路を幾條も設け、丘上に巍然として立つ國會議事堂と、白堊館を中心地域として放射する街路系統が樹てられてゐる。夫よりも同市の最大特色とするところは、廣場や四辻の廣場や、建物の周圍の空地、公園、遊步道等が、思ひきつて豐富にとつてあることで、勿論それらの街路には、總數約八萬本からの樹木が植栽され、廣場には、記念碑や彫刻像、噴水が設けられ、樹園や花壇を以つて裝景さ、て居ることは、巴里と異なるところがない。

蓋し、歐米都市に於ける樹木愛護の念の熾んなことは非常な

もので、懸賞でもつて植樹を勵行し、少年に害蟲の卵を取らしめたりする。或は植樹協會の如きものが出來てゐて、盛んに植樹の宣傳をやる。紐育市のブルークリン及びマンハツタンの協會の如きは有名なもので、マンハツタンの協會は千八百九十六年成立したものであるが、千九百年には、四千本からの植樹を遂行したことが報告されてゐる。ブルークリンの協會では、植樹に關する科學的研究の結果を印刷物にして汎く配布し、子供に對しては、興味ある解説を用ゐて愛樹心を吹き込むといつた具合、この協會が嘗て、路傍に繋がれた馬が、街樹の枝葉や皮を咬み傷めるといふので、全市の馬の持主や騎乘者に警告を發したといふことは有名な話である。其他倫敦のメトロポリタン、パブリツク、アツソシエーション。エジンバラ市のコツク、バーン、アツソシエーション等、いつれもその都市を装景するために、昔蘇格蘭の地主が、その子供だちに語り聞かせたといふ『樹はお前達が睡つてる間に伸びる』といつた古雅な言葉を使つたりして、愛樹心の涵養に努めてゐる所である。

一體、欧米人は、その地理的事情にも因ることであらうが、裸出(ベーア)といふことを忌む傾を持つてゐる。彼等は、住宅の周圍や、空地には必ず草樹を植え、それを愛惜することは非常なものである。かの桑港のゴールデンゲートパークの如き、以前は不毛の砂地に過ぎなかつたが、今日では、綠樹枝を交へ、樹影濃やかに地を蔽ふといつた狀景を呈して居るではないか。又かの早い植民時代に於ける、ニユーイングランドの美はしい楡で蔽はれた村々、ニユヨークやオハヨーヴオレーの楓の樹陰濃やかな町々、東南地方に見る樫の飾を持つ街路等は、いづれもその昔を偲ぶことが出來るであらう。又嘗つてサヴアンナ地方に大暴風が起り、美しい街樹は殆んど倒損の厄に遭つた時、市民は直ちに植樹委員(トリーコンミツシヨン)を選出し、鋭意失はれたる美觀の恢復に努めたといふことである。

翻つて我帝都の街路樹木を觀るに、その街路施設と共に、欧米都市に比して著しく貧弱であつた。しかも玆に不思議に感ずることは、古來自然物の美をもつて誇る我國人が、何故か愛樹の念に乏しいといふことである。之は或は、古來樹木の豐多に慣れ、却つてその尊さを逸して居るのではあるまいかと考へられないでもない、若し吾々が砂漠のやうな所に在つたならば、假令一樹の影でも、如何に尊く、懐かしいものであるかを知るに至るであらう。然るに、事實帝都の大部分は、今度の災害によつて、砂漠の如き荒廢に化したが、蓋し地上の衣といはるゝ草樹の姿を見ることが出來ぬといふことは、如何に殺風景であるかを目のあたり痛感したであらう。ラスキンは、『樹木を造り

給へる神慮は如何』と叫んだが、吾々の樹木に愛着するのは、殆んど本能的である。殊に、近代の經濟組織の變化と共に、樹林地はズンズン工場や道路のために浸蝕されてゆき、巷衢の熱閙につれて段々衰凋に赴きつゝある樹相を見るに及んで、一層その愛惜感を强くするのである。吾人はこの際、帝都再建の事業の一として、當局が、眞に帝都の裝景に愧じない植樹計畫を樹つる事を望んで已まぬと共に、民間に於ても、植樹協會のの如きを設立し、大いに植樹宣傳に努め、時に植樹デーをも開催して官民協力して植樹に努めたならば、人工的に整備した新帝都を一層莊嚴化し、美化し、衛生的ならしむるに違ない。

從來の我帝都の樹木は虐げられつゝあつた。街路施設の不完全なるがため、特有の砂埃は濛々沸起し、街樹の綠葉は、ために本來の生色を失ひ、しかも、近時、漏洩瓦斯や、道路舖裝用のクレオソート注入木塊から發散する瓦斯は、樹木に有害で、その衰弱を誘致すること夥しいものがあつた。尙不都合なことは我街樹には、生長限度といふものがあつて、その高さが三間中に限られてゐることである。之は、諸種の架空線が、恰も網の如くかゝつてゐるためで、街樹の發達の上に悲しむべき障害であつた。萬事島國的にせゝこましく發達し來つた都會にあつて、少なくとも自然の生々潑々を誇るべき樹木までも、グロテスクな矮小なものを持たねばならぬかと思へば、情なく感ぜざるを得なかつた。然るに、再現の帝都の街路は、一層完全なものに改造され、架空線の如きも、地下埋設とさるゝことが專ら豫想されてゐる。果してさうなれば、我街樹は、從來陷つてゐた弑虐から蘇ることが出來るであらう。

樹種の選定も、此の際一層研究を要する。必ずしも外國種を採用せずとも、我國固有の樹種を選び、我帝都特有の美觀を創出すべきではないか。銀座の一名物であつた柳の如きは、近代的都市の街路樹としては不適當であるといふので、先年取り拂はれて了つた。そうはいふものゝ柳は捨てがたい味を持つてゐる樹木の一つで、その植栽の個所如何によつては、隨分美はしい風色を造るであらう。四國雜記に『白川二所の關にいたりければ、いく木ともなく山櫻咲きみちて、心も詞もおよび侍らず。

　しら川の關のなみ木の山櫻
　　花にゆるすな風のかよひぢ

など、路邊の並木のもとにみえたるもすくなからず』と記し、本朝世事談綺五の卷雜事門には『天正年中信長公三十六町に一里塚を築き、榎木をうゑられしよし』を載せてゐるが、山櫻や榎木にも特有の趣があろう。

街樹の根を下す個所は、步道と邊行との間の地帶で、幅四尺、

その中央に植ゑらるゝが通例である。樹木の間隔は、三十尺乃至四十尺を適當とする。又樹木は歩道に穿たれた穴に植ゑらるゝ、其の場合、穴(ホール)の直徑は三尺乃至四尺、深さは三尺位を程度とする。街樹を植ゑこむ際には、見通し(サイト)をよく考へ、交通頻繁な交叉點に於ては、特に注意して植栽しなければならない。樹列は、普通の街路にあつては、二列が通例であるが、大通りや公園道路は、四列乃至五列とし、その基部を帶狀にし、芝を植ゑつけ、灌木や草花を配する事が望ましい。住宅地區に於ける道路等、比較的狹い道路には、樹を交(オルタネート)互に植ゑるも却つて趣がある。

次に帝都の公園樹木のことであるが、災害前の公園の數は大小二十六、總面積四十二萬八千九百五十坪、その中、草樹の植込地が十七萬二千七百七十一坪、芝草地が四千六百六十坪ある。而して樹木の總數は六萬四千三百三本、針葉樹ではアカマツ、クロマツ、ヒノキ、カヤ、トウヒ、ヒマラヤスギ、常緑濶葉樹ではシヒを主とし、シラガシ、アカヾシ、ウバメガシ、ツバキ、サヾンクワ、モチ、サンゴジユ、モツコク、ネズミモチが最も多く利用され、落葉花木では各種のサクラ、ウメ、ヒヤクジツコウ、モクレン、ハクレン、コブシ、フジ等である。落葉濶葉樹ではスヾカケノキ、ユリノキ、アヲギリ、エンジユ、ホゝノキ、トチ、ケヤキ、ポプラ、ニセアカシヤ、エノキ、ムクエノキ、ハクウンボク、エゴノキ、カツラ、ミヅキ、イテフ、モミヂ類カエデ類等で、災害で燒失した公園は十二、燒失樹木數は五千餘本に達して居る。

蓋し、これまで公園といふものは、都會の窓とか肺臟に譬へられて居る如く、觀賞休養の目的以外には餘り考へられなかつた。然るに、今度の災害にあたつては、まのあたり群衆の唯一の避難場所となり、それがために、救はれた人命は蓋し幾許であつたらうかと思はれる。市内の四辻などにある。小公園は、今度のやうな猛火に對しては、殆んど防火上の效果がなかつた。淺草の觀音堂が燒けずに殘つたといふことは奇蹟の如く言はれておるが、それは丁度火防に必要な程度の地域と、樹林によつて圍繞されてゐたからで、今後公園を新設する場合には、尠なくとも、淺草公園位の地域即ち六萬三千六百四坪餘と、二千本の樹木が必要であることが自づから歸結されるわけである。又かの最も慘鼻を極めた本所横網の被服廠倉庫跡の驚くべき燒死者の如きも、若し適當な樹林が植栽されておつたならば或は救はれたかも知れぬとさへ云はるゝ位で、其外、今度の災害に於て、到るところ、樹木が火防上有効な働をなすことを實驗濟となしたのである。これに鑑みて、將來の帝都は、大道

路大公園式で行くといふのも妥當なことで、公園系統確立の要要なることは勿論、將來の植樹計畫の上にも、斯の點を考慮しなければならない。橋臺地、巡査派出所、揚水場、街頭便所等、道路植込地と總稱する個所に於ける、樹木としては、落葉樹は街路樹と同樣なものを用ひ、常綠喬木としては、クロマツ、ヒノキ、シヒ、モチ、ネヅミモチ、サンゴジユ等が用ひられてゐる。

要するに、帝都の植樹計畫は、再建せらるべき街路、公園廣場遊歩道等の造設に對應して、愼重立案せらるべきであるが、それらの完成は、今後幾年かの後に俟たねばならぬのであるから、植樹に就いては、その間に充分研究を積み、最も適當なる樹種を選定し、苗圃を擴充して、當にシヴイックエセチックの立場からばかりでなく、休養、衞生、火防等、都市生活の實際の上に效果あるやう企圖さるべきである。從來、樹木の如き自然的要素は、人工的要素が主調をなして居る都市の環境にあつては、等閑視さるゝ傾であつた。併し今日いづれの都會に於ても、樹木は都市の物質的造營物を潤飾する唯一の自然的要素として、重要視さるゝに至り、今や立派な都市行政上の一部門として、科學的に研究されつゝある所である。

都市計畫の事業は、元より、一切の都市の機能作用を含んだ複雜なる施設であつて、道路、交通機關、河港、地區、水道、下水、電氣瓦斯、市場、學校、病院、公園、墓地等、あらゆる專門科學を應用し、この有機體の働を擧げて用ふるやうにしなければならんもので、決して一方に偏したものでなく、そのいづれに輕重のあるべき筈がない。チヤーレス、エリオツトの如きは『人間の實用を利便と享樂のために、土地と風景を整へる技術が造園であるが、都市計畫も正に夫でなければならない。造園家こそ土木家、園藝家、建築家、養樹家等を統帥して、此に有機的體制を附與してゆけるものである』といつて、造園科學といふ事に重きを置いて居るが、吾々は、勿論、都市計畫を以つて造園の一分科とは見做さない。たゞ從來の都市計畫の項目中、稍々もすれば輕視される傾をもつてをる都市植樹のために、聊か其の意義を明らかにし、以て、帝都將來の植樹計畫の指針を暗示するを得ば幸とする所である。

故郷に歸り行く心

葛西善藏

田園に歸臥して——と云ふやうな意味とは、僕の場合とはだいぶ縁が遠い氣もするんだが、兎に角病氣にしろ何にしろ一時歸ることになつてゐる。いろ／＼前々からの持病は別として、今度の事變後脚氣に出られ、稍重い氣がするので、詮方なしに歸る氣にもなつたやうな譯だ。が今更田園生活の幻影でもあるまいと云ふ氣がする。それも、自給自食するに足るだけの田園の所有者でもあれば格別、やはりコツ／＼原稿稼ぎで食はなければならぬのだとすると、田舍では何かと隨分不自由な譯だ。僕も何年か建長寺内のあの陰氣な生活をして來た揚句だから、今度は少し都會の生活に馴染みたいと思つてゐた位ゐで、尤もこの春時分までは山の畑へ小屋でも造つて引込みたいと云ふやうな空想も描いたりしたものだが、今度の事變前からはそんな考へも捨てゝゐた。それが、捨てたつもりの考へを今更拾つて見たり、一生離れたつもりの故舊田園に身を依せねばならなかつたり、そんな例は、今度の場合柄、文壇では餘り聞かない話だが、世間には隨分あつたことゝ思ふ。

僕も最初、まだ脚氣の出ない時分だつたが、金の都合が出來たら、歸るつもりだつた。東京の狀態も一通り見聞きしたし、何しろ非常に疲れて居る、世間の騷々しさに壓倒される氣味で迚も落付いて仕事なんか出來さうもなかつたので、まだ雪の來ない前に郷里に歸つて畑へ堀立小屋を造り、一冬雪の中に埋まつてぢつと息を殺したやうな生活をしたい——さう云つた氣持だつた。郷里の冬を、自分は非常に好いてゐる。幾年他郷に放浪してゐるが、雪の郷里へのあこがれの氣持だけは、未だに失はれずにゐるやうだ。あのすべてを蔽ふたひと色の白、なだらかな線、冷めたいやうで必ずしも冷めたくない感じ、晴れた朝、吹雪の夜、——皆、雪のない國での冬を迎へる度に、なつかしく思ひ出されるものだつた。今年の冬は郷里を見舞はなかつたが——一月信州の雪を一寸見て來たが感じが違ふ——昨年は少し時期を遲れて二月半ば過ぎ態々本線から奥羽線を一周して來

たやうな譯で、ひどく氣分の行詰つた場合などには、鄕里の雪の姿は、自分には多少のいゝ刺激だつた。雪につゝまれた山、川、田園、樹木、人家——何と形容していゝか、兎に角さう云つた氣持を自分の創作に取入れたい、自分の育つた斯うした自然から遠退き過ぎてゐた——と云ふやうな氣持を、多の鄕里地方の汽車旅行の場合には、いつも起させられる。と云つて今度の場合は、斯う云つたやうな動機からの思ひ立ちでは無論ない。もつと幻滅的な感じのものかも知れない。

しかし、斯うは書いて見たものゝ、兎に角ひどく氣乘りのしない題目だ。それも幾年ぶりで鄕里の生活を實際に繰返して見たら、また何かの感想に打突かることもあるか知れないが、今の考へでは要するに休養本位だ。三月中旬頃の雪消え時分まで村の温泉宿の部屋でも借りて自炊でもしながら病氣を養ひ、それから畠へ小屋でも造つて妻子を集めて家族生活の根を据ゑることになるか、それとも氣紛れな自分のことだから、半年もするとさうした生活にも飽きて飛び出すことになるか、それもはつきりしたことは云へないが、どうかして根を据ゑたいものとは思つてゐる。浮浪生活も大抵この邊で打切りにして、柄相應の簡易生活をやつて、コツ〱と短いものでも書き、それも書けないやうになつたら正直な自傳小說でも書きたいとも思つてゐるが、それもいつのことになるやら見當もついてゐない。自分の稼ぎだけで、家族五人どうやら餓ゑずにやつて行けるやうだつたら、それだけでも田舍の生活は、何年にも味つたことのない自分の慰めとなるかも知れない。どうかさうありたいものだ。

僕の友人のうちにも今度の變災で家族を亡つて歸鄕した人、捲土重來の意氣込みで歸つた人、多少事情の相違はあるだらうが、要するに生活の便宜上からで、特に人生觀藝術觀に動搖を感じてとか何とか云つたやうな、さう云つた風に考へて歸つた人は、餘り見受けないやうだ。またそれだけに、事件が突發的だつただけに、あわたゞしい氣持一方に急き立てられて、敗殘的？な氣分を沁み〱味つてゐる隙もなく、そんな氣分が今更らしく感じ出され、逃げて來た都會の生活が新らしく思ひ出されるのも、まづこれからと云ふところではあるまいか。

僕の地方ばかしではあるまいが、大體に僕等の年配になつて都會へ出て來る人の多くは地方の失敗者であり、同じやうに、地方へ歸つて行く人の多くは都會の敗殘者かも知れない。食へなくなり、病氣にでもなると、故鄕のあるものは故鄕に歸るほかない。その中には再び捲土重來の元氣を快復する人もあるだらうが、そのまゝ埋沒してしまふ人もあらうし、僕自身の場合

またば僕の近親の場合の例など考へると、僕はいつもチエホフの「農夫」と云ふ作品を思ひ出さずにゐられない。百姓の次男かで都會でコツクをしてゐた男が脚氣を患つて妻と娘をつれて故郷の貧乏な生家に歸り、虐待されながら慘めに死ぬ、妻と娘は巡禮をしながら再び都會へ歸る——誰でもが知つてるチエホフの傑作だが、自分は今でも感動なしに思ひ出すことが出來ない。この春歸郷した自分の弟たちの場合、自分の場合、あの作品ほどの深刻さは持たないとしても、都會敗殘者の誰もが多少とも味はゝねばならない運命的な悲劇ではないか。無論自分は自分等の場合とあの作品と比較して云つてるのではないが、チエホフの數多くの作品の中でも特に自分は好きであり、今更に尊敬の念を新たにしない譯に行かない。あの正確丹念な描寫——あれだけでも田舍で少し落付けるやうだつたら、學び直したいと思つてゐる位だ。そんなことを考へて來ると、自分の心も少し開きかけて來る氣がするんだが、しかし一朝一夕に學んで達せられると云ふ譯のものではあるまい。唯斯う云ふ機會にも考へられることは、あれだけの素質、教養、またあの體質でかなり永い間田園にも引込んだ生活を送つてゐたらしい彼が、少しも自己の趣味的なものに溺れたらしい臭ひを作品に止めず、どこまでも現實的な、正確な寫實で押通してゐるところに

一面地方の自治生活などにも理解を持ち、また科學的な教養にも依るのだらうが、やはり民族文學の傳統とか國民性の相違とか云ふやうなことも、考へられないではない。日本の田園文學の代表作の一つとして長塚節氏の「土」なども立派なものであらうが、これからはもつと都會生活と地方生活との接近した交錯狀態の扱はれたやうな作品が、出てもよさゝうなものである。今度の事變で、都會人と地方人との交流ぶりは、實に凄じいほどではなかつたか。都會が都會人だけの都會ではないと云ふことが、否應なしに明瞭にせられたやうなもので、考へやうに依つては、地方民としては多少痛快な感じもないことはなかつたらうと思ふ。それほどの勢ひだつた。さうした影響も、自然藝術の上に現はれて來るに違ひない。

新山手繁昌記

松川二郎

與へられたる、問題は『新山手繁昌記』、紙數は五十枚。

私がこゝに山の手といふは、「東京市」といふ舊行政區劃上の狹い線ではない。將來の大東京、――否、現在すでに形づくられつゝある「大東京」の山手方面を指すもので、當然、市に隣接した郡部の町々を含む。具體的にいへば、今度の大震火災に燒け殘つた麻布、赤坂、四谷、牛込、小石川、本郷の各區と、之れに接續した大崎、目黑、澁谷、千駄ケ谷、淀橋、大久保、高田、西巣鴨、板橋、瀧野川などいふ町々であるが、無論その全部に亙つて記述せむとするのではない。このうち發展ぶりの特に目立つて著るしい場處、面白さうなところを選んで、何處まで行けるか、行ける處まで、書いて行つて見ようといふのである。

一　澁谷道玄坂

◉都會の人たちにも、田舍の人達にも、見せたきは此頃の「夜の道玄坂」の賑ひである。

◉市內では牛込の神樂坂、市外では澁谷の道玄坂が、人出の多い「盛り場」の双璧として、東京名物の一つにかぞへられて來たのは、すでに古いことであるが、震災後の道玄坂の賑ひと來ては、何といつてよいか。全くもつて言語道斷の有樣である。」

◉順序として、澁谷そのものの發展ぶりから申上げる。

◉青山の大通が、たゞ幅びろく美しくなつただけで、期待された程の發展を遂げ得なかつたのは、一面は練兵場、片側は墓地といふ厄介ものを控えた、地形上の關係にも因るであらうが、大きな原因は寧ろ澁谷村が、早くから青山の隷屬的地位を離れて、ズンズン獨立した發展を遂げて行つたことにあるであらう。

◉尤もこれは觀方によつて、澁谷が東京市の接續地帶の中で特に異數の發展を遂げた原因は……、と逆に云ふことも出來る。

或ひはさう云ふ方が、本當かもしれない。兎に角、人々はそゝくさと足早に青山を過ぎ去つて、澁谷へ澁谷へと、集まつてしまつたのである。

◉澁谷の人口は、震災前すでに十萬と號し、內實九萬內外を有してゐた。日本に於ける最大の「町」であつた。

◉今度の大震火災で、隣接地帶は何れも一せいに地震太りをした。十月上旬頃の調査で、千住町の七萬二千を筆頭に、品川の六萬七千、西巣鴨の四萬六千、瀧野川の四萬四千、南千住の四萬二千、代々幡、大井の各四萬、日暮里の三萬九千……。澁谷は澁谷としては割合に少く、四萬五千と算せられてゐた。

◉是等の避難者の幾何プロセントまでが、果して其地の定住者となつた乎、或ひは成らむとしつゝある乎は、分明でないが、當時澁谷町の理事者及び有志家等が戮力して取つた救護振りは、寔に敏活、懇切、公正を極めたもので、都下隨一、拔群の働きであつた。馴れては兎角贅澤を言出した避難者も、こゝ計りは些の怨聲なく、感謝と賞讚の聲のみが充ち滿ちてゐた。

◉斯樣なことも、確かに一つの原因となつて、澁谷町は避難者の數の割に、定住者のパーセンテイヂが多く、今や人口十三萬と稱せられてゐる。田舍のヤクザな「市」を二つ三つ合せた程の大いさで、震災後に於ても、依然として我國最大の「町」たるの誇りを失はないでゐる。

◉省線「澁谷驛」に於ける、一日の乘降客數は、震災前三萬三千八百であつたが、けふ此頃の平均數を見ると、實に六萬五千を突破して、驛員に眼を廻させてゐる。試みに午前八時頃、驛前に行つて見玉へ、交通巡査が指揮の下に、整然と一列に並んだ長蛇の陣が、蜒々數町に亘つて敷かれてゐる。げにや壯觀と言はふか、あはれ憫然と言はふか？『毆るぞ』

◉澁谷は尙此の外に、「惠比壽」驛を有つてゐる。此の方はぐつと少いが、でも一日の乘降客は七千以上（十一月上旬平均）昨年の同期に比して二千五百の增加を示してゐる。卽ち今日この頃、澁谷町を出入する人數は、省線だけでも一日八萬を超えてゐるのだ。

◉市電の方の混雜は、震災前から已に定評ありで、震災後に至つて益々激しく、行列は萬世行と築地行の二手に分れて、一は表通に一は裏通の澁谷館横手へ、別々に長蛇の陣をつくつてゐる。その一端に到着して、御順に、電車に乘る迄には三十分以上を要する。

◉市電氣局の發表に據れば、此の每朝出勤時に際して、一時間の電車乘客數は、新宿・大塚・巣鴨線の各終點が三千人、澁谷が四千人とある。

●以て、震災後に於ける澁谷町勢の一端を、窺ひ知ることができようと思ふ。

二

●本年度の澁谷町の歳入出豫算は、七十五六萬圓であつたと記憶する。從來の例に徵すれば、その實行豫算は、蓋し少くも八十五六萬圓に上るであらう。

●一見、人を驚歎せしむる如き此の尨大な豫算は、町營の水道を有する爲であつて、總額の三分一が通常豫算、三分一が水道特別會計豫算、殘りの三分一が水道建設の爲の臨時費（本年度完成）である。他の隣接町村が、何れも手を懷ろにして、アテにもならぬ市の恩惠的給水を待つてる間に、澁谷町民は、四百萬圓の巨費を投じて、獨力で上水道をつくつた。借金をして作つたのである。

●本年七月から、すでに一部給水を開始し、餘水を分つて世田ケ谷、駒澤、目黑、代々幡、千駄ケ谷の各町村にも給水することになつてゐる。東京の上水道が、多摩川の水を直ちに引いてるに對して、澁谷の上水道は伏流水を引いてゐる。設計工事の萬般、東京のに比すればずつと新式で、自ら「日本一の水道」と誇つてゐる。今度の大地震にも、殆んど何等の被害をうけず、九月四日から給水をつゞけて『どんなものだい』と鼻を高くした。

●土木町長の稱ある佐々木恭氏の發案であり、その努力に待つところが多いが、また町民の氣魄、尋常ならざることを示すもので、今後の諸施設に於ても、澁谷は他の隣接町村に、常に一歩をお先きに失敬して、自から進展して行く氣慨と、實力とを有する者と、私は視てゐる。

●「澁谷の政友會」と云はれる絕對多數黨の公友會は、伯中川久任氏を會長に戴き、前滿鐵副總裁で町會議員の一人たりし中西清一氏が、その實權を握つてゐたが、中西氏の失脚以來、實權は自然府會議員の朝倉虎次郎氏に歸し、會長も今夏中川伯が澁谷を去つたので、勝田主計氏が代つて會長となつた。

●勝田さんは寺內內閣時代の大藏大臣だ。公友會長たると同時に、澁谷實業聯合會の會長をも兼ねてゐる。『お引受致した以上は、看板だけでなく、實際の努力をしよう』と。氏の性格として、是はさうあるべき筈。澁谷の將來益多望なることを想はせる。

三

●宮益坂下から、道玄坂上へかけて、一の「銀行街」を現出

せむとしつゝあるの状況も亦、澁谷繁昌記には見のがしてならぬ事實であらう。

◉十年前の澁谷には、土地の人達の出資に由る豊貯蓄銀行と尾張屋銀行及び國民銀行の兩支店があつたので、預金額も殆んど言ふに足らなかつたが、村井銀行が早くも此土地に眼を着け、宮益坂下――澁谷川河畔にあつた蕎麥屋を買潰して、今の位置に支店を設けた。その時の買ひ値が坪當り百圓で、澁谷の地價を狂はせたと、評判されたものである。

◉村井支店の預金額は數年ならずして、一千萬圓を突破しその身代は本店よりも大きくなつた。此の異數の成功は、忽ち銀行界羨望の的となつた。次で廣部銀行が下澁谷へ支店を出して、是れ亦大成功を收めた。

◉是よりして澁谷には、恰かも雨後の筍の如く、銀行ができて、現在に於ては大小本支店を合せて無慮十有一。

◉先づ宮益坂下の北側、中澁谷一番地に福徳銀行（舊豊銀行の後身）これが唯一の本店銀行で、その下隣りに古川銀行支店、向側に村井銀行支店、澁谷驛前に國民銀行支店（目下休業中）大和田に武藏野銀行支店、並木橋と廣尾に福徳の支店、惠比壽驛附近の廣部支店、道玄坂中程に昕洋銀行支店、農大通に鍋島一家の三十銀行支店、坂上に尾張屋の支店。

◉震災後、日東銀行とかいふのが、神田から燒出されて來て、同じく道玄坂上に、「晝夜銀行」として打て出た。噂のあつた鴻巣銀行は自然消滅となつたが、安田系で昨年來適當の候補地を物色してゐるらしい。未だ此上に、二つや三つは近き將來に出現し相である。

◉昨年の暮にできた古川銀行支店は、宮益坂から下澁谷へ通ずる改正道路――將來の澁谷の中心地と豫想されてゐる――の曲り角で、位置もいゝには相違ないが、二十坪には餘程足らぬ土地を、四萬六千圓で買つた。坪當り三千圓といふ話である。――斯うなつては『米國のマンハツタンが何だ』である。

◉賣坪三千圓の噂も、今日の澁谷町民は左程におどろかない。矢張り昨年の暮に、道玄坂下通りに「借地權」の賣り物が出た。その權利だけの賣買に、買手は坪千圓まで奮發せうと云ひ、賣手の主張は千四百圓鐚一文も負からぬとなつて、とう〳〵不調に終つたと聞いた。

◉まだ〳〵。道玄坂の裏通、廢物となつた舊警察廳舍を、僅か千圓といふたゞ同様の値で、町が府から拂受けて、其を又第四區が事務所として讓受けた迄は大出來であつたが、地代が一躍二圓と跳上つたのは流石の町民も肝を潰したとある。斷つておくが、二圓とは一坪一ケ月の地代なんですよ。

●以上は固より「高い」方でも特例に屬するもので、悉くが此の相場でもないが、兎に角、道玄坂界隈の繁榮振りを語る、好エピソートたるを失はずと云へよう。

四

●「道玄坂通」とは、山手線の澁谷驛、市電なら「中澁谷」線の終點停留場前から、左（西）への一直線に、坂上まで五六町の間を指していふので、それも本當に賑かなのは、省線ガード下から、坂の中ほど與吉といふ牛肉店の前あたり迄、凡そ三町ほどの間である。

●夕方の「灯」がともると同時に、兩側にズラリと露店が出て、餘りひろくもない道路（八間道路）は、眞に文字通り人の波で埋まつて、ケンマコクゲキも啻ならずである。此の壯觀を觀るには、省線電車の窓から望むのが一番よい。その雜踏は、神樂坂とても到底こゝには及ばず、獨り比儔を、舊淺草公園内の活動街に求むべきのみ。夕々ひたすらに、人に押されて歸つて來る夜さへ、稀れではない。

●もとは夏の夜のみの、賑ひであつたが、何時からか四季を超越した、年中の賑ひとなつてしまつた。そして夜な夜な、此處を指して集まつて來る人達は、上澁谷中澁谷の住人を主として、青山・原宿などの一部、目黒、世田ケ谷、駒澤乃至は代々幡町の富ケ谷あたりに住まふ人々である。

●然し道玄坂は「混雜第一」でこそあれ、人の頭數から云つたら、或ひは「新宿附近」に一儔を輸するかも知れない。混雜は即ち、道幅の狹いことゝ、距離の短かきことゝの賜で、賑ひ方に比して、家並が見すぼらしく、店頭も暗い。此の三町ほどが間に、明るく人の目をひく店と云つたら、子供服と西洋雜貨の堀兄弟商會と、その隣の成蹊堂書店ぐらゐのものであらう。

●それには然し、理由があつた。例の大都市計畫に基て「環狀線」道路が、大坂上から來て、此の道玄坂を過つて千駄ケ谷へ拔ける、即ちこゝは早晩取拂ひ、改築を行はねばならぬ運命の下に在る爲め、皆その時機を待ちつゝ、今はシコタマ貯めこんでゐる時なのだ相である。

●活動常設は、坂下に澁谷館（日活系統）坂上に澁谷劇場（松竹系統）がある。此の外下澁谷に氷川館、不二館、帝國館の三館及び澁谷演藝場といふ色もの席があるが、勿論道玄坂からは埒外に屬する。

●カフエとレストラン、をごつちやにしたやうな家には、坂の中程の田中自動車商會の階上にカフエイーグル、裏大通りに

壯大な三層洋館の太洋軒、但是は二階以上は澁谷相互俱樂部といふ貸席になつてゐる。輕便で料理もうまいのは、玉川電車澁谷驛樓上の玉川食堂。以下の雜踏に至つてはその數を知らず。

◉女給で評判なのはイーグルのお靜。もと太洋軒にゐたお靜か、或ひは同名異人かは知らないが、其のお靜にあやかつて、インヂヤン・バーやカフエ・シブヤにまでお靜といふ女ができた程の人氣ものぢや相である。インヂヤン・バーと云へば、夜の一時二時頃迄も店を開けておくので名高い家、坂上にある。

◉パウリスタ式のカフエと、「いろは」式の牛屋の無いのが、些か心淋しい氣がするが、生ビール專門のバーのあるのは自慢だ。中ほどから右へ、農大通へ曲つて一軒二軒三軒目、此處だ〳〵「第一安全亭」、ウツカリすると行過ぎるよ、あはゝ驚いたかね餘り小さい家で……。甘黨には汁粉屋の朝日屋がある。しるこの外に黄金餅といふのが名物である。

◉道玄坂名物は「赤シヤツ屋」。農大通へ曲らうとする角店で賣品は西洋雜貨、つい數年前までは赤シヤツ一枚を着て、大道でメリヤス類を賣つてゐた。持て生れた愛嬌と、油紙に火のついた如うに饒舌るのが中つて、めき〳〵と身代をつくり、昨年の暮國民銀行支店が店を閉めたとき、『四千圓ほどの預金がフイになつて、赤シヤツが青くなりやがつた』と、近所合壁から妬まれてゐた。小立志傳中の人物。

◉おもへば、想ひ出は深い。私がはじめて京橋から、澁谷へ引越したのは四十三四年頃。澁谷驛のあたりは未だ田圃で、田の畔には櫟の並木があつた。與吉の牛肉など鐵筋コンクリートかと怪しまれる程の固さで、ダシより外には使へなかつたものだ。それが今では、下町にも無いやうな上等の肉を賣つてゐる。

◉御承知であらうが、道玄坂は昔、大和田道玄といふ野武士――といふと體裁がいゝが、實は山賊――のすみかであつた由。

五

◉道玄坂は、今後ます〳〵發展する、すべき可能性を豐かに具備してゐる、恐らく半歳を出でずして、今日の面目を一新するであらう。

◉今年の春の暮であつたか、夏の初頃であつたか、坂の中ほど、右手の一段高い臺地にあつた中川伯爵の屋敷三千五百坪を箱根土地株式會社が買取つて、震災前の「夜の銀座」と「淺草」とを、つき交ぜたやうな殷賑區域を作るべく計畫を立て、今や着々工事進行中である。

●中央を娯楽場として、活動常設の二つ三つも建てゝ、周圍は賣店街として、二十坪内外の洋館二階建を百餘戸ならべる。震災後は一段と力をこゝに注いで、麻布赤坂あたりの客を逆さまに此方へ招ばふといふ意氣込である。年末迄に諸般の設備完成の豫定とあつて、目下晝夜兼行で工事を急いでゐる。「工事の成るまで」と、すでに城内の空地には、お揃ひの天幕張りの賣店ができて、すでに坂下から客をこゝに吸收してゐる。

●此の墓地の裏は、たゞちに澁谷の花街荒木山につゞいてゐて、從崖の一端「見晴亭建築敷地」と標木の建つたほとりに立つて見渡せば、艶めいた待合茶屋の町が、美しく輝やいて見える！。絃歌の聲もきこえる。

●伯爵久任さんは、時々この崖頭に立つて、彼の灯に眺め入つたことは無かつた乎。いかにも貴公子然たる、粋な殿様であつた。「伯爵夫人」とからかはれるのを光榮とした。しん藤の醉江を想ふと、私は破顔微笑、獨り靜かにうなづかさるを得なかつた。

荒木山情調

一

●道玄坂を叙して「荒木山」を逸しては、相濟まない氣がする。職責上、忠ならざるやの感もする。澁谷の繁昌は、道玄坂よりも荒木山にあり、況して下町の花柳界全滅の今日では、荒木山は神樂坂と相俟つて、兎にも角にも都下第一流の大花街である。——第一流といふ文字が泣くかも知れないけれど。

●『澁谷の藝妓は泥くさい』などゝ、田圃そだちの餡あつかひにされたのは、少くも十年以前のことで、今尚そんな風に考へてる者があつたら、その頑迷固陋笑ふべし、歐洲大戰並にそれに引續く一昔しの星霜を忘れたか、こゝなリツプ　バン　ウインクル奴！　と云つてやり度い。だが、沈香の匂ひありとは言ひませぬよ。

●澁谷の花街を「道玄坂」、そこの女を「道玄坂藝妓」などゝは、ヨソ土地の人の言ふことで、地廻りは決してさうは言はない。「荒木山」又は略して單に「ヤマ」とよんでゐる。荒木山と云つても區域は甚だ廣く、細かく分ては荒木山、富士横町、劇場裏、尾張屋横町、神泉谷、その他にも少々は散亂してゐる。

●道玄坂を登り切ると、突當りに交番があつて、道は歪形の十字路となつてゐる。右へ行くと見番（三業事務所）だの、やつちや場だの、料亭「高砂」、鳥御料理の「かめ屋」などいふ家があつて、だらだらと小さな坂一つ降りた處が神泉谷、澁谷名

物として知られた「弘法湯」はこゝにある。弘法湯（浴場）と神泉館（料亭）とは、一つ家である。

●交番から神泉谷へ降りる間の、右側の裏手一圓の廣濶な區域が、澁谷花街の中心地「荒木山」で、大路小路縦横に通じて兩側にならぶ家々は、藝妓屋にあらずんば待合茶屋、待合にあらざれば即ち藝妓屋で、何々家と書いた古風な御神燈こそ今は無けれ、軒には一樣の艶消し電燈を掲げて、いきな格子戸の中からは、眞晝もチントンシヤンと、絃の響の洩れるところ、いかにも花街らしい情調が滿ちあふれてゐる。

●鳥森の「湖月」以上といはれる割烹店の「銀月」待合では「茂の家」、「鶴の家」、「菊水」、「金泉」など、一二流どころは多く檐を揃へてこゝに在る。千代田稻荷を分請した赤い祠まで整つて、花街氣分はいよ／＼濃かである。

●交番から眞すぐに、玉川電車に沿ふて廣い道（舊大山街道）を約半丁も行くと、左手に澁谷劇場がある、その裏手が即ち「劇場裏」なる一劃。更に半町ほど行けば右側に尾張屋銀行支店。その横丁につらなる鰻の寢床のやうな路次が「尾張屋横町」で、こゝは小待合ばかり。大伴病院の裏手にも亦一區あつて、待合「もみじ」は近頃普請をしてから大分賣出してきた。電車線路に沿ふて三四町行くと、一軒だけ飛びはなれて料亭「有明館」がある。庭の廣い家で、裏口は神泉谷の方についてゐる。

●交番の處から左へ、即ち神泉谷道とはアベコベの狹斜へ入れば富士横町、料亭に「福壽亭」「松風」がある。藝妓屋は少く、小待合小料理屋が多い。劇場裏とは脊中合せの一衣帶水の形となつてゐる。

二

●料理屋〆て四十軒。待合が九十幾軒か、何でも百に近い數。藝妓屋百三四十軒、藝妓の數は、震災前迄は四百名内外であつたが、震災後五百名を突破した。その五百名が毎日賣切れの盛況で、一目見たばかりでプツと吹出し相な可愛い御面相のが、「お茶ツ引」てなアに、などゝ言つて居られるんだから豪勢である。

●待合の女將のこぼすことには、『藝妓さへ有れば面白い程儲かるんですけれどもねエ、何しろ藝妓が間に合はないものですから、帳場で御酒を一二本召上つて、プン／＼怒つてお歸りになるお客が、一晩の中に乾度二人や三人はあるんですから……』と。つい二三ケ月前に『かう世の中が不景氣になつちやあ』といつた時の話なぞは、正に長持の底へでも藏ひこんでしまつたんだらう。

◉鐘一つ賣れぬ日は無し……。それは昔の江戸の繁昌ぶり。日々三人や四人おひろめの無い日はない。是れが今日の荒木山の繁昌振り。バラツクで風に吹かれてゐる下町の藝妓連には、ちと聽かせにくい話である。

◉尤も、荒木山といふ處は、昔から藝妓泣かせで名高い土地で、萬事がお客本位。震災前から駒込あたりに比べてさへ半分の祝儀であつたのが、震災後更に四分一の値下げをして、而も「今晩は……』とお座敷へ出たら、二時間は全縛り、斷じて「貰ひ」は利かないといふ掟である。

◉衣食足つて禮節云々、孔子は藝妓の爲に言つたので無いにしても此の場合當はまる。荒木山の藝妓は衣裳がわるくて、意地がきたないと、よく下町の客がいふ。私も、然らずと否定する勇氣はない。

◉然し、氣分はさう惡いところでない。日淺いやうでも、すでに三十餘年の歷史あり、おのづから一の「荒木山氣分」を醸成し、芳町や柳橋などでは、到底味へない面白味もある。

◉思ひも設けぬ二階の四疊半から、黄昏るゝ夕暗の空に、クツキリと白い富士の峰などを望むと、いかにも「郊外の花街」に來て遊んでるといふ感じがあつた。寂びれてはゐるが有明館などは、私の最も好きな料亭の一つであつた。裏口から森々と茂つた樹立ちの下の、曲りくねつた細い道をのぼつて行くと、昔は却つて表玄關であつたらしい大きな玄關の前の瓦斯燈に、極まつてペタリと家守がくつついてゐた。

◉靜かに雨そゝぐ夕、泉水のある庭にのぞんだ奥の小座敷で淺酌してゐると、のそりのそりと蟇が出てゐる。向ふには「御堂」とあだ名された大きな離れ座敷が、ガランとして建つてゐる。俳味を超越してむしろ妖怪趣味に富んでゐた。惜しむべし、時勢順應とやらで、目下改築中である。庭も狹くなる由。澁谷で料理のうまいのも此の家であつた。

三

◉何處のたはれ男が、作つたとも知れぬ「荒木山雜詠」數首、荒木山情調の説明代用として掲げる。固より戯れ半分の人眞似、歌といふ資格で載せるのではない。

荒木山雜詠

○

高砂のあるじばかりに殘暑してあはれ今年の夏も去ぬめり

○

摩訶不思議、白馬戀すてふうわさなど吹きつたへくる秋の風よな

○
秋ちかし弘法の湯のえんとつに夕日あかあか暮れてゆく宵

（待合「富久井」即興）

○
宵々を「山」の紅燈にさそはれて行衛しらずもたはれ男なれば

○
わびしさは神泉館（しんせんくわん）のよるの雨はなれ座敷の爪びきを聴く

○
しめやかに戀かたるにはいともよし有明館（ありあけくわん）に雨けぶる宵

○
ニクネームをがちや／＼といふいてふにも戀はありけり女なりけり

○
さびしさがいてふの眉にまざまざと見ゆるも秋となればなるらむ

○
とんぼふも多くをのまずほのぼのと醉ひたる顏のうつくしきかな

○

千代吉を一目見しより荒木山の夜をうつくしとおもひそめてき

○
歌まろの繪に似るてふもあだならじ今奴こそはなまめきて見ゆ

○
見るからにあなすが／＼しぽん太郎の瞳の中にぞ秋は棲むらし

○
花咲野に蝶々となりて舞ひいでよ千代之助の夢かめ丸の夢

○
白絹のくつした長くかろがろとタマラはダンスを踊りてしかな

（タマラは露西亜女）

○
峰松ののろけ話などきゝをれば心がつかれるこれわいさのさ

○
名物の阿呆陀羅經などきゝをればの屋の大路よ霜おきわたる

（の屋は「茂廼家」の通稱）

〓

●澁谷花街の開け始めは、日清戰爭の少し以前の頃で、義太夫を流して來たのが、今の神泉館の前あたりに居据つて、寶家といふ藝妓屋を出したのが元祖だとか。神泉谷から富士横町へかけて、追々に藝妓屋ができ小料理屋ができて、此の方面からぽつ〳〵開けて行つた。

●その寶家は早く無くなつて、今ゐる藝妓の中で、一番の古參に新寶家の「若子」この若子が文字通り若かつた頃には、荒木山などは、武藏野特有の雜木山で、眞晝間でも、親狐が仔狐をつれて、のそ〳〵遊びに出てゐたものだ相である。荒木山一圓が開けたのは、極く最近のことで、開けてからも、何とかいふ待合の椽の下に、狸が棲んでゐて、眞夜中になると腹皷を打つなんどいふ話は、つい二三年前まで、よく聞いたものであつた。

●古い話をするなら、今の神泉谷あたりは、往時は隱亡谷戸と稱へて、火葬場だつた處である。こゝで茶毘に付した亡者の冥福を祈る爲に、建立した大きな石の地藏尊が、今でも彼の坂上の交番の隣りに、「右、北澤道」などゝ書いた石標と共に殘つてゐる。背に「文化三年」と刻んである。文化三年といへば將軍は五代目の綱吉。柳澤吉保が幅を利かせてゐた時代であらう。

●春花秋雨二百年……。昔には冥界の道案内者、今日は花街の守護神、地藏さまも定めし感慨無量であらう、將たそれとも予が職掌は六道の能化、色の道だけは管轄ちがひぢやと、苦り切つておはす乎。兎もあれ、花街の入口に地藏尊の立つて在すのは、些か珍とするに足る。

四谷の銀座

一

●東京の「新銀座」といはれる、四谷區の本通り鹽町附近の發展振りは、凄まじい程の勢ひである、つい四五年前迄は、「四谷」などゝいへば十五區の中一番貧弱な土地で、彼處は質素剛健を旨とする軍人——それも佐官級以下——の棲む處、君處い品がいゝなら四谷へ行き玉へ、なんかと云つてゐたのは、實にハヤ何とも相濟まぬ次第謝罪る。

●確か、荒木横町へ曲る角に、メリンスの見切ものなどをブラ下げてゐた武藏屋が、いつの間にか向側へ引越して、鐵筋コンクリート三層樓で、今はデパートメント式の「武藏屋呉服店」三階に食堂を置いて、菊花陳列會などを開く、今に油繪の展覽會などゝ始まるに相違ない。

◉總檜の御殿風建築でおどかした牛肉屋の「松喜」は、未だ木の香も新らしく、中には藝妓上りとも見える稍々美しいところを揃へて、時分どきには、何時行つて見ても入口の石甃にずらりと履物がならんで『濟みませぬ、滿員でございます』。天幕とシートの岸田商店なども、今は同業仲間では東京一の店であらう。

◉總體、町がぐつと明るくなつた。其は必ずしも、震災後各商戸が申合せて、店頭に、少くも百燭電燈の三四個を點じてゐることを云ふのではない。同じ「盛り場」でも、矢張り都は都なりだ 道玄坂あたりとは少々世界がちがふ。

◉その繁榮振りを視るには、矢張り夜が一番よい。鹽町停留場から四谷見附まで三丁場の間、隙間もなくずらりと露店が出ならぶ。數にして大凡二百六十軒。一方は同じく鹽町から大木戸迄、これが又百軒足らずある、この全延長約半里。

◉凡そこゝの露店に、出ない日用品はなからう。小は大正十三年の「曆」店や、小供だましの「魔法インキ」から、大はちやぶ臺店、張板の店。洋服のボタンばかりが二十餘種、或ひは眞珠色に、或ひはめのう色に、或ひは水牛色に、とりどりに美しい光を放つてゐるのも、露店には珍らしい光景だし、銀座名物であつた古錢や刀の鍔が、いつの間にか此處へ現れて來たのもおもしろい。

◉「夜の銀座」の賑かさは、すでにこゝに復活されたと云つてよからう。が、賑かなばかりが「銀座」ではなかつた。

◉銀座は、けたゝましい電車の響、自動車の行きかひ、人の雜踏、さうした中にも一種の快い明るさと、柔かさとがあつた――その柔かさを授けたものは、あの美しい並木の柳であつたらう。電柱ばかりが並んでゐる四谷では、この情趣は出さうとしても出ない。

◉昔の甲州街道を、そのまゝ受繼いでゐる路には、到底あの木れん瓦やアスファルトの上を、そゞろあるく快さを味はふことは出來なかつた。梅の古木に苔の生へるやうに、將た、古い葡萄酒のみがもつてゐるやうな「うま味」が、この四谷の通に味はれてくるのは何時の日であらうか。

二

◉銀座が、その裏に新橋の花街を控えてゐた如うに、四谷の新銀座も、その裏手に津の守の花街をもつてゐる。此の一區域が、特に繁榮して來たのも、何程かは、津の守のお蔭を蒙つてゐるかも知れない。

◉新銀座の殷賑につれて、昨今津の守の繁昌振りも亦、頗ぶる華かである。山の手でも見町は燒けてしまつたし、殘つてゐ

るのはこゝとおとは神樂坂ぐらゐのものだわネ』と、今は第一流の花街をもつて任じ、せい〳〵氣しがつてる相である。

●『おも、どちらへお遊びにゐらツしやるの』『おもつていふ程、そんなに遊んで歩きやしないが、赤阪へはちよい〳〵行くよ』『あら左樣ですか、此の間赤坂から來た妓が一人ありますよ招びませうか』『イヤ津の守へ來たら、矢張り津の守氣分の藝妓の方がいゝよ』『でも、赤坂なら御存知の妓かも知れないぢやありませんか、かけて見ませうよ』

●『今晩は……、おや』『おや』『そら御覽なさい、お馴染なんでせう?』『うゝむ、お馴染には相違ないが、へえ、變な處で會つたものだね……』ピカリ(藝妓の眼の光り、雷光の如しそのあと言ふな)。——世古といふ待合の女中、走り使ひをしてゐた女であつた。變な御馴染にあつてダチ〳〵としたそれも七八年前の話。今はそんなのは居まいな。

●美濃高須の藩主松平攝津守の上屋敷の在つた處、かるが故に「津の守」とは、誰でも知つてる事だが、二十年前迄はあの窪地のところに池があつて、その西崖に懸瀑あり 之を津の守の瀧と稱へ、夏季は來りて遊ぶ者多かりしと聞かば、『ヒエーン』といふだらう。

●こゝで有名な料亭は(伊勢虎)。坂町の「遠州屋」尾張町の

角の「魚金」なども、相當人に知られた家である。待合茶屋で一流と云はれるのは湖の家、月の家、菊水などであらう。鳥料理では「登利家」といふのがあつたと記憶する。

●藝妓屋で幅を利かせてゐるのは「本武藏」。その分看板や孫店に花武藏、竹武藏、千武藏、新むさし、政花むさし、新花むさし、福花むさし、高竹むさし、千代竹むさし、菊竹むさし、……一々數へたら草臥れる。次が「叶家」で、これにも新叶、鶴叶、久叶を始め澤山な看板がある。

●藝ができても、顏がよくても、「むさし」系統か「かなふ」系統の藝者でなければ、巾のきかない土地である。

●花街として七十年の歴史を有し、お粗末ながらも、一種「津の守氣分」と稱すべきものがある。

●藝妓屋及び待合の營業許可地は、荒木町二十七番地と、それに隣接せる十五、六、七、八番地及び二十五、六番地に限定せられてゐて、區域甚だ狹小。今後の發展は、内容を精錬して行くの外、容積を擴大するの望みはうすい土地柄である。

新宿と淀橋

一

●大木戸を過ぎると、げつそり靜かになる。殊に御苑前附近は、場所柄でもあり片側町でもあり、ひつそりとして常に暗い。太宗寺前から復た明るくなり、賑かになり、ずつと三丁場ばかりの間、露店がつゞいて、新宿終點附近に至つて、殷賑その極度に達してゐる。

●震災の當時燒拂はれた一劃も、すでに半永久的のバラツクが建つて、百燭電燈の明り眩ゆく、ドシ／＼商賣をやつてゐるので、些かも震災氣分はない。

●新宿終點附近の繁昌は、牛込の神樂坂・澁谷の道玄坂と伯仲の間に在り、或ひは寧ろ兩者を凌駕してゐるかも知れない。店頭の華かさは道玄坂に優り、人の出は神樂坂に優つてゐる。路幅はどつちよりも廣い。

●市電新宿線の終點を成し、一般に「新宿終點」と呼んでゐるし、銀行や大店の看板にも「新宿支店」と書いてある爲、こゝを四谷區新宿と思つてゐる人が多いが、最も殷賑を極めてゐる武藏野館から先きは 實は淀橋町字角筈である。新宿の終點でなくて、「淀橋の關門」と謂ふべきである。――淀橋町の人達に取ては、面白くない呼び方であるに相違ない。

●此の界隈こそ、將來最も恐るべき發展力を持つた地域ではあるまいか。――私はさう觀てゐる、

●道玄坂は、要するに「澁谷の」道玄坂である。澁谷自身は大きいが、奥が淺い。澁谷の勢力範圍に屬するものは、目黑の一部（上目黑）、世田ケ谷及び代々幡の一部（富ケ谷）などである。同じ澁谷內でも下澁谷方面は、道玄坂へ出ないで、麻布の方へ出て行く傾向がある。市電が廣尾へ延びてゐる所爲である。

●淀橋は奥が深い。一方は角筈を經て代々幡に、一方は柏木を經て中野に、大久保に。すでに一ツ町と云つていゝ位、人家が人家につゞいてゐる。そして是等の町々へは京王電車、西武電軌堀內支線等に依て、完全に連絡し、東京市內からは市電に由ても、省線に據ても、必らず此の關門を、通過しなければならぬやうな地形となつてゐる。

●單に澁谷驛と、新宿驛とを比較してみても、「澁谷」は山手線上の單なる一驛にすぎないが、「新宿」は同時に中央本線の分岐點で、旅客の乘降以外貨物の集散が激しく、「田端」「秋葉」「汐留」などゝ肩を並べて、市內屈指の貨物集散驛となつてゐる。

●私が「さう觀る」如く、世人も亦さう觀てゐるに違ひない。

二

●かういふ點を、最も鋭敏に感じてゐるのは、欲張り銀行業者である。この新宿附近に、銀行の集中してゐる狀況は、澁谷

道玄坂附近に於けるよりも、更に一層甚だしいものがある。

●淀橋には、土地の金持連が寄つてこしらへた淀橋銀行といふのが古くからあつて、是が唯一の本店銀行で、其の他は凡て市内銀行の支店。タヾ一つ除外例として、中野銀行が角筈に支店を出してる外は。

●乃ち終點附近にあるもの、藤田銀行、淺田銀行、安田銀行、名古屋銀行、尾張屋銀行、丸の内銀行、東京貯蓄銀行、東海銀行、四谷銀行（休業中）の各支店加島銀行出張所に明愛銀行と驚ろく勿れ總計十有三。

●震災後、三越は青山七丁目に「マーケット」を開くと同時に、新宿追分にも小さな「マーケット」を開いたが、その敷地は坪千五百圓であつたと。坪千五百圓出しても、一日に數回入場を謝絶して、お客の整理をせねばならぬ程の繁昌振りだから『安いもんだ』との評判である。

●此の一劃に於ける成功者中の双璧と云はれる、洋食店の早川亭と、西洋雜貨店の櫻井とが、同じ鐵筋コンクリートの三層樓で、隣り合つてゐるのも、人の眼をひく。早川亭などは未だ漸やく三十五六歳、こゝに何錢均一かの見すぼらしい洋食店を出してから、僅かに十年の星霜だそうである。

●夕食時なら、大抵いつだつて滿員。別に料理がうまい譯ではなく、客も亦大抵はトンカツ黨で、繁昌の所以は「安い」ことゝ、女ボーイに美人を置かず酒の酌をさせぬ代りに「チップ謝絶」といふことにある。兎に角、出盛り時には七八人のコツプが汗を流してゐる。

●鳥料理の「鳥一」も一寸した家だし、支那料理の「福來軒」も、料理は知らぬが家は可なり大きい。果物問屋の「高野」は新橋の千疋屋の塁を摩し、「中村屋」のもなかとパンも慢るに足るものである。

●震災後増加した露店が、此の區域から食み出して、省線のガードをくゞつた向ふ側へ一列出現した。その中に「丸燒屋」と書いた一杯十錢の牛うどん屋がある。主人は口ひげを生しや小作りな男、京橋の燒出されだ相で、洋服を着てゐます。――但その男がお話なのではない。『女給さん入用。月給二十圓、他に收入あり』と書いた貼札がお話なのである。

●此の小ぽけな、薄ぎたない屋臺店が、月給二十圓の女給を雇入れ、萬一チツプを與れる客が有らば、それはお前さんの別途收入だといふ豪勢さが、お話の種になる。此の牛うどん屋はうどんに牛汁をかけて出すのでなく、牛汁で饂飩を煮しめて出すところに、特色がある。

●

三

◉誇りと云つてもよく、或ひは名物と稱してよいものが、こゝに三つある。乃ち一は西洋料理の「新宿ホテル」、二は洗湯の「双益浴場」三は活動常設の「武藏野館」である。

◉新宿驛前。巨然として聳ゆる白堊三層樓の新宿ホテルは、灰白色の貯水タンク及び赤煉瓦の專賣局工場などゝ相俟つて、淀橋の一偉觀である。株式流行の時代に、是が株式組織でなく松本三郎なる一個人の、經營になつたのも珍とすべく、最も直截簡明に、淀橋の繁昌振りを物語るものである。

◉二階三階を旅館に充て、階下は全部、麴町の「たから亭」が借受けて、食堂とレストランを經營してゐる。澁谷になく四谷になく、ひとり淀橋の有つてゐる自慢ものは、此の洋食であらう。卓上の挿花、雪白なナプキン、よく磨かれた銀のナイフとフオークも、甚だこゝろよい。

◉双益浴場は『都下の模範浴場』と警視廳が賞讃した程、設備の完備した、共同浴場であり、又子供の遊び場所でもある。東京の洗湯には類ひ稀れな洋館建築で、入浴は一切々符制度、浴槽の湯は絶えず新陳代謝して、常に一定の「清潔さ」を保持する仕組みとなつてゐた。

◉浴料は十錢、――取つたら興業じみる。これを世間並の五錢で入れてゐる處が値打なので、其處に、町内有志者の共同出資たる「双益商會」經營の光りがある、警視廳の「模範」と云ふのも、恐らくこゝらであらう。別に二間に四間――伊豆山溫泉の千人風呂そこ退けの大浴槽があつて、子供の遊泳場に充てゝゐる。

◉『浴場改良の先驅！ 双益浴場の出現を妨害した東京浴場組合も、今に見ろ、我が後塵を拜しつゝ、踵いて來なければならぬやうになるのだ』と、これが双益浴場の意氣であつた。震後暫らく休業してゐる。

◉武藏野館は、震災前からすでに淺草の帝國館、電氣館などゝ肩を竝べて、新聞へ二段ヌキの大廣告を出してゐた第一流の活動常設であつた。新宿淀橋ばかりがお得意でなく、遠く下町或ひは麴町、神田、赤坂、麻布邊にまで御定連を有つてゐた。況や是れからは名實ともに都下第一。

◉松竹キネマの特約館で、西洋もの專門。入場料も特等一圓二十錢、一等八十錢、普通席五十錢、震災後も依然此料金を維持し開館は平日は晝夜二回、金土日曜は午前十時より三回、と云ふ豪勢ぶりである。

◉それでゐて、晝夜ともに殆んど滿員。滿員毎に館員一同へ

配る謂ゆる「そば代」なるもの、半期の決算に一萬七八千圓に上る。「そば代」の性質を解せざる株主、「そんなに蕎麥ばかり食はせないで、時々は天丼なども取てやつてはどうか」と發言して、總會を笑はせたといふ珍談がある。

●徒らに、提燈持ちばかりすると、思はれては困る。新宿ホテルなり、双葉浴場なり、將た武藏野館なり、かうしたものをこゝに出現せしめ、斯く繁昌せしむる迄に、此の界隈の文化生活が、進んで來てゐることを、具體的に說明したいのである。

●淀橋町昨今の人口は、約六萬と見るのが先づ外れぬ處であらう。

四

●淀橋の一ツの悲哀は、市の大きな淨水場を預かりながら、少しも其の恩典に、浴することの出來なかつたことである。それでも、曩に澁谷町から『水を分配しようか』と申込まれた時は『その儀には及ばぬ』と謝絕した。澁谷などの御厄介になるものか、といふ腹がある。

●漸やく宿願が叶つて、今度市へ十一萬圓を納めて、町內各小學校への給水と、十箇所の消火栓だけは、近く實現の運びとなつた。第二期計畫として、百五十萬圓の豫算で、町內一般に上水道を敷設して貰ふことに、市との間に契約が成立した。

●たが其れは、市の現狀では、果して何時頃實行されるか、些か心細くないこともない。下水道の方は、國庫の補助を仰ぎ七ケ年繼續事業百五十萬圓の豫算で、町自からやることになつてゐる。

●青梅街道の第一期工事、乃ち西成子から中野町境の淀橋（橋の名）に至る街路取擴げ工事――幅員十二間、歩道車道を區別し、街路樹を植ゑる――は本年末迄に竣工の筈で、沿道の商舖は、悉く新しく立派に改築せられた。此の方面も亦、近く「新宿終點」附近に劣らぬ殷賑街となるであらう。

●新宿の遊廓は、先年國道筋から、裏手の方へ形付けてしまつた。――國道にあつても、裏手にあつても、要するにこれは淀橋のものではない。

●淀橋の歡樂境は「十二社」である。藝妓まがひの師匠なるものが三四十人も居つて、待合まがひの小料理屋が軒を連ね、梅林の如きは可なり名を賣つてゐる。

●一層公然の許可地として、こゝに色街をつくらう、町の發展策ともなれば、一年十二三萬圓の稅源ともならうといふのですでに町會は可決したが、教育家宗教家連の猛烈な反對をうけて、一時立消の姿になつてゐた。震災後再び此の計畫は擡頭し

て來た模樣である。

●もし花柳街の建設に敗れたら、熊野神社境内から池畔一帶にかけて、一大遊園地をつくり、活動その他の娯樂設備を施さうと、今度の計畫は二段に分れ、大分底力がある。實現するであらう。

●淀橋名物「町會の角づき合」。いやな名物である。市倉諒吉氏の率ゐる協和會、井上龍太郎氏や三島彌吉氏等が牛耳を執てゐる同志俱樂部が兩親玉で。これに實業會、淀橋會、五十人町會、維新會などが加はつて、事毎に卍字巴の混戰。町會ではいつも椅子が飛んだり、壯士が暴たれり、時々は血をも流すといふ殺伐なところである。

●自治體に黨爭は宜しくない、とあつて、前の陸軍大臣大島健一氏が柏木の閑居を乘出し、いろ／＼と膽を煎つて、今年の春、六派を打つて一丸とした、かくて多年の紛爭、春風とゝもに解け、淀橋町は初めて平和な町となつた、と思ひきやそれは表面だけのこと。内々は矢張りやつてるらしい。

●町將來の發展を沮害する。此の名物、早く溝へでも打つちやつちまへ。

西郊の町々

一

●澁谷・淀橋の、更にその外緣を取卷く目黑、世田ケ谷、代々幡、中野、大久保などいふ町々にも、一瞥を與へておき度い。目黑は昨年の十二月、世田ケ谷は今年の四月、「村」から「町」へ出世した。

●目黑は、東京の郊外として特にすぐれた武藏野氣分を有し且つ又、比較的長くその特色を支持してゐたが、此の兩三年來めき／＼と膨脹を始め、去る大正九年十月の國勢調査に一萬七千弱を示してゐた人口は　僅か三年間に倍加して、震災前二萬二千に達してゐた。今日は五萬を突破して居よう。

●昨年八月から今年六月迄、十ケ月間に增加した新築家屋が一千三百十四戸。一日に四軒乃至五軒の割合で、どし／＼新らしい家がふえてゆく。

●栗林などは疾くの昔に無くなつても、名物「栗飯」は無くならない。多摩川を泳いでる鮎の大さ三寸に足らずとも、河畔の旗亭で食はせる鮎は五寸を越えてゐるのと、同じ理くつである。孟宗藪も、漸次伐り開かれて宅地となり、もはや十五六町歩とは殘つてゐまい。四五年もしたら、名物筍も亦、目黑から姿を消すに至るであらう。

●然し賑かなのは、省線目黑驛前から行人坂下までと、不動附近の一割とだけで、澁谷淀橋に較べたら、まだ／＼「目黑村」。五萬といへば「市」にもしまほしき人口だが、是れを百八十餘萬坪といふ、莫迦々々しく廣い面積にばら撒いたら、四坪に一人の割合だもの。

●この事實は、目黑町が將來に、莫大な收容餘力を有してゐることを證據立てゝゐる。從來の交通線の外、田園都市電車はすでに目黑驛前より起つて、多摩川畔を經て、蒲田へ通じ、近き將來、市電は長者丸から不動下に通じ、玉川電車は「大坂下」から上目黑を縱斷する。

二

●世田ケ谷は、玉川電車の大橋停留場附近から三軒茶屋を經て、世田ケ谷上町の西端まで、一里十町ほどの間、ずつと人家がつゞいてしまつた。三軒茶屋附近が將來の殷盛區域。報徳銀行・農園銀行などが、素早く支店を出して、預金吸收をやつてゐるし、活動常設も目下建築中。銘酒屋もどん／＼殖えてゆく

●世田ケ谷の特色は兵隊町氣分。――砲兵旅團がある。名物は櫟並木と「襤褸市」。名所は松陰神社に豪徳寺。

●人口四萬、町とはいふものゝ、何しろ總面積三百萬坪から

ある廣大な武藏野ケ原、大部分は田と畠と雜木林で、人口の一萬や二萬、殖えても減つても、格別目立ちはせぬところだが、けふ此頃の夕暮時東京市內へ働きに出た勞働者が、疲れた足を引張りつゝ、電車線路に沿ふて歸つてくる有樣は、絡繹として織るが如し。それを目擊すると『世田ケ谷も變つたな』とおもふ。

●私が世田ケ谷に移り住んでから滿四年、その頃十五六圓であつた家賃は、今は大抵四十圓から五十圓になつてゐる。月に二度づゝ來た汚穢屋さんが、此の頃自轉車で飛んで步いてゐる、聞けば下町でバラツク建築をやつてゐる合資會社、何とか組合の代表社員ぢや相な。

●世田ケ谷村が「町」となると同時に、字池尻、字三宿などいふ百姓臭い稱呼を廢し、全町を十四區に分けて區制を敷いた。質屋と百姓を兼業にしてゐる私ん處の大家さんが區長で、前の八百屋さん、裏のかしら（人夫親方）が區會議員だ。

●八百屋さんは町內の名譽職（區會議員は無報酬乃ち名譽職なんである）になつても、相變らず車を引張つて、御用を聽きにくる。八百屋さんも偉くなつたし、區會議員から旦那と呼ばれる私も、何だか偉くなつたやうな氣がする。馬鹿だね。

三

●帝大の郊外移轉說が、大分八釜しい。最初は駒場(上目黑)へと云ひ、次で、駒場へは一高が來て、帝大は代々木原へ集合といふ說が傳はつた、移轉そのものさへ、實は未だ決定した譯ではないが、移轉するなら駒場・代々木何れでも結構と、涼しい顏をしてゐるのは澁谷で(何方も隣接區域だから)大いに氣を揉んで居るのが代々幡町である。

●代々幡町の人口は、震災前に於て四萬六千、震災後の今日は六萬を突破し、淀橋よりも少々多からうと云はれてゐる。東京市とは直接に區域を接せず、澁谷・淀橋の如き、華々しい繁華を望み難き代々幡は、帝大の代々木移轉によつて、將來の大東京に於けるラテンクオーターたらんことを希ひ、且つ夢みてゐる。

●甲州街道筋も、角筈をすぎて代々幡にくると、餘程場末氣分が濃厚で、繁昌記の仲間入をする爲には、尙數年の歲月あることを想はせるが、此の街道が、十二間道路に改修せられると同時に、繁華な商店街となるべきことは、容易に頷首かれる。そして一方、初臺一圓は引つゞき住宅地として發達してゆくであらう。

●中幡谷から、中野町雜色の――新設東京高等學校前に通ずる四間道路にも、新しい市街が出來かけてゐる。學問街建設の第一着手として、先づこゝらが發展し相である。

●多年の懸案であつた、幡ケ谷狼谷の火葬場は、いよ／＼移轉と決し、そこから大山公園(十萬坪、山下龜三郞氏所有)へかけた廣大な區域に、町營で、高尙な郊外公園を經營しようと計畫してゐる。

四

●犬公方綱吉時代には、犬小屋であつたところ、近くは軍用鳩と電信隊で知られた中野町も、近年ぢりぢりと發展して來た。震災後の活氣は殊に著しく、一日に平均五六軒づゝ、新築家屋が增加してゆく。

●目貫の場處は坪五六十錢、場末でも十五錢からの地代が取れるとなると、算盤を置いて熟々考へる迄もなく、鋤鍬ふるつて汗を流して、而も坪十錢以下に、收入を減らすなどは馬鹿らしくて出來ず、百姓はみんな、懷ろ手に咥へ煙管の地主樣と納まることにした。

●數年前まで、二千石の米が獲れた中野に、農家のかげを斷つに至つた理由は是れ。

●かくて町の様子も、どし／＼變つてゆく間に、淺田・石森などいふ大きな醬油醸造所が、ひとり昔の俤を留めて、殘つてゐるのは、趣きがふかい。然しそれもこゝ暫らくの命、現在六間の甲州街道を、十二間にする改修工事は、すでに新宿の方面から町境まで進行して來てゐる。

●雜色に新築されたる東京高等學校は、來年の新學期から使用の豫定であつたのが、一つ橋を燒出された爲め、急に引越して來て授業を始める。その一劃と町立第四小學校の一部へ、商科大學が同居する。俄かにどや／＼と、學生が入込んで來た爲、雜色一帶は大面食ひの態で、介慌として、書店・文具店・菓子店などを開店してゐる。

●此の界隈も、日を追ふておもしろくなる。

×　×　×　×

さて所定の線に達した、一先づ擱筆。

牛込の神樂坂、小石川の白山、接續地區では西巣鴨町、瀧野川町などの發展振りも、他日また機會があつたら、書いて見たいと思つてゐます。



悲しみを忘れ疲れを癒やす 愉快な話

山へ歸り行く父（童話）

小川未明

父親は、遠い街に住んでゐる息子が、どんな暮らしをしてゐるかと思ひました。そしてどうか一度行つて見たいものだと思つてゐました。

しかし、年を取るとなかなか知らぬところへ出かけるとなると、おつくうなものです。そして、自分の長らく住んでゐたところが一番いゝのであります。

「私は、こんなに年をとつたのに、悴はどんな暮らしをしてゐるか心配でならない。今年こそは行つて見よう」

父親は、遠い旅をして、息子の住んでゐる街にやつて來ました。それは、賑かな都會でありました。

靜かな、私などは、物音ひとつ聞えず、全くさびしい田舍に住んでゐました人が、停車場に降りると、あたりが明るく、夜でも晝間のやうであり、馬車や、電車や、自動車が、往來してゐる賑かな有様を見て、びつくりするのは無理のないことです。父親も、やはりその一人でした。

「お父さん よくおゐで下さいました」と、言つて、息子はどんなに喜んで迎へたか知れません。

息子はいまでは、この都で不自由なく暮らしてゐられる身柄でありましたから、父親に、なんでも珍らしさうなものを持つて來てもてなしました。また、方々へ見物にもつれて行つたりいたしました。

父親は、はじめのうちは、どこへ行つても賑かなので驚いて

ゐました。また、いまゝで口にいれたことのないやうなものを食べたりして、かうして、人間が暮らして行かれたら、仕合せなものだとも考へられたのでした。

　五日、六日といふ風に同じことがつゞきますと、その賑かさが、たゞさうざうしいものになり、また、毎日ご馳走を食べることも、これが人間の幸福であるとは、思はれなくなりました。

「お父さん、面白い芝居が、はじまりましたから行つてご覧になりませんか」

「いゝや、見たくない」

「お父さん、これから、何かうまいものを食べに出かけませう」

「いゝや、何も食べたくない」

　父親は、ぢつとして、家の中に、坐つてゐました。

「どうしたのですか？　お父さん」と、息子は、何を言つても、父親が氣乗りをしないので、心配して問うたのでありました。

「私は、國へ歸りたくなつた」と、父親は、答へました。

　息子は、これを聞くと、眼を圓くして、

「あんなさびしい山の中へ歸つても仕方がないではありませんか。どうして、あの不便なところがいゝのですか？」と、息子は、父親の心をはかりかねて、たづねました。

「私は、國へ歸りたい」と、父親は、答へました。

「お父さん、何かいけないところがあつたら、言つて下さいまた、私達が、氣の付かないところがあつたら、これから、氣を付けるようにしますから、もつと、こちらにゐて下さいまし、そのうちに、お父さんは、この街の生活にも、おなれでありませうから……」と、息子は、ひたすら眞心をあらはして言ひました。

　すると、父親は、頭を振つて、

「いや、私は、却つてお前が國に歸るように、つれに來たのだが、お前は、歸らないか？」と、言ひました。

「どうして、お父さん、私が、歸ることができましよう？」

　息子は、父親の顏を見つめて、呆れた顏付をしました。

　それから、日ならずして、老人の故郷に向つて旅立つて行く姿が見られたのであります。

　その日は、一日、息子は、家にゐて、父親のことを案じてゐました。

「あんなに、お年をとつてゐられるから、道中、何か變つたことがなければいゝが……」

「いま頃、汽車は、どのわたりを通つてゐるだらうか……」

いろ／＼と息子は、思ひました。そして、道すがらの景色などを思い出しては、眼に描いてゐたのであります。

汽車は、高い山々の麓を通りました。大きな河にかゝつてゐる鐵橋を渡りました。また黑いこんもりとした林に添つて走りました。白壁の土藏があつたり、高い火の見櫓の建つてゐる村をも過ぎました。そして、翌日の晝過ぎには、故郷に近い停車場に着くのであります。

「いま頃は、お父さんは、あの街道の松並木の下を歩るいてゐなさるだらう……」と、息子は、都にゐて思つてゐました。

それは、廣々とした野中を通つてゐる。昔ながらの道筋でありました。年とつた松が、道の兩側に生ひ立つてゐました。野の面を見渡すと、だん／＼北の海の方に伸びるに從つて低くなつてゐました。そして、その方の地平線は、夕暮方になつても明るくありました。

山には、蟬や、蜩が鳴いてゐました。老人は、もう多年この山の中に生活をしてゐます。道すがらの木も、草も、石も、またこの山に住んでゐる小鳥や、蟬や、蝶に至るまで、毎日のやうにこの山道を步るく老人の咳ばらひや、足音や、姿を知らぬものはありません。

父親が、街道を步るいてゐますと、電信柱の附近に鳴いてゐる燕は、「今、お歸りですか」と、いふやうに聞えました。

夕燒の空は、昔も、今も、この赤い、悲しい色に變りがありません。父親は、夕燒の空を眺めました。

「よく、自分は、悴の手を引いて、夕暮方、町から歸つたものだ。あの時分の悴は、どんなに無邪氣で、可愛らしかつたか。あの悴がいまでは、立派な人間になつたのだ。私が、こんなに年をとつたのも、無理はない……」と、感へに耽つたのでした。

そして、老人は、いよ／＼山道にさしかゝりますと、山の上は、まだ、麓よりは、もつと明るくて、蝶が飛んでゐました。

「いま、お爺さんお歸りですか？」と、言つてゐるやうに、人なつかしげに、老人の身のまはりを飛んでゐました。蟬も、蜩も、この時、みんな聲を揃えて鳴き立てました。

「よう歸つておゐでなさいました。あなたのお山は、いつでも平和です。お爺さん、あなたは、いつまでもこのお山におゐでなさい。そして、決して、他へ行くなどと思ひなさいますな」と、みんなして言つてゐるやうに聞えました。

お爺さんは、にこ／＼してゐました。

「なんで、こんないゝところを捨て、他國へなど行けるものか」

いつまでも、いつまでも、この山の中の自分の家に、暮らさうものと思ひました。そして、その憐れげな、小さな影を道の上に落しながら、一歩、一歩、登つて行きました。

かうして、父親は、また、故郷の人となつたのであります。

こんどは、息子が、毎日のやうに父親の身の上を心配しました。「お父さんは、ほんたうに年をとられた」と、彼は、父親の姿を眼に思ひ浮べました。自分が子供の時、父親の後からついて町へ行き、また山に歸つた時は、父親は、まだ若く、力が強く、達者であつたのです。さう考へると、なぜ早く、この都へ越して來られないものかと案じてゐました。

「あのさびしい、不便な、田舍がなんでいゝことがあらう。ぜひ、今年の中に、迎へに行つて、つれて來なければならない」と、息子は毎日のやうに思つてゐました。

それに、秋から、冬にかけて、山の中は、風が寒く、吹雪がすさまじいのでありました。息子は故郷にゐた時分の記憶を決して、忘れることができません。

「雪の積る冬は、お父さんは、どうしてあんなところで暮らされやう」

息子は、とう／＼お父さんを、自分の住んでゐる賑かな街へ迎へるために、久しぶりで故郷へ歸つたのであります。

息子は、自分の生れた、古い家の中へはいりました。すると、いろ／＼の思ひ出が、そのまゝよみがへつて來るのでした。壁板に書いた、子供の時分の樂書が、なほうすく殘つてゐます。よく鳥籠をかけた戸口の柱の小刀の削り痕もそのまゝであります。雨の降る日には、土間で獨樂をまはした。そして、よく、かち當た敷石もちやんとしてゐました。何もかも昔のまゝであつたのであります。

息子は、ぼんやりとした氣持で、二三日は過してしまいました。

「お父さんは、都へお出になりませんか」と、息子は、言ひました。

「いや、どうして、この長く住み慣れた家を捨て行けやう」と、父親は、頭を振りました。

「お前こそ、こゝへ歸つて來て、いつしよに暮らしたがいゝ」と、父親は、息子に向つて言ひました。

息子は、都に殘して來た、仕事のことを思ひ出しました。そして、どうしても都に歸らなければなりませんでした。

二人は、互に別れて暮らさなければならないのを悲しく思ひました。

「これは、お前が子供の時分に、裏の庭さきで拾つて大事にし

てゐた石だ」と、父親は、言つて、床の間の臺の上に乘せてあつた黑い石を取り上げて、息子に見せました。

「私は、お前が子供の時分に、持つてゐたおもちやは、みんな粗末にしないでしまつて置く。そして、時々出して見ては、お前のことを思ひ暮らすのだ」と、父親は言ひました。

これを聞くと、息子は、どんなに父親の情を有がたく感じたか知れません。そして、その黑い石を手に取つてつくづくと眺めますと、やはり、自分にも子供の時分のことが思ひ出されたのであります。

殆んど、幾十年の間、その石は、故郷のうす暗い、家の床の間に、埃を浴びて置かれてゐました。

「お父さん、私は、この石を持つて行つてもようございますか？」と、息子は、父親にたづねました。

「あゝ、いゝとも、お前の持つて行く分には差支へない。なんでもほしいものがあつたら持つて行くといゝ」と、父親は、答へました。

長い、長い間、かうして、ぢつとしてゐた石が、こゝから、どこかへ、全く知らぬところへ持つて行かれることになりました。それは思ひもよらないことで、變化といふものが、どんなものゝ上にも來ることを思はせたのであります。

石は、息子の鞄の中へ、紙に包まれてはいりました。

彼は、また外に出て、小供の時分よく遊んだ草原へやつて來ました。そこには、いろいろな草が紫や、青や、白の花を咲いてゐました。その花は、このあたりには澤山あつても、都では、とても見ることができませんでした。彼は、その花の一つ、一つのを昔のお友達にでも遇つたやうに、なつかしげに眺めました。蜻蛉が飛んで來て、輝やかしい羽子を花に止まつて休めてゐます。それに、ぢつと見入つてゐると、その頃、いつしよに草の葉や、花を摘んで遊んだ、近所の女の子や、男の子の姿がありありと目さきにちらつくやうに映つてくるのでした。

しかし、その女の子も、男の子も、もう今ではこの土地にはゐません。みんな大人になつて、女の子はお母さんになり、男の子はお父さんになつてゐるのです。けれど、この草原の景色は昔と少しの變りもありませんでした。草に咲いてゐる花の色も、また蜻蛉の羽子も少しの變りがありませんでした。

息子は、考へました。「この草も都へ持つて行かう。そして、朝晩眺めて、故郷のことを思ひ、子供の時分のことを考へよう……」と、彼は、紫色の花の咲いてゐる草を根をつけて掘り取つたのであります。

やがて息子は、都に歸ることになりました。父親に、別れな

ければならぬ悲しみで胸いつぱいにして旅立ちました。
汽車は、來る時と同じ道を通つて、つひに二たび故郷から遠く去つてしまつたのであります。
幾百里も、遠いところを石と草とが運ばれました。石や、草はどうして、こんなに遠いところへ來るなどと思つてましたでせう？
息子は、植木屋に、草といつしよに石も鉢へ移させました。そして、草と石とを、時々見ようとしたのであります。植木屋は、鉢の中へ、草を植ゑ、程いゝところへ石を置きました。
「これで根が付けば、たいしたものです」と、植木屋は、言ひました。
息子は、植木屋に向つて、「これをどこに置いたらいゝだらうか」と、聞きました。
「左樣です、寒いところに生へる草ですから、風當りのいゝ高いところがいゝと思ひます」と、植木屋は、答へました。
息子は、これをバルコニーに、出して置きました。そこからは、都會のいろ／＼な工場から上る煙が黒くなつて見られました。ちようど黒い蛇の這ひ上るやうにいつしか青い空に煙は吸ひ込まれて消えてゐるのでありました。
また、いろ／＼の巷から起る音が聞えて來ました。風は、いまゝでは、常に南から吹いてゐましたが、だん／＼北から吹く方が多くなると、季節も變つて、熱さは去つて行つたのです。
燕は鳴いたり、雀も稀に來て、家根の上などで鳴きましたけれど、草は、故郷の草原で聞いたやうな、いゝ小鳥の聲には二たび出遇ひませんでした。
太陽は、東から出て、西に沈みました。けれど、あの黒い森影から上つて、あの高い、雪の光る山の彼方に沈むのではありませんでした。いつも埃りつぽい建物の家根から上つて、あちらの家根の間に落ちるのでした。草は、夜々、大空に輝く星の光りを仰いで、獨りさびしさに泣いたのです。故郷の露深い、蟲の聲の繁き、草原が慕はれたからです。そこに、いまもなほ花の咲いてゐる姉妹や、友達がゐるのが、かぎりなく戀しかつたのです。
ある日、草は、下に默つて坐つてゐた石に向つて言ひました。
「あなたも、遠くから來なされたのですか」
「えゝ、やはり汽車に乗つて、あなたといつしよにまゐりましたのです」と、石は、答へました
すると、草はさも疲れたといふ樣子をして、
「あなたは、體がお丈夫ですから、どこにゐられてもいゝので

すけれども、妾は、もうこんなに弱つてゐます。つい、こゝに來るまでは、はかない自分の運命といふものに考へつかなかつたのです」とさも後悔したやうに、語りました。

これを聞くと、流石に默つてゐた石も、感慨に堪えない風で、

「私は、長い幾十年かの間、無事に暮らして來ました、そして、恐らく、永久そのやうに暮らされるものと思つてゐました。それが、思ひがけなく、こんな身の上になつてしまつたのです。これから先のことを考へると不安でなりません」と、石は、言ひました、

やさしい草は、自分の身を忘れて、石に同情したらしかつた。

「けれど、あなたはお丈夫ですからご安心なさいまし。妾は、枯れゝば、明日にもあの人通りの多い道の上に捨てられてしまふかも知れません。さうすれば、あの怖しい車や、馬に踏まれて、妾の體は、跡形もなく碎かれてしまふでせう」と、花は、言ひました。

「いえ、私だつて同じことです」と、石は、言ひました。

かうして、草と石とが相慰め合つたのも、束の間のことでありました。草は、とう〳〵枯れてしまつたのです。

息子は、草の枯れたのを、どんなに悲しんだか知れません。

「そのうちに、何か、かはりのいゝ草を見付けて來て植ゑて差上げます」と、植木屋は、言ひました。

ある日のこと、植木屋は、バルコニーに上りました。そして、枯れた草の鉢を持つて降りて來ました。何か それに代はりの草を植ゑようと思つたからです。

その後のことでありました。息子は、夜床の中にはいつてから、枯れた、草や、持つて來た石のことを思ひ出しました。せめてあの石なりと大事にして、紀念にして置かうと思ひました。そして、夜の明けるのを待つてバルコニーに出て見ますと、いつの間にか、そこには新しい草の植はつた鉢が置いてありました。そして、もとより枯れた草も、石も影だに見られませんでした。

「この草は、どうしたのだ?」と、言つて、家内の者に聞きますと、「昨日、植木屋が、あなたのお留守に持つて來ましたのです」と、答へました。

息子は、枯れた草は仕方がないとしても、石は、どこへ行つたらう。植木屋に聞いて見ようと早速、植木屋を呼びにやりました。

「あの、草の下にあつた、黑い石でございますか。つまらない

石だと思つて、捨てしまひました」と、植木屋は、答へました。

息子は、これを聞くと大そう驚きました。

「あの石は、私の大事な石だ。どこへ捨てしまつた？」と問ひました。

すると、植木屋は、しばらく考へてゐましたが、

「たしか、こゝからの歸り途に、あちらの廣い空地に捨てしまひました」と、答へたのであります。

その空地は、もと建物があつたのですが、いまは何もなく草が茫々として生へてゐました。そして、小供等は、その中に遊び、通行する人達は、近道するために、その空地を横切つたのであります。

息子は、どんなに、がつかりしたか知れません。どうしても、その石を忘れることができませんでした。すると、黒い石が、夜露にしつとりと濡れて、廣場の中で月の光りに照らされて輝いてゐる夢を眺めました。

ふと眼を醒ましますと、外は、ちやうどその夢に見たやうないゝ、月夜で、小さな窓が明るく月光に照らされてゐました。彼は、早速、起き上りました。そして、その廣場へ、石が落ちてゐないかと探がしに行きました。

すつかり秋の景色となつて、こうろぎが鳴いてゐました。うす霧が一面に降りて、建物の間や、林の木の間や、廣場の上に渦巻いてゐるやうにも見られました。

息子は、あたりが、すでに眠靜まつた眞夜中頃、一人廣場にやつて來きますと、果してさびしい月の光りが草の葉をば照らしてゐました。けれど、黒い石が、どこにあるか、もとより容易に見當ることができませんでした。彼は、あちらへ行き、こちらへさ迷つてゐますと、うす霧の中に、しよんぼりと立つてゐる人影を見出しました。

「いま頃、何人が立つてゐるのだらう」と、怪しみながら、よく見つめますと、それは、美しい、若い女でありました。彼は、好奇心からつい、その傍に近づいて見る氣になりました。

「いま頃、あなたは、そこに何をしてゐられますか？」と、彼は、たづねました。

美しい女は、ぱつちりとした、すゞしい眼をこちらに向けました。そして、彼を見てゐましたが、につこりと笑つて、

「妾は、寶の珠をさがしてゐます。もう幾十年も前のことでありました。妾は、お嫁に行く前に、ちやうどこのあたりであつた窓から、ある日の日暮方、寶の珠をあやまつて落しますと、それが轉げてどこへ行つたか見えなくなつたのです。それが

ら、妾は、いくら探かしたか知れません。お母さんからは叱られました。しかし、どうしても、なくした珠は見付からなかつたのです。妾は、一生そのことを忘れませんでした。今夜も、また、妾は、その珠のことを思ひ出して探しに來たのです」と、その若い女は、答へたのであります。

彼は、この話をきくと、何となく體中が、ぞつとしました。女の姿を見ると、長い黒い髮は結ばずに、後に垂れてゐました。

若い、美しい女は、一生懸命に、足許の草を分けて、珠を探がしてゐました。彼も、また草を分けて、何かそのあたりに落ちてゐないかと、熱心にたづねましたけれど、別になにも見當りませんでした。

「どんな色の珠でしたか？」

から言つて、彼は、顏を上げて、もう一度仔細に若い女を見ようとしますと どこにも女の影は、見えなかつたのです。

不思議なことがあれば、あるものだと思つて、しばらく彼は、茫然として、佇んでゐました。

月は、西に傾きました、そして、思ひなしか、東の空は白んで、どこからか、曉を告げる鷄の鳴く聲が聞えて來ました。霧は、いつしか晴れて、空は青味をまして頭の上に垂れかゝてゐました。

―一三、十一作―

シャボン玉物語

「さあこれから管を吹きます、何が出るか消えぬうちに御覧下さい」

稻垣足穗

風をひろつた話

私は海水浴場を歩いてゐた。

頭の上からカツと太陽が砂に照りつけ、そこに乾してある赤

や黄の派手な縞のついた女の海水服や、白い天幕が強烈な未來派の繪に似た渦を卷いてゐる。そこを通りぬけると、綠色の四角な小舍があつたが、その窓の縁にとゞくまで砂がよせかけてある。どうしたのだらう、子供が窓をのぞくために集めたのか知ら、それにしても高い窓でもないのに……と近づいた拍子に、その砂がムク〳〵と動いた。オヤ！　と思つた時、そこに斜に立てゝあつた白ペンキの立札が目についた。それには The Horse と下手な字が書いてあるので、急いで砂を堀つてみると、そこに馬が入つてゐた。しかもそれは生きたチョコレート色のいゝ馬だつたので、自分はそれに乘つて歸つた。ハイシー　ハイシー！…………

どうしてその煙草を吸ふか？

この頃巴里で流行してゐる赤踏(レットソックス)派のシガレットつて云ふのは、匂のいゝ紙卷ですが、それに細い一本の赤い條が縱についてゐるんです。これを吸ふのは、まづ瀟洒なコーヒ店の圓テーブルに、あなたの好きな人と向ひ合つてゐる時でなくちやいけないんです。

「まあスマートなシガレットね」

あなたが銀のケースから一本取出すと、その人はかう云ふでせう。そこであなたはマッチを擦つてもらふのです。

「えゝなか〳〵面白いやつでね、そらこの赤い線が惡氣じやありませんか、ちやうど君のやうに……」

からあなたが笑ひながら云ふと

「たんと仰つしやい！」

さう云つて、その人はあなたを可愛いゝ目でにらむでせう。そこであなたは、その顔にプーッとうすい紫色の煙をふきかけるために、ずつとからだを前にのばして強く吸ひこむんですね。白いシガレットの先の火が、二三ミリばかりあなたの口元の方へ進むでせう。そのとたん、ズトン!!!　と花火が鳴つて、仕掛けられた彈丸が飛び出します。

「まあ驚いた！」

と、瞳を張つたあなたのお友だちの白い額には、いつの間にかハイカラなダイヤの赤い星が一つくつゝいてゐるといふわけになるのです。

——が、それは何もダイヤとばかりは限つてゐません、クラブでもスペードでもハートでも、それからその他に三日月や、星や、黒猫や、蝙蝠や、各國の旗や、いろ〳〵のものがあります。そして、その何が仕組んであるかは、火をつけてみないとわからないところに、このビツクリタバコの面白味があるので

す。ついでに云つてをきますが、これは、元來、着物とか手のひらに向つて發砲するやうに出來たものなのです。しかし、これも勿論それとはきまつたわけでもないでせう。冒險と自由が若いあなたの戀の信條である以上はね。……

ピエロー登場

マンドリンオーケストラで幕が開くと、舞臺は一面に眞青で、そのまんなかにまん圓い月がぶら下つてゐる。三角帽子のピエローがゼンマイ仕掛の人形のやうな足取りで出て來る。

ピエローの獨唱

「昔私は月を見た
　今晩私は月を見た
　それは昔と同じ月
　今も昔も同じ月
　これから先も同じ月」

月の獨唱

「それから先はどうなつた」

ピエローの獨唱

「それから先もそれだけさ」

歌が終ると同時に月からシューと赤と青の火花が噴き出して、そのまゝ矢車になつて廻り出す……黑い幕が急に落ちる。

カイロから歸つて來た人の話

名を云ふのは憚かるが、君の好きなあのタバコの製造元で、かなり世界的にも名を知られたその會社が、僕があそこを出發するすぐ前の日につぶれた。わけはと云ふに、その會社で最近スフィンクスといふシガレットを造つたのであるが、その百本入の箱についてゐるスフィンクスの畫が、夜中に歩き廻るといふ噂が立つたのだ。そんな愚にもつぬか話を信じたわけではないが、僕もその頃は少し退屈してゐたし、物好きにその百本入を買つてみたのさ。匂はよいが、價段の割にしちやあまり感心も出來ない。ところでへんな話だが、笑つちやいけない、誰にだつてそんな好奇心はあるもので、僕はその箱についてゐるスフィンクスが歩き出すかと思つて毎晩注意してゐたのだ。勿論、そんな事が起らう道理がない。だけどね、不思議なのは、僕の一笑にふすべく巷の風説はあまりにもかまびすしいではないか。で、僕は氣にかゝるものだから、とう／＼會社へ出かけて社長に面會して、事の眞疑を問ひ正したのだ。勿論、社長は笑ひ出して、そんな馬鹿な事はない、が、どうもその噂には當方も困つてゐると云ふのだ。そして、近頃試驗に歩いてみたと

いふ上等のシガーを僕にすゝめながら、今にこいつが飛行船になつて飛びまはるのだらう、そんな冗談を云つて、彼自身もその一本にマッチをつけて、プーと煙を吐いたがね。その時チラツと僕の方に注がれた奴の目の色はどうも少しへんであつたよ。と云ふわけは、その時、僕が直感したとほりの事が當つて、案にたがはず會社がすぐに倒れたじやないか。さうさ、そんなつまらない風説を人をやとつて云ひふらさして、それでもつてタバコの販路を擴めようとしたのさ。それが發覺して、いやそれもなあに、さくらに使つた人に割増をやらなかつたとかそれが少なかつたとか云ふケチくさい事で、それがために常から會社に恨みを持つてゐた者に告訴されて、それが負けたといふ事になつたのさ。かうしてあの有名な會社が一朝にしてバタ〳〵と倒れたのだ。何、をかしな話だねだつて？　さう何しろ相手がタバコ會社だからね、話が煙のやうなのも無理はあるまいて。――

Aの氣轉

お孃さん姉妹と、O氏と、Aと、自分とで初夏の景色を見に出かけた時の事である。

思はないまはり道をして、お晝までには豫定のところへ行かれなかつたので、大へん咽喉が乾いて來た。で、折から見つかつた小さな旗を出した家へ入つたが、そこはほんの田舍の茶店だから何にもない。棚にならんでゐるサイダーやビールの瓶には、眞白に埃がつんでゐて、何年前のものか見當もつかないほどだ。仕方なしにコーヒを注文したが、それが又ゴミくさい事つたら、とても飲まれた代物じやない。男の方はまあ辛抱もしようが、それじやお孃さんたちがお氣の毒だ。どうしようかと考へてゐる時に、Aがやにはに麥藁帽子を取つて、テーブルの上に仰向けに載せた。

「ねえ、これはたつた昨晩買つたばかりの帽子です。このなかで諸君の飲物をこしらへようと思ふのですが、別に御意存はありませんか？」と一同を見まはした。

何の抗議も出なかつたので、それじやと、Aは、店の者にコップを五つ用意させて、自分はポケットから新聞を取り出した。

「これは今朝のクロニクルです。僕がまだ目をとほしてゐないほどだから、新らしい事は又この上なしです……」

云ひながら、それを片手にさしあげて帽子の上でふると、そこに印刷されてあつた活字がバラ〳〵と下へ落ち出した。すつかり拂ひ落して白紙になつた新聞をすてたAは、帽子を取つ

て、その底にたまつた活字を二三回よくふりまぜた。そして、それを一つかみづつ手早くコップのなかへ放りこんだら、忽ち、ジユーと、コップのなかゝら白いものがもり上つて來た。

Aは帽子をうしろに引いてみんなに云つた。

「出來立てのミユンヘンです。どうぞ泡の消えぬうちに……」

追つかけられた話

暫すぎに人通りのない坂路を歩いてゐると、右手にある大きな煉瓦建の倉庫のなかで、ガラガラツ……と螺旋のもどるやうな音がした。すると　そこにある8といふ番號のついた鐵の扉の下から、水のやうなものが流れ出て、土にしみながら蛇のやうにクネ〳〵うねつて足の下まで來たので、あはてゝからだをよけると、こんどはその方へ向きを變へて來た。で、反對の方へそらすと、そこへもついて來る。逃げ出すと、それも又大へんな速さで追つかけて來た。一生懸命に畑の方へ走つたが、やつぱりついて來る。それがもう踵にとゞきさうになつて、自分は息が切れて倒れさうになつた時、ちやうど頭の上にさし出た樅の枝をめがけて、エイツと飛びつくと、水のやうなもは足の下を通りぬけて、一直線に半丁ばかり先の方にあつた馬車の下まで行つたと思つたら、馬も車も二吋ほどの破片になつて飛び散つてしまつた！……

無用意な誘拐

霧のふる夜、令孃が公園のまへの廣場を歩いてゐると、むかふから一臺の黒い箱形の自動車がやつて來て、その前にピタリと止つた。

なかゝら覆面の紳士がとび出して、やにはに令孃の胸へピストルを突きつけて、自動車に乘れといふ。仕方なしに乘ると、自動車はうごき出したが、それが格別どこへ向つても走らずに、同じところばかりグル〳〵まはつてゐる。一たいどうするつもりだらうと、令孃はうすぐらい電燈に照らされてゐる車内を見まはす折から、ふと足下に落ちてゐる紙片に目を止めた。となりに腰かけてゐる紳士の油斷を見すまして、ひろひ上げてそこに書いてある字を讀むと

「さて、この話をどういふやうに運ばうかな？」

朱脣の力

何でもそのお孃さんが、帽子屋のなかでお友だちの買物をするのを待つひまに、入口のところへ行つて、氣なぐさみにその厚い磨ガラスのドアーに息をふきかけて、絹ハンカチで二三べ

んこすつてゐると思つたら、忽ち、そこから表をとほる人や、むかふの辻にあるオートモービルがハッキリ見え出して來たさうだ。それに、そのドアーの磨ガラスと云ふのが、決して糊を引いたものでなかつたと云ふから、話は少しばかり怖つかなくはないか？　と云ふのさ、君！

レモン水の秘密

Bが造つてくれたレモン水のうまい事つたら、口のなか一パイに何とも云へぬ涼しい香りがしみ渡つて、とてもこの世のものとも思はれません。どうして造るのだといろ／＼にたづねてみても、言を左右にまはしたBはなか／＼白狀しないのです。そこで或る晩、それは、その一週間ばかり以前から初めて製造され出したBのレモン水が、さらに一きわの香りと涼しさを增して來た頃でしたが、私は、一たいどうするのだらうと、友だちの注文にコップを持つて座を立つたBのうしろについて行つたのです。不思議な事には、Bは勝手元へは行かずに、反對に階段を二つものぼつてとう／＼物乾に出たじやありませんか。オヤと思つて、物かげから息をこらして見てゐると、屋根に匍ひ上つて行つたBは、その一等高いところで背のびをして、その上に出てゐる十三夜のお月さんから、そのレモン水をしぼり取つたのです。

客と主人

客が來て二時間ばかり經つた時、主人は手をのばして傍の机からアルバムを取つた。

「ちよつとこれにはめづらしいのがあります。廿五六頁あたりからごらんになつて下さい」

さう云つて客の前にさし出した。

受け取つた客が、さつそく廿五頁をあけると、そこには「もうい丶かげんに歸らないか？」と記した紙片がはさまつてゐた。だが、客は云つた。

「ほう、これや面白いですな。やはり、あちらでは今でもこんな風俗をしてゐるのでせうか……」と、感心しながら「さて」とつぶやいて、懷中から金時計を出して龍頭を押した。「もう失敬しませうかな、あまり遲くなると又……」

「まだ早いぢやありませんか、夕飯をすましていらつしやつたらどうです……」と云ひかけた主人が、客の手に開いた時計の蓋の裏に何氣なく目を注ぐと「まだ／＼歸るものか！」と少さい紙片が張つてあつた。

それから一時間ばかりして、主人は新らしいコーヒを出し

た。客がそれを飲み終らうとした時、茶碗の底にこんな字が書いてあつた「無神經！」

そこで客は立ち上つた。

「長くなるやうですから……」

「も少しいらつしつては……」

「いゝえ、用事がありますから」

「さうですか、そりや殘念です。では又近日中に是非共……」

客が表へ出やうとすると、門のそばに名刺のやうなものが落ちてゐるので、ひろい上げると「どうだ參つたか！？」と書いてあつた。

玄關まで送つた主人が、舌を出して座敷へ歸ると、客の忘れた扇子があつた。ひろげてみると太い字で「月夜の他に闇があるぞ！」

停らない理由

動いてゐる電車にとび乘つて、ハンドルを取つてゐる運轉手に、挨拶がはりの笑をもらした針金の束を肩にかけた工夫があつた。そこで、運轉手は笑ひ反したかと云ふにさうではない。彼はその工夫をまるで知らないやうにすましこんでゐた。で、人ちがひかなと思つた工夫は、運轉手の顏を見なほしたが、やはりいつもの男なので、もう一ぺん笑つた。が、運轉手はやはり知らぬ顏をしてゐる。工夫は怒つてしまつた。すると、こんどは運轉手の方が笑つた。しかし、思ひの他工夫が六つかしい顏してゐたので、てれかくしにハンドルをグルッと廻した。電車はビューと一さう速く走り出した。運轉手はしばらく前方からとんで來る電柱を見てゐたが、やがて工夫の方をふり向いて「怒つたのかい？」と云つた。

「馬鹿にするない！」と工夫がどなつた、

ガラス窓と車輪の音の間にも聞えるやうな激しい叫びが、二三回交されたと思つたら、格鬪が初まつた。しかも、ハンドルをフルーに置き放しにされた電車は、乘客にも停留所にもおかまひなしに風のやうにとんで行く……

* * * *

その停留所で待つてゐる時、滿員でもないのに、停る筈の電車が停らなかつたので、私は、車中で多分そんな事件が起つたのだらうと想像したのである。

本が怒つた話

或る日、三階で讀んでゐた本をポンととじたハヅミに耳のそばで

「面白いか？」と云ふ聲がしたので
「面白くない」と云ふと
「何が面白くない！　何が！　何が！　何が！……」と肩をこづきまはされて、窓ぎはに押して行かれて、おまけに足をはね上げられたので、アツといふ間に明いてゐた窓から眞逆様に落ちた。

ジエキル博士とハイド氏

ジエキル博士は世にたぐひのない仁者であつたが、彼は自分の信念からきつちり十二時間起きて、十二時間眠つてゐた。ところが、その睡眠中に、彼はハイドと云ふ世にもたぐひのない惡漢になつて活動 るのである。しかも、その夢がハツキリして、次の晩から次の晩へ論理的の經過をたどる事は、正にジエキル博士がそんな生活を現實にやつてゐるとしか思はれない。おしまひには、どちらの方が夢であるかと云ふ事さへちよつと見當がつかなくなつて來た。彼は少なからず煩悶した。――自分は醒めてゐる十二時間には德望ある醫者として多くの病人を助けてゐるが、次の十二時間には正反對の事をして、人々を戰慄させてゐる。これやさし引ゼロではないか？　そこで、親友である數學者にその事をうち明けた。

「何も心配するには及ばない」と數學者は云つた。「つまり君が一晝夜に一つの善事なり惡事をすると假定すれば、君は一晝夜に十二の善事をして、十二の惡事をしてゐる事になる。だから、君がハイドになる睡眠時間を今一時間短かくすれば、君は十三の善事をして十一の惡事をするから、さし引いて君は一晝夜に一つの善事をする事になる。かうして改めて行けばわけはないではないか？」と數字に書いて說明した。

成程と感心したジエキル博士は、早速、その敎へられたとほりにやつてみた。一週に一時間づゝ睡眠時間をへらして、三週間の後には、彼は十五時間起きて九時間眠た。そこで、話は數學者の豫想どほりに、ジエキル博士の善がハイド氏の惡とさし引いて、一晝夜に三つづゝ勝つて行く勘定になつたかと云ふに、さうではない。こゝにジエキル博士の苦悶がさらに輪をかけたと云ふのは、彼の夢に現はれるハイド氏は、その活動時間が短縮されたゞけ、それだけよけいに惡辣な手段をめぐらし、實に身の毛もよだつやうな數々の犯行を重ねるのは、とてもジエキル博士の十五時間の善事をもつて對抗する事が出來ないほどである。それでも博士は屈せずに勇敢な態度を持して、最後に睡眠時間を一時間にしてしまつた。あゝしかし、そのたつた一時間中のハイド氏の惡は、なほ、廿三時間中のジエキル博士の善よ

りも强かつたではないか。連日の睡眠不足に青い顔をして今はその事で倒れさうになつた博士は決心して、ピストルの銃口をこめかみに當てゝ引金をひいた。轟然と音響がとゞろいて、そこに吾々は血に染つた不幸な博士の姿を見出したらうか？　いや決してさうではない。安心し給へ。神は徒らに仁者を殺さなかつた。その悲壯な反省行爲は、實に、善と惡との火玉をちらす死物狂ひの爭闘の裡にあつたジエキル博士とハイド氏との境目に於てなされたのである。そして、彈丸は間一髪のところでハイド氏の方へ命中したのだ！　かくて長年博士を苦しめた惡夢は一掃された。ドクター・ジエキルの德望はいよ〳〵昇つた。めでたし〳〵。

「どうして動物は話をするか」

宇野浩二

地震後混亂した道具類の中から、思ひがけない、もう失つてしまつたのだらうと思つてゐた、六七年見なかつたら反古箱を見出した。その中から發見したのが、この「どうして動物は話をするか」といふ一綴りの原稿である。言ふまでもなく、これは私が書いたもので、題から本文から、全部私の十年前の筆蹟で現されてあるが唯一つ、その署名のところに、私のでない筆蹟で、「阪本紅蓮洞」と認められてある。その筆蹟を見るまでもなく、この原稿の一瞥は忽ち私に、私の十年前の牛込の下宿屋での生活を思出させねばならなかつた。

その當時私は月々の下宿屋の費用をどうして拂はうかといふ何のあてもなくて暮してゐた、それでゐてこんな下宿屋のまづい物を食つて辛抱が出來るものかと朝から晩まで吠じてゐた。私は何處でどうして手に入れたのだつたか、それは多分お洒落な婦人が湯屋に行くのに、化粧道具でも入れる爲めのものであつたらうか、それを提げて朝晩近所の魚屋や八百屋へ買物に出かけた。そして家にはアルミニユームの煮物鍋を一箇持つてゐ

た。それで下宿屋の御膳の物を傍に置いて、別に味噌汁をこしらへたり、魚を煮たりして食ひ食ひした、つまり普通の規則正しく下宿代を拂ふ人たちよりも、そんな酔興な贅澤をして暮してゐたのである。無論普通の下宿屋のことであるから、さういふ風にしても部屋代と賄代とは一般に出さなければならない、その上、さういふ煮物の爲には外の客の三倍もの炭代も拂はなければならなかつた。だから一俵二十錢だかの炭では到底やり切れないと思つて、私は風呂敷に新聞紙を添えて、夜陰に乘じて五錢づゝの計り炭を買ひに行き行きしたものである。そしてそれ等の金を何處から得たかと言ふと、質屋から融通してゐたのであつた。だから、そんな生活は二ケ月とつゞかなかつた。

その頃私の部屋に最も屢々現れたのが阪本紅蓮洞であつた。彼は、多分彼も亦私と五十歩百歩の生活をしてゐたものであつたらうが、彼は私を憐んで「何か俺に向くやうな原稿を書いて見ろ、何とかしてやるから、」と言つた、「あんたに向くやうな原稿とはどういふのだい？」と私は聞いた、「さあ、それや困つたな、俺にも一寸分らないな、」と彼は考へ考へ、「お前は英語が讀めるだらう。上野の圖書館へ行つたら確かにある」、と言ふには、今はもう名前を忘れたが、何とかいふ英吉利の雜誌の最近の號に、電氣鰻と馬との戰爭といふ記事が出てゐる、それを和譯して來たら、冒險世界に賣つてやる、と斯う勸めてくれたのである。私は早速圖書館に出かけて行つて、言はれた通りにして來ると、紅蓮洞はそれを持つて冒險世界に出かけて行つて、五圓なにがしの金に代へて來てくれた。それが親と質屋とでなく、私が金を貰つた最初のものであつた。私の驚きと喜びとは全く筆紙に盡し難いものであつた。

その後、私が又紅蓮洞に、あんな風なことで金がもらへるものなら、又世話してもらひたいと賴むと、「よし、又考へとくよ、」と彼は癖で、襯衣の胸のボタンを無暗にひねりながら言つた。それから二三度私が催促した末に、彼は何處から持つて來たのか、英文雜誌の切拔らしい紙切を持つて來た。彼はそれを私の机の上に載せながら、「これを極く平易に飜譯してくれ、」と言つた。そして私は又早速その通りにした。それがこの「どうして動物が話をするか」である。それを彼はばら〳〵と無雜作に繰り開くことに依つて讀みながら、「これは少し硬いな、もう少し易しく出來んか、」と言つた。「幾らでも出來るよ、」と私が答へると、彼は「これは然し案外面白くないな、」と言つた。「面白くなくはないよ、」と私は言つた。彼はそれに答へないで、暫くの間原稿をひねくつてゐた。彼は私にこれを書かしたのを内心後悔して居るやうに見えた。彼がそれを懷中に入れて私の部屋

を出て行く時、この前の電氣鰻と馬との戰爭の時と違つて、變に悄氣てたやうに見えた。果して、それがどんな理由でだつたかは忘れたが、都合よく賣れなかつた證據に、十年後の今私の反古箱の中から見出された所以である。

今度、中央公論記者が私に求めて、陽氣な、疲れを忘れるやうな話を書いてくれと言ふのである。私たちは不斷文章を賣つて生活してゐるものであるが、考へて見ると、大抵の場合、いつも自分勝手な事を考へて、自分勝手な事を書いて、言はゞそれを讀む人が陽氣にならうと、陰氣にならうと、溜息を吐かうと、肩を凝らさうと、そんな事を考慮する事は殆どない。又私たち歪みなりにも藝術を作らうとするものは、それでよいといふ事になつてゐる。だから、落語家のそれのやうに、注文通りの內容の文章を引受けることなど、甚だ無理なことと言はねばならぬ。一應斷つた上で、さて私は苦笑しながら「どうして動物は話をするか」を持出した所以である。これからそれを讀んで見る。但、文字通り讀むと長くなるから、飛ばし飛ばし、或ひは部分部分その梗概を讀んで見ることとする。

「どうして動物は話をするか?――」などと言つても、諸君はそんな馬鹿々々しいことを、それはお伽話のことでゞもあるだらう、と思ふに違ひない。無論、私たちもさうは思ふのだが、然し、そんなお伽話の上でのやうに彼等が自由自在な話をするとは思へないが、何か簡單な方法で話の代りのやうな事は確にする。といふことをこゝで言ひたいのである。

たとへば、諸君が家に飼つてゐる犬を注意して御覽なさい。怒つた時に吠える聲と、或ひは何處かへ散歩に連れて行つてやらうとする時に鳴く聲と、留守にしてゐて歸つて來た時に嬉しがつて鳴く聲とは全然違ふではないか。彼は外へ出たい時にはひそ〳〵と囁くやうに吠える。表を通る他の犬を見た時は叩くやうに吠える。寂しい時には泣くやうな吠え方をする。それは犬ばかりでない。庭の雄鷄を注意してゐると、彼が何か食べ物を見付けた場合の鳴聲は一種特別である。果してそれを聞きつけた數多の雌鷄は一勢に彼の周圍に集まつて來る。即ちそれは食物を見付けたといふ知らせの聲に違ひないのである。若しそれが所謂鷄鳴をする時には、決して先の場合のやうに雌鷄は集まつて來ない。殊にこの雄鷄はよく他の雄鷄を見附けた時に、この鷄鳴をすることがある。その聲はひどく挑戰的に聞える。すると　果して他の雄鷄が同じ聲で應じて、見る〳〵うちに二羽の雄鷄は喧嘩を始める。それを雌鷄の場合で見ると、彼女は卵を生む時によく氣たゝましい聲でかい〳〵と鳴くが、さうするとその夫鷄やその朋輩鷄が駈けつけて來るのは大抵の人が

知つてゐることであらう。

若し鷹とか、その外恐るべき敵が頭の上に飛んで來た場合には、雄鷄は又全く違つた調子で鳴くものである。それを聞くと雌鷄たちは大急ぎで小屋の中に隱れてしまふ、つまりその雄鷄の聲は警戒を意味するものに外ならない。それに反して雌鷄が小さい雛を大勢連れて歩いてゐる時の聲は、何とも言へぬ優しさと氣遣ひの調子に響くものである。離れちやいけないよ、道草しちやいけないよ、とでも言つてゐるのであらうか。そして彼女はふと食物を見付けると、又違つた聲で鳴いて雛鷄等を呼ぶものである。斯ういふ風にいろ〳〵と擧げると、一羽の雌鷄からでも直に六つや七つの違つた言葉を聞き分けることが出來る。

然し、斯ういふのは何といつても甚だ單純な會話法で、丁度人間の赤ン坊の程度位である。唯人間と違ふのは、それが殆ど發達しないだけである。が、さういふ動物でも、唯の恐れとか、怒りとかを現すだけに止まらないで、互ひに或考へを交換することも出來るといふ證據が屢々見當る。數年前のことであるが、一疋の野良犬が足を折つてロンドンの病院に入れられて、そこで大變大事にしてもらつてうまく療治してもらつて歸されたことがあつた。すると、それから數日後、同じ犬が外の犬を一疋連れてやつて來た。見ると、その連れられてゐる犬が足に怪我をしてゐるのである。これで見ると、先の犬が何かの方法でその友だちの犬に、一緒に來給へ、その傷がなほしてもらへる所があるから、といふ事を話したに違ひない。どうしてそれを表現したかは神樣でなければ分らないが。

古い文法には言葉を三つに分類してある。第一は斷定、第二は命令と要求、それから第三は質問。これに依ると、動物はこの第一と第二は音で現して、第三の場合は多分その顏つきとか樣子とかで現すものらしい。よく飼犬がその主人の前を歩いて行つて、道の分れ目のところへ來ると立止まるか、後戻りして來て、如何にも、質問そのもの〻やうな恰好をして主人を見ることがあるのは、私たちのよく知つてゐるところである。或ひは又私たちが散歩に出ようとすると、その時犬にとつて連れて行つてもらへるかどうか分らない、すると、彼は私たちの顏を見ては、門の所へ走り、振り返つては又戻つて來る、それは先に言つた道の分れ目の場合と同じである。私は嘗て動物が鳴き聲で質問を現した例を聞かない。

さて、鷄が他の鷄に食べ物の發見を敎へることとか、犬が他の犬に警戒の發音をすることとかは既に述べた通りであるが、もつと小さなもの、例へば田舍などに行つて、蟻の類が巣を營

な時分に、それの邪魔をして見ると、彼等は屹度けたゝましく囀り立てる。ところが、同じ邪魔をするにも、人間がする時と、猫がする時とでは、その囀り方が明らかに違ふ。して見ると、そんな小さな鳥でさへも、同じ危險を知らせるのに、或程度まではその危險の種類まで知らすことが出來ると見て差支へないだらう。或加奈陀の博物學者が、鴉の樣々な鳴き聲に就いて次のやうな事を發表して居る。言ふには、或鳴聲は無事平安を示して居り、別の鳴聲は或種の警戒を現し、又他の鳴聲は鷹とかその他肉食鳥の來襲を意味し、又外の聲は人間が鐵砲を持つて來たといふ事を報告する。それは悉く鳴聲には違ひないが、一々その調子が違つてゐることが確かだ。卽ちたとへば電信の符號のやうに、長く引張つたり、短く幾つにも切つたり、といふ風に。

が、そんな事に注意を拂はない私たちは、例へば白嘴鴉などはいつも同じやうな聲で鳴くもので、夢にもそれで話などするものとは想像しないが、或觀察家の報告に依ると、彼が或時の數時間、一羽の白嘴鴉が巢を營んで居る下に身をひそめて、そつと伺つてゐたところが、それが色々な違つた狀態の下に、少なくとも三十二種の違つた聲（或ひは言葉）を數へることが出來たさうである。

雉に就いて豐富な智識を持つて居る或人の話に、野性の雉の卵を取つて來て家畜の雌鷄に孵させて見ると、その幼ない雉の雛は初め一日二日といふもの、頻りに物欲しさうに大きな口を開いて訴へるやうに鳴き歩いてゐた。養母の雌鷄が心配さうにその後を何か言ひながら附いて廻る。然し結局養母の鷄の言葉が雛鳥の雉に通じないらしく、結局鷄の命令は少しも行はれないで、雛は散り散りになつてしまふといふことである。この例でも分るやうに、同じ鳥類でも類の違つた鳥は違つた鳴聲を持つて居て、丁度人間同志の種族の違ひのやうに、違つた種類の鳥の間では、その境遇がどんなに親密であつてもその言葉が通じないのである。

こゝで、私たちは誰でも私たちと最も近い關係にある猿のことを、猿こそ最も人間に近い巧妙な話し手だらうと想像する。が、事實は案外さうでもないので、或阿米利加の教授が數年前阿弗利加の內地に這入つて行つて、數週間森の中で大猿の群に交つて、彼自身は檻の中に住居して、彼等の會話の樣子を研究したが殆ど得るところがなかつたといふことである。彼の研究したところに依ると、殊に獸の中でも大猿は無口な性質ださうで、多分五種以上の言葉を持つて居ないらしいといふことである。而もその五種類も至つて不確かなもので、唯狒々の一隊が

道を歩いて居る時、その中の大將株のものが何か變な聲を出すと、全隊が止まつたり進んだりする事だけは本當らしい。唯、小猿になると始終女のやうにぺちやくちや喋つて居るらしいが、それは誰もこれといふほどの意味を探り得ないやうな種類のものである。要に角、私たちの遠緣である猿猴類は、身體の方と反對に、會話術の方では一向進歩して居ないらしい。

猿から一足飛びに昆虫に移つて見よう。これは少し突飛なやうであるが、事實は昆虫こそ、殊に蟻や蜂の場合になると、その會話術の進歩は一番人間に近いやうに見えるのである。彼等は單に希望とか、命令とかを現す以上のことをその會話でやつて居るのである。或博物學者などの說に依ると、本能といふ點に於いては、彼等はあらゆる高等動物（人間をも含めて）以上に發達してゐると言ふ話である。

人間にあつては智識は理論の形式を取る。卽ち人間はその學んだところを思考し、結論を造り、それに依つて働く。ところが、下等動物にあつては智識は本能の形式を取る、彼等は自然の衝動を持つてゐる、それが彼等に何をすべきかを敎へる。その評で、蟻や蜂は、人間以外の如何なる、他の動物も及ばないやうな、驚くべき働きをするのである。それに又、昆虫と雖も少しも理智的な力を持つて居ないといふことは言へない。彼等も亦極く低級にだがそれを持つてはゐる。同樣に私たち人間にしても屢々理智ではなく、本能だけで動くことがある。例へば食ふとか、飲むとか、眠るとかいふやうな自然の行爲は、私たちの父祖が私たちに改めて敎へたものではない、赤ン坊は物を考へるやうにならぬ先から、食物を取ることを知つて居る。何は兎もあれ、理智は人間を待つて最も完全な花を開き、本能は蟻に於いてその極妙を盡して居る。卽ち人間が地上の王であれば、蟻は地中の王と見ることが出來よう。

若し諸君が一の蟻塚を研究して見るなら、そして彼等の小市街が如何に驚くべき組織を持つて居るかを知つたなら、この小市民たちが互に會話をする何かの方法を持つことなしに、こんな立派な市街を造るとは思へないだらう。諸君は又二疋の蟻が途中で會つた時、必ず彼等が互ひに觸角を觸れ會つて挨拶する爲に立止まることを知つてゐるだらう、それはどんなに不注意な人でも、彼等が何か話し合つて居るに違ひないことを思はせるに十分な恰好である。

一疋の蟻がそれを運ぶのに、餘り大き過ぎたり、或ひは重過ぎたりする物に出遭すと、彼は早速その巢に走り戾つて、數疋の友達を連れて引返して來る。つまり彼は何かの方法でその友達に加勢をしてくれといふ事を表現するに違ひないのである。

サア・アベビュリイといふ人がある。彼は數年來その研究室に蟻の巢を置いて、朝から晩まで彼等の行動を見て暮して居る人である。多分、彼は現存のどんな蟻學者よりも一層詳しい蟻學者であらうが、その彼は夙にこの蟻の會話といふことに就いて、それが確にあり得ることを力說してゐる。彼は樣々の實驗を重ね、盡せる限りの手段を講じてそれを研究した結果、それは多分觸角と觸角とで話し合ふに違ひないと言つてゐる。

彼が或實驗報告の一として、言ふには、「私は先づ各二呎六吋の長さの糸を三本、互に並行さして、六吋づゝの幅を置いて並べた。そしてその各一端を蟻の巢に觸れさせ、他の端にはそれぞれ杯を置いた。そして一つの杯の中には蛹を四五百疋入れその次のには同じものを二つ三つ入れ、第三のものは全く空にしておいた。私はそこで二疋の蟻をとつて、その一疋を澤山の蛹の這入つて居る杯の中に、今一疋を少ない蛹の杯の中に放して、そして默つて見て居た。二疋の蟻はそれぐ\大急ぎで巢に歸つて行つた。ところで、この二つの杯から二疋の蟻が單にいゝ獲物があるからといふ位の程度の報告を持つて來たとするなら、この二本の綱を傳はつて來る蟻の數は先づ同じ位と見なければならない。

ところが、この實驗の結果は、蛹の一ぱい這入つて居る方の杯には、その受持の蟻が二百五十七疋の蟻を呼んで來たのに對して、少しゝか這入つて居ない杯の方へは唯の八十二疋來たばかりであつた、そして一疋の蟻も空の分へはやつて來なかつた。これで見ても、蟻はその友達にあの中に蛹があるといふことを告げるだけではなく、何方に澤山あるかといふことをさへ敎へることが出來るといふ事が明らかな譯である。

その外いろぐ\な實驗が色々な條件の下に出來るだけ蟻の能力を試さうとして、サー・アベビュリイに依つて行はれて居る。そしてそれは悉くこの小さな昆虫が智識を持つてゐるばかりでなく、それを他の者に傳へることさへ出來るといふ事を證明して居る。同じやうな實驗は又他の人たちに依つて蜜蜂にも、山蜂にも試みられて居るが、それ等が又悉く彼等が互ひに思想を交換する或能力を持つてゐることを示して居るのである。」

これで「どうして動物は話をするか」一篇は終つて居るのである。どうして私のやうな柄にないものが、こんな通俗科學話のやうなものを書いたか、それがどうして記者の求める陽氣な、面白い、疲れを忘れる話になるか、と問はれたら、私は辯解する言葉を持たない。然しこれの原文を今は十年前私に持つて來てくれた阪本紅蓮洞のところへ、これで得た金でキスキイの一瓶でも買つて、持つて訪ねて行くことにしたらどうであらう

か。そしたら、彼一人だけでも面白がつて、陽氣になつて、そして疲れを忘れることは確かだらう。

（十一・七）

戯話

われ鍋にとぢ蓋

上司小劍

われ鍋。（おど／＼して）只今！

とぢ蓋。（きげんよく）今來たのか。（白みの多い眼で、じろりと見る。）

われ鍋。へえ一時半の汽車で着きました。この前參じました時にくらべると、まるで乞食町でしたな。東京はえらい火事や。

とぢ蓋。もう、地震や火事の話を聽くのはいやぢや。何んぞ面白い話をしてくれんか。……時にみんなはどうした。子供等は？

われ鍋。みな氣を利かして、表で待つてまんね。伊太郎も作二郎もお秀も早苗も。五年ぶりやさかい、お父ッつあん、お母んと積る話があるやろいふて。（もう五十になる皺のよつた顔を、ぽうッと赤くする。）

とぢ蓋。さうか。（六十幾つの肥えた大きな顔に、ほく／＼と、好人物らしい喜びを浮べる。しかし、其の間の拔けた喜び顔が、ちよッと曇つて。）伊太郎も來よつたんか。そいつあア。……

われ鍋。そやけど、わてえが東京へ來たら、伊太郎も居るとこがおまへん。來年は徴兵だすよつて、それまで置いたッとくなはれ。よろしおまッしやろ。

とぢ蓋。よいもわるいもないわ。親の家に子が居るのは當り前だ。みんなまアよう來よつた。狹い家だが、どうにかして寢られるだらう。

われ鍋。何んの狹いもんだッか。昨日までゐた大阪の家なア、四疊半一と間だッせ。そこに皆居ましたんや。これは六疊に三疊やおまへんか。今までゐたところにくらべたら、御殿

や。東京は乞食町になつたが、わてえ等御殿に住めるんや。嬉しい。嬉しい。（子供のやうに喜びつゝ、身體にくらべて、小さい頭の上の小さい丸髷を振る。）

とぢ蓋。お秀にもさう言つといたが、わしはもう決してお前をわるう思ふてはゐないよつてな。死んだ姉貴やそこの音藏にだまされて、あんなことをしたけど、あれはわしの本心やない。お前もわるう思ふとくれなや。（大きな眼に涙をいッぱい溜めて、ほろりとする。）

われ鍋。（めそ〳〵泣き出す。）わてえもあんたがわるいとは思ふてやしまへん。何もかも義姉はんと音藏はんの指し金やといふことは、何んぼ阿呆でも、知つてます。ほんまに毒性な人や、義姉はんと音藏はんは。……あんたみたいな正直な、おとなしい、親切な人をそゝのかして、妻子を棄てさせるんやもの。（啜り泣く。）

とぢ蓋。勘忍しとくれ。わしがわるいのやない。（大きな、しみだらけの手で、俯伏しになつて泣き入るわれ鍋の背を撫でる。）

われ鍋。そらわかつたる。あんたがわるいとは思えへん。（起きなほる。六十幾つの夫と五十の妻とが、十次郎と初菊との如く、手に手をとり交はして泣く。）

われ鍋。（やゝ暫らしてから、涙に濡れた顔に悦びの笑ひを浮べて。）丁度五年前の、忘れもせぬ六月の朔日や。（ちよッと振り事になるやうな、身の構へをする。）あんたはなア、あんたはなア、お醫者はんとこへ行くといふて、朝の十時頃家を出なはつたなア。これが妻子と一生の別れやと思ふても、何んともなかつたんッか。

とぢ蓋。もう何んにもいふとくれなちうのに。……あの時、わしが小さい風呂敷包み一つ持つて出がけに、落し話の短かいやつをして聽かしたやろ、土間に立ちながら。……おぼえてるか。

われ鍋。いゝえ、忘れました。そんなことどこやあれへん。何んしよ、お醫者はんへいて、それから、事によつたら、奈良へ廻はつて一晩泊るか知れんと言ひなはつたやろ。そやさかい、其の晩はきつと奈良やと思ふて、皆安心して高枕で寢てましたやが、スルト大地震や。

とぢ蓋。地震が揺つたのか。

われ鍋。家だけの大地震や。あんたが實印を持つて出なはつたやろ。あれから義姉はんと落ち合ふて、登記所へいて、家も地面も皆賣りやはつたんや。其の金持つて東京へ逃げなはつたやろ、東京では、惡人の音藏はんが待つてゐて、あんたをどこ

へやら隠してしまやはつた。家では、わてえや子供が、自分の寝てゐる家も、地面も貸家も皆其の日のうちに人手に渡つたるとも知らずゝ、高枕で寝てましたんやで。……翌る日になつても帰りはおらん、二日経つても三日経つても戻りやはらへん。さア分らん、義姉はんとこへ聞き合はしても、知らんと言やはるし、東京の晋蔵はんに手紙で尋んねても、知らんといふ返事や。さうかうするうちに、義姉はんが来やはつて、こゝの地面も家も、わしが買ふた言やはる。家も地面も買ふといて、あんたの行く先きは知らんて、あんまりや。何んぼ阿呆のわてえでも、それほど踏み付けられては、怒るのが当り前や。それが無理かいな。

とぢ蓋。もう止してくれ。お前に今更それを言はれると、つらい。もうおいとくれ、よう分つたる。わしがわるいのやない。(髪が胡麻塩になつた大きな頭を掻く。まだ晩秋にもならぬのに、水鼻汁が垂れかゝる。)

われ鍋。あんた五年も東京に居て、まだうまいこと江戸弁が使へまへんのやな。男には江戸弁がえゝ、さツぱりして。……あんたみたいに、江戸弁と大阪言葉をチャンポンに話しゝなはるのが、一番いかん。

とぢ蓋。これもわしがわるいのやない。わしは、常時お前のことばツかり覚へてたさかい、お前を忘れないやうに、お前の使ふてる言葉を忘れなんだのや。しみだらけの大きな手を伸ばして、太い指先きで無器用に、われ鍋の鼻の頭を突く。弛んだ口元から涎が落ちさうになる。水鼻汁とゝもに。)

われ鍋。(皺だらけの顔をまた赤くして小娘のやうに羞かしがる。)てんごうしなはんなや。(もつと顔中を撫でて貰ひたさうに、とぢ蓋の方に摺り寄る。とぢ蓋は人並みはづれて、身體も手足も力士の古手のやうに大きいので、小づくりなわれ鍋の、特に不釣合ひなほど小さい顔面と頭とは、とぢ蓋の掌におつかぶさつて、一升鍋へ二升鍋の蓋をしたやうであつた。かくして、とぢ蓋の大きな掌は、心ゆくまでわれ鍋の顔を撫で廻はした。鼻糞のつくのも厭はないで。)

とぢ蓋。(漸うわれ鍋の顔を撫でることを止めて。)可哀さうに、お前痩せたなア。

われ鍋。五十老婆が子供のやうにうなづいて。)そら痩せまツしやろかいな。えらい苦労しましたがな。……義姉はんは、さアもうかうなつたら、お前は離縁や、子供等は皆奉公に出せ、と足もとから鳥が立つたやうに言やはりまつしやろ。二た月だけ家賃を取らんよつて、其の間にちやんときまりを付けなはれと言やはりまつしやろ。昨日までは家主やつたのに、今日から

は家賃をせんならんかと思ふと、この胸が張り裂けるやうだしたで。……伊太郎も作二郎も皆怒りよつて、伯母ちやんを出刃庖丁で突き殺して、わしも死んだる言ひまんねやがな。そんな無茶しいな、いふて、わてえが止めましたんやで。

とお盃。(愉快氣に。)伊太郎も作二郎も、今ならやり兼ねよらんやろけど、あの時はまだ子供やつたさかいなア。

われ鍋。そやけど、義姉はんの方では、却つて恩に着せてはりました。……わしがあゝしてやつたよつて、たとへ一萬圓の金でも殘つて、あいつが其の金持つて隠れよることが出けたんや。あの阿呆な家內とのら息子とのら娘であゝしてこれから五年もやつてよつたら、あんじやう食ひつぶしてしまひよるいふな。いツかど親切に世話燒いたつもりでゐやはりましたんやで。……あんたもさう思ひなはつたのか、そやなかつたら、もつと早う、わてえや子供をなんで助けとくなはれへなんだ。(怨めしさうに、とお盃を睨んだわれ鍋の眼は、どんより濁つてゐた。)

とお盃。姉貴が生きてよつたらちはなア。(嘆息する。)

われ鍋。そらさうと、あんた其の金どないしなはつた。其の一萬圓!(きつとなつて身構へる。)

とお盃。(また頭を掻いて。)お前の籍を拔く時、千三百五十圓やつたやろ。殘りをチビ〱使ふて、そいでもまだ六千圓は殘つたるがな。

われ鍋。(ほつとしたやうに。)それ聞いて安心や。(表で立ち聽きしてゐた子供たち二十一歲の伊太郎を先頭に、おの〱『安心や、安心や』と叫びつゝ、ドヤ〱入つて來る。狹い家が忽ち人でいつぱいになる。今日のことがあるので、昨日放逐した綺麗好きの屑婆が拭き込んだ鏡のやうな板の間まで汚なく塗つてしまふ。十八歲のお秀、父の敷島を見つけて、立て膝しながら、スパ〱吸ふ。)

とお盃。みんな揃ふて嬉しい、嬉しい。生れてからこんな嬉しいことはない。……どうや、五年前家を出る時、落し話を一つ聽かして、わツとみんなを笑はして、それをキツカケに敷居を跨いだあの落し話を、もう一遍聽かさうか。(好人物まる出しの大きな顏をくづして、ホク〱喜ぶ。『謹聽。』と伊太郎が隅の方で叫ぶ。)

とお盃。朝寢が好きで、まだ朝顏といふものを、生れてから一遍も見たことがないといふ人があるのや。一遍はどうしても、朝顏を見たいと思ふて或る朝一生懸命で、六時に起きやはツたんや。さうすると、咲いた朝顏が、一時に皆萎んでしまふた。朝顏の言ふことには、お前が起きたから、もう十二時かと

思ふた。あはゝゝゝ。（皆あはゝゝゝ。）

われ鍋。（あわてた風で。）あんたまた其の落し話をして　みなを笑はしといて出て行きなはるんやないか。……出て行くんなら、今度はお金だけ置いといとくなはれ。……

暴君と妖姫

田中貢太郎

七月七日の夜のことであつた。福建の藩主耿精忠は藩邸の奥の池塘に臨んだ樓閣に寵姫を集めて乞巧の宴を張つてゐた。その碧瓦を葺いたそり棟の簷端には、水晶の簾を垂れてそれを赤い珊瑚の鉤でつるしてあつたが、それには銀色に燃える燈籠の灯が映つて深みのある趣を添へてゐた。耿は閣の眞中の卓に背の低い横肥りのした體を寄せてゐた。その耿の後には雲母の屏（ついたて）が置いてあつた。綺麗に著飾つた若い女達は耿の左右に居並んで桃の花のやうな唇を見せてゐた。

南方閩中の大氣は依然として夏であつたが、それでも季節は爭はれなかつた。輕い肌觸りの宜い風が思ひだしたやうにそそりと動いて、その風の動くたびに蘭麝の強い香がこぼれるやうに匂ふてきた。それは左右の梁の間に一つづつ懸けてある香毬からであつた。その廊下には勾欄に沿うて綵縷を張つて、それに野からとつて來た瓜や荔枝などを掛けつらねてあつた。もしその瓜の上に蟢子が來て網をこしらへるなら巧を得たしるしである、女達の中には王の機嫌を害はないやうにとその顔色の宜い時を見て、そつと席をはづして廊下へ行き、瓜から瓜へとその眼をやる者があつた。

勾欄の外には水水した月の光があつた。その時もし空を仰ぎ見る者があつたなら、そのそり棟の屋根の上近く、天漢（あまのかは）が白い練絹を置いたやうに南から北にかけて流れてゐるのを見たのであらう。それは靜な乞巧にふさはしい夜であつた。耿は珍らしくゆとりのある氣持ちになつてゐた。耿の右脇には袁姫がゐて酌をしてゐた。それは長手な細そりとした顔で、蟬の羽のやう

に薄い藍色の服を著てゐたが、それには海珠を織り込んであるので、體を動かすたびにぎらぎらと星の數瞬のやうに輝くと共に、白い豔麗な肌が依約として透けて見えた。これが褒姫の好んでする服裝で、それがまた耿の好みにかなつて、特に寵をほしいままにしてゐるのであつた。

火は琥珀色の玻璃盃を持つてゐた。その耿の前には彼が好きな雜羞の料理が並べてあつた。褒姫の前には榛栗と熊白を置いてあつた。耿はふとあることを思ひだして、褒姫に云つて笑つた。それは靈芝と云ふ若い侍女のことであつた。それは春の頃、その侍女が狐つきのやうになつて、男を近づけだしたので、耿は怒つて平生のやうに皮を剝いで虐殺しようとしが、殘忍な彼はまだそれで足らないので、その前に汚辱を加へやうと思つて、二十人の少年を選んでそれに近づけたところで、女は不憊の狀態にあつたから、彼の心がやはらいで、邱堅可盈、是不可厭也と云つて釋してしまつた。

『あれは豪い女だ』

耿はまた濁のある大聲をだして笑つたが、咽喉に唾が溜つて來たので一つ咳をしてそれを床の上に吐いて、盃に指を觸れたところで、傍にゐた護衛兵に氣まぐれな考へが行つたので、一口飲みながら左の方へ眼をやつた。

『小林、』

雲母の屏に背をくつつけるやうにして四五人の若い男が並んで立つてゐた。その男の中には鳥の羽の柄の長い大きな團扇を持つてゐる者もあれば、戟を持つてゐる者もあつた。

『は、』

戟を持つた小柄な男が眼をいきいきとさした。それは林青と云ふ護衛兵であつたが、敏捷で愛嬌があるので耿から姪かなんかのやうに可愛がられてゐる者であつた。

『來い、』

『は、』

林は耿の傍へ寄つて行つた

『お前は家内が有るのか、』

林は笑つたきりで何も云はなかつた。有るも無いもそれはあまりに明白なことであつたからであつた。

『今晩は、天上でも、織女と牽牛の二つの星が、天漢で、年に一度も歡會をする晩だ、だからわしも、かうして女達を集めて、それを祝つてゐるのだが、獨身者を見ると氣の毒になる、どうだ、家内を持たしてやらうか、』

林はまた笑つたが笑つたままではゐられないと思つた。平生王の詞は冗談が本當になつたり、眞面目が冗談になつたりして

判斷がむづかしいために、王の怒を買つて大變なことになるのであつた。

『どうだ、冗談ぢやないぞ、ほんとに持たしてやらうか、わしは藩王だから、冗談は云はない、持たしてやらう、わしの傍にゐる女の中で、お前の好きな女があるなら、云ふてみよ、何人が宜い。好きな女があるのか、』

耿は自分の云つた詞に興奮して、みやうに責任を感じてゐた。女達の眼はその王の顔と林の顔との間に集まつてゐた。

『は、』

『何人か好きな女があるのか、』

林は自由に藩邸の內外に出入りすることを許されてゐるので、女達とは馴れ親しんでゐた。

『は、倩霞、倩霞でございます、』

耿は林の顔をぢつと見詰めた。

『倩霞か、倩霞か、なるほどお前の眼にも、倩霞は綺麗な女と見えるか、』

耿はかう云つてから哀姬の方を向いて意味のある笑ひ方をした。

『小林はなかなか眼が高い喃、』

女の中には倩霞もゐた。林はきまりがわるいので俯向いてしまつた。

『よし、それでは、明日、お前と倩霞と天緣が有るか無いか、ためした上でやることにする、』

耿の詞の中には何か考へついたことがあるらしかつた。

『は、』

林は自分の前に何か高い大きな堤のやうな物ができたやうに感じた。

●

林は藩邸の外にある自分の室で王からの使を待つてゐた。彼は夜半過にぎ藩邸から歸つて來るなり、降つて湧いたやうな、そして氣味の惡い幸福に就いて考へだしたが、それがためにその夜はろくろく睡らなかつた。

正午近くなつて內豎の少年が來た。林はその少年に隨いて王の室へと行つた。耿は孔雀の羽でこしらへた柄の長い大きな團扇で背の方を煽がせながら坐つてゐた。

『來たか、よし、これから倩霞と天緣が有るか無いかをしらべる。わしの傍にをる女を三十人、幕の內へ入れて、手を出させてある、倩霞と思ふ掌へ、その名を書いて來て、それで天緣が有るか無いかが判る、』

『は、』

『それでは筆をやる、それを持つて行つて、倩霞と思ふ女の掌へ、名を書いて來い、』

耿は笑ひ笑ひ桌の上の筆を執つてそれに硯の墨汁を含ませた。

『間違へて天縁を取り逃がすな、』

『は、』

林は王の手から筆を貰つて、内豎に隨いて後廳へと行つた。そこには紅錦の幕を張つて、その幕には横に並べてたくさんの穴をこしらへてあつた。

幕の中では女の笑ふ聲とぼそぼそと囁く聲とが交つて聞てゐた。内豎が何か云つてあいづをすると、その聲がぱつたり止んで、もそもそと體を動かす氣配がしたが、それと同事に幕に開けた穴から白い手先が出はじめた。それは皆掌を仰向けにした左の手ばかりであつた。それは王の云つたとほり三十もあるらしかつた。

「さア、見てから書くが宜いよ、」

心安い内豎が促した。林は女の手の皆が同じやうに見える上に倩霞の手の特徴を知らないので躊躇した。しかしそれでもなんとかして知らうと思つて、倩霞の姿を強いて浮べやうと努力しいしい幕の右の端へと行つた。彼は自信はないが右の端から一心にしらべてみやうと思つたからであつた。

白いそしてすこし赤味を帶びた細そりした手は、最初の手もその次の手もまだその次も皆同じやうであつた。林はどうして倩霞を見別けて宜いか判らなかつた。と、林の頭にはつきり浮んで來た蒼ずんだ眼をした女の左の無名指の爪が二寸ばかり延びてゐた。彼はまた最初の手から無名指に注意して歩いた。

中央になつたところで、無名指の爪のばかに長い手を見つけた。しかしその弱弱しい生氣にとぼしいやうな指は倩霞のやうでなかつた。林はまだ他に無名指の爪の長い女がゐはしないかと思つて向ふへと行つたが、それほど爪の長い無名指は他に見當らなかつた。林は引返して中央の無名指の爪の長い手に行つて、思ひ切つてその掌へ倩霞と云ふ文字を力を入れて書いた。

『書いたか、書いたか、』

窓の入口の所に耿が二三の内豎と共に來てゐた。林はそれと見て微笑を見せて近づいて行つた。

『小林が字を書いた女を連れて來い、』

林に隨いてゐる内豎は、もう掌の見えない幕の左の端の方を捲つて入つて行つた。幕の中では女達の面白さうに笑ふ聲が聞こゐて幕に紅い波が動いた。林も耿も耿と一緒に來てゐる内豎達も皆好奇の眼をその方へとやつた。

幕の中に消えてゐた内豎の姿がやがてはじめの所にあらはれて、それが右の手に幕の端を揭げて後から來る者を待つやうなふなふうをしてゐたが、まもなくそこから痩ぎすな女の姿があらはれて來た。翡翠の耳環をした蒼ずんだ眼の林には忘れることのできない倩霞であつた。林は嬉しいときまりがわるいとで、すぐ眼を伏せてしまつた。

『ほう、倩霞を、ほう、』

　耿は何かしら周章ててゐた。そこへ倩霞が近付いて來た。

『掌を見せよ、』

　倩霞は輕く笑ひながら左の掌を仰向けに開いてみせた。林の書いた武骨な文字が滲み徹るやうになつて見えた。

『ほう、書いてあるな、』

　だがこの豎童はどうして倩霞と云ふことを知つたのであらう、何處か何人にも判るやうな特徴があるからではないだらうか。

『どれ、どうして知つたのか、わしが見てやらう、』

　耿は倩霞の左の手首を握つて、ぢつとその眼を見て女の眼から潤ひのある一閃を得てから、その掌から指に注意した。無名指の爪がすぐ眼に注いた　耿は大聲を出して笑ひだした。

『これだ、これだ、この指だ、これぢや天縁ぢやない、小林、もう一度、明日しらべる、退つて待つてをれ、』

『は、』

　林は手にしてゐた筆を内豎に渡してから傍視もせずに其所を出た。

　林はその日、自分の室の臬の上に赤い蠟燭を燃やし、白檀と香を焼いて諸大士に祈願を籠めてゐた。

　その夜林の枕頭に一人の婢が來て、手にしてゐる白絹の一片をくれた。そして林がその絹の上に眼をやるとそこにうつすらとした模樣が浮んだ。それは川と云ふ文字のやうな模樣であつた。

　林は朝になつて夢のことを思ひだして考へてみたが、なんのことやら意味が判らないので、それを考へることはよして、その日の王の試みのことを考へてゐた

　正午近くなつてまた昨日の内豎が來た。林はその少年に隨いて王の室へと行つた。耿はもう笑つて待つてゐた。

『今日は爪の長い無名指は出でゐない、今日判かれば天縁だ、』

　林は王から筆を貰つて後廳へと行つた。そして内豎の少年があいづをすると紅錦の幕の穴からは掌を指でかためたやうな小さな足が出た。それは皆右の足先であつた。林はまた右の端か

らしらべるつもりでその方へと行つた。

林は歩きながら倩霞の容貌を描いた。翡翠の耳環をした蒼ずんだ眼の女の左の無名指の爪を長くしてゐるのが心象にのぼるばかりで、鞋におほはれてゐるきぢのままの足は判らなかつた。林は仕方なしに潔白細膩の白いその足足の踵を覗いて歩いたが、どうしても判断がつかなかつた。

林の眼はぼうとなつて何の足も何の足も同じやうな白い肉の團となつて見えて來た。そのぼうとなつた林の眼に一つの足の踵が焼けついたやうになつて、そこに川の字に似た隆起が隱隱としてあらはれた。それは昨夜の夢の中の白絹の上に浮いた模様に髣髴たるものがあつた。林は眼が覺めたやうになつてその踵に筆をつけた。

『それでよし、足に文字のある者を呼んで來い。』

もう耿が窓の所へ來てゐた。内豎の少年はまた幕の中へ入つて行つたが、今度出て來る所を見ると彼の倩霞が一緒であつた。林の眼は喜びに輝いた。

『ほう倩霞か。』

耿は重い唾の乾いたやうな聲をだした。それは如何にも望みを失ふたやうなさまであつた。

倩霞は笑ひを見せながら耿の前へ來た。耿はそれをぢつと見たままで默默としてゐた。倩霞は靜にその前に坐つて襪なしに穿いてゐる右の足の鞋を脱いで、耿に見えるやうに踵を出した。

『よし。』

耿は頷付いてみせた。そしてちよと默つて考へるやうにしてゐたが、思ひだしたやうに林の方を振りかへつた。

『小林、約束通り倩霞をお前にやる、沙汰をするまで歸つて待つてをれ。』

林は歸つて待つてゐると、夕方になつて王からの人が來た。林はその夜王の前で倩霞と合卺の式をあげた。王は倩霞の粧奩の費として千金をくれた。

林は倩霞と結婚してからはじめて霞の素性を知つた。霞はもと開元の寧遠の生れであつた。ちやうど九つの時、家の前の田の畔で豚を遊ばしてゐると、同地方の總兵をしてゐた耿が兵士を連れて通りかかつたが、霞の亂頭粗服の子供ではあるが、眼鼻だちの優れてゐるところに眼を着けた。その時霞の家では祖母が入口へ坐つて苧麻を績いでゐた。耿はそれを見て入つて來た。

『あの女の子は、何所の小供だ。』

『はい、はい、あの子供は私の孫でございます。』

『さうか、それならちやうど宜い、俺にあの孫をくれないか、白金を十兩やる、』

『あれは大事の孫でございますから、幾等お錢を戴いてもあげることはできません、』

『なにくれない、くれなけりや奪つて行くまでだ、あの小供を連れて行け、』

二三人の兵士は霞の傍へ走つて行つて、泣き叫ぶ霞を戰車に積んだのであつた。そして奪はれた霞は十九になつてゐた、耿は二三年前から納れて妾にしようとしたが、袁姫が容さないのでそのままになつてゐた。

林は王の知遇に感じて、一朝事ある場合には身命をなげうつてこれに報ゐやうと思つてゐた。この感激の心が、顏にも詞の端にもあらはれた、それを見て霞が云つた。

『王が、私とあなたを結婚さしてくださつたのは、王の氣まぐれからですよ、決してあなたを國士として待遇したわけではないのです、それに王の行ひがこんなですから、屹と恐ろしいことが來るのですよ、さうなれば私達もこれに捲き込まれるのですが、馬鹿馬鹿しいぢやありませんか、それよりかいつそ逃げやうぢやありませんか、』

林とても王の狂暴の報ゐを考へないことはない。

『逃げても宜いが、さしあたり何所へ逃げる、』

『私の姨さんが京師にゐるのです、京師へ行かうぢやありませんか、』

そこで林と霞は逃げることにして荷物を作り、二疋の良い馬を買つて、夜それに騎つて北に向つて走つた。

林と霞は京師へ行つて、霞の姨の家から貲を出してもらつて茶を販つたところが、しだいに金が出來て富豪となつた。さうして心にゆとりの出來た霞は、姨や姨の家の女達と茶を飲んだりすることがあると、淫虐な舊主家のことを良く話した。

霞の話によると袁姫は二十餘人あつた耿の寵姬の中で、いちばん年が若かつたが、耿の心を提へるのが上手であつたから、耿に愛せられると共に憚られてゐた。その袁姫は放縦で嫉妬心が強かつた。耿の小供の内の某公子と關係してゐたが、ある時耿が入覲して留守になると、その公子は最負にしてゐる梨園の俳優の許へ泊りに行つた。その俳優は貼旦の珍兒と云ふ狡猾の少年であつた。袁姫はそれと知ると十數人の待女を連れて、そつと後門から出て珍兒の家へと行つた。珍兒と話してゐた公子は、びつくりして這ひながら袁姫の前へと行つた。

『すみません、』

珍兒はその後の方で額を床に擦りつけたなりに顫へてゐた。袁姫の好奇心は珍兒へ行つてゐた。袁姫は公子の方には眼もくれなかつた。

『顏をおあげ、』

珍兒の耳へは入らないので俯向いたなりであつた。

『顏をおあげと云ふに、なぜあげない、おあげ、顏を見てやるから、』

珍兒は恐る恐る顏をあげた。

『火をおあげ、』

袁姫は明りで珍兒の顏を精しく見やうと思つた。侍女の一人は急いで手にした燭の火をあげた。珍兒の女やうな綺麗な恐怖に滿ちた顏があらはれた。

『なにもそんなに怖がらなくつても宜いのよ、べつに執つて噉はふと云ふのぢやないからね、』

袁姫の詞は急に穩になつて笑ひ聲さへ交つて聞こゑた。

『これから私と一緒に行きませうよ、』

袁姫はさう云つて珍兒を連れて歸つたが、珍兒はその夜の内に冷たい死體となつて袁姫の紅閨の中に横たはつたのであつた。

袁姫は巴山の老猿の化したものであつた。その老猿は時時形を現はした。それは白い大きな猴であつた。珍兒はその犧牲となつたものであつた。

袁姫と公子との關係を盧大眼と云ふ耿の腹心の臣が知つて、それとなしにそれを耿に云つたので、耿は非常に怒つて、盧の罪をこしらへて杖で打ち殺さした。

耿の殘忍な皮を剝いで人を殺した話はたくさんあつた。玉笙と云ふ侍女が玉盃を碎いた。耿は怒つて皮を剝いで殺さうと思つて、それを縛らすともう恐れて死んでしまつた。そこで舁かして郊外に埋めにやつたところで、途でいきかへつた。舁いでゐる者はそれを誑女として表面では埋めたことにして、それを李と云ふ學生にかたづけたが、後にその李は科擧に及第して山東で一縣令を授けられた。

耿は間もなく淫虐のために族滅せられたので、林は霞を連れて自分の故郷の福淸へと歸つて、富翁として晩年を送つた。』

堂々六百頁！無比の大壯觀！

◎地震後素敵な勢力を示せる大阪商船活動振…

◎腕一本脛一本の先驅者…澤田撫松

◎子年生れ名士の活躍…木下宗一

◇金運に惠まれた手相人相　小西白眼

■（傳記）田健治郎……横山健堂

■（月日）實業界の團琢磨……

小說と講談

地震小說　焦土に哭く（野村愛正）

國民講談　軍神乃木（大瀧鞍馬）

漫畫小說　どぜう地獄（岡本一平）

實業講談　若尾逸平（長野鶴城）

探偵小說　死の寶庫（紀　潮雀）

武勇講談　久米平内（小金井蘆州）

傳奇小說　恐怖時代（三上於菟吉）

◎各種職業立志成功秘訣談……

◎小資本で取付ける商賣……

◎大阪東京各會社活動振り……

◎各種商法打明けばなし……

◎今後有望な商賣樣さま……

◎利殖金儲けの研究實例……

◎殖民地成功發展物語……

◎その他數十篇！誰にも出來る、是非一讀あれ！

（三）戀・名・金・譽の大場面

■純眞の戀、咲かずの梅…

■お六櫛の由來（國枝史郎）

■名聲世界に高き愛の人…

■猫の一萬兩…（堤　綠風）

■美丈夫趙雲、晴の舞臺…

■海の秘密…（福永　渙）

■フランス帝國を生んだタリアンの戀・（貴志卯川）

■南洋の孤島に王冠と戀を得た者・・（何藤乃武雄）

■勇みと戀の後藤又兵衛……

第三附錄此外數十篇あり。

新春讀書界を風靡すべき名篇傑作揃ひ！

注意＝十二月中旬出來（直接御註文は振替仙臺六二〇〇番へ……）＝

▲定價金壹圓五十錢

▲郵送料四錢

（東京本郷駒込）大日本雄辯會發行

時論

普通選擧制度の根本理想

法學博士　吉野作造

普通選擧制度の將に實施を見んとして居ることは前號にも述べた。普選の實施その事に反對の人も二三は見えるが、世論の大體の傾向は、齊しく之を歡迎して居るやうである。兎に角政府の實施の決意も堅く、法制審議會の討議も餘程進んで居るのだから、謂はゞ議論の時代は過ぎて、今や正に實行上の細目を吟味しつゝあると云つていゝ。細目の問題としては、年齡とか、被選擧資格とか、區制とか、罰則とか、いろ〳〵あるが、之に關する法制審議會の討議並に諸新聞に現はるゝ説明等に就いては大體に於て僕も贊同を惜まない。之等の諸點に關する僕の意見は、曾つて數年前の本誌に之を評論したこともある。

只この場合を機として、讀者と共に愼重に考へて置きたいことは、普選制度の根柢を爲す所の思想的基礎如何と云ふことである。何の爲めに普選を布くのか。普選を布けば我々の生活がどう幸ひされるのか。之等の根本の點を適當に了解しなくては、折角普選制度を採用しても、之をして有終の美を濟さしむるに必要な細目の決定に誤ることがないとも限らない。細目の諸點は、所謂細目なだけ、純然たる便宜から割出されることもある。併し便宜に執すれば、時として、爲めに根本の理想を傷けられないと限らない。我々は、普選の實施は抑ふべからざる大勢だなぞと安んじて、その實現の後に要求せらるべき道德的努力の大責任を忘れてはならない。

區制問題の中に、こんな説をなすものを見た。小選擧區制に在つては、例へば百の投票中僅に五十一を得ても當選するのだから、その區の代表者と僭稱する者も、其の表はすものは只五十一票の志向感情に止まる。他の四十九票は全く代表されない。つまりこの四十九の投票は全然無駄に投ぜられた事となる、之が小選擧區制の不都合な所以であると。こんな議論をする人は

世間に隨分多いが、是れ果して普通選擧の理想から見て首肯さるべき議論であらうか。

尤も小選擧區制の利害得失は、いろ〳〵の點から議論され得る。少くとも、我國の現行制度の如きは單純な便宜的見地から觀て甚だ不都合なものとされて居る。その世間の謂ふ所によれば政友會に特に有利なやうに割當てられて居るからである。この當面の弊害を防ぐ爲に大選擧區に直すのがいゝか、或は小選擧區の原則を其儘にし只多少の改定を加るだけで差支ないか(多數黨に取て小選擧區制が大體常に有利なる事は云ふ迄もないが)は一概に決し難い。が只現に見るが如き弊害があるからとて直に小選擧區制が惡いとは云へない。僕の考ふる所によれば、抽象的理論として、先に擧げられた例の四十九票は決して無駄に投ぜられたのではない。何故なれば、僅か二票の差で負けてもその後引續いて五十一票を背景とする代議士の意見行動を牽制するの力がある筈だからである。何を以て之を云ふや。抑々小選擧區制に於ける第一の原則は、一票でも多い方が勝つと云ふことである。之を形骸の上から觀れば不都合のやうにも思はれやうが、一人でも多數の味方を作るべく努力することの上に勝負の數が定り、そして一樣に味方を得んとして行動するものゝ中、正しい方がより多くの贊成者を得べき道理なるが故に、一票でも多い者に勝たしむると云ふ事に一種の道德的意味があるのである。一票でも多い爲めに勝つたと云ふ事は、一面に於てはその道德的努力に對する報酬であつて、又他面に於ては聊かでもの懈怠が、直ちに反對黨の道德的努力に因つて覆さるゝ事あるべきの警告とも云へる。之を敗北者の方から云へば、僅々の差で負けたと云ふは殘念なことではあるが、失望はしない。もう少し奮發すれば、やがて勝利の榮冠は自家の頭上に來るの見込があるからである。加之、彼等は彼等の立場を正しいと信じて居る以上、怠らず運動を續ける限り、次の選擧には自分の方が勝つ筈だと信ずべきを以てゞある。斯うなれば、一旦の勝敗で驕らず挫けず、每に生々の意氣を以て道德的進展を續けて行く。此處に活潑にして健全な國家社會の進歩が育くまれる。斯う見れば、小選擧區制で一向差支ない。只問題はいろ〳〵の事情が相輻輳してかゝる原則の實行を妨げて居ると云ふ點にある。

斯う云ふ抽象的理論からすれば、比例代表制の如きは比較的道德的根據が乏しいのである。何故なれば、比例代表主義は少數代表を根本の原則とするものだからである。尤も比例代表にもいろ〳〵の種類がある。一律に之を評するのは聊か失當の嫌ひないではないが、併し兎に角少數ならばもつと努力して多數

を得て來いと云ふのでなく、努力の足らない少數にもそれ相當の發言權を認めやうと云ふのだから、その理論上の價値や知るべしではないか。併し之は純粹な抽象的理論だ。實際問題として、比例代表主義の大いに傾聽に値するは云ふ迄もない。從つて之を採用すべしとなれば、大選擧區制に由らねばならぬことも亦勿論である。併し僕一個の考としては、大選擧區制比例代表の繁雜なるに困惑するよりも、他の諸方面に於ける改革を條件として、依然小選擧區制によつた方が遙に有利だとも考へて居る。ヨーロッパ諸國に於て比例代表主義の行はるゝは、特別の事情に出づるものなることを一言して置く。

僕が、理想通りに行はるゝものなら、小選擧區制でも一向差支ないと述べた主張は、實は二つの前提條件の上に乘つて居るのである。一つは各候補者はその人格的價値に對する承認と信賴とを、選擧民に要求する道義的努力の結果として又結果としてのみ投票を集むる事、モ一つは選擧民は之等各方面の道德的努力によつて刺戟され、開發され、從つて大いに向上されて、その結果自由なる判斷に基き、眞に賴むに足る人物を擧ぐるものなる事、之である。之を候補者の方から云うと、選擧の過程は之が爲めに人格的内容の承認要求であると同時に、最も眞面目な民衆教育の効果をも伴ふものである。之を選擧民の方から云うと、特に烈しく開發向上を促されたその極限に於て、自由な判斷で選良を擧ぐるのだから、爲めに國家の期待に背くこと萬々ないのみならず、同時に又代議士の將來の行動に對して、極めて眞劍な監督を加ふることになる。斯う云へば、選擧制度の根本理想が何所にあるかは、多言を要せずして自ら明かであらう。

世間には、國法の前には萬人平等なりと云ふ原則が普通選擧制の根據だと云ふ人がある。又斯う云ふ空疎な平等論を根據とするから普通選擧は誤りだと非難する人もある。この二つの立場は共に普選制度の現代的効用を辨へざるの謬見に過ぎない。

國家は我々全體のつくる所のもので、從つて我々全體が國家の運命に關心するのは當然ではないか、天下萬民の參政權要求の根據は此所にあるとて普通選擧を主張する者がある。所が、斯くては俺のものは俺が處分する。その結果の好い惡いに干涉して貰ひたくないと云ふ事になるからとて、之に反對する人もある。この二つの立場も亦前同樣に普選制度の現代的効用を辨へざるの謬論と謂はなければならない。

之等の諸說に通ずる根本的の誤りは、我々人類を一定の境遇に膠着せしめて固定的に之を觀る所にある。固定的に觀れば、

人は固より平等に非ず、國政運用と云ふ重大な仕事に賢愚不肖の差別なく一様の發言權を附與すると云ふのは、全く以て不都合の制度である。加之、この固定觀に執して、進歩向上の機會の潤澤に與へらるゝ方面を閑却すれば、先づ人はその最も劣惡なる狀況の下に活動するものと見なければならない。だから普選を實行しても社會人生の幸福に何の寄與する所ぞと云ひたくなる。殊に選擧制度が從來いろ〳〵の理由によつて惡用された事實を見せ付けられて居る我々にとつて、斯う云ふ考は中々尤もと受けとられ易い。

併し乍ら我々の生活はそう一定の境遇に固定するものとして觀らるべきではない。我々は可成り惡い境遇に置かれてさへ結局に於てその桎梏を突破して向上發達して居るではないか。況んや適當の機會の潤澤に提供せらるゝに於ては、我等の進歩向上の前途は無限に廣い。普選制度は實に此所を狙つて居る。凡そ人は適當の境遇にさへ置けば、無限に進歩向上するものだとは、所謂デモクラシイの根柢をなす根本觀念であるが、現實の社會に於ては餘りに多く之を妨げる原因に富む。而して之を政界の一面に見るに、選擧權の制限の如きは慥に著しい原因の一つである。何となれば、之を制限するによつて特殊の階級を作り、之と專門政治家との結托によつて忌はしき利害關係が拔くべからざる根據を据ゆるに至るからである。故に普通選擧はデモクラシイの政治理想を開展するに、是非共通らねばならぬ第一の關門とせられたのである。但屢々繰返して云ふ通り、普通選擧になつたからとて直にデモクラシイの理想が實現されるとは限らない。それには更に一層の努力を要する。つまり從來の制度の下では、どんなに努力してもそが全く報いられなかつたのだ、普通選擧になつて初めて相當の效果が上る見込が立つ、つまり努力の仕甲斐のある世の中になるのだ。若し幸ひにして努力の效果が擧つたとすれば、選擧民は即ち最も開發せられたる狀況の下に於て選擧と云ふ仕事に與り、其間何ものにも妨げられざるが故に、彼の良能は限りなく發展すべき機會に置かる。限りなく發展するとすれば、進化的活物として總ての人は平等でなければならない。普通選擧制が總ての人を平等と觀るのは斯う云ふ立場に基くのは勿論だが、其他總ての人に平等の價値を附することによつて、候補者の選擧運動による教育的效果をば、總ての選擧民に洩れなく行き渡らせんとする要求をも充たさしめんとするものであることを忘れてはならない。

普通選擧制の根本觀念を此所と決めて、さて細目の規定に臨むと、自ら快刀亂麻を斷つの趣きを感ずるであらう。第一に民衆の良能を欺瞞する一切の原因を排斥しなければならない。罰則

の規定を嚴重にし、特に候補者側の反則を嚴罰に處するの必要がある。其他戸別訪問、選擧運動者、運動費等に關しても考ふべき點が多々ある。第二には欺瞞手段を罰する許りでなく、根本的に之を不可能ならしめなければならない。選擧權の極度の擴張はこの點からも主張される。世の中の事物には漸進を可とするあり急進を可とするあり一樣ではないが、選擧權の擴張だけは漸進主義を以て最も有害なものとする。第三には選ぶ者と選ばれる者との人格關係を最も密接ならしむることが必要だ。誰を選んでいゝか分らないとか、餘り信用も出來ない樣な人に投票すると云ふやうな事のないやうにするのが肝要だ。選擧區の問題は專らこの點から考察されねばならない。この點に關しては、當面の實際問題としても、僕自身は小選擧區を原則とし、それに多少の例外を認めて可なりと信ずるものであるが、更に進んで、純粹の理論問題としては、地域的區分制度、職能的區分制度の論爭がある事を注意して置きたい。

島田三郎先生を弔す

十一月十四日沼南先生遂に逝く。先生の死に依て我國は色々の意味に於て再び充たし難き一大缺陷を生じた。享年七十二。年に不足はない樣だが天下の爲に切に痛惜の情に堪へない。

僕一己の先生に對する關係をいへば、先生は實に吾々の前途を導く燈明であつた。言葉の最も深い意味に於て「先生」と稱し得る者、僕の親炙せる先輩の中に少くとも三人ある。海老名彈正先生の今なほ矍鑠として健鬪を續けらるゝは吾人の意を强うする所であるが、先には江原素六先生を送り、今また沼南先生と分るゝに及び、密かに寂寥の感に堪えない。以上三氏の如きは啻に僕等少數後輩に取つての先生たるのみならず、又廣く天下の師傅たるに値する者。心あるものは之を識ると識らざるとに論なく、沼南先生の訃を聞いて同じく哀悼の情に堪へまいと思ふ。

先生が清議高節の君子として一生を終始せられしは世の普ねく識るところ、復た贅するの要はない。而して吾人の先生に服してやむ能はざるは、正義の爲にするその熱狂的奮鬪である。

世或は曰ふ、先生の狹量容易に人を容れず遂に政界に孤立して晩年の薄運を致せりと。是れ一面の觀ではあるが、吾人は寧ろ此處に先生の面目と使命とを認めざるを得ない。惟ふに先生の至誠はもと天稟に出づ。事功を急いで慢りに之を枉くることは出來ない。先生の如きは到底現代に容れられざる人、而かもまた現代になかるべからざるの人、少くも一人位はあつて欲しき人。沼南先生ありて腐朽せる日本政界の大厦は辛うじてよく一木の支持を得來つたと謂つていゝ。誰かいふ、先生四十年の政治生活は何等の事功を遺さずと。又誰かいふ、先生の晩年周圍に共に語るものなしと。最近起りつゝある政界廓清の道義的機運は實に先生遺業の最も意義あるものにして、而して先生の知己友人は遠く千載をまたず今日既に天下有望の青年の間に無數にあるではないか。先生を薄運の裡に逝けりといふは極めて皮相の見、寧ろ功成り名遂げ凱旋將軍の意氣を藏し微笑を含んで靜に天に歸せるものといふべきではあるまいか。

政治家としての先生の活動は明治十五年改進黨の創立に始まるのであらう。當時既に領袖の一人として重きを爲したことは云ふまでもない。二十三年初期議會以來今日まで間斷なく而かも同一選擧區より代議士として擧げられ來つたことは全く先生の德望に歸せねばならぬ。其間常に清議公論を以て異彩を放ち、所謂世の光たり地の鹽たるの任務を努進したことは何人も認むる所だらう。同じ態度はまた新聞記者としての奮鬪にも現れて居る。東京毎日新聞に據つての星亨攻撃は、議會に於ける有名なシーメンス事件の摘發と共に、先生の歴史を飾るべき二大事績と謂てよい。其他數へ擧ぐれば限りもないが、要するに先生の如きは荒涼たる議會史に聊か一味の生色あらしむる異常の人格であつたことは間違ない。

但し先生を單純なる清議公論の政客のみとするは當らない。先生は其の活躍の主たる舞臺を政界に置いたが、傍らまた社會事業にも多大の力を致された。廢娼運動、禁酒運動等はいふも更なり、平和運動、軍縮運動の如き、先生の與らぬは稀だ。要するに先生は凡ゆる善き事の味方であり、餘力の存する限り、犬馬の勞を吝まれなかつたのだ。が、之を併せ加へてもまだ先生の全豹は盡されない。更に先生の本領は學者又は史家としての方面にも著しく現れて居ることを忘れてはならぬ。先生の社會に遺した事業も主としては政界に在ることは勿論だが、學者としての功績もなほ亦決して見逃す可らざるものがあると思ふ。

學者としての先生の業績は二つの方面に分れる。一は明治初

年に於ける我國法學の開發に貢献せる方面である。ベンサムの譯「立法論綱」(和本四冊)は十一年の版に係り、翌二十二年には東京帝大の屆教師テリーの教科書を譯し「法律原論」(和本四冊)の名で公にして居る。前者は元老院の藏版で幹事陸奥宗光の序文もあるから同院權少書記官としての仕事であつたのだらう。陸奥は先生の兄事せる先輩で元老院に入りしも其の推挽による。當時元老院の書記官といへば、謂はゞ議官の顧問のやうなもので西洋新學に通せる高才逸足の集る所であつた。先生は大井憲太郎、中江兆民等と伍して遜色が無かつたといふ。以て其の學殖の當時群を拔きしを想ふべきである。聞く所に依れば先生は始め漢學を修め中途英語を學べるも、孰れも中途退學して一つも學校を卒業はして居らぬ。而かもその學才凡ならざるは皆自習玉成の工夫によるものだ。故に僕は常に思ふ、先生はたしかに學者たるの禀質を本來多分に有たれた人だと。辯論の條理整然たる、文章の理路明晰なる、亦皆之に基くものであらう

併し乍ら學者としての先生の大分は法律家としてよりも寧ろ史家としての方面により多くあるやうに思はるゝ。是れ今日なほ史界一方の權威として認めらるゝ「開國始末」の著がある故にいふのではない。「開國始末」は明治二十年の公刊にかゝる。先生の政界に於ける活躍の最も激しき時、博引滂證この尨然たる大冊の著あり、之れ丈でも先生の史癖を偲ぶことが出來るが、僕は時折先生に親炙して政界馳驅の追憶を質し、而して先生の答ふる所全く尋常政客と異りて常に史家らしき客觀的態度を失はれざるに驚嘆するのであつた。從つて僕は先生が晩年の大事業として數年來鋭意心血を注がれたる「明治政史」の大成に甚大の囑望を寄せて居つたのだ。今や中道にして先生逝く。此點に於ても僕は學問の爲に大に先生を惜む。

先生曾て僕に語つて曰ふ、明治政史の編纂は國恩に報する予が最後の御奉公だと。其意蓋し先生が政治家として政界廓清に努められたる其の同じ目的を、明治五十年間の政界の醜事惡事を偽る所なく描寫することに依て達せんとせられたのであらう。革新の事業も固より忽には出來ぬ。併し之には猶多くの同志がある。獨り過去の失態を數へて國民的反省の料を供するは他に多く其の人なかるべしとは、實に先生政界退隱の志をかためられたる主因であつた。此點に於て先生に期待さるべき明治政史は、或は正史として其體を成さぬものかも知れぬが、又別個の意味に於て貴重なる文獻の一たる價値を要請するに餘りある。少くとも近き將來に吾人に提供さるべき蘇峰先生の明治天皇時代史と相表裏して、明治史研究者に缺く可からざる資料た

るゝのであつたらう。先生の訃に由て其完結を見ざるは、殘念であるが、其草稿だけでも速に整理して公にされたいものである。

加之先生の品藻高潔なるは之に接する者の敬慕措く能はざるものがあつた。悪に對して秋霜烈日の嚴しさを示しつゝ、其の謙抑坦懐は人をして徐ろに春風に包まるゝの思あらしめずには置かぬ。是れ先生が政治家として異彩あり學者として亦重きを爲すの外、天下の「先生」として一代の尊崇を博する所以。先生の如きは明治大正を通して後世に誇るべき偉大なる人格であり、不幸にして現代に多く理解せられざりしとはいへ、年を經ると共に益々光を發つべき典型的大平民と謂はねばならぬ。玆に草卒一片の弔文を呈するは、單に後進としての追慕の私情を洩らすばかりではない。(十一月十五日)

小題小言

○

今度の災厄で東京の太半が灰燼に歸して見ると、前號の本誌

にも一長編を寄せた矢田挿雲君の「江戸から東京へ」が一段の懐しみを我々に覺へしめる。大正十年三月第一卷を公にしてより此夏までに既に七冊を出して居る。而して其の誌るす所僅に麹町、日本橋、淺草、下谷、本所、深川に止るから東京全部を了るまでには更に數冊を重ぬるだらう。內容は特に說明するまでもない。名所舊蹟の解說は固より、傳說か史實にわたり、特に幕末の開國史と明治初年の文化開發に就ては教ふる所頗る多い。が、何よりも優りて本書の世に薦めらるべき價値は、內容の豐富、調査の正確、探索の綿密を飾るに平明輕妙の才筆を以てせることであらう。だから本書は我々學問の徒に取て一參考資料たると共に、亦童蒙半夜の娯樂に供せしむるに妨ない。いつか一度紹介の勞を取りたいと考へて居つたが、東京の大半が燒野原となつて見ると、昔を偲ふよすがとして矢田君のこの著の如きは一躍して最も有力なる文獻の一となる譯だから、特に此際を機として同好の讀者に告ぐる次第である。

○

書物の紹介をしたついでにもう一つ讀者に告げたいものがある。それは兒童科學教育會の出版に係る「科學遊具と自作」と云ふ叢書だ。之は讀者諸君に直接薦めるのではなく、諸君を通して諸君の子弟にすゝめたいのである。科學教育の必要なんどい

ふことは今更云々するの必要もないが、僕等は從來自分の子弟の科學的智識の慾求に對して適當の手引なきに苦むことが多かつた。況んや子弟自身から之等の慾求を以て迫らるゝに於てをや。坊間には多少此種の需要に應ずるの著書もないではないがどうも飽き足らない、否多くは之を兒童に與へて更に何の用をも爲さぬが多かつた。然るに兒童科學教育會の「科學遊具と自作」は此點、於て實に完全なる成績を示して居るのが喜しい。僕自身の經驗に依ると、同書の一二冊を子供に讀まし、同じく同會で供給する所の材料を書物の指示通りに組み合はさして見ると、まことに立派な器械が出來上る。以て如何に親切に説明してあるかゞ分るであらう。全部十二冊の豫定のうち既刊の分は、第一が電動械、第二が電氣呼び鈴、第三がパントグラフと魔法扇、第四が實物幻燈機、第五がケーブルカー、第六が單葉飛行機である。子弟の科學智識開發に志ある人々には是非ともおすゝめしたい。本の値は固より製作材料も驚く程安い。





頽廢時代を顧みて

近松秋江

一

その夏一と月餘り、上總の方の海岸にいつたり、そこから一旦引揚げて歸ると又湘南の方の海水浴場などへいつて過してゐた葛野は、九月に入つて佗しい秋雨模樣の濕つぽい天氣が續いて來ると、水の退くやうにして歸つて往く浴客の群れに誘はれるやうな心持になつて東京に戻つて來た。彼はまだ夏の前から輕いインフルエンザのやうな氣味で、風邪が癒つたあとも鼻や腦を惡くしたり、それに大分健康をも害してゐたのであつた。無論健康を害したのはインフルエンザが原因でもあつたが、丁度その頃の葛野は、ある、戀愛に似たやうな事件の醜い破滅からひどく心身を傷けてゐたのである。それは果して戀愛と名づけてよいものか、又は若い肉體の盲目的な本能の衝動といふべきものに過ぎなかつたか、いづれか知れぬが、それが誤られた戀の形をとつたものであつたには相違なかつた。しかしその頃の彼は、ひたすら自分の成業につ

いて熱心してゐた時分であつたから、戀愛に心を奪はれることを以て甚だ潔しとしなかつた。人間には戀愛などよりもまだ他に爲さねばならぬ大事が幾らもあると心得てゐた。加之その戀の關係が最も不健全なもの――既に戀愛がいかなる場合でも、あまり健全なものではないが――であつたがために、その頃尙ほ道德的理想が純淸で、情操の汚されてゐなかつた彼には自分の誤りたる行爲からひどく道德的汚辱を感じてゐた。さういふ不健全なる感情の狡獪が與つて彼の健康を害したことも少くはなかつたのである。

　それでも三四十日間も努めて精神を休養するやうにして海水に浸つてゐる間に大分健康も回復して來たので、葛野は新秋とゝもに更に新なる希望を復活したやうな氣分になつて東京に歸つて來たのである。

　學校を出てから丁度一年になつたが、まだ確乎とした生活の道も立たず、それに卒業後半歲ばかりある處へ出勤してゐた月給生活も二月頃から止めてゐるので、何か文筆の仕事で生活してゆくよりほかに爲方がなかつた。葛野はしかし、自分のことを省みて、まだ何といつて一つも完成してゐない自分の如き者が何か書いて、それが多少でも金錢に換へられることを思ふと不思議でもあり、又それが一向難有くないことのやうでもあつた。自分の書くやうな下らない物が、たとひ少額たりとも金錢に換へ得られるといふやうな文學といふものは如何に無價値のものであるかとさへ思はれるのであつたが、その頃の所謂文壇に名を成してゐる人達は誰れでも皆なそれをやつてゐるのであつた。しかし葛野には、其等の知名の人にとつては、それが別段不合理のことゝも思はれなかつた。自分は尙ほ一介の書生に過ぎないのである。それが金錢を目的として何か書くといふことは、自分が多年貴んでゐた文學といふものを汚辱することになると考へられた。彼はそれよりも出來るだけ、貴い古今東西の文學書を讀みたいと思つた。けれども何か書いて金錢を得なければ生活が出來なかつた。さういふ心ならずも目前の生活に追はれて、貴い、理想的の讀書や思索に專念すること

の不可能な狀態は、その後年を經るにつれて、何處まで往つても、丁度並行線が無窮に亘りて一致する時がない如く、彼の理想は殆ど終生現實と離れて行かうとするのであつた。

今まで美しく夢みてゐたことが何もかもその實際に當つてみると案外に卑俗なものであつたりするところから葛野の頭の中は荒寥とした失望の感情に塡まつてゐた。彼の少年時代から空想して來た人間になるといふやうな茫漠とした希望は何時になつても實現されさうに思へなくなつた。

そんな狀境に置かれながらも、書く物によつて幾らかづつ錢の取れる道が段々開けて來た。そして、やゝ錢の自由が得られるやうになるに伴ひ、又、現實の人間の世界が、今まで考へてゐたやうな單純なものではないといふことが解かるに從ひ、彼は、初は爲方なしに、後には大して苦痛なしに卑俗な世間の中に入つていつた。しかしながら、それは彼にとつて生涯の遺憾であつた。それがために彼は、これから後一生、强いことも理想的のことも、淸いことも、それを口にする權利がなくなつたやうな感慨に迫まつたのである。人間の弱さを、遠く他人の上にでなく、自己の胸臆方寸の間に明歷と見せつけられたのである。彼は傍に人の居ない時、自分獨りでゐる時に却つて顔を俛れて卑屈な恥辱の念に責められることがあつた。しかも、それが、女性に關係したことになると倍々さうであつた。が、そんな心でゐるにもかゝはらず、一度女性のことで心を亂されてからは、丁度一とだび驅け出した馬は、どうしても手綱の力では制馭することが出來ないと同じやうに、彼は少しの意思の耐力もないものゝやうに醜い情慾の深淵に引込まれて陷つていつた。

そしてこれは、ずつと後年になつて葛野が散々苦んださういふ不態な惑亂の狀態から漸く足場を踏み直さうとする時分であつた。彼の知人の中に、彼が平素、自分などとは、全く品性人格を異にした人間として敬意を抱いてゐた年長者に、異性のことに關係して思ひ掛けもない醜狀を暴露した者が二三に止まらず出來てきたのには彼は甚く驚かされたの

であつた。彼等はその時皆な、既に年齢からいへば人間として最も思慮の熟すべき四十を越してゐた。そして、いづれも數人の子の父親であつた。その中には法律の上で結婚をすることを承認することの出來ない肉親の間柄で、兩性の關係を結んだ者もあつた。又多くの青年子弟から師表と仰がれて、其等の高等教育に從事してゐる者にして、妻子を棄てゝ一婦人と同棲したものもあつた。またその述作と說教とによつて一代の青年男女の渇仰の的となり、謹嚴溫厚の模範的紳士と謳はれた人にして有夫の婦と通じて最後は情死をして身を果した者さへ出來た。

さういふ、社會の信仰を裏切つたやうな意表の出來ごとのある度に世間は悉く驚かれされたが、葛野は又彼れ自身の立場から、特殊の判斷を以つて格別に驚かされたのであつた。

世上それ等を道德的に非難した者も相應にあつたが、むしろ非難した者は笑はれて、反對に、人間の眞情の僞なき發露として讃美し、又は、もしさうでない者までも、それを止み難き人間の弱點として寛恕しようとする傾きがあつた。

葛野はそれについて、ある矛盾を感じた。文學とか藝術の人間であるがゆゑに、さういふ常規を逸した行爲をも賞讃されたり辯護されたり默認されたりするといふは如何なものであらうか。通例因襲的に常規となつてゐることが、その實過誤であつて、常規を踏みはづし、肉親と性交上の關係を結び、妻子を棄て他の婦人と同棲し、又は有夫の婦人と通じて情死したのは何れも文學藝術に携はつてゐる人間であつて、文學者藝術家などゝいふ者は、普通の世間人よりも思想が遙に進歩してゐるので、其等の人間は、やがて一般人の常規となるべき行爲を衆に先じて實行したものであるか。

しかし、まさかさうとも思はれない。彼等はやつぱり常規を逸した行爲をしてゐるのである。そして、それが文學者であつたり藝術家であるがために世人から、賞讃されたり、辯護されたり、默許されたり、若し然らざるまでも、「あれは

文學者の爲したことだ、小說家のしたことだ。」と特殊の取扱を受けて、大目に看過される點を考へて、葛野はいつも深い疑惑に囚へられるのであつた。

文學者藝術家等は一般世間人よりも優越せる人間であるがためにその、如何なる行狀をも、普通の道德的の批判、制裁から容されるのであらうか、まさかさうでもあるまい。さうすれば「どうせ文學者術家などゝいふ者の行爲は普通の道德的批評を以つて律することは出來ない」といふのであるか。たとひさうだと明かにいはないまでも、幾分かさういふところがある。假りに其等の行爲が、文學者藝術家よりも、もつと衆人の眼に着き易い、社會的公人の立場に在る人間によつて行はれたとしたら、世間はそれを何といつて評するであらうか。內務大臣の私生活にそんなことがあつたら、どうであらう。その他の高官にそんな行爲があつたら、どうであらう。世に名士として通つてゐる人にそんな行爲があつたら、どうであらう。彼等はその場合恐らく公的生涯に終を告げなければならぬ。文學者や藝術家であるがために、そんな行爲があつても道德上の批評から不問に附せられてゐるといふは、恰も未成年者の犯罪の場合の如く、彼等は道德の裁きを受ける資格の無い者として特殊の取扱ひを受けるのではあるまいか。もしさういふことになると、文學者藝術家などゝいふ者は普通の人間に比べて道德的に缺陷のあるものと認めなければならない。彼等は、人の常倫又は道德的批判に堪え得ない、不完全なる人格であらうか。世人が、彼等に如何なる破倫の行爲、不檢束の行ひあらうとも、それを敢て非難攻擊もせず、又彼等を社會的生活から葬り去らうとしないのは、取りも直さずそれだけ文學者、藝術家等を道德的人格として、一般世間人以下に劣等なる人間として暗默に認めてゐることになる。

葛野は平常から、あの人達に限つて必ずさういふ道德的破綻を露はさない人間であらうと信じてゐた者等が、彼の從來の確信を裏切つて、さういふ破綻を露はしたのを見て、新に人間といふものに對して絕望せざるを得なかつた。最後

に僅に繋いでゐた人間といふものに對する理想がそれとゝもに遺憾なく崩壞してしまつたのである。

　彼は、自分が、何時の間にか、彼が少年時代から青年時代の初期にかけて抱いてゐたやうな、現實生活の風塵に穢されない淸い理想的の人間にならうとする空想を粉微塵に破壞されたことから甚く自己の道德的生活に絕望するとゝもに、世に公人として立つべく面目を踏みつぶした者のやうな卑屈な氣持に支配されてゐたのであつた。そして自分などはもうどうすることも出來ない、いはゞ穢されたる人間である。然るに同じ文學藝術に携はる人間の中には、自分の嘗て空想したやうな異性に關する道德について立派な行ひをしてゐると信じてゐた人間があつた。葛野は其等の人間と自分とを、心の中で區別を附けて考へてゐた。然るに事實は彼自身などよりも其等の、異性道德の堅固なる行者と見た人間の方が却つて甚しい異性道德の攪亂者であつたではないか。

　葛野は、さういふ意表の出來事を一度ならず二度も三度も歷明（まざまざ）と見せられた。しかしながら彼は、そのために、決して自分の長い間の穢されたる道德的生活を是認しようとは思はなかつた。――今まで道德的生活といつて來たのは、主として異性道德についていふのである。――

　とにかくその頃の彼は何事を爲さうとしても、又何人の前に出ても、いつも含羞が先きに立つて手も足も出なかつたと同じやうに戀といふことに對しても又ひどく臆病であつた。しかし何かしら、今までのやうに唯々書籍ばかりによつて人間生活の凡ての要求を滿足せしめようとする遣り方では到底充實した滿足は得られさうもないといふことが解つて來た。そして、その隙間には女が欲しいといふ正直な本能が殆ど無意識に働いてゐるのであつた。彼は時々、自分の要求を充たしてくれる女を空想してゐた。それが、どんな女であるか極めて夢のやうなものであつたが、時々それが種々な形となつて彼の眼の前を往來した。まことに取留めもない、きれ〴〵な淡い色彩であつた。

二

　その頃葛野は、牛込の盛り場に近い高臺にある下宿屋に隨分長く住んでゐたが、九月の中旬を過ぎる頃になると初秋の頃をしみ／＼と身に感ぜしめるやうな清風が高く晴れ澄んだ空を吹いた。そこら邊には、まだ處々に取り殘されてゐる、江戸時代の大きな屋敷でもあつたかと思はれるやうな、樫や櫟の老樹が鬱蒼と茂つた庭があつた。葛野は、ふらりと家を出て、まだ、ちか／＼と炎暑の照り輝く日を避けて、其の木立に添ふた日陰の道を散歩しながらよく本を讀んでゐた。それは外國の著名な文豪の書いた物か、それでなければ其等に關する解説や評論などであつた。彼は自分の乏しい智識と未熟な見解とを意識してゐるので、専ら其等外國の名著傑作に親むことによつて、人間としての自分を修養することが出來るものと思つてゐた。又自分がこれから段々文筆の仕事に從事するには職業としてもさうせねばならぬと思つた。そして、それは自分の平常の理想を放棄しないで出來ることであつた。何故ならば古今の名著に親むことによつて人間としての自己の完成が成就せられるものと思つてゐたから。

　そのうち次第に秋も深くなり、健康も追々回復して來るにつれて、山の手の盛り場である夜の街の賑かさは、何等の繋累のない、自由に解放されたやうに心の浮ついてゐる彼の身體の中のものを唆るのであつた。彼は自分の若さを意識してゐた。境遇の自由を意識してゐた。さうして單なる書籍や、道徳的生活に對する渇仰だけでは到底滿足することの出來ぬ、もつと直接な、人間らしい──それは、たとひ恥づべき卑俗な欲望であるにしても──生活興味の方に惹き付けられて行かうとするやうな氣持に段々なつていつた。ぞろ／＼歩いてゐる神樂坂の夜の街の人込みにまぎれて、肩と

肩と擦れちがひに行く女に眼を惹かれたり、毎晩のやうに寄席で聞く卑俗な流行唄に遊蕩氣分を唆られてゐたのもその頃であつた。女の中でも殊に藝者といふ種類の女に對して、その方の修養がなくては侮られて容易に近づき難い、權威のある生活をしてゐるもの〻やうな、ある憧れに似たやうな興味を持つゐてた。錢の自由にならぬところから其等の種類の女には一層近づき難いやうな氣がしてゐた。そして次第に都會の生活に馴染むにつれて、花柳界の女の好尚風俗に最も鮮明に表はされてゐる都會的の洗練を經た婦人美といふやうなものが、どうかすると優れた藝術的興味と同じものであるかのやうな氣さへして來た。

その時分同じ下宿屋にゐて、互に自分達の部屋を往つたり來たりして、いろんな世間的雜話を交はしてゐた男は、葛野よりも四五年前に學校を出て、ある新聞社の經濟記者などを務めてゐた。その男は郷里の實家が金持ちでもあるらしかつたが、もう可なり世間擦れがして、毎日手俥で東京中を飛び廻はつてゐた。——その頃自働車などなかつた。——その頃葛野が自分の筆によつて大分錢を取つてゐるのを見て、その男は自分が毎日手俥で外を飛んで歩いて得られる月給などよりも却つて割がい〻のを羨むやうな口吻で、

「い〻ものだねえ、文筆の仕事は。」などゝいつてゐたが、近處の神樂坂で遊ぶ話などをして、土地の大抵の好い女はみんな知つてゐるやうなことを自慢にしていつてゐた。葛野は、自分には、わづかに筆によつて得られる外に金もないし、現實世界の人間として特殊の修養と錬磨を積んでゐる、優れたる女性と譯もなく談笑することの出來るその男の大膽と自由とに感心してゐた。

「君、今度一緒にいつてみよう。僕が好い女を君に紹介するよ。」といつてゐた。

そして、ある晩彼が葛野の部屋に聲をかけて入つて來ながら、

「君、今日は忙しいの。……忙しくなければ、いつてみようぢやないか。」といつて、誘ひに來た。

無論葛野は從順にそれに同意した。

「君、うんと好い着物を着てゆかなけれや駄目だぞ。」彼はそこに坐つて、葛野に指圖するやうにいふのである。

「格別好い着物もない。これつきりだ。」葛野はきまり惡さうに押入れの行李から何かしら糸織のやうな着物を取り出した。

彼はそれを凝つと見て笑ひながら、

「うむ、隨分君、田舍臭い物を持つてゐるぢやないか。」

「だつて。これよりほかにないんだ。」

「まあ、それでいゝさ。君、あんな處に往くには着物や持物に注意しないとすぐ馬鹿にせられるからね。」

「それはさうだらう。」葛野も幾らか反抗的な氣持で、うるさいと思ひながら。そんなことを受け返答しい〳〵着物を更めて、その男と伴れ立つて、すぐ近くの神樂坂の方に出ていつた。

彼は葛野の先に立つて、ぞろ〳〵人通りのしてゐる表の通りから横丁に切れ狹い裏通りになつた、小意氣な家の軒を並べたところを、ずん〳〵歩いていつた。葛野もこれまで、その邊の粹な構へをした狹斜の氣分を崇拜するやうな、懷しい氣持ちで、偶に、恐々ながらそこ等を素通りして見ることがあつたが、そんな家へ入つていつて、彼れ自身にとつて未知の世界に住む人間としての特殊の修養と練磨を經てゐる婦人と口を利き交はすといふことは容易に遂せられない欲望だと思つて、諦めてゐたのであつた。

その男が、やがて、葛野を外に待たしておいて、自分だけでとある瀟洒とした軒燈の出てゐる門を入つていつた。門

から玄關の入口までは何ほどもなかつたが、軒燈の微明りで花崗石の敷石に濡れた打水が澤々と輝いてゐるのも艶めかしく、入口の兩側に盛り鹽をしてゐるのも淸らかである。

彼は入口の處に突立つて、玄關に表はれ來た、銀杏返しの、女中らしい年增の女と何か二た口三口話してゐたがやがて合點したやうにうなづきながら出て來た。

「今内にゐないさうだ。そこの寄席にいつてゐるさうだからいつてみよう。」と、そんなことを獨りごとのやうにいひながら、彼は又先きに立つて賑かな神樂坂の通りを横丁の坂の途中にある寄席の方に來かゝつて、葛野には、曲り角の處に立たしておいて、彼は寄席の入口から下足番に頼んで中に來てゐる筈の女を呼び出さした。葛野は、少し離れた小間物屋の曲り角のところに姿を半分隱しながら見てゐると、女はすぐ寄席の入口まで出て來て、その男と立ち話しをしてゐたが、此方で葛野が、どんな女かと思つて、そこらの灯影に遠目に透して見てゐると、向うでも黑つぽい羽織を引掛けて黑襦子の半衿の上に眞白に化粧した顏を時々こちらに向けて、目ざとく見てゐる樣子である。銀杏返しに結つた、なか〳〵好い女である。葛野は、心の中で、あの女を吉崎――その男――が自分に取り持たうといふのであらうか、それとも、あれは吉崎が自分の馴染みの女であらうかと思つて待つてゐると、彼等は互に何かいひ交はしながらそのまゝ別れて吉崎ひとりで此方に引返して來た。そして步きながら、

「歸らない。もつと聞いてゐるといふんだ。……君も見たらう。そりや素晴しい別嬪なんだ。あれを君に取り持たうと思つたんだ。」

葛野は、平常容易に近づき難いものと思つて諦めてゐるそんな、しかも美人の女を取り持つてくれようとした吉崎の好意を難有く感じながら、

「さうか、僕に紹介してくれるつもりであつたのか。僕は又君の馴染みの女かと思つてゐた。」

「そんな譯ぢやないさ……まあ君振られたんだよ。あそこに立つて君の方を見てゐたらう。あの人でせうといふから、うむ、さうだといつたんだ。隨分僕が口說いてやつたんだけれど今日は身體が惡いとか何とか斯とかいつて歸らない。爲方がない、まだ他にも幾らもゐるよ。」

吉崎はそんなことを半分ひとり語のやうに呟きながら、今度は先の横丁とはちがつた、狹い裏通りを歩いて、又とある粹な入口に入つた。

其家で彼は早速自分の馴染らしい妓を招んだ。そして、

「だれか別嬪を一人招んでくれ。」と女中に命じた。

吉崎の馴染と思はれる妓は、とても讃美することの出來ない、見るから安つぽい場末の藝者らしい女であつたが、二人は大分好い仲と思はれて、來て、そこに坐はり早々互に狎れ々しい大口などを利き合つてゐた。そしてそんな場席には、ぴつたり板に附かぬやうな吉崎の感じの荒い物の言ひ振りなどが、これまでそんな處にあまり來たことのない葛野にも氣がさすほど不愉快であつた。

吉崎は寄鍋などを取つて馴染の妓と頻りに酒盃を交して好い氣持ちになつてゐた。そして時々葛野を若輩視したやうな口吻で、

「君、こんな處でそんなに堅くなつちや却つて持てないんだよ。」などゝいつてゐた。

「あなたのやうにさう堅くなくつても困るわ。」妓は煙管に火を吸付けながら云つた。

「なぜ？　俺は堅いぢやないか。」吉崎はわざと眞面目な顏をして、氣障な眼鏡をきらつかせながら妓の顏をじろりと見

た。妓は笑を含みながら、何か意味ありさうな眼元で

「なぜか知らないが、あんまり堅くはないよ。」と、卑しい言葉でいつた。

葛野は二人の痴話を體よく見せつけられてゐるやうな氣がして一層堪らなくなつた。

さうしてゐるところへ又妓が一人入つて來た。葛野はこれが自分の爲に招ばれた妓であらうと思つたので、それとなくよく見てゐた。彼女は先から來てゐる妓に比べて年も大分若いらしく、身體も大柄で色の白い肉附の豊かな女であるが、大きな顔がどこやら間伸びがしてゐる。彼女は先から來てゐる女を姐さんと呼んで、何か、今度のお約束にゆくとか行かぬとかいつたやうな、彼等以外の者にはよく解らぬ話を二た口三口話してゐた。そして暫く酒盃を取り交はしたりしてゐるところへ、女中が入つて來て、何か知ら合圖のやうなことをいつた。すると、吉崎は早速呑み込み顔で、

「もういゝの、君。」と、まるで書生のやうな調子で云つた。

「えゝ、どうぞ。あちらにして置きましたから。」と、女中はおとなしくいつた。それで吉崎は葛野の方を見て指圖するやうに、

「君、もう支度が出來たさうだから、彼方にいきたまへ。」といつて、後から來た妓の方にも

「さあ君、あちらへ。どうぞ御遠慮なく。」彼は粋な洒落れでもいふやうな調子でいふのであつた。

葛野はその意味はよく解つてゐたが、いくら羞恥を感じない場處であるとはいひながら、あまりに露骨な吉崎の言葉に又更に不快を感じて、たゞ、うはの返事のみしながらそこに坐つてゐた。すると吉崎は又粗雜な調子で、

「何だい君。ちつとも耻かしいことはないぢやないかまあ暫く彼方へ往つてゐたまへ。僕等は又二人で、此處で好い話があるんだ。……ねえ君。」と、彼は若い妓の方を見て笑つた。

「どうぞこの人を彼方に連れていつてくれたまへ。×××××××××××××××。」

吉崎はさも、何も斯も心得た、遊びなれた人間のやうな調子で厭味なことをいつてゐた。

葛野はその妓と、幾間か隔てた向うの方の座敷に入つていつたが、間もなく氣もない顔をして表はれて來た。妓と差向ひで寄鍋をつゝきながら、もう顔を眞赤にして上機嫌になつてゐた吉崎は、そこへふいと立ち表はれた葛野を例の厭味な眼鏡の眼を上げて不思議さうに仰のいて見て、

「どうしたんだ？君。」

「うむどうもしない。」

「馬鹿に早いぢやないか。もつと彼方にいつてゐたまへ。え、どうしたんだ。」吉崎は彼の癖で執固く訊ふた。葛野は興味のない顔をして、

「どうもしないけれど、××××××。」

「はあ、××××××。……××××××。」と仕舞にはそこにゐる妓と顔を見合はして「あはゝ」と笑つた。

葛野は何となく肉體に不快を感ずるやうな氣持ちで此處に坐はつてゐたが、あとから、何事もない顔をしてそこへ出て來た妓を見ると、もう女を見るのも厭だといふ氣持がして來た。彼は我慢して暫くそこにゐたが、やがて言ひにくさうな顔をして、

「僕はもう歸らう。」といつた。

吉崎はそれで又解らぬ顔をして、

「何で？……何故歸る。」といつて葛野の顔をじつと見た。

「うむ、何といふ譯もないが、もう歸つてもよからうと思つて。」

吉崎は笑ひながら、「君は、まだ遊ぶことをよく知らないんだ。こんな處に來てはもつとゆつくりするもんだよ。まだいゝぢやないか、さあ一つやりたまへ。」と酒盃をあけて葛野に差した。

葛野はそんな處に來たのは殆ど初てゞもあつたが、卑しい欲望を充たしたあとの何ともいへない不愉快な肉體的感覺たどうすることも出來なかつた。そして又しても彼が歸るといひ出すので吉崎は不思議に思つて執固くその理由を訊かうとするのであつたが、それは葛野にも、口に形容して說明することの出來ない氣持であつた。勿論吉崎にも理解することが出來なかつた。

「どうしてそんなことをいふんだ。今日は此の間から約束して置いて折角一緒に君と遊びに來たんぢやないか。もつとゆつくり遊んでゆきたまへ。何かほかに食べる物を取らうか。」

「そうしたらいゝわ。何かほかにさういつて。」吉崎の馴染の女も口を添へながら、葛野の方を見て、

「別に御用がなかつたら、いゝでせう。」と氣心を測りかねたやうに云ふ。

「えゝ、」と葛野は爲方なしにいつてゐた。

そんなことを執固く問答してゐる間にいつの間にか若い方の女は何處か帳場の方にでも下りていつたらしく一寸姿を見せなかつたので、吉崎は又露骨なことをいひ出して葛野に、彼が歸りたがる譯を訊かうとした。

「ぢや大に持てたんだ。そんならもつと居るさ。」と、頻りに引留めたが、葛野はどうしても歸ると云ひ張つて、仕舞にはさも〱困つたやうな顏をするので、吉崎もそのうへは留めかねて、

「ぢや歸るさ。歸りたまへ。」と諦めたやうにいふ。

葛野もさうなると、何だか吉崎には濟まぬやうな氣がして、
「ほんとに失敬だが、僕は何だか今日は少し氣持ちが悪いんだから。」
吉崎は、
「なにそんなことはいゝさ。」といつてゐたが、葛野が立たうとすると、「君一寸。」
といつて、彼を座敷の外の廊下の隅まで誘ひ出して、低聲で、
「ぢや君、今のを僕がこゝで一寸預つておかう。」
といつた。葛野は、
「うむ、それは。」といつて、懐中から拾圓札を二枚取り出して吉崎に渡した。
後になつても吉崎はそれつきり葛野に書附も見せず、あの時の錢がどのくらゐ掛つたといふやうな話もしなかつたが、いくらそんな錢を使ひなれぬ葛野にもほゞ見當はついてゐたので、
「彼奴め、口の先では、さも人に御馳走をするやうなことをいつて居て、ひどい奴だ。」と憤慨してゐた。その後、やつぱり神樂坂にしげ〳〵足を踏み入れてゐる者から聞くところによると、吉崎はその土地でもあんな吝ン坊はないといつて、藝者からも待合からも鼻摘みである、少し氣の利いた藝者は對手にもしないといふことが知れた。そして、そのことをいつて聞かせた男は、その女は素敵な別嬪なんだ、といつてゐたが、後になつて、彼は本人から聞いたといつて、あの時吉崎さんだから行かなかつたといつてゐたと話した。
「そのうち一度僕と一緒にいかう。」と彼はいつてゐた。

三

葛野はその頃から、江口といふその男とも親しくなつてゐた。江口は葛野よりは五六年も早い、同じ學校の先輩で年も三つ四つ上であつたが、文學者としても妙に出來そこなひの方で、安つぽい藝人のやうな風をした、女たらしの遊蕩兒であつた。そしてひどく世間ずれがして、葛野などの嘗て知らない社會のことによく通じてゐるので、葛野は、一と仕切り初のうちは、一種の才人である江口の話に何でも心醉してゐた。それも段々後になつては、彼の見聞も大したものでないことが分つたが、その頃から、急に學生々活から解放されたやうな氣分になつてゐるとゝもに、都會趣味の目覺めて來た葛野は、江口から聞かされる下町の料理屋のはなし、食べ物のこと、芝居者の噂、藝者やお茶屋の女中といつたやうな苦勞人の女のことが何を聞いても彼の興味をそゝるのであつた。中にも意氣な銀杏返しの頭髮とか黑襦子の半衿とかいつたやうな、見方によつてはつまらない瑣末な形體上の視感が強い魅惑の力を以て彼の女性に對する興味を唆つた。そして都會趣味の堂奥に入つてゆくことが、どうかすると殆ど生存の價値の大半であるかのやうにさへ彼には思ひなされることさへあつた。いつも下駄の好いのを穿いてゐるとか、着物に襟垢の附かないのを着てゐるのが何よりも都會人の氣にすることであるといふやうなことを覺えて、そんなことまでに入らぬ苦勞をするやうになつたのもその頃からであつた。

おい〳〵秋も濃かになつて、街の人通りもどこやらしつとりした落着きが見え、澄んだ秋冷を快よく肌に覺える頃になると、美しい夜を色彩る家々の灯影の中にも呉服屋の店先に飾られた派手な色地だの唐物屋の飾窓の中が殊に眼をひ

いた。水菓子屋の店頭には日毎々々に蜜柑の黄色や林檎の紅が色々増した。

葛野は、繁華な都會の中に住んでゐる者の賑かな變化と興味とを殆ど肉體的に感じてゐた。そしてその頃から屢々江口に引つ張られて、そこらの料理屋へ物を食べにいつたり、歌舞伎座や明治座へ芝居を見にいつたり、方々で催うされる遊藝のお浚へを見にいつたりしてゐた。そして到る處で眼に着く女を品評して、あれは好いとか惡いとかいふやうな雜談に耽けるのが最も興味のあることで、葛野はさういふことに生存の幸福を意識してゐた。美しい女は何處にいつても見ることが出來た。女といふ、美しい頭髮容形(かたち)を整へた異性の人間が到る處に見られることが、どれだけこの都會を華美なものにしてゐるかわからない。葛野はいつも目まぎれのするやうな氣持ちがして、街を行く目につく女を振り返つて見た。美しい女は數知れぬほどある。そんな無數の美しい女の中から、どんな女か自分に滿足を與へる女と都合よく出合はないものだらうかと空想してゐた。そして何時かは必ずさういふ女に出合へさうな氣がしてゐた。けれども、それは容易に事實となつて現はれさうでゐて、何時まで待つても、なか／＼見附からなかつた。

江口は二三度葛野を誘つて、じめ／＼した露地の中の遊びに行つたあとで、

「もう今度は君一人で一遍いつて見たまへ。もうゆけるだらう。待合へ行くことなど何でもないことさ。」

と、けし掛けるやうなことをいつてゐたが、臆病な葛野はまだそんな元氣がなかつた。そして一體金をどのくらゐ取られるものやら分らない不安もあつた。それで、いつも金などあんまり持つてゐたことのなさゝうな江口が、まだ十分諳譯の分らぬ葛野には、奇麗な顏をして平然と通してゐるのが非常な手腕家の如くに考へられた。その實江口は彼の使用されてゐるその區内のある有力者の顏を巧に利用してゐたのであつた。勿論そんなことは葛野などに知られる筈もなかつたが、江口のそんな不信用はいつまでも尻つぽを露はさずにはゐなかつた。けれどもその有力者の男衆のやうな、幇

間のやうなことを勸めてゐる江口は大將のお伴をして旅行などに出掛けた時に、旅の憂さはらしにとて大將の枕席に侍する女を周旋たりする場合に搔いところに手のとゞくやうな技倆をもつてゐた。そんなことから、何時も金錢上の不信用などを暴露しながらも全く大將から見棄てられてしまふといふこともなかつた。金のない江口は、さうして大將の顔で通れる處はそこら中の料理屋待合から曖昧な席貸しのやうな處まで色食の欲望を滿足さするべく漁り歩いてゐるのであつた。

その頃江口や葛野は四五人の同好の友達と演藝の研究の名の下に屢々ある處に會合してゐた。そして一とゝほり研究に關する談話が果てると最後はいつも女遊びの話に落ちてゆくのであつた。いつも露骨な猥らな雜談に、はつ／＼云つて笑ひ興じてゐた。そんな放縱な感興が彼等に伸々とした生活の快樂を覺えしめた。本當は演藝の研究といふのは名であつて、さうした三十前後の遊び盛りの連中が寄り集つては無益な雜談に夜を耽かすのが面白かつたのである。

いつも集まる場處は定つてゐた。そこは藝者などの入らない處であつたが、料理屋や待合のやうに氣が張らず座敷も宴會に使ふやうな廣間もあれば、三疊四疊半の意氣な小座敷など、間數も相應にあつた。以前寺のあつた屋敷跡の高い崖の上から低地の街が一目に見晴された。

年中のらりくらりして遊んでゐることの好きな江口は何かの會合を名としては始終そこに入り浸つてゐた。碌な文筆の仕事もしてゐる譯でもなかつたが、何か書く物でもあると、そこの小座敷にいつて遊んでゐた。そこへは藝者といふやうな表向きの者でなく、秘密に客を取る種類の女が偶に出入りしてゐた。それでも亭主が案外頑固な爺兒であつたので、おかみの一存で亭主には隱して長い懇意の筋でなければそんな周旋はしなかつた。

葛野は江口と一緒によくそこへも遊びにいつてゐたが、彼にとつては未知の世界である、さういふことのあることは

少しも知らなかつた。けれども江口は、そこのおかみとはもう長い間の知合で、おかみの周旋でいろんな女とそこで秘密に會つてゐたのである。

一度葛野は江口と連らなつてその家へいつた時、いつもおかみや女中達のゐる、帳場の奥の圍爐裏端に入つて茶を飲んでゐると、そこに女中のほかに藝者のやうな風俗をした銀杏返しの三十がらみの女が坐つてゐた。葛野にはそれがどんな種類の女か詳に分らなかつたが、その後で、彼等は小座敷の方に上つていつた。おかみは座敷の案内に立つてついて來たが、江口はそこに入ると、「おかみさん、ありや好い女ぢやないか。」と、色慾に渇した江口はもう一寸どうかしてみたいやうな氣持をしていつてゐた。江口はまだ獨者であつた。

すると、そんな處のおかみとも思へない、大女で不恰好な樣子をしたおかみは、見るから氣持ちの惡い、にや〱した笑ひ樣をして、

「江口さん、またそんなことをいつて、あんた見る女ごとどうかしたいんだから」

と、變な田舍訛りの言葉で友達にいふやうにいつた。そこの爺兒は伊勢產れの者で、おかみは若い時松阪か何處かで女郎をしてゐた女だといふ話しであつた。江口もさういはれて、爲方なくにやりとしたが、又すぐわざと眞面目な顏をして、

「そんなことはないよ。そんなことはないよ。」と重ねて辨解するやうにいつて、

「好い女ぢやないか、あれどうかならならのか。」彼はもうぜひ共何とかしてもらひたいやうにいつた。

おかみは餘りはき〱せぬ調子で、

「さあ話の樣子によつては、どうかならないこともないか知りまへんけど、江口さん浮氣者だから、何をいふか一寸も

當てにならないんですもの。」

彼女は何かしら一寸怨むやうにいつた。――大分後になつて、そのおかみとも、江口はちよつと譯のあつたやうなことを、葛野は聞いたことがあつた。

そんなにいはれて、江口はちよつと照れた笑ひ様をしながら、

「戯談をいつちや可けない。おかみさんは僕をひどく惡人のやうに思つてゐるんだ。僕は決してそんな惡人ぢやないよ。」

するとおかみは、一層甘つたるい笑ひを發して、

「あんた本當に惡人ですがな。私は先の時分のことを思つて江口さんは生なお方と思つて居つたら、二三年遠のいてゐる間にすつかり人が變つてしまつた。」と何處までも戯弄ふやうにいふ。

江口は洒々した顏を又わざと生眞面目な表情をして笑を含みながら、

「いゝよ。」と切り口上につんと澄まして、

「おかみさんが僕をそんなに惡人と思つてゐるんなら惡人にしておくさ。實に非道い人だ。」と、すねた風をしてみせた。

ずるい癖に正直な處のあるおかみは、一寸本當になつた顏をして、

「江口さん、たうとう怒つてしまつた。」といつて、はあ〳〵笑つてゐる。

「何にも僕は怒りやせんさ。おかみさんが僕を惡人にするんだもの。あんまり非道いよ。」と又眞顏になつて見せた。

江口は彼自身には財産などもなかつたが、母方の實家の伯父は大會社の重役で、可なり派手な生活をしてゐた。そちらにはまだ江口の祖母に當る人も高齢で存命してゐた。さういふ關係から江口も何處か、本來良家のお坊ちやんが文弱

に流れて放蕩に身を持ち崩したやうな處があつた。金はなくつても何時も金持ちの若旦那のやうな風がしてゐたかつた。

おかみは可笑さうにいよ〳〵笑つて、

「江口さん、先によくクリスマスの時にお母さんと御一緒に自家へおいでになつてゐた時分は、そりや人柄なお坊ちやんのやうだつた、それがいつの間にかそんなになつてしまつた。」

江口は「はゝゝ、」と笑つて「今だつて人柄なお坊ちやんですよ。」

江口の家では自分も彼のお母さんも番町教會に屬する信者と稱してゐた。日曜毎には切り髮姿で上品な風俗をしたお母さんは、聖書を包んだ小い縮緬の小包を脇に抱へて定まつて教會にいつてゐた。たとへば朝飯などもお味お汁けに糠味噌漬の香々といふよりも、二食にして朝はたゞ木村屋のビスケットに牛に乳珈琲といつたやうな風な生活であつた。二人とも格別好い物も着てゐなかつたが、いつも身奇麗に、汚れぬ物を着てゐた、それで庭などの廣い、五六間もある新築の貸家に住んでゐたが、葛野は段々近しくなるにつれて、家賃はもう半歳も拂つてゐないことを知つた。江口は暫く默つてゐた後で　今度は本常に落着いた口調になつて、

「ねえおかみさん、そんな話はまあどうでもいゝさ。それよりあの女は一體どんな身上の人間なんだ。」しんみりとなつて訊いた。

するとおかみもそれに釣り込まれたやうになつて、

「あの人ほんとに、今も話を聞いてゐると氣の毒な人なんですよ。わたし先から一寸知つてゐたんです。やつぱり以前は何でも東京からさう遠くない處の相當な家のお孃さんだつたんでせうが、一家の不幸つゞきで藝者になつて、つい此

の間まで北海道にいつてゐたんですけれど、今度事情があつて戻つて來たんです。」
「ふむ。」と江口は、感心したやうに聽いてゐる。
「それで此度は東京で商賣を始めようといふの。」
「さあ、今もその話をしてゐたところです。東京で藝者をするといつたつて、なか〳〵骨の折れることだし、あの人も、わたしもう此の年になつてあんな商賣は厭だといつてゐるんです。」
「いゝなあ、さういふ女は。」江口は正直に、もうすつかり氣のあるやうな顏になつてゐる。
おかみは又づるさうな、甘つたるい顏でにや〳〵笑ひながら、
「わたし、以前の、おとなしい江口さんだつたら、お世話をするんですけれど、今のあんたのやうな人を、うつかり世話などすると、今まで散々辛い思ひをして來たあの人に又辛い思ひをさせるのが可哀さうだから、そんな罪の深いことは出來ない。」
おかみは眞劍な調子でいつた。すると江口は又わざと勃然としたやうな色を表はして、
「おかみさん、一體僕の何處がそんなに可けないんだ、何處がいけないといつてくれたまへ。僕は大に改心するから。」
するとおかみは、泳ぐやうな形で片手を上げて江口の顏を指す眞似をしながら、堪らないといふやうにも一つの手で腹を抱へて笑ひ入り、
「あんな顏をして憤つて。お可笑しい江口さん。」といつたきり、物もいへないほど一としきり笑ひ入つてゐた。
江口も爲方なく仕舞には笑つてしまつた。葛野はそれから暫くして一人で出て歸つた。それから十日ばかりも過ぎてからであつた。ある晩又そこへ彼は遊びにいつて、いつもの帳場の奧の茶の間の爐傍で話してゐると、座敷の方から戻

つて來た一人の女中が、
「おやゐらつしやい。」といつて、そこに坐はつたが、一寸低聲になつて、
「葛野さん、あちらの中二階にいつて襖の間から、そうつと覗いてご覽なさい。」と耳打ちした。
「何だ？どうしたの。」葛野が不思議な顏をすると、
「何でもいいから一寸早くいつてご覽なさい。……江口さんが來てゐる。」
「あゝ、江口が來てゐるのか。」といひながら、葛野は立つて、遠い廊下づたひに中二階の方にいつて、襖の外からそうつと中の樣子に耳を澄ますと、江口だけではなささうで、何かすすり泣きをするやうな忍び音が洩れて、衣摺れの音もする。それで葛野は盜むやうに、そうつと、襖の建て付けの、わづかの隙間に眼を押着けてみると、床を背にして紫檀の餉卓の前に坐つた江口の膝の上に紫紺縮緬の紋の付いた羽織を着た女が面を俯伏してすゝり泣いてゐる處であつた。葛野は腹の中で、これは惡いところを覗いて見たと思つて、氣が咎めたけれど、又、なに江口のすることだから構やしないといふ氣になつて、江口はどんな顏をしてゐるかと、息を殺して尙ほもじつと見てゐると、彼はいつも吸ふリリイの吸ひ口を口の横の方に啣へて鼻から煙を吐きながら、思案に暮れたやうに默り込んだまゝ堅く腕組みをしてゐる。女はその横手から此方に、艶めかしい長襦袢の裾の方を向けて、紅い袂裏を溢しながら、聞えるか聞えないくらいの泣き聲を吞み殺すやうに、ぴつたり江口の膝に縋り伏してゐる。赤い裾裏の處から白足袋が見えてその奧に白い脛の一部が露はれてゐる。
葛野はその瞬間、まるで息が止まつたかと思ふほど全身の血が沸くやうに、ある興味に唆られるのを覺えた。そして、がつがつ齒の根の慄えるやうな氣がしながら、又密うつとそこを立ち退いで、足音を忍びながら廊下を戻つて來た。

葛野が爐端に歸つて來るのを、興味の眼を以つて待受けるやうな顏をしてゐた女中は、笑を含みながら「どうしてゐました。」と低聲でいつた。

葛野はちよつと羞含んだやうな面持ちになつて、

「うむ。」と笑つてゐたが、「あれは此の間此處に來て坐はつてゐた女？」

「さうですよ。隨分でせう。」

すると、そこにゐたも一人の、まだ人擦れのしない若い方の女中は、それも何だか妙な處を見たといふやうに照れた笑ひ様をしながら、

「わたし、あんな處を見たのは初めてゞす。男とか女とかいふものはお可笑なことをするものですねえ。」と感心したやうにいつてゐる。

そこへ又おかみが何處からか出て來て坐つてゐたが、何も斯も心得たやうに、

「江口さんには、どんな女でも二寸の間はすぐ慕れるんだ。」と、笑ひもせずにいつた。

「だつて、あの人も隨分早いんですねえ。」

年取つた女中がいつた。

「一體男に慕れつぽい質なんだ。あの女それで始終苦勞してゐるんだ。」おかみは又笑ひもせずにいつた。

「どうしたんでせう。たつた此の間からぢやないんですか。」若い女中は正直さうにいつた。

葛野は感慨ぶかい顏をして傍に默つて、そんな話を聽いてゐたが、男女の間の事が、そんな風にとん／＼進んでゆくのが新しい興味を刺戟するやうに思へた。

四

その頃から葛野は、其家のおかみや女中達と自然に顔馴染になつて江口には關係なしに時々一人で茶の間に遊びにいつてゐた。葛野の下宿からそこへは遠くなかつた。まだそんな女の中へ入つていつたことのなかつた葛野には、どこか異性に對して江口などにはもう見られなくなつてしまつた、生(うぶ)なところがその容姿(ようす)や物のいひ振りに表はれてゐた。初はそこのおかみが電話口に出て葛野を呼び出したのが元であつた。葛野はそれでも何だか、會か何かで明白(はつきり)した用事のないのに、そんな處に何でもなくたゞ遊びに押掛けるのは厚皮しいことのやうに思はれてゐた。

「そんな遠慮は入りませんです。お遊びにゐらつしやい、」おかみは電話口で、言葉尻に妙な甘つたるい伊勢訛りの殘つた語音で、そんなことを云つてゐた。

おかみは一體、そんな女にはよくある、妙な癖で、男と女との仲を取持つたりするのが一つの道樂であつた。さうかといつて、表面だつた結婚の仲立ちをするなどゝいふやうな堅氣なことは出來なかつたが、色の世話を燒くことに興味を持つてゐた。江口はその手でおかみに幾たびも世話を燒かしてゐた。その癖彼女は自分の世話をした男や女が二人だけて段々仲がよくなつて自然出雲の神なるおかみを、ちよつとでも袖にしたりする風が見え出すと、すぐ何かにつけて水を差したり、邪魔をしたりせずにはゐられない性分であつた。そんな時には一種の嫉妬の變性とも思はれる執念深い怨みとなつて、それが發揮されるのであつた。

おかみは電話口から、

「ねえお遊びにゐらつしやい。今日は自家でも暇で皆な遊んでゐますから。」

葛野は、電話だと、顔を見ずに物がいへるので、少しく大膽になり、

「えゝ遊びにいきますよ。おかみさんその代り、江口君にだけでなく、僕にもあんな女を世話してもらひたいもんだなあ。」

すると、おかみは、一層甘つたるい優しい聲になつて、

「えゝ、あんたには、あんな年を取つた人でなく、もつとおとなしい、若い奇麗な女をそのうち心掛けておきますから、まあお遊びにゐらつしやい。いろんな面白い話がありますよ。今皆なで面白い話してゐるところです。」

机に凭つて何か讀んでゐた葛野は、そんな呼び出しをかけられると、もう樂しい氣持ちで一杯になつて早速出掛けてゆくのであつた。

その年も暮れようとして十二月も追々末になり、街には落着いた冬の氣持が濃かになつて軒を並べた店家はいづれも歳暮の賣り出しの品を山ほど積んで景氣を競ふた。道を行く人の心も氣せはしさうであるが、いつの年でも歳末の繁華は東京の街でなければ見られない景物である。

まだ下宿屋暮しの葛野は、年中盆も正月もなかつたが、それでも繁華な街の景氣の中に住んでゐるのは惡い氣持ちではなかつた。

その頃になると、これも今では年中行事の一となつた、クリスマスのお祭が方々の教會に屬する信者の仲間で執行はれた。そんなことも歳末氣分を濃厚にする一つであつた。

ある午後葛野は、いつもの席貸しからの電話が掛つたといふので電話口に出ると、お新といふそこの年取つた女中の

聲が聞えて、格別用事もなささうであつたが、

「どうしてゐらつしやるの。おいそがしいの。」といふ

「いゝや、別に急しいこともない。」

「お遊びにゐらつしやいな。」

「えゝ有難う。」

そんなことを二口三口いつてゐたが、葛野にはさういふ場合にそんな女と調子を合はして頓智問答のやうな、用のないことを面白さうに話すことは出來なかつた。そして、いふことに好い考も浮ばなくつて默つてゐると、向うは

「あゝさう。」と獨り言のやうにいつて、「あなたにお訊ねしたいことがあるの。」と意味のあることのやうにいふ。

「何？」

「あの、クリスマスといふことをみんないふでせう。あのクリスマスといふのは何のことです。」

葛野は、妙なことを訊くと思つたが、そんなことくらゐ知らぬ、舊い東京の女の無智と無邪氣とに淡い興を感じながら、彼は電話口ではゝと笑つて、

「あんたは面白いことを訊くねえ。クリスマスといふのは、さうだなあ、解り易くいへば、あの、耶蘇教といふことをいふだらう。あの耶蘇教の、つまりお祖師さまの御縁日のやうなものなんだ。……どうして君出しぬけにそんなことを訊くんだ。」

「あゝ、さうですか、それでよく解りました。どうも難有うございました。クリスマス、クリスマスつて、前からよく聞いてはゐましたけれど、私何の事か、その譯を知らなかつたのです。……お暇でしたらお遊びにゐらつしやいな。」

お新は、輕く口を滑り出る江戸つ兒らしい語音でさういふのであつた。

お新といふその女は二十六七の小柄な女であつた。何處か病氣でもしてゐたらしい樣子で、少い髮毛をやつと銀杏返しなどに結つて、顏の血色も蒼白く優れなかつたが、物の言ひ振りなどはきく／＼してゐて、見たところ客の取廻はしなどによく頭の利く女であつた。葛野は、二月ばかり前ずつと最初に見た時に、病みあがりのやうな蒼い顏をして手束ねの頭髮を亂したまゝ、その時七八人同勢の命があつて、その席へ出て來た時に、青つぽい唐棧か何かの袷衣に半襟のかゝつた、見るから所帶くづしのやうな引掛け帶の恰好をしてゐたのが眼に留つてゐた。格別好い女でも何でもなかつたが、眉のはつきりした、口元の小さく引締つて物をいふ時白い齒並みの奇麗に揃つてゐるのが何となく賢さうな顏に見せた。

葛野はそのお新が、それまでにも一二度電話で話したことはあつたが、今日は何だか、いつにない、ちよつと彈んだやうな調子で親しさうな口を利くので、遊びに來いといへば、女の話り對手に事を缺いてゐる彼はすぐ浮いたやうな興味をそゝられて、出掛けてゆく氣になるのであつた。

「今そちらはほんとに暇なの。邪魔でなかつたら往いつてもいゝ。」

「ちつとも邪魔なことはありませんから、すぐゐらつしやい。わたし一寸あなたにお聞かせすることがあるんですから。」

そんなことをいはれると、葛野は、とても書籍などによつては得られない生々した興味を感じて、すぐさま出掛けていつた。ゆくとおかみもお新もほかの女中なども皆な居つたが、その頃は葛野も大分そんな處へ行くことに熟れて來て、臆せずずつと座敷へ通るだけの勝手をおぼへた。

お新は、すぐその後から一とゝほり坐蒲團を持つて來たり、茶や火を運んで來たりして机と脇息の中ほどの處に坐はりながら、先程はどうもと、又改まつて一寸挨拶をした。

葛野は笑ひながら

「クリスマスつて、妙なことを出し拔けに訊くのはどうしたの。」

するとお新も笑ひながら、

「いえ、どうもしないんですけれど、先からクリスマスといふことはよく聞いてはゐましたけれど、何の事か分らなかつたのです。此の家でも明日その會があつて百人ほど集まる申込みがあるんです。毎年今頃になると、いつも二組や三組は申込みがあるつて、おかみさんいつてゐました。それでクリスマスといふのはどんなことをするのかと思つて、昨夜江口さんが一寸來た時に『江口さんクリスマスつて、何のことです。』と訊いたら、どうしたのですか、つうんと怒つたやうな顏をして『今そんな話をしてゐる暇はありません。』と、さういふんです。」

お新は呆れたやうに言葉に力を入れていひながら、

「わたし、そんなことを訊いたくらゐで何も、そんなに怒られる譯はないと思ふんです。どうしたんでせう。あの人は一體こう妙な厭やあなところのある人ですねえ。――こんなことをいつて、あなたのお友達のことを惡く申しては濟みませんけれど、――こゝのおかみさんもさういつてゐました。葛野さんは江口さんと大變親しくしておいでになるやうだけれど、江口さんとは餘りお交際にならん方がいゝんだと、さういつてゐました。」

彼女はさら〳〵とした言葉でそんなことをいつた。葛野は默つてひとゝほり聽いてしまひ、笑ひながら、

「うむ、しかしクリスマスのことを一寸訊いたくらゐで江口がそんなにぷん〳〵する道理はない。その時何かほかの事

でも考へてゐたのでせう。そんなことは何でもないぢやないか。……それより此の間の女はあれからどうしたんだ。」

「わたし、委しい事譯は知りませんがあの人も大方あれつきりなんでせう。」お新も笑ひを含みながら、

「あの女の人も、まあいはゞ淺敢果なんです。江口さんは、どんな女にでも、初めは、お前を俺の女房にするとか、一生世話をするとか、程のいゝことをいふんださうです。それを又本當にするのが間違つてゐるんです。……だつて、まだ、やつと十日になるかならないんですもの、はゝゝ。」と、又笑つた。

五

葛野は知らなかつたが、お新が二た月ばかり前はじめてそこへ、一週間ばかりといふことで手傳ひに來てからすぐであつた。江口は新顔の彼女を見るとすぐ浮氣の蟲が起つて、おかみに彼女の身の上を訊ねなどしてゐた。その頃、一時二三年も途の絶えてゐた江口の足が又此家へだん／＼向きはじめてゐた時で、彼は、

「おかみさん、僕もまだ獨りでゐるんだ。だれか、おとなしい女を一人世話をしてもらひたい。」といつてゐた。

「あなたまだお一人なんですか。もうそろ／＼奥樣をおもらひになつてもいゝ時分ですねえ。」

「もうそろ／＼ぢやないよ。大分遲れてゐるんだ。」

「ほんとですねえ。あなたに奥樣がお出來にならんとお母さんがご安心なさらんでせうから。」

江口は大にわが意を得たやうに夕なづいて、

「さうなんだよ。僕は一人の方が氣樂でいゝんだが、母がもう年を取つて、内の事に骨が折れるのを見てゐると、傍で

見てゐて氣の毒で堪らないよ。」

江口が眞面目な顏をして、さういふと、おかみも、しんみりとした調子になつて、

「ほんとにさうですねえ。でもあなたが、そんなに思つておいでになる心をお母さんがご存じならお喜びでせう。」

おかみは、江口のお母さんとも、何かの會などで偶に此家に來た時口をきゝ合つてよく知つてゐる間であつた。

江口は放蕩者にしては、なか〳〵母親思ひであつた。

「まあ、それはそれとして、おかみさん誰れか一人おとなしい好い子はないかね。」

「えゝ、今すぐといつては好い心當りもありませんが、ひとつ氣をつけておきませう。」

そんなことをいつてゐたことがあつた。

「おかみさん、何だか又年増の女中が一人來たぢやないか。」

「えゝ、あれは女中といふこともないんですが、忙しい間一寸手傳つてもらつてゐるんです。」

お新は其家からつい近い處に母親や兄弟なども住んでゐて皆なそこのおかみや亭主とは、ずつと前からの知合ひであつた。彼女は四五年も下町の方に嫁してゐたが、夫が道樂者であつたので散々苦勞をしぬいた揚句たうとう去年の秋口に離緣して老いた母親一人の處へ出戻つて來た。そしていろ〳〵な精神上の打擊からその歲中ずつと身體が優れないでぶら〳〵してゐた。片親や兄はあつても、昔はさうでもなかつたが今はいづれもさう樂でない處ばかりなので、彼女は何時までも其等の厄介になつてばかりは居られなかつた。それで、今年の春頃から、先に嫁いでゐた處で覺えた小商ひを始めてみたりしたが、それも女手ひとつには思ふやうにもゆかず、少しばかり持つてゐた小錢も又その爲にすつかり無くしてしまつたりして、まるで氣落ちのしたやうになつて母親の傍で毎日鬱いでばかりゐた。それを先から懇意の間

であつた貸席の亭主夫婦が氣の毒がつて、

「お新さんまあ、そんなに何も悒々しないでも、又そのうち好い日の照ることもありますよ。」と、慰めて、

「さう毎日家の中にばかりゐて、何處へも外へ出づにゐるゝ、却つて身體の爲めに好くない。氣晴しと思つて、私の處に來て、すこし手傳つてください。」

といはれるので、それもさうかと其家へ來てゐるのであつた。

おかみは江口に、自分の知つてゐるだけのお新の身の上話しをして聞かせて、

「あの人もあまり良くない處へ嫁いだために散々隨分苦勞をしたでせう。」

江口は眞劍な顏をして、

「ふむ、それは氣の毒だなあ。そんな堅氣な人がいゝなあ。どうだ、堅いんだらう?。」

「えゝ、あの親や兄姉ども、わたしのとこ、古くから懇意にしてよく知つてゐるんです。暮しもあまり樂ぢやないけれど商人で堅いんです。それで滅多なことをする譯にはいきませんが、でも一旦嫁いて出て來たんですから、堅い人になら話し樣によつては、その氣にならないこともないでせう。」

江口は頻りに本氣になつて、

「そこを一つおかみさん、何とかうまく話してみてくれたまへ。」

「えゝ、まあ機を見て本人の考を訊いてみませう。」

そんなことを、おかみと江口とで初の内いつてゐたこともあつたが、その間にだん〳〵、江口が、二三年見なかつたうちにひどく女擦れがしてゐることが分つて來たので、流石のおかみも、これでは幾ら出戻りでも困つてゐても、堅い

交際の家の娘を、迂濶にそんな世話など出來ないと思つてゐた。

一度江口の噂が出た時おかみは、

「江口さん、堅氣な女を一人世話をして欲しいといつてゐたから、わたしお新さんを世話をしようかと思つてゐたんだが、あの人暫く見ぬ間にひどく人が惡くなつてゐる。あんな人にうつかり女の世話など出來ない。」と云つてゐたことがあつた。

そんな話をおかみから聞かされた後であつた。一度お新は江口の一人で來てゐる座敷へ用事でいつたついでに、江口からいろんなことを話しかけられて、つひ一寸話込んでゐると、帳場の方から頻りにりん〳〵呼鈴で呼ぶ音がするので、そのまゝ急いで立つてゆくと、どうしたのか、おかみは顏を眞赤にして相形を變へて憤つてゐて、お新がそこへ戻つて來たのを見ると、いきなり、

「お新さんに、江口さんのことを此の間あのくらゐよくいつて置いたのに、江口さんといふ人は道樂者で可けない人なんですから、あの人とあんまりつまらない話をしてはいけないんですよ。あんたにあれほど云つて置いたぢやないか。」

おかみは、まるで雷の落ちかゝるやうな調子で頭から、そんな氣まづいことを露骨にいつた。

お新は、呆氣に取られて卽座には何といつてよいか、それに對して返答することも出來なかつた。おかみから此の間、なるほどそんなことを聞かされたことは知つてゐるが、そんなことを自分の方から別に頼んだ譯でもないし、此方では格別氣に留めても聞いてゐなかつたくらゐであるから、そんなことを何とも思つてゐないし、今だつて、向うからいろんなことを話しかけるので、此方でもそれに調子を合はせていゝ加減なことを二た言三こと口を利いてゐたゞけであつた。

それをおかみに何と感ぐつたのか、ひどく昂奮した顏をして眞赤になつて怒るのが彼女には一寸不思議な氣持ちがしたのであつた。

「何でもないんですよ。江口さんがいろんな話を仕掛けるもんですから、一寸その對手になつてゐただけなんです。」

お新は呆れた顏をしてさういふと、おかみはそれでも容易に釋けない顏をして、

「それが可けないんだ。江口さんといふ人何をいふか知れない。」と、まだぷん／＼してゐる。お新は何だか腹の中でお可笑くもあつたが、それきり默つてしまつた。

江口は先刻お新が用を達して出て戾らうとすると、妙に笑顏をつくつて、

「お新さんまあお話しなさい。」と呼び留めた。お新は、

「えゝツ。」と中腰になつたまゝ膝をついてゐると、

「今日は暇なんだらう。まあお話しなさい。僕、あんたに少し訊ねたいことがある」と優しい言葉を掛ける。お新はお世辭に嬌笑しながら、そのまゝ又お尻を落して、

「訊ねたいことつて、何です？」

「あんたのことは此の間こゝのおかみさんから一寸聞いた。あんた長い間下町の方にいつてゐたんですつてねえ。」

「えゝ、此方の方は歸り新參で何にも分りません。」

「下町に住み馴れた者にはこんな牛込なんか野暮臭くつていけないでせう。」

「そんなこともありませんが、彼方は住みいいには住みようございます。」

「大變意氣な商賣だつたんですつてねえ。」

江口はどこまでも調子の好いことをいつて話しかけた。しかし、お新は自分の嫁してゐた先のことまで、もうおかみが饒舌つてしまつたのかと思ふと何とも厭な氣がして、江口にまで餘計なことを知つてゐられるのが堪らない恥辱であつた。そして、いとゞ血氣のない顏をぱつと赧くしながら、強ゐて苦笑を色に表はすやうにして、

「なんですか……」といつてゐた。

そこへ消魂ましい呼鈴の鳴る音がしたので急いで帳場の方へ出て戻つたのであつた。

江口は、それから後もちよい〳〵來るたびに、お新が座敷に出て來た時を捉まへては、徐時程の好いことをいつては水を向けてゐた。けれどもお新は、あの時おかみから、乙なことを云はれたことは忘れてゐないのと、これに彼女もなか〳〵さる者なので、いつも江口から何か面白いことを話し掛けて來るたびに、それに負けず竹篦返しをいつて戲弄つてゐた。

さうなると江口の方では却つて眞劍になつて、男の面を抓つたやうになつてお新に當つて來るのであつた。彼女は江口の心持ちは解つてゐた。すると丁度そんな場合のところへ北海道の方の旅稼ぎから歸つて來たといふ例の女が帳場に顏を現はしたので、浮氣者の江口はもうお新の方へは戲談さへもいはなくなつてしまつた。彼女は、おかみから、折くもない腹を探られるやうな變な邪推を向けられたことがあるうへに、迂濶り江口の口車に乘るやうな氣は少しもなかつたが、たとひ戲談にもせよ、一と仕切りはお新さん〳〵と云つておいて、ふつと氣が變ると後はもうお前なんぞには用はないといつたやうな外方を向いた樣子をするのが彼女には癪に障つて堪らなかつた。尤もその爲におかみの變な疑ひは晴れたやうなものゝ、何とかして江口を戲弄つてやりたかつた。

葛野といふ人はまだ人擦れのしない人のやうである。あの人にでも江口のことを引剝いて話してやらうと思つた。

六

それでお新は、葛野にこんなこともいつた。江口がいつも葛野などを誘つて此家で會をするといふのは、それは表面の附けたりで、その實江口は、自分では一錢も席料を拂はないで、連中の歸つた後もひとり居殘つて十二時過ぎてから翌日まで座敷を使つてゐる。

「あなた方皆さんはご存じないでせうが、江口さんの遊んでゆく席料まで何のことはない會で拂つてやつてゐるやうなものです。つまらないぢやありませんか。内のおかみさんもさういつてゐますよ。江口さんといふ人は非道い人です。」

お新はそんなことをいひながら、自分のいつてゐることに油の乘つて來たやうな表情をして、

「ほんとに非道い人です。江口さんに貴方からさういつてやるといゝんです。あんな厚皮の人はつけ〱剝き出しをいつてやらなければ駄目です。……さういつて下さい、君は非道い人間だつて。……此家のお新から聞いたつて、さういつて下さい。お新がいつたつて。もし怒つたら、私からうんとさういつてやりますから構はないです。」

葛野が、何がそんなに非道いのか、未だ十分腑に落ちぬやうな面持をして默つてゐるのを見て、お新は慷慨するやうな調子でさういふのであつた。

しかし、葛野がお新に興味を持つことを自分で氣が付いたのはその頃からであつた。彼は、お新に、そんなに注意されても江口をまだ、お新のいふほど、そんなに爲方のない奴とは自分では思つてゐなかつた。それよりも初めの一寸の口澤りが、いかにも何んとお新がいゝのに、江口をまだ〱信用してゐた、

葛野はその翌日、小日向臺の奥まつた閑靜な處に在る江口の家へわざ〳〵出掛けていつて、置炬燵に凭りかゝりながら、昨日お新から聞かされたとほりに、

「お新がさういつてゐた。江口さんといふ人は非道い人だつて。……お新がさういつてくれといつてゐた。」

と笑ひを含みながら云ふと、そんなことくらゐに辟易する人間でない江口は、

「ふゝん。」と何か意味ありさうに、にやりとしながら、一つうなづいて、

「それには譯があるんだ。……そんなことをいふ譯があるんだ。」と調子の高いことをいつた。

葛野はたゞ

「さうか。」と思つてゐたが、江口に向つて恰も先輩に腹心を打ち明かすやうに、

「僕はあのお新がどうかしたいんだ。」

といふと、江口は、

「そりやあいゝ、君彼女(あれ)をしたまへ。實は僕がどうかしたいと思つてゐたんだが、一寸事情があつて、それがいけないことになつたんだ。もう僕のいふことは信用しないことは分り切つてゐるが、君ならば持つていき樣によつて或は承知するかも知れん。」

葛野はそれから江口とだん〳〵話してゐる間に大分實行的な考へにまで氣持ちが進んで來た。江口は、

「地色(ぢいろ)といふものも一寸面白いものだ。ずぶの業務人はどうしても商賣氣を離れることが出來ないけれど、素人はそこになると、しんみりとした味がある。」と、さも女色の妙味を樂むかのやうな調子でいつた。

たゞ單に金錢によつて肉欲を賣買することだけでは、どうしても滿足することの出來なかつた葛野は、差當り素人の中

で普通の婦人よりも比較的近づき易いところからお新によつて實行的の興味を刺戟されてゐた 彼は幾度か躊躇つたおと、丁度クリスマスの會合があつて、家中忙しくしてゐる時であつた。彼はほかの座敷にいつて遊んでゐたが、人眼の無い薄暗い廊下の處でお新の往くのを××××××、×××××××××××××と、彼女は、葛野が此の間中から頻りに不安を抱きながら考へてゐたとは案外に、直ちに彼の暗示を解するやうな表情をした。葛野はその時彼の未だ嘗て經驗したことのない、胸に何か靈能のある泉でも新しく湧き出たやうな悅びを感じた。そして、廣間の方では座敷や廊下でクリスマスの悅びで湧くやうな歡聲の起つてゐるのを、餘所のことのやうな氣持ちで聞きながら、自分は誰れにも知られない秘密な、無限の悅びを胸一ぱいに湛えながら、もうそれだけの暗示を得たら、大半成功したやうな、浮き立つ思ひで、何だか其處にいつまでも靜つとしてゐられなくなつて外に出て來た。そして、心の中で、「あれだけ意志を交通することが出來たら、もう後は急ぐには及ばぬ。」と思ひながら人通りの少い暗い裏通りを歩いて來ると、彼はひとりでに笑ひたくて堪らなくなつてたうどう誰れも見てゐない處で笑つてしまつた。裏町から次第に、明るい大通りの方に出て來ると、街は歲暮の賣り出しで、ぞろ／＼と大變な人が出てゐる。彼はその間を縫つて、ひよん／＼足が地に着かぬやうな心地になつて道を急いだ。そんなに道を急いで何處へこれから往かうとするのか、何處へ急いでいかねばならぬ處もない。たゞ悅びに滿ちて心がそは／＼してゐるのであつた。暮れの街を步いてゐる多勢の中で自分だけが一人幸福者であるかのやうな氣がしてゐた。彼は、肩と肩と擦れちがふ雜沓の人込みに揉まれながら、ちやうど宙に持ち上げられてゐるやうな氣持ちで、賑かな物賣りの景氣や多勢の男や女の顏を見て通りながら、いつも心は、先刻の、秘密に交感された樂しい暗示について思ひつめてゐた。街の景氣も賑かな人の往來も毎時のとほりである筈だが、の晩は、何も斯もが、すつかり今までの物とは違つたもののやうに眼に映つた。冬の夜とは思はれない、しつとり

とした、靜かな空氣は薄い絖を一枚透して見るやうで、軒を並べた家の形や、灯の色や、美しい色した水菓子や呉服屋の飾窓の中の物などがいづれも白い霧の中に水氣で糢糊した繪の如く思はれた。彼の眼に映る凡ての物が悉く美しい物ばかりになつた。

彼は何かしら獨りごとを浮かれ出すやうな氣持ちになつて、それから宿に戻つて來たが、時に先刻のことを樂しく嚙みしめるやうに懷想しては誰れも見ぬ處で微笑んでゐた。やがて、いつものとほりに押入れから自分で夜具を取り出して寢床の中に橫はつたが、妙に擽られるやうな心地がしてゐるとゝもに片はら無闇に敢果ない不安に襲はれてゐた。そして、いつしか眠つてしまつた。

さうなると少しも早く、不安な暗示をもつと、はつきり確めねば落着いてゐられないやうな氣がするのであつたが、急いで事が露顯するやうなことがあつてはならぬと思つて、堪え難い中の一日を、何かほかの事にまぎらして忘れて居らうとして、彼はその翌日自分の部屋に閉ぢこもつてゐられなくなつて、ぽいと外に飛び出した。そして、當てもなく友達の處を訪問したり、少し離れた處の街を散歩したりして、一日落着いてゐなかつたがその間も少しも他の事は考へずに、樂しい暗示と敢果ない不安とを織り交ぜて考へ續けてゐた。

その翌日早速お新のところへ出掛けて、彼は何食はぬ顏をして座敷にとほり、一寸した食べる物などを取つて彼女と話してゐた。

「お新さん此の間のことよく解つたの?」葛野は照れ隱しに、却つて洒々した調子でいつてみた。

するとお新はもう飲込んでゐるやうに、一つ顏を下げて、そのまゝ下を向きながら、

「あなたが、これから先わたしを親切にしてやらうと仰有るのは難有うございますが、此處の家へ今までのやうに始終

さいでになるのは可けませんから、こゝの家でなく、何處か他で月に一度か二度お眼にかゝるやうにして戴きたいと思ふんです。」

さういふお新の考へはもう葛野よりも遙かに實際的に頭が働いてゐるのであつた。葛野は、彼の不安を抱きながら豫想してゐたよりも、案外容易くお新が應諾したので、それを喜ぶよりも却つて稍々不滿足にさへ思つた さうして、心の中で、

「これぢや此の女は今までもこんな經驗があるかも知れない。……此の間江口が妙なことをいつてゐたが、或は江口のいつたのが全く噓ではなかつたかも知れぬ。」と思つてみたりして、又別の不安と疑惑に囚へられた。

けれども葛野はもう生れて初めて經驗する甘い戀の囁きに、心は無中になつてゐるので、それはそれとして、お新に對する強い本能的の欲望を抑へることが出來なかつた。彼は、お新の言葉に對して稍々不滿の色を浮べながら、

「そんな、月に一度や二度逢ふなんていふやうなことぢや僕は厭だ。」

彼は、熱心に思ひつめてゐる者が、そんな微溫的なことでは到底滿足されるものではないと思つた。そして、お新がそんなことをいふところに、何處やら、職業的な氣持ちが混入してゐるのではないかといふ不滿や嫌厭が伴つて起つた。

その場合無論彼女の心持ちでは、自分をひどく卑下して考へてゐるところから、葛野に對して相對的に戀愛關係などゝいつたやうな交渉が成立つものではないと思つたのであつた。そして、葛野の、恐ろしい劍幕で熱心な顏色を見ると、彼女はそれに感謝するやうな、つり込まれるやうな心持ちになつて、

「そりや、貴方が、こんな私の樣な者でもそんなに思つて下さるのは難有うございますけれど、こんな事がもし何處か

貴方のお友達の方などに知れたら、わたしは構はないにしても、あなたのお名に傷が付くことになるでせう。」

葛野はそれを皆まで聴いてしまはないうちに強く頭振をふつた。

「そんなことは何でもありやしない。私が好きですることを少しも世間や友達などには關係のないことだ。」

「さうですか。……それならようござんすけれど。」

その間にもお新は、他の方にも用事があるので起つたり居たりしてゐた。

「兎に角此處では落着いて話もしてゐられないから、その内何とか都合して一度何處かへ出て話さう。」

「えゝ、そのうち何時か好い機を見まして。」

とお新はいつてゐたが、葛野は、何だか彼女の微温るい態度に滿足してゐられなかつた。

「そんな、何時か好い機を待つなんていつてゐたら、何時まで立つたつて、好い機なんかありはしない。」

お新はそれから十日ばかりしたら、自分の先に營んでゐた商買の事で、そのまゝになつてゐることを、ぜひ其片付けねばならぬ用事があるので、もう遠から一度そちらへ往つて來なければならぬといつてゐることは其家のおかみも承知してゐるので、なるたけ早く都合をして、そちらへ往く日をこしらへるから、それまで待つてくれといふのであつた。

葛野は氣に入らぬらしい顏をして、

「もう十日?」と呆れたやうにいつたが、爲方なくその時はそれまで待つてゐることにした。

それから葛野は毎日他のことは考へず、たゞ十日ばかりの日が少しも早く經つのを指を折つて待つてゐたが、とてもそれまで待つてゐることは出來なかつた。……………

七

そこの席貸の主人は一面風雅な老爺であつたが、その話によれば若い時から散々道樂もすれば苦勞した甲斐性者であつた。今の商賣に仕上げるまでは古道具や屑買ひまでして歩いてゐたこともあつて、そんなになつてからも屑買ひをしてゐた時分の心を忘れないために紙屑買の古い鑑札を大事にして保存してゐるくらゐであつたが、淸元の三味線を彈くのが老後の何よりの樂みであつた。

葛野はその頃古い江戸趣味に憧れてゐた時分であつたから、その老爺が淸元の三味線を彈いて樂んでゐるのにひどく感心してそれが羨しくつて堪らなかつた。

「おかみさん、こゝの老爺さんは僕に三味線を敎へてくれないだらうか。」とよくいつてゐた。

その後そんなことは何度も口癖にいひながら、そんならいざ稽古しようともいはないので、

「葛野さん、貴方ほんとに稽古する氣があるのか無いのか。ほんとに稽古をする氣があるのなら、内のお爺さん敎へて上げてもいゝといつてゐましたよ。」

「うむ、ほんとに稽古したいんだ。」

さういつて彼は、淸元の稽古をかこつけに今までよりも一層足繁くそこへ遊びにいつてゐた。老爺は一寸附きの惡い因業者のやうな顏をしてゐたが、淸元の三味は彼が老後の唯一の樂みで、葛野が、老爺のその趣味に共鳴してゐることがひどく滿足であつた。

「こつちいおいでなさい。」といつて、葛野を、ずつと奥まつた、たつた三疊の間の中二階に連れていつた。

「こゝが私の隱居所です。」といつて、爺兒はいつも其處で一人で三味線を彈いてゐた。そこからは牛込の低い街つゞきを越して向うには小石川の方の高臺から目白の丘雜司ケ谷に連らなる林が一眼に見晴らされた。」

「どうです好い景色でせう。」

と、爺兒は北窓の硝子越しに西の方を眺めながら、

「あんた本間にやる氣なら私教へますが、續けてやんなはるか。」といふから、

「えゝ、ほんとうですとも。教へて下さい。」といふと、

爺兒はさうかといて、「傀儡師」といふ稽古本を取出して、

「ほんならこれがよからう。これは私が好きなものです。」

といつて、三味線を取り直して彈きながら、なか〳〵好い聲で歌ひ出した。

「寶萊の島は目出度い島でなあ……」

初め二三度爺兒さんが獨吟すると、今度は自分も一緒にそれにつれて聲を合はした。

「まあ今日はこれだけにして置きませう。あんたは三味線が習ひたいいふてなはるさうですが、三味をやるにも一とほりは歌の方を稽古せんとよう習へん。」

そして二日めから、

「あんた今度一つひとりで歌ふて見なはれ。」といふので葛野は極まりわるさうに覺束ない調子で、

「寶萊の島は目出度い島でなあ……」と一くさりを歌つた。爺さんは、

「えゝ〳〵、その調子で。」といふのに勢を得て、彼は、

「……傀儡師阿波の鳴戸を小唄とは晋子が吟の風流や……」と歌ひつゞけた。

さうして五度六度稽古を重ねてゐるうちにやがて正月になつた。一月は會など多いので爺さんも忙しく稽古も中止してゐたが、葛野は相變らず遊びにだけいつてゐた。その頃からよく雪が降つた。席貸しの座敷から見晴す雪景は格別に好かつた。葛野はその頃書く物から入る金で小使ひにはさう不自由をせぬので、樂しい正月氣分に浸りながら、美しい詩の國にでも住んでゐるやうな夢を見てゐる心地で長閑な日を暮してゐた。

やがて松が取れて、改まつた年始の客の姿も道に絶え正月氣分が次第に忘れて來るにつれて、却つて、そち此方の裏通りの宿を歩いてゐると到る處の家の中から歌かるたに遊び興ずる聲が洩れ聞えた。

それは紅葉山人の名作である「金色夜叉」がその頃の小説好きの若い男女の心を唆つてゐた時代からまだ餘りに遠ざからぬ時分であつた。いつも小説や戯作の中の人物を頭に描いて彼等と共鳴したやうな心持で生きてゐた葛野は、夜の街を往きながら、さういふ歌加留多の朗吟の聲を遠くに聞かされても、それが何だか戀を唆る聲のやうに思ひなされた。しかし彼は初めから歌加留多を戯れる趣味を少しも持つてゐなかつたし、そんなことには至つて不器用であつた。そしてもう四五年東京に來てゐてもずつと下宿屋生活をして東京に家庭のある人間と交際のない、荒寥とした生活をつゞけてゐるので、「金色夜叉」の開卷第一に書かれてあるやうな温い家庭に出入する機會などのありやうもなかつた。

歳晩のあの華かな、明るい街の景氣に引比べて、一月中ばを過ぎる頃からの、冬の最中の街の寂しさは、さながら道を歩いてゐても大地とゝもに自分の身體までが凍て付いて消えてゆくかと思ふやうであつた。かの二葉亭の「浮草」の終に書いてあるやうに、温い家の中で明るい燈火の下に靜に夜を過してゐることの出來ぬ者の境涯が羨ましかつた。

此の間から引つゞけに降り積もつた雪が、日當りの悪い片蔭だけ、雪掻きしたまゝ小山の堆く凍てついて、いとゞ嚴しい寒氣の夜の風がその爲に一層冷くなつて戟々しく頬を斬つた。道を通る人影も途切れがちで、こんな寒い晩に戸外を歩いてゐるのは餘程効性のない者であつた。彼は何か知ら温い心持ちに飢えて、わつと暗い處で、聲を出して泣き出したいやうな遣る瀬のない心地になつてゐた。

それでも時々お新の顔を見てゐれば、いくらか寂寞が紛らせるゝのであつた。しかし、たゞ、ほかの者のゐる傍で、顔だけ見てゐるのでは物足りなかつた。

葛野は、お新を　擬い世界の眼になつて考へても少しも好い女とも思はなかつたが、何故か、彼には、不足のない幸福な境遇に生ひ育つてゐる女性に對して戀愛を感ずることがなかつた。それは、おほかたイソップの物語にある狐のやうに、自分の手の屆かぬところにある葡萄はまだ青くつて不味いものと思つて諦めてゐると同じ道理であつたかも知れぬが、どちらにしてもそのお新とさへ思ふまゝに逢ふことの出來ないところから彼女に對する情欲は、それが爲に一層募るばかりであつた。

やがて一月も末になつて二月に入ると、まだ寒い日はあつても、どうかすると雪解けの暖い日のつゞくことがあつた。筧を流れる軒滴の音は單調な中にも物憂いやうな安らかな睡を誘ふた。瑠璃色に晴れ渡つた空には麗かな日の光が漂つて、陰氣な冬に閉ぢこもつてゐた心は、何處か早咲きの梅でも探ねて出歩きたいやうな氣分を唆られた。その時分から席貸の老爺は、

「葛野さん又少し始めませうか、あんたもう忘れたらう。」

といつて、傀儡師を歌ひだした。葛野は老爺の三味線に伴れて歌ふ清元の滑かな調子にさそはれてお新に對する甘い

感情がます／＼燃え盛つてゆくのであつた。

お新の方では又、葛野に江口といふ惡い友達のついてゐるのが何につけてこれから先きの二人の交情の妨げになるやうなことがあるので、彼がどこまでも今までのとほりに江口と親しくしてゐる間は、迂潤り自分の心を葛野にゆるされないと思つてゐた。それで大事を取つて葛野のいふことに容易く乘つて來ようとしなかつた。

「あなた、江口さんを信用してゐるやうですけれど、あの人はいけない人ですよ。わたしの事について江口さんに何か打ち明けて相談なんかしては駄目ですよ。」

お新はさういつて、葛野の背後に江口が附いて居りはしないかといふ疑ひが、彼の熱情の眞僞をどう汲んでよいかといふ不安を抱かしめたのであつた。

「その事なら大丈夫だよ。」と、口では明かにいつてゐたが、又葛野の方では、お新のやうな境涯にゐる女を、正直に、此方の思つてゐるまゝに解いていゝかどうかといふことも一つの不安であつた。が、それにもかゝはらず彼の彼女に對する感情はます／＼募つてゆくばかりであつた。しかしそれは果して純粹なる戀愛であつたか、それとも彼の青春の頂上に達してゐる本能の情欲が彼を盲目的にさうさするやうに強ゐたのであつたか、それは分らなかつた。

兎に角葛野のお新に對する心持は、最初はいくらか遊戲半分であつたものが、彼女との逢ひ曳が自由に滿足されぬところから、漸眞劍になつていかねばならぬやうな結果になつて來たのであつた。

彼がお新を全く自分の物にするが爲にはいつまでも其處に置いておくのは勝手がわるかつた。到頭それで彼女にそこの家から暇をとらして、葛野は長い間の下宿屋生活から脫して、初めてお新と一緒に小石川の奥に些かな一戶を構へた。彼女が、自分と同棲するにはいろ／＼た點から、條件のふさはしくない葛野と一緒に住むといふことは、その爲に知つ

た人に目立つことになつたが、それを推してさういふことになつたのは葛野の熱情に動かされたのが主なる原因であつた。葛野も一時の熱情に驅られてその決心をしたもの丶愈々これを斷行しやうとする間際に臨んで彼の心は頻りに迷つた。それは主として打算的功利的な見地から熟慮を要するやうな事柄であつた。そして賢い人間ならば、今自分の斷行しようとするやうなことは決してしないであらうと思つて幾度か躊躇した。けれども、その時はもう、お新が葛野の熱情を深く信じて、葛野と共に新しい生活に入らうとして、今まで行つてゐた處から、ほかの事に託けて無理に暇を取つて出て來た後であつた。そのためにお新はおかみ達の感情を害することさへ辭しなかつたのである。

　葛野はお新と肩を並べて人どほりの少い何處かの屋敷の塀に沿ふた薄暗い道を選んで歩きながら、千々に心が迷つてゐた。それはもう二月も末の頃で夜の風はまだ寒かつたが、何處かで聞える夜仕事の物の音にもう冬の最中とは違つた軟かい響きがあつた。

　葛野は今度お新と新しい生活に入るために國元の方から調達して、丁度その日に手に入つた、參百圓ばかりの金を懷中にして、ひとり心の中で、

「いつそ此の金をすつかり今、この女に與へてやつて、それで違約の罪を謝し、お新との關係を此の處で絕つてしまはうか。……さうすれば、さうした方が賢いのだ。」と考へながら歩いてゐた。

それとも知らぬお新は、葛野から、今日丁度金が手に入つた。もう金が出來たから、これから早速家を持つ所帶道具を買ひ調へようといつて、昨日から自分の家へ歸つて來てゐるところを、かうして呼び出されて歩いてゐる場合なので、葛野の足に遲れぬやうに、いそ〳〵しながら、

「わたし、今日はじめてお母さんに話した。」

「今度のことを。」

「えゝ。」

「そしたら何といつた。」

「…………」

「小言をいつたか、それとも喜んだか。」

「たゞ、さうかえといつたきりでしたが、大變喜んでゐました。」

お新の言葉は少なかつたが、彼女が喜んでゐるとほりにその母親も喜んでゐるらしいことはそれと知られた。

葛野はそれを、犇と胸にひゞいて聽きながら、たとひ今懷中に持つてゐる參百圓の金を、そつくりお新に與へるといつても、彼女はひどく失望するであらうと思はれた。

× × × × × × ×

× × × × × × ×

葛野はそれを機頭に、それから段々いろんな女の胸に安心の場所を漁り求めた。

あばばばば

——保吉の手帳の一部——

芥川龍之介

保吉はずつと以前からこの店の主人を見知つてゐる。

ずつと以前から、——或はあの海軍の學校へ赴任した當日だつたかも知れない。彼はふとこの店へマッチを一つ買ひにはひつた。店には小さい飾り窓があり、窓の中には大將旗を掲げた軍艦三笠の模型のまはりにキユラソオの壜だのココアの罐だの干し葡萄の箱だのが並べてある。が、軒先に「たばこ」と拔いた赤塗りの看板が出てゐるから、勿論マッチも賣らない筈はない。彼は店を覗きこみながら、「マッチを一つくれ給へ」と云つた。店先には高い勘定臺の後ろに若い眇の男が一人、つまらなさうに佇んでゐる。それが彼の顏を見ると、算盤を竪に構へたまま、にこりともせずに返事をした。

「これをお持ちなさい。生憎マッチを切らしましたから。」

お持ちなさいと云ふのは煙草に添へる一番小型のマッチである。

「買ふのは氣の毒だ。ぢや朝日を一つくれ給へ。」

「何、かまひません。お持ちなさい。」

「いや、まあ朝日をくれ給へ。」

「お持ちなさい、これでもよろしけりや、——入らぬ物をお買ひになるには及ばないです。」

此の男の云ふことは親切づくなのには違ひない。が、その聲や顏色は如何にも無愛想を極めてゐる。素直に貰ふのは忌いましい。と云つて店を飛び出すのは多少相手に氣の毒である。保吉はやむを得ず勘定臺の上へ一錢の銅貨を一枚出した。

「ぢやそのマッチを二つくれ給へ。」

「二つでも三つでもお持ちなさい。ですが代は入りません。」

其處へ幸ひ戸口に下げた金線サイダアのポスタアの陰から、小僧が一人首を出した。これは表情の朦朧とした、面皰だらけの小僧である。

「旦那、マッチは此處にありますぜ。」

保吉は内心凱歌を擧げながら、大型のマッチを一箱買つた。代は勿論一錢である。しかし彼はこの時ほど、マッチの美しさを感じたことはない。殊に三角の波の上に帆前船を浮べた商標は額椽へ入れても好い位である。彼はズボンのポケットの底へちやんとそのマッチを落した後、得得とこの店を後ろにした。

保吉は爾來半年ばかり、學校へ通ふ往復に度たびこの店へ買ひ物に寄つた。もう今では目をつぶつても、はつきりこの店を思ひ出すことが出來る。天井の梁からぶら下つたのは鎌倉のハムに違ひない。欄間の色硝子は漆喰塗りの壁へ緑

色の日の光を映してゐる。板張りの床に散らかつたのはコンデンスド・ミルクの廣告であらう。正面の柱には時計の下に大きい日暦がかかつてゐる。その外飾り窓の中の軍艦三笠も、金線サイダアのポスタアも、椅子も、電話も、自轉車も、スコツトランドのウイスキイも、アメリカの干し葡萄も、マニラの葉卷も、エヂプトの紙卷も、燻製の鰊も、牛肉の大和煮も、殆ど見覺えのないものはない。殊に高い勘定臺の後ろに佛頂面を曝らした主人は飽き飽きするほど見慣れてゐる。いや、見慣れてゐるばかりではない。彼は如何に咳をするか、如何に小僧に命令をするか、ココアを一罐買ふにしても、「Fryよりはこちらになさい。これはオランダのDrosteです」などと、如何に客を悩ませるか、――主人の一擧一動さへ悉とうに心得てゐる。心得てゐるのは惡いことではない。しかし退屈なことは事實である。保吉は時時この店へ來ると、妙に教師をしてゐるのも久しいものだなと考へたりした。(その癖前にも云つた通り、彼の教師の生活はまだ一年にもならなかつたのである！)

けれども萬法を支配する變化はやはりこの店にも起らずにはすまない。保吉は或初夏の朝、この店へ煙草を買ひにはひつた。店の中はふだんの通りである。水を撒つた床の上にコンデンスド・ミルクの廣告の散らかつてゐることも變りはない。が、あの眇の主人の代りに勘定臺の後ろに坐つてゐるのは西洋髮に結つた女である。年はやつと十九位であらう。en faceに見た顏は猫に似てゐる。日の光にずつと目を細めた、一筋もまじり毛のない白猫に似てゐる。保吉はおやと思ひながら、勘定臺の前へ歩み寄つた。

「朝日を二つくれ給へ。」

「はい。」

女の返事は羞かしさうである。のみならず出したのも朝日ではない。二つとも箱の裏側に旭日旗を描いた三笠である。

る。保吉は思はず煙草から女の顔へ目を移した。同時に又女の鼻の下に長い猫の髭を想像した。

「朝日を、――こりや朝日ぢやない。」

「あら、ほんたうに。――どうもすみません。」

猫――いや、女は赤い顔をした。この瞬間の感情の變化は正眞正銘に娘じみてゐる。それも當世のお孃さんではない。五六年來跡を絶つた硯友社趣味の娘である。保吉はばら錢を探りながら、「たけくらべ」乙鳥口の風呂敷包み、燕子花、兩國、鏑木清方、――その外いろいろのものを思ひ出した。女は勿論この間も勘定臺の下を覗きこんだなり、一生懸命に朝日を探がしてゐる。

すると奥から出て來たのは例の眇の主人である。主人は三笠を一目見ると、大抵容子を察したらしい。けふも相不變苦り切つたまま、勘定臺の下へ手を入れるが早いか、朝日を二つ保吉へ渡した。しかしその目にはかすかにもしろ、頬笑みらしいものが動いてゐる。

「マッチは？」

女の目も亦猫とすれば、喉を鳴らしさうに媚を帶びてゐる。主人は返事をする代りにちよいと唯點頭した。女は咄嗟に（！）勘定臺の上へ小型のマッチを一つ出した。それから――もう一度羞しさうに笑つた。

「どうもすみません。」

すまないのは何も朝日を出さずに三笠を出したばかりではない。保吉は二人を見比べながら、彼自身もいつか微笑したのを感じた。

女はその後いつ來て見ても、勘定臺の後ろに坐つてゐる。尤も今では最初のやうに西洋髮などには結つてゐない。

ちやんと赤い手柄をかけた、大きい圓髷に髮つてゐる。しかし客に對する態度は相不變妙にうひうひしい。應對にはつかえる。品物は間違へる。おまけに時時は赤い顏をする。——全然お上さんらしい面影は見えない。保吉はだんだんこの女に或好意を感じ出した。と云つても戀愛に落ちた譯ではない。唯如何にも人慣れない所に氣輕い懷しみを感じ出したのである。

或殘暑の嚴しい午後、保吉は學校の歸りがけにこの店へココアを買ひにはひつた。女はけふも勘定臺の後ろに講談倶樂部か何かを讀んでゐる。保吉は面皰の多い小僧に「Van Houten はないか」と尋ねた。

「唯今あるのはこればかりですが。」

小僧の渡したのは Fry である。保吉は店を見渡した。すると果物の罐詰めの間に西洋の尼さんの商標をつけた、Droste も一罐まじつてゐる。

「あすこに Droste もあるぢやないか？」

小僧はちよいとそちらを見たぎり、やはり漠然とした顏をしてゐる。

「ええ、あれもココアです。」

「ぢやこればかりぢやないぢやないか？」

「ええ、でもまあこれだけなんです。——お上さん、ココアはこれだけですね？」

保吉は女をふり返つた。心もち目を細めた女は美しい綠色の顏をしてゐる。尤もこれは不思議ではない。全然欄間の色硝子を透かした午後の日の光の作用である。女は雜誌を肘の下にしたまま、例の通りためらひ勝ちな返事をした。

「はあ、それだけだつたと思ひますけれども。」

「實は、このFryのココアの中には時時虫が湧いてゐるんだが、――」

保吉は眞面目に話しかけた。しかし實際虫の湧いたココアに出合つた覺えのある譯ではない。唯何でもかう云ひさへすれば、Van Houthen の有無を確かめさせる上に効能のあることは確かである。

「それもずゐぶん大きいやつがゐるもんだからね。丁度この小指位ある、……」

女は聊か驚いたやうに勘定臺の上へ半身をのばした。

「そつちにもまだありやしないかい？ああ、その後ろの戸棚の中にも。」

「赤いのばかりです。此處にあるのも。」

「ぢやこつちには？」

女は吾妻下駄を突かけると、心配さうに店へ探がしに來た。ぼんやりした小僧もやむを得ず罐詰めの間などを覗いて見てゐる。保吉は煙草へ火をつけた後、彼等へ拍車を加へるやうに考へ考へしやべりつづけた。

「虫の湧いたやつを飮ませると、子供などは腹を痛めるしね。（彼は或避暑地の貸し間にたつた一人暮らしてゐる。）いや、子供ばかりぢやない。家内も一度ひどい目に遇つたことがある。（勿論妻などを持つたことはない。）何しろ用心に越したことはないんだから、……」

保吉はふと口をとざした。女は前掛けに手を拭きながら、當惑さうに彼を眺めてゐる。

「どうも見えないやうでございますが。」

女の目はおどおどしてゐる。口もとも無理に微笑してゐる。殊に滑稽に見えたのは鼻も亦つぶつぶ汗をかいてゐる。

保吉は女と目を合せた刹那に突然悪魔の乘り移るのを感じた。この女は云はば含羞草である。一定の刺戟を與へさへす

れば、必ず彼の思ふ通りの反應を呈するのに違ひない。しかも刺戟は簡單である。ぢつと顔を見つめても好い。或は又指先にさはつても好い。女はきつとその刺戟に保吉の暗示を受けとるであらう。受けとつた暗示をどうするかは勿論未知の問題である。しかし幸ひに反撥しなければ、――いや、猫は飼つても好い。が、猫に似た女の爲に魂を惡魔に賣り渡すのはどうも少し考へものである。保吉は吸ひかけた煙草と一しよに、乘り移つた惡魔を抛り出した。不意を食つた惡魔はとんぼ返る拍子に小僧の鼻の穴へ飛びこんだのであらう。小僧は首を縮めるが早いか、つづけさまに大きい嚏めをした。

「ぢや仕かたがない。Droste を一つくれ給へ。」

保吉は苦笑を浮かべたまま、ポケットのばら錢を探り出した。

その後も彼はこの女と度たび同じやうな交渉を重ねた、が、惡魔に乘り移られた記憶は仕合せと外には持つてゐない。いや、一度などはふとしたはづみに天使の來たのを感じたことさへある。

或秋も深まつた午後、保吉は煙草を買つた次手にこの店の電話を借用した。主人は日の當つた店の前に空氣ポンプを動かしながら、自轉車の修繕に取りかかつてゐる。小僧もけふは使ひに出たらしい。女は相不變勘定臺の前に受取りか何か整理してゐる。かう云ふ店の光景はいつ見ても惡いものではない。何處か阿蘭陀の風俗畫じみた、もの靜かな幸福に溢れてゐる。保吉は女のすぐ後ろに受話機を耳へ當てたまま、彼の愛藏する寫眞版の De Hooghe の一枚を思ひ出した。

しかし電話はいつになつても、容易に先方へ通じないらしい。のみならず交換手もどうしたのか、一二度「何番へ？」を繰り返した後は全然沈默を守つてゐる。保吉は何度もベルを鳴らした。が受話機は彼の耳へぶつぶつ云ふ音を傳へる

だけである。かうなればもう De Hooghe などを思ひ出してゐる場合ではない。保吉はまづポケツトから Spargo の「社會主義早わかり」を出した。幸ひ電話には見臺のやうに蓋のなぞへになつた箱もついてゐる。彼はその箱に本を載せると、目は活字を拾ひながら、手は出來るだけゆつくりと剛情にベルを鳴らし出した。これは横着な交換手に對する彼の戰法の一つである。いつか銀座尾張町の自働電話へはひつた時にはやはりベルを鳴らし鳴らし、とうとう「佐橋甚五郎」を完全に一篇讀んでしまつた。けれども交換手の出ない内は斷じてベルの手をやめないつもりである。

さんざん交換手と喧嘩した揚句、やつと電話をかけ終つたのは二十分ばかりの後である。保吉は禮を云ふ爲に後ろの勘定臺をふり返つた。すると其處には誰もゐない。女はいつか店の戸口に何か主人と話してゐる。主人はまだ秋の日向に自轉車の修繕をつづけてゐるらしい。保吉はそちらへ歩き出さうとした。が、思はず足を止めた。女は彼に背を向けたまま、こんなことを主人に尋ねてゐる。

「さつきね、あなた、ゼンマイ珈琲とかつてお客があつたんですがね、ゼンマイ珈琲つてあるんですか？」

「ゼンマイ珈琲？」

主人の聲は細君にも客に對するやうに無愛想である。

「玄米珈琲の聞き違へだらう。」

「ゲンマイ珈琲？ああ、玄米から拵へた珈琲。――何だか可笑しいと思つてゐた。ゼンマイつて八百屋にあるものでせう？」

保吉は二人の後ろ姿を眺めた。同時に又天使の來てゐるのを感じた。天使は高高と積み上げた麥酒箱に肘を靠せたまま、何にも知らぬ二人の上へ祝福を授けてゐるのに違ひない。尤も燻製の鯡の匂に顏だけはちよいとしかめてゐる。

――保吉は突然燻製の鯡を買ひ忘れたことを思ひ出した。鯡は彼の鼻の先に浅ましい形骸を重ねてゐる。

「おい、君、この鯡をくれ給へ。」

女は忽ち振り返つた。振り返つたのは丁度ゼンマイの八百屋にあることを察した時である。女は勿論その言を聞かれたと思つたのに違ひない。猫に似た顔は目を擧げたと思ふと、見る見る羞かしさうに染まり出した。保吉は前にも言ふ通り、女の顔を赤めるのには今までにも度たび出合つてゐる。けれどもまだこの時ほど、まつ赤になつたのを見たことはない。

「は、鯡を？」

女は小聲に問ひ返した。

「ええ、鯡を。」

保吉も前後にこの時だけは甚だ殊勝に返事をした。

かう云ふ出來事のあつた後、二月ばかりたつた頃であらう。確か翌年の正月のことである。女は何處へどうしたのか、ぱつたり姿を隱してしまつた。それも三日や五日ではない。いつ買ひ物にはひつて見ても、古いストオヴを据ゑた店には例の眇の主人が一人、退屈さうに坐つてゐるばかりである。保吉はちよいともの足らなさを感じた。又女の見えない理由にいろいろ想像を加へなどもした。が、わざわざ無愛想な主人に「お上さんは？」と尋ねる心もちにもならない。又實際主人は勿論あのはにかみ屋の女にも、「何何をくれ給へ。」と云ふ外には挨拶さへ交したことはなかつたのである。

その内に冬された路の上にも、たまに一日か二日づつ暖い日かげのさすやうになつた。けれども女は顔を見せない。店

はやはり主人のさはりに荒寂とした空氣を漂はせてゐる。保吉はいつか少しづつ女のゐないことを忘れ出した。……

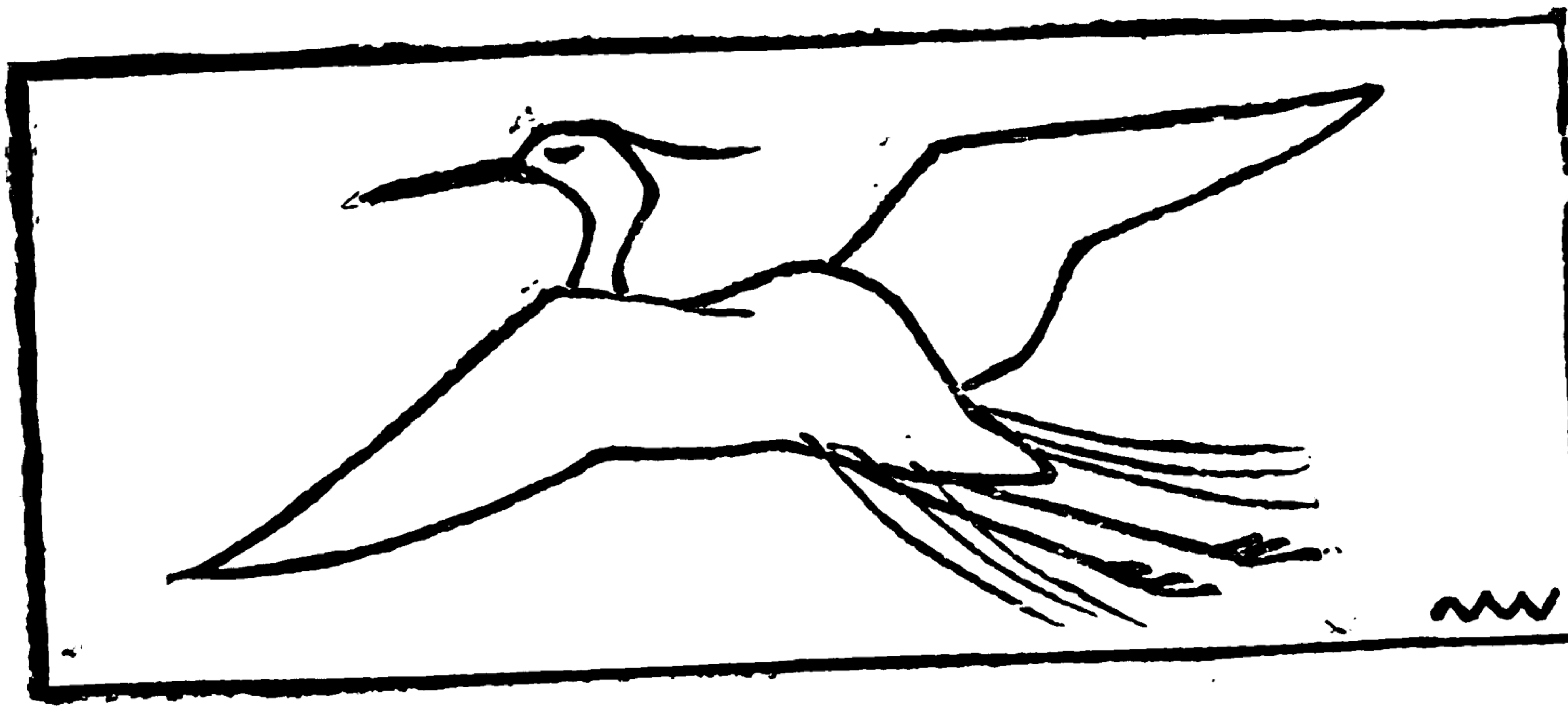
　するとニ月の末の或夜、學校の英吉利語講演會をやつと切り上げた保吉は生暖い南風に吹かれながら、格別買ひ物をする氣もなしにふとこの店の前を通りかかつた。店には電燈のともつた中に西洋酒の罎や罐詰めなどがきらびやかに並んでゐる。これは勿論不思議ではない。しかしふと氣がついて見ると、店の前には女が一人、兩手に赤子を抱へたまま、多愛もないことをしやべつてゐる。保吉は店から往來へさした、幅の廣い電燈の光りに忽ちその若い母の誰であるかを發見した。

「あばばばばばば、ばあー」

　女は店の前を歩き歩き、面白さうに赤子をあやしてゐる。それが赤子を揺り上げる拍子に偶然保吉と目を合はした。保吉は咄嗟に女の目の逡巡する容子を想像した。それから夜目にも女の顏の赤くなる容子を想像した。しかし女は澄ましてゐる。目も靜かに頬笑んでゐれば、顏も嬌羞などは浮べてゐない。のみならず意外な一瞬間の後、揺り上げた赤子へ目を落すと、人前も羞ぢずに繰り返した。

「あばばばばばば、ばあ！」

　保吉は女を後ろにしながら、我知らずにやにや笑ひ出した。女はもう「あの女」ではない。度胸の好い母の一人である。一たび子の爲となつたが最後、古來如何なる惡事をも犯した、恐しい「母」の一人である。この變化は勿論女の爲にはあらゆる祝福を與へても好い。しかし娘じみた細君の代りに圖圖しい母を見出したのは、――保吉は歩みをつづけたまま、茫然と家家の空を見上げた。空には南風の渡る中に薄い春の月が一つ、白じろとかすかにかかつてゐる。……



第一號檻房にて

宮地嘉六

日がくれて、留置場の小暗い電燈がついた頃、背の低い肥つちよの、着んぶくれの女が風呂敷包を斜に背負つて足袋はだしで、まるで家鴨のやうな歩きつぷりで留置場の中へやつて來た。

『向ふの腰かけにかけとれ……』入口までつれて來た警官がさう云つて彼女の肩を輕く押しやると、群れを離れて見知らぬ鳥小舍へ迷ひこんだ水鳥のやうに、女はしようことなげに、えか／＼した疲れた足どりで、それでも心持顏には頬ゑみを見せながら、示めされた向ふの隅の、ぎこ／＼する腰かけの方へ歩み寄つて行つた。

『何だい此の女は、どうしたのだい。』

『うん、なに、保護だ。』

つれて來た警官と留置場係りの警官とは簡單な應答をしたゞけであつた。

五戸の檻房は恰度汽船の中のボイラのやうに向ひ合つて兩側にならんでゐる。それを見張つてゐる警官は五つのボイラを受け持つた火夫のやうに、きたない白手拭でう

しろ鉢卷をして、その上に帽子を被つて、目をぎよろつかせて、樫の木劍を板土間の上に突きあて突きあてにして、時々から怒鳴るのであつた。

「やいこら、二房は騷がしいぞ。何を話しとるか、話しをする奴やこれだぞ、横着者……」

二疊敷ほどの一つの檻房の中には大地震以來九人十人と詰め込まれてゐるので、全くボイラのやうにむし返つてゐた。その兩側からの濕氣で警官殿にたまらなさうに上衣の釦をはづしてしまつてゐる。うしろ鉢卷は頭痛の爲めであつた。

「女、何處から來たんだお前は……」

「浦和から來ました。」女は鼻の低い、それでも頭髮は七三に分けてゐて決して別嬪ではなかつたが、女らしくつゝましい聲で答へた。

「浦和から……」警官はちよつと蔑み半分の調子でたゝみかける。

「へえ……」

「浦和から何しに此所へ來たんだ。」

「つれあひを搜しに浦和へ行きましたけれど、分りませんから、また引き返してまゐりました。」

「ふん、搜したつて分るもんか。知れてるよ。此の地震騷ぎを好いことにして男はお前を突つ放して逃げたんだ――男は浦和の者か」

「へえ……」女は俯向いて云つた。

此の時檻房の中の多くの髭面共はめづらしさうに首をのして覗いてゐたが默つてゐるにしたい。

「おい、どうだい別嬪か。」

『素的なハイカラだ、見ろよ。』

『なに、素的だ……』

『よせ、素的もねえすべたぢやねえか、ちよつ……』

『お前えの嬶よりは好いだらうぜ。』

『冗談ぢやねえぜ。』

問はるるまゝに女が警官に答へてゐるのを聞くと、つれあひとは鐘ケ淵紡績で働いてゐる間に出來あつた仲らしく、一年あまり二人は向島で暮してゐたが、大地震の三日前に淺草松葉町へ住むことになつて、或る店屋の二階へ男と共に引き移つたが、地震の日は彼女だけ千住の知りあひの家へ行つてゐて、急いで家へ歸つて見ると家はまる潰れになつてしまつて、火はもう間近に追ひかけて來たと云ふのである。

『澤山の人混みで店屋の人達も近所の人達も見あたりませんもんですから、つれあひがどこへどう避難したかまるつきり分りませんでした。』

女の云ふことは此所まではうなづけたが、男が浦和在の生れの者であると云ふことだけ聞いてゐて、あてもなく浦和へ往つて男を捜し廻つたが遂に分らなかつたと云ふので、聞く方でもたよりない氣がした。浦和をまごついてゐるうちに少しばかりの金も使ひつくし、仕方なしにまた東京へ引き返しては來たが、宿錢もなし、足は腫れむくんでゐるので此の警察へ一晩泊めて貰ふことに決心したと云ふのである。

『足が腫れとる？』

『へえ、こんなだもんですから思ふやうに歩けませんです。』女は着物の裾を少しひきあげてむくんでゐる脛を見せた。

『それは脚氣ぢやないよ。一目見れば、俺は醫者ぢやないが分る。お前は足ばかりぢやないお腹もはれとるぢやないか。』警官は冷かすやうに云つた。女はまた俯向いた。

『幾月だ。お前は。』

『七月です。』はにかみながら女は云つた。彼女は身持だつた。

夜になつても街の大混亂を思はせる多忙な兵士や警官や貨物その他を運搬する自働車の轟きが留置場へも聞へた。檻房に放りこまれてゐる連中はどれも大地震が生んだ不良自警團の類で、その中には暴利商人もゐた。また保護の名の下に檢束されてゐる社會主義者の一味もあつた。震災の爲めに發狂して腦病院へ送られる身柄を都合上警察に留め置かれてゐる在鄕軍人もゐた。更に留置場の裏手の練武場には何百と云ふ鮮人が收容されてゐるので署内は上を下への大混雜である。留置人は減ずるよりも殖えるばかりで、夜中に限つていろ〳〵の男がひきづられて來た。どやされる。吹呵をきる。蹴られる。それでも反抗する。警官はよつてたかつて手をねぢあげて××××、×××××。××××+××××××、悲鳴をあげる――大騷ぎが始まるのだ。

『此の警察に留め置かれるのはありがたいと思へ。他の警察ぢやどし〳〵軍隊へ渡してしまふんだ。軍隊に渡せば手前なんかズドンと一發だ、分つたか……』

その肥つちよの身持女がやつて來てからほどへて、今度は浴衣を着た若い男が警官に引きづれられて此の留置場へやつて來た。恰度家禽が無理むたいに小舍の裡へねぢこまれる時のやうに、男は留置場の入口で羽ばたきに似た身もだえをして、内へ押しこまれるのを拒んだが、いきなりそこで、もう一人の警官が、とりあへず平手で五つ六つその男の耳の下あたりをひつぱたくと同時に、後方の警官が蹴つ飛ばしたので、男はひよろ〳〵つと前のめりに一氣に留置場の向

ふの隅まで行つてしまつた。危くその腰掛にかけてゐる女にひつかゝるところで男はうまく喰ひとめた。

『女、お前は此の室へ入れ。』女は遂に保護室へ入れられた。

くだんの男はそこでまた三人の警官から蹴毬のやうに扱はれたが、彼は蹴られる度に、『やしし……やしし……やしし……』と妙な聲をあげるのである。それが恰度『ヤツシツシ』と芝居に出て來る奴のかけ聲のやうにも聞へるので、檻房の中の者共は皆その一風變つた悲鳴を面白がつて鐵棒の格子の間から中腰で見物した。

『何がヤツシツシだ、此の野郎……』

『やしし……』

『ふざけやがるない此の野郎……』

『キヨウ、ホケキヨ……』くだんの男は打ちのめされる最中に何うしたわけか鶯の鳴き眞似をした。檻房の裡からどつと笑ひ聲が起つた。

『氣ちがひの眞似をしたつて誰が本氣にするものか、此の野郎！』

『コツケ、コツコー！』男はまた鷄の鳴き眞似をした。若し彼が、此の場合警官からあまりにひどい目にあはされるので止むなく試みた一種の技巧であつたとすれば、極めてまづい技巧で、それには些の魅力もなかつた。彼は街の方から避難して來る不幸な女の後を掏くつけたといふかどで此の留置場へ引きずられて來たのである。したゝかひどい目にあはされた後、檻房の裡へ放りこまれたが、彼は、自分がひどい目にあはされてゐた間、皆が面白がつてゐたと云ふことに今更のやうに反感を起したものらしく、檻房の中では誰が言葉をかけてやつても返辭をしなかつた。

『君はなかなか藝人だなあ、鶯の眞似もやるし、鷄の鳴き眞似もやるし、猫八以上だよ』誰かゞ云つたがくだんの男は

耳に入らない風をしてすましてゐた。

やつと留置場がひと騒ぎ終つたと思ふと、今度は一人の老人が曳きづられて來た。細長い、しやくれた顏の六十近い白髯の爺さんである。詰襟の麻服を着て、半ズボンにゲートル鞋がけと云ふ風態であるが、どことなく品があつて、落ちついた調子がある。

『何もさう手荒くさつしやることはないでへ、へへ……』爺さんは入口から突き飛ばされながらもにこ〳〵して警官を顧みて云ふのであつた。

『愚圖々々云はんでも好えから、向ふの隅へ行け。』

『わしがステーションの待合室に腰をかけて汽車を待つとると、ちよつと警察まで來いと云ふて曳つぱつた來よつた。おかしなこともあるもんぢや、へへへへ。』

『誰もそんなことを今きさまに問いてやせん、默つとれ。ぐつ〳〵云ふと毆りつけるぞ。』

『へへ、これは奇怪千萬、まあ仕方がないからするやうにさせて置くわ。へつへつへつ……』

『ステーションの待合室に唯腰をかけてゐたと云ふだけで警察へ曳つぱつて來る馬鹿な警官があるかい。きさまの腰かけてゐたところの右脇に蝙蝠傘があつたぢやらう。人が置き忘れてゐる蝙蝠傘のそばに腰をかけたつきりきさまはそこを動かなかつたぢやないか。自分の心に訊ねて見ろ。』

『へつへつへつ、ぢや、わしがその蝙蝠傘をどうかする氣であつたと云ひなさるのぢやな、飛んでもない。あつはつはつ……さあそんならそれでもようがすわい。吠えつく犬に棒を構へるよりや、口笛を吹けと云ふ諺があるでなあ。へつへつへつへつ……』

『何をよけいなことを云ふのだ、老ぼれのくせに……』
『いや、わしらも心で感謝しとりますぢや。あんた達警官が大地震以來ようく働いておくれることは感謝しとりますぢや』
『よけいなことを云はんでも好え……』
爺さんはそれでもひとりごとのやう云ひ續けるのである。
『わしは、つい此の間、群馬の方の溫泉場へ行つとりましたぢや、するとその宿屋のわしの部屋の直ぐ隣室に二人の男の子をつれた婦人が、矢張り入湯に來てをりましたぢや、六十ばかりの姑ども一緒で、それがお前さん高崎の巡査の御家族でな、矢張、あんた方巡査でも自分の家族を可愛がつて樂をさせてやんなさる爲めにやいやな職務もおろそかには出來んぢや、へつへつへつ……』
『何をぬかすのぢや、こら老ぼれ、毆りつけるぞ……』
『いや、もう何も云ひませんぢや……』
檻房の中では『面白い爺だなあ』『奇抜な爺だ』と云ふ小聲がしてゐた。
『自然力ちふものは偉い仕事をするものぢや。えらくらうして暮しとつた有産階級に一擊を與へると同時に其の反對の無産階級の方からも犧牲者を出したぢや。公平なさばきをしをる。地方人が都會へ都會へと目さして來よつたで田園は荒れて農產物は減る。現にわしが此の間行つて見て來た群馬の方がさうぢやつた。百姓をするよりや鐵道工事の人夫になつた方が勞賃が好えちふて百姓をする者はない。地主は高い地租を納めた上に、小作人にやいぢめられるで土地を持てあまして、これも東京へやつて來て小商賣をするか、腰辨になるか、氣のきいたのは巡査になつたりするちふ風ぢや。

たが、今度の地震ぢやおつたまげて田舍へ歸農しをるぢや――尤もそれも無理はなかつた。田舍で青年會の幹部をしながら鋤鍬をとるよりは東京へ出て巡査にでもなりや威張つて人民共を叱りつけて好えのぢやから、へつへつへつ……』

『こら、老ぼれ、いくら云つても手めえ、聞かんか、あん。……』

『いや　何も云ひませんぢや。へつへつ。』

此の爺さんは忽ち全檻房の留置人共の人氣を一身に集めた。彼は一體何者だらうと皆は小聲で話し合つた。誰かゞ云つた。

『そこだ〳〵。爺さん賴んますぜ。しつかりやつておくんなさい。』

此の老人もとう〳〵その夜は檻房の裡へ押し込まれてしまつたのである。

『あんたは五軒町の易者さんぢやありませんかね？――』

老人は檻房の中でかう聲をかけられて、ちよつと意外な顏つきをした。

『あんたはどなたぢや。』老人は相手の顏を瓢輕な目つきで見入つた。

『私かな。そら、あんたの家から二三軒先の横町に小泉の家作がござんしようが、あの貸家の差配をしとる徃原ちふもんですよ。』

『おう、小泉さんの貸家の差配さんかね　どうしてまた此所へ來なさつたのぢやな。』

『え、此の地震騷ぎで、つまらんことで引つぱり込まれてねえ先生、前にすんでる事件まで持ち出されて、五六年監獄で暮す覺悟でをれ。なんて司法主任が云ふんですがね――あんたもまた飛んだ災難で……』

『地震以來警察官も血まよふてござるて、へつへつへつ、わしは高崎の娘の緣先へ行く氣で今し方、ステーションで汽

車の來るのを待つとつたぢや、するとな、恰度運悪く、誰れかゞ置き忘れとる蝙蝠傘の際に、わしは知らず腰をかけとつたもんぢや、それを巡査が見とつて、わしがその蝙蝠傘に目をつけとつたちふのぢや、へつへつへ……地震ぢや助かつたが、飛んだところで災難をくひますぢや、へつへつへつ……』

『なあに大丈夫ですよ、明日は一應調べて、それで分れば出られますよ、あんた出なすつたら。私の家へすみませんが、言傳をちよつとしてくれませんか、恐れ入りますがね、此の通りシヤツもズボンも血だらけになつとりますで、女房へ着物を一枚持つて來いと、さうおつしやつてくれませんか、家ぢや私が警察へゐることをまだ知りませんから、ちよつとさう云つておくんなさい。女房の奴、氣の小さい女ですから、そのつもりで心配しないやうにおつしやつて下さい頼みますよ。』

『よろしい／＼――あんたの頭は血だらけぢやが、どうしたのかね。』老人は相手の頭を見て云つた。手拭を裂いて繃帶をしてゐたが、それが全く血に染まつてゐる。その男の目の下には打たれた痕らしい薄黒い斑點があり、下唇は切れて腫れあがつてゐるのである。此の差配自身が云ふのでは、大地震の翌日、下谷稲荷町の、以前から知りあひである麻問屋へ金の無心に行つたが、五百圓と云ひ出たのに十圓札一枚で追拂はれたので、そのまゝおとなしく引きとるところへ其の家の若者等が三四人で打つてかゝり、そこへ彌次馬が飛びよつて來て、それ鮮人だ殺してしまへと、手に手に持つた昆棒で袋叩きにした。で全く人事不省に陥つて、それから後のことは自分でも分らないと云ふのであつた。然し同じ檻房にゐる者は此の男の云ふことを全部は信じなかつた。どうも此の男の云ふことに辻褄の合はない節が多いからである。おとなしく金の無心に行つたやうに云ふかと思ふと、白鞘の日本刀を持つて脅迫的に出たらしくも云ふ。金は自分一個の必要からでなく町内の窮民の爲めにかねて強慾横暴なその麻問屋に此の際報復してやる意氣でやつたことだと云つて見たり、また日頃非常に自分に好意を持つてゐてくれるから少々の金は融通してくれると信じて無心に出かけたの

だと云つたり、一向そのへんは曖昧なのだ。大體の意味は町内のかみさん連が日頃、内職の麻つなぎをやつてゐたので、差配はその麻問屋との仲次をしてゐた關係から、それで此の際の地震にことよせて彼は五百圓と云ふ金を無心に出かけたものらしい。町内の窮民の爲めと云つたりするのはそれであつた。

『なあに、奴さん地震ですつかりのぼせきつて、屹度先方へ行つてへたな出やうをしたんだ。だから袋叩きに逢つたのに違ひない……』同じ檻房の者等は差配のことをさう云つてゐた。

差配は袋叩きにあつて、人事不省に陷つてから、憲兵の手で救護所に引きとられ、そこで息を吹き返したので、一先警官の手に渡つて此の警察の留置場へ來たのであるが、彼はどうしたわけか此の警察の司法主任を誰よりも恨んでゐるのであつた。

『あの司法主任の奴、俺を仇のやうに憎んでゐくさる、あん畜生……』と彼は司法主任が留置場を時々見に來る度に云つた。それは彼の所謂前に既にすんでゐると云ふ事件までも掘りあばかれた爲めである。前の事件と云ふのはかうだ。彼が差配をしてゐる其の長屋に女髮結がゐた。それが亭主に逃げられた。亭主と云ふのは名古屋の者で、彼の話しによると、なか〳〵のしたゝか者であつたと云ふ。ところで差配は女髮結の爲めにわざ〳〵名古屋まで出かけて行つて、その亭主から三百圓と云ふ手きれ金がとれるやうに盡力したと云ふのだ。三百圓の手ぎれ金を受取つて貰つた女髮結はそれから間もなく町の藥種屋の主人の妾になり、するうちに本妻が死んだのでその後釜に据つた。それはよいが、それまで世話になつた差配の家に顏向けをもしないばかりか、差配についてはさん〴〵町中に惡口を吐いて歩くので堪へかねた彼はその女髮結を半殺しの目に逢はせたと云ふのだ。それが警察沙汰になつて差配は二十日の拘留をくつた。これが前の事件なるものゝ大要である。それだけの話しではその女髮結なる者はひどく恩知らずのあまつちよらしいが、その外

にまだいろ／＼のいきさつがあるらしい、もと／＼差配はその女髪結を口說いてものにするつもりでいろ／＼の世話をしてゐたと見れば藥種屋の主人に先鞭をつけられた無念さも交つてゐたに違ひない。その女髪結が藥種屋の本妻の後釜に据ることになつて、いよ／＼長屋を立ち退くにあたつて、差配は言を左右にし八十圓の敷金を手もとに押へて彼女に渡さず、それを今だにそのまゝにしてゐることも事實らしい。そこで今度の麻問屋脅喝罪に加へて彼には横領詐欺取罪と云ふ餘罪が成り立ちさうになつてゐるのであつた。その爲めに差配は司法主任が飽くまで自分を憎んで罪を重くしようとしてゐるやうに感じてゐるのだ。然し、はたの者は此の男についてはもつと公平に批判してゐた。彼よりもずつと早く大地震の前から傷害致死の罪で入つてゐるおとなしい若者は差配に云つた。

『君はさう云ふが、あの司法主任くらゐもののよく分る人はないよ。君の思違ひもある。君を憲兵隊から引きとりに來た時もう少しのことで君は渡されるんだつたが、あの司法主任が『一度警察へ受けとつた人間は憲兵隊へは渡されぬ』ちふて君をどこまでもかばつてあの主任が渡さなかつたんだぜ。その時、君が憲兵隊へ渡されてゐたら銃殺されたかも知れはしないんだ。君はそれを思はんにやいかんぜ。』

ついでに此所でちよつと此の若者について簡單にのべる——此の若者は年の割に恐ろしく落ちついた批判力を持つてゐた。彼は大地震の前から此の警察の監房に置かれてゐたので東京市街の慘状を少しもまだ見てゐないと云ふ。自分は人を殺したのだから死ぬのは當然だと觀念してゐたのであの大地震の時も、崩れるほど監房が搖れて皆は蒼くなつたが、自分は格別怖くもなかつたと云ふ。彼は土方の親分の伜で父親の下に使はれてゐた一人が他の組の土方と工事場で喧嘩を始めて組みふせられてゐるのを見るや、まるたん棒で相手の後頭部を目がけて一撃を加へた。打たれた男は大兵肥滿の屈強な暴れ者であつたが、それから三日目に病院で死んだと云ふのである。彼はその時のことを極めて落ちついた語調で

話した。殺す氣はなかつたが自分の父親の子分がやられてゐるのを見た時は默つてをれなかつたのでやつけたが、然しすまぬことをしたと直ぐ氣がついたので病院にも見舞に行つてやり、手厚い謝罪の仕向けをしたので、死んだ男の親兄弟も警察へ願ひさげをしてくれたりしたと彼は語る。平時ならば、警察の留置場に長く留め置く用はないが、大地震で刑務所は破壞され、裁判所は休止の狀態にあるので、未決監へ送られる手筈ものびて、豫審の取り調べもなく、かうして此所に二週間近くゐるのであつた。背むしの瘦せた、顏色の病人じみた小男であつたが、心持は一號の檻房內では一番しつかりしてゐた。喧嘩の際に組みふせられた、彼の父の子分と云ふ男も拘留場に來てゐたが、人柄がよい爲めか、この混雜最中の警察でば手が足りないので、小使代りに檻房外の雜役にあたつてゐた――。

さてくだんの差配は思ひがけなく同じ町內の易者の老人と檻房內で落ち合つたので急に元氣づいて、いろ〳〵と女房への言傳を賴んだり、老人の爲めに警察の不法であることをとなへたりして、寢る時刻が來ると自分の枕を易者に貸してやつたりした。

『先生もつと足をのばしなさいよ。構はんから、私の横腹の方へおのばしなさいよ。蚤が澤山ゐますからズボンもゲートルもはづした方がようがすぜ。毛布をもつとあんたの方へ引つぱんなさい。私の方は充分ぢやから……』

差配はしきりと老人の世話をやいた。三疊敷ほどの檻房に九人が寢るのだから並大抵の窮屈さではない。簀の子に詰められたシヤコのやうに足と頭、頭と足と云ふ有樣に並んで寢るのである。九人のからだの外に便器が一個構へてゐるのだ。その便器の近くには氣ちがひの在鄕軍人を寢せることゝなつてゐた。在鄕軍人は夜中に人の腹の上を躍り廻るので手足を堅く手拭と革帶でしばりつけられてゐたが、それさへ口でほどいてしまふのである。

『やい、おとなしくしろい。』在鄕軍人は寢てからも便器を足で蹴つたり、蓋をはね返したりするので差配は怒鳴つた。

彼は毎晩その氣ちがひの直ぐ次に綴る順序になつてゐたのだ。

此の在鄕軍人は本ものゝ氣ちがひであるかどうかは疑問とされてゐた。彼は軍服もシヤツも脫がされて、サルマタ一つのすつぱだかである。そのまたサルマタが素的に垢じみてゐて稍々惡臭を放つほどのものである。彼は頑健な骨組の男であつた。何でも大震災以來、混亂の東京市街を、在鄕軍人の服裝をして、見つけ次第の自働車へ飛び乘つて廻つてゐたと云ふのだ。そして、あらうことか宮樣の自働車へ飛びのつたと云ふのだ。その場で銃劍を持つた護衞の兵士に突き殺されるところであつたが『許してやれ』とのお言葉があつたので、そのまゝ警官の手に渡されて、此の警察の留置場へ送り込まれたものである。髯は濃く荒かつたがまだ三十を多くは出ない年柄で、手足の並はづれて大きく荒くれてゐる所から推せば荷揚人足か馬方かいづれ勞働者だらうと差配は鑑定して云ふのであつた。

『間ぬけめ、しやれたことをぬかしやがんない。手足の大きいのは生れつきだい。金持の若旦那だつてよ、でかい手足を持たねえとは限るめえぞ。ふん、これでも青島の總攻擊の時にや重砲兵の一番砲手だ……』在鄕軍人は歯ぎれの好い啖呵を時々きるので皆は興味を感じた。彼は朝の間だけはよくいろ／＼のことをしやべくるが、午後になると一言も口をきかないのだ。皆は朝起きて食事がすむと、昨夜喰はれた腹いせに毛布をひろげて蚤退治をやるのが例になつてゐたが、或る朝、差配が毛布の蚤をとり逃して口惜がつてゐると、隅の方にゐた在鄕軍人は素的な警句を吐いたものである。

『おめえなんかつかまへるよりはつかまへられる柄ぢやねえか。蚤をとつつかまへる柄ぢやねえぢやねえか。』

この警句には檻房係の警官も笑つた。

『おい、在鄕軍人、もう氣ちがひの眞似なんかよせよ。お前がいくら氣ちがひの眞似をしたつて誰も本とにしやしねえ

んだから。』差配は云ふ。

『何も俺あ氣ちがひの眞似なんかしやしねえぢやねえ、べらんめえ、手前達が勝手に俺を氣ちがひ扱ひにしてやがるくせに、何云つてやんだい。』在郷軍人は敗けてはゐない。然し全くの僞せ氣ちがひではなかつた。午後になると定まつてむつつりと沈默して、誰が話しかけても返辭はしない、狹い監房内をぐる〳〵と兵隊の歩調で歩き廻る。立ち射ちの構へをするかと見ると折りしきの構へをやる。かと思ふと係官の方を向いて不動の姿勢をいつまでも續けてゐるのだ。といつの間にか手を合掌して天井を睨みつけてゐる。と急に躍り出すと云ふ風――彼は朝の握りめしだけしかたべない。晝と夜とは握りめしを見向きもしない。なあに飽くまで自分を氣ちがひだと信じさせる爲めだと云ひながら差配は好いことにして晝と夜の分を喰つてしまふのであつた。在郷軍人は朝に小さな二個の握りめしをたべるきりで、終日體操をやらかしたが不思議に疲勞を見せない。それだけでも立派な氣ちがひの資格はあつたのだ。

さて五軒町の老易者を加へて都合九人になつた第一監房は蚤に攻められながらもいつか高鼾をてたゝ眠る者もあり、いつまでも眠れなさうに、折々長い吐息をもらしてゐる者もあつた。やがてその中の一人はどうしたのか、急に飛び起きて、半は泣くやうな聲でかう叫ぶのだ。

『あ、口惜しい。どう考へても口惜しい。ほんとうに、夏の暑いのもいとはずに一生懸命働いたんだ。好きなドラ燒一つ買ふて喰はずに辛抱してためた金だ。一きれ五錢の西瓜を喰ひたくても喰はずにためたお金だ。それを泥棒した金だと云ふのはあんまりぢやないか、あゝ口惜しうて寢られはせん……』

皆は此の聲に驚いて目をさました。居眠りをしてゐた係りの警官も顔を上げた。

『誰だ、今の聲は、あん、何が口惜しいんだ、皆が眠つてるのに何をぬかすか、口惜しけれや此所へ出ろ。ぶんなぐつ

てやるから出ろ。』係りの警官は檻房の格子外から目を怒らせて、早速扉の錠をはづしかけた。

『何を今ごろになつて大きな聲をあげやがるんだ、さあ出ろ、出て來い。』

『おわびを云ひな、お役人さまにおわびを云ひな、――何か惡い夢でも見たんでござんしようよ。お役人さん許してあげておくんなさい。早く寢なよ。えゝ――どうぞお許しなすつて……』差配は云つた。差配はこんな場合には誰よりも先に口をきゝたがる男だ。いつも自分は誰よりもよく／＼と愚痴をこぼしてゐるくせに割の好い役と見ると悟りきつた顏で人をなだめたり、代つてわびを云つたりする男である。然し此の時は彼の出しやばりは無益でなかつた。警官は差配がしきりと本人に代つてわびを云ひ、本人をなだめて寢かしつけることに骨を折つたので、はづした扉の錠前をそのまゝもとのやうに、ガチヤンとおろして、その男を引きずり出すことだけはしなかつた。

『馬鹿め、よる夜中、何を云ふ、皆が迷惑するぞ、此の野郎、今度ぐづ／＼ぼやきやがつたら承知せんぞ、引きずり出して、此の木劍の折れるほどぶんなぐつてやるから、さう思ふとれ、ろくでなしめ……』係りの警官はいつまでも格子外から目を光らせて云ひ續けた。

口惜しいと叫んだ男はそれきり默つて小さくなつて靜かに枕に頭をおつつけてゐた。彼は北海道生れの勞働者で、中年生れの四十だと云つてゐたが五十面に見えるほど老けてゐた。淺草の勞働會館に寄宿して、晝間は溝さらひや、塵芥運搬の勞働をし、一年ほどみつちり辛抱して五十圓と云ふ金を溜めたと云ふのだ。ところで彼は今度の大震災に逢つて勞働會館を燒け出され、火に追はれて淺草から千住へ、千住から三河島へ逃げて來ると、鮮人と見ちがへられて自警團の一味にとりかこまれ、したゝか棍棒で打ちのめされたあげく警官の手に渡された。警察の調べを受けて不逞鮮人でないことだけは分明したが、所持品の檢査を受ける段になつて、腹卷と共に肌身つけてゐた汗の結晶の五十圓に不審を

打たれたのである。財布の中に半燒けの紙幣が唯一枚あつた爲めに火事どろの嫌疑をかけられてそのまゝ此の留置場へ押し込まれたのだ。

『前科があるだらう』と詰問されて『あります』と彼は正直に答へたので嫌疑はいよ〳〵深められ、彼の辯解は通らなくなつた。そして五十圓入の財布は押收されたのだ。彼は人から訊ねられると云つた。

『ほんとうに働いて溜めたんだよ君、それや前科はあるけれど、今度の金だけは汗水たらして溜めた金なんだよ。三河島まで逃げて來た時も、道ばたで一きれ五錢の西瓜を賣つてたから、喰べたいなと思つたが、それも我慢してつかはなんだお金だよ。泥棒した金だとはあんまりひどいぢやないかね……』彼はお湯にも一週間に一度しか入らないやうにして勞働會館でその金を溜めたと云ふのである。

『だからなあ、北海道。俺が云つて聞かしどくが、今度娑婆へ出たら、喰ひてえものは喰つて、風呂にも入えつて、男つぷりでもみがいて、たまにや白首も買つたりして働くんだ。好いけえ。何の爲めに人は生きてるかてえことを考へりや分るぢやねえか。たつた五十兩の金を勞働會館で一年もかゝつて溜めるなんて、氣の小せえ話しだ、俺つちは五十兩百兩てえ勝負を十分間か五分間でしててせえ、まどろつこしくつて仕樣がねえんだ。今度出られたら俺んとこへ一度やつて來ねえ、上尾久の桐野つて聞けやぢきに分るからよ。一月や二月お前えが來て居喰ひしようとちつとも構はねえ。仕事の口なら何時でも見つけてやら。』かう云つて北海道をなだめてやる者は不良自警團の一味で、大和民勞會に加つて今年の正月の元日に國粹會の一味を向ふへ廻して淺草で大喧嘩をし、獵銃で胸を射たれたと云ふ男であつた。ついでだから述べるが此の男の一團は大地震から二日目の夜、罹災民を代表して荒川の土堤向ふの百姓家へ乘り込み、玄米を幾俵かゆすり取つたと云ふ嫌疑で來てゐた。彼はまだ二十七八で色の淺黑いがつしりした體格の男で、子分もあるらし

く、賭博が本業だが表面は人夫請負業をやつてゐるのだと語る。その二日目の夜、土堤向ふの百姓家へ行つて罹災者の爲めに米を三俵貰つて來たのは事實だが脅迫したわけではないと彼は云つてゐた。脅迫的に押しかけたのは橋本の一味で、自分達が其の百姓家へ行つて、おとなしく米を貰つて來た後で橋本一派が押しかけて、はねつけられたのを承知せず、脅迫がましくやつたのだと云ふのであつた。

『なあに橋本一派の奴等が俺達をつゝいたんだ。取り調べの司法主任の前で俺達のことを惡く云やがつたんだ、それでこんなことになつたんだ。』彼はさう云つてゐた。橋本一派と云ふのは土方の一派であつた、その橋本一派が先に擧げられてそれから三日目の明け方彼は十人ばかりの角袖に家をとりまかれたので、寢床からシャツ一枚で拔け出して、裏の家の廂に飛び移つて、逃げれば逃げ了せたが、近所に迷惑をかけてはすまぬと、遂に繩にかゝつたのだと云つてゐた。繩にかゝる前に癪にさはつたから角袖を二人投げ飛ばしてやつたと云つてゐた。腕にそのくらゐの心得があることは、からだつきを見ても分る。彼は話した。

『ねえ先生、わつしのところへハイカラが一人ゐるんですよ。わつしは此所へ何十日ゐようと女房や子供のことはそれほど氣にもなりませんがね、預つてるその女のことが氣になるんですよ。』

彼が先生と尊稱してゐるのは、日本の民主主義者で、市川某と云ふ名を聞けば大方の者は、あの最近佛蘭西から、歸つて來た主義者の一人だとうなづくその人である。此の人は第一號檻房内では一番の有識者だと見られてゐたので皆は先生とよんでゐたのだ。

『そのハイカラと云ふのはどうした意味の婦人です。』市川某は訊ねた。

『それはからですよ……』桐野の話しはからであつた。地震の時に足を折つた橫濱の兄弟分を手車に乘せて四人で曳い

て東京へつれ歸つたのは九月四日の夜で、芝公園でひと憩みしてゐると、年頃の娘を一人つれた罹災者らしい老夫婦が途方にくれた面持で公園の樹蔭に腰をおろして思案してゐたので、つい話しかけていろ〳〵事情を聞くと大地震の日、本所から燒け出されて命から〴〵やつと逃げのびては來たが、親類と云ふ親類も悉く燒け出されて立ち退き先は不明であり、他にたよるべきところはなく、少しばかりの金はつきて、地震以來此の公園の樹蔭に親子三人は野宿を續けてゐるとのことで、三人共朝から何も喰べないでゐると聞いたので、早速持ち合せの餡パンを與へ、それから三人を家へつれて來て世話してやつてゐると云ふのであつた。

それは素的なハイカラですぜ。二十一だと云ひますが横文字も讀めるし、教育のある娘なんです。何とか方法をして小店でも出せるやうにしてやらうと思つてゐると、わつしは警察に來ちまつたもんですから、どうすることも出來ませんや。氣になるてえのは家にゐる若え野郎共が、わつしの留守に惡さでもしなきや好いがと、それだけでさあ。はつはつ……』

『それは安心出來ないな。』市川某は笑ひを含んで云つて『第一親分だつて安心の出來る人ぢやなさゝうだ。』

『冗談云つちやいけません。』彼は妙た笑ひを含みながら全くの俠氣から世話してゐると云ひ張つた。

さて、くだんの北海道は、おとなしく寢てゐたが、やつぱりいつまでも眠れないと見えて長い吐息をもらしながら鼻をくん〳〵鳴らしてゐた。例の差配は齒ぎしりしを始め、親分の桐野は高鼾を立て、氣ちがひの在郷軍人は手足をしばられたまゝすつぱだかで夜ぢゆう半身を板壁にもたせて、兩の眼を光らせてゐるのだ。

眠れないのは北海道一人ではなかつた。市川某と同じ日に共に檢束されて、既に八日になる三好孝吉もその中にゐたのである。彼は桐野某と、北海道の間に細長い足を向ふの板壁に突つ張るほど伸ばして、一方の腕を額の上にのせて寢

てゐるのである。息くるしさと、蚤の襲撃と、いろ〳〵のもの思ひの爲めに彼は毎夜夜半過ぎまで眠れなかつた。彼は市川某と同様に主義者の一人として九月九日の午後、二人の高等係につれられて此の警察へ來てそのまゝ留置場に押しこまれたのである。つく〴〵自分でも俺は運の悪い人間だと考へて見るのであつた。善人たらんとして善人にもなれず悪人たらんとして悪人にもなれない者は、神様にも氣受けがよくないと同時に悪魔にも振り棄てられるとは彼の如きを云ふのか。それにしても警察の取り扱ひはあまりに不法であつた。彼等は此所へ來てからまだ一回の取り調べもない。勿論何も法律に問はれるやうなことをした覺えはないのであつた。唯彼等は極めて無力な主義者であつたのだ。更に若し強いて彼に少々苦痛を與へてやつてよいと云ふことが許されるならば、それは多くの同胞が今度の大震災に逢つて慘死したのは彼等はあまりに無事でありすぎたから、と云ふ滑稽な理由が成り立つかも知れない。ともあれ、三好孝吉がかうして檻房に押し込まれてゐることは彼に好感を持たない者にとつては好い氣味であり、彼をよく知れる者には氣の毒な次第であつた。

『何だつて俺は旅行先から急いで歸つて來たのだ。歸つて來て三日目に大地震……流言蜚語……そして自分は理由もなく犯人扱ひにされてしまつた……まるで此の留置場へぶち込まれる爲めにわざ〳〵旅行先から歸つて來たやうだ……あの透明な谷間の温泉場に何故自分は最初の豫定通りもう一週間ほど逗留しなかつたらう……そしてあのまゝ東京へ歸らずに何故風景のよい海岸線で關西行きを決行しなかつたのだ……いや、それよりも、大地震後、何故直ぐに何處かへ行つてしまはなかつたのだ……何故東京でぐづ〳〵してゐたのだ……』

今その温泉場での一週間の生活を思ふと眞に極樂世界であつたと云ふ氣がする。朱塗の足高の宿屋の大膳には、ぴんと反りかへつた鮎の鹽燒きが粧てゐた。その隣りには鯉の洗ひ、吹き入る涼風、水聲、それが宿屋の晩餐であつた。沈

んでゐる針さへ見えるほどの清澄な岩底の浴槽、思ひ出しても肌身が涼しくなる。今此の狹くるしい、不潔な、汗の息ひと蚤の跳躍とのすさまじい留置場のありさまは何ごとぞ——その谷間の溫泉場に彼がゐる時、御國峠を越えて越後からやつて來た三人の法界屋があつた。宿屋の番頭の斡旋で法界屋は多少の祝儀にありついて、そこで一夜の演藝會が催されて、安來節、まづい茶番、まづい手踊が二階の廣間で始まつたものだ。地かたは八絃琴に月琴のつれひきだ。『よう成駒屋あ……』それでも山奥の溫泉場の逗留客を慰めるにはこと足るのであつた。客の半ばは東京者で、中には旦那づれの湯島藝者もゐたが、踊り子は馬鹿にされてるとも知らず、紀伊の國、梅にも春、と盛り澤山に踊りぬいて見せたものである。

『東京で見ようたつて見られない踊よ、おつほほ……』藝者は云つた。

『全くだ。』旦那は云つた。

三好孝吉は今その時のことを思ひ出すと法界屋の手踊も滑稽ではあつたが『東京では見られない踊よ』と東京を自慢した湯島藝者もその旦那も、東京へ歸つて間もなく大震災に逢つて燒け出されたのだらうと考へると人の世の皮肉を感ずるのである。更にまたその時の氣樂げた浴客の一人であつた自分が二週間後の今、かうして警察の留置場に押しこまれて、八日が間入浴も許されず二個の小さな握りめしと一個の梅干とを食事として、夜中蚤と蚊にせめられて苦しんでゐることを思ふとまたなさけない皮肉な感がするのであつた。

孝吉はこの留置場に押しこまれてからは、岡田嶮岳や佐藤牧村や、更にまた赤塚澤子などに對して考へたくないことまで考へ見るのであつた。兎も角此の三人は孝吉から小說のモデルにされた爲めに憤慨し復讐的感情を懷いてゐることは事實であつた　中でも赤塚澤子は、三好孝吉と二三ケ月同棲してゐた間に親密になつた孝吉の重なる友人をば　孝吉

と別居後も訪問して、さも孝吉からは無情に棄てられたかのやうに、それでも自分は今なほ孝吉を心では愛してゐると云ふ態度で巧みに同情を求めていろ〳〵の策略をやつてゐるのであつた。彼女はいきなり露骨に孝吉の惡口を人に云ひ歩くやうなまづい中傷はしない。巧みに孝吉を傷ける爲めの地雷火を敷いて歩いてゐた。先づ孝吉の友人の家を訪ねる時はその友人の妻君との親交を保つことに努めてゐる　たゞ友人の妻君の中には彼女からいろ　の打ちあけ話しを聞かされて意氣投合し、同じ女性としての思ひやりを催し、孝吉と云ふ人物を殊更批難もしない代りに『三好さんもそんなぢやこまりますわねえ。』と云つた程度の同感と合槌とを惜まないのもあつた。兎も角彼女は外部にあつて孝吉の爲めにはかつてゐないことは事實である。或る刑事は彼女を利用しようとしてるとも人は云ふ。ところで孝吉にとつては九月九日の夕から此の市川某と同じ此の檻房に入れられることになつたのも一つの皮肉の偶然である。赤坂澤子を最初此の市川某に紹介したのは孝吉であつた。孝吉は澤子が自分と別居後も此の市川某のところへ佛蘭西語の稽古に通つてゐることを知つてゐた。だのに二人は同じ檻房にかうしてゐながら澤子のことについては一言も話しを交へないのだ。

『澤子は俺のことを此の人によくは告げてゐないのは無論だ。此の人はあの女から俺のことを何かと聞かされて、それ以來俺と云ふ人物に感心してゐないやうだ……』孝吉は久しぶりに此の留置場で落ち合つたその時、直ぐ相手の調子にそれを感じた。或る人は澤子と此の人とは進んだ關係があるらしいと孝吉に話した。がまた或る人は『市川君は人格者で、そんな疑ひを持たれてはこまると云つて　君と別居後は彼女の出入を斷つたらしい』とも云つた。然し現在でも澤子が此の人に接近してゐることは事實なのだ。別に深い仔細はなくとも此の人がいろ〳〵と澤子の世話をしてやつてゐることを孝吉はうす〳〵聞いて知つてゐた。然し孝吉は此の人に對してそんなことを考へたくなかつた。彼は同じ檻房に入れられてからよくこんな話しをして笑つた。

『出る時は一緒だらうぢやありませんか、ねえ市川さん。出たら先づそこいらで一杯傾けませうよ。』孝吉は云つた。

『大にやらう。』市川某は云つた。

『あなたは先づ何が喰べたいんです。』

『さうだなあ、何よりもめしだなあ、あつさりとおみおつけかなんかで。』

『僕は牛肉が好い。先づ僕はめしよりは酒を一杯のみますよ。』孝吉は云つた。

『だつて此のぺこ／＼のすき腹に酒を流し込んだら、それこそ直ぐまゐつちまふだらう。』

此の中に押しこまれると誰ゝが子供のやうに單純な欲望を語るやうになつてしまふのだ。彼等は五日目に蒟蒻を一きれ、梅干の代りに貰つて晝めしの時にたべたがそれはマグロの刺身のやうにうまかつたものだ。六日目の晝めし時に隱元の胡麻よごしをひとつまみづゝ八人で分けてたべたがこれも素的であつた。

『あゝ早く歸してくれると好いなあ。一體、いつ放還するんだらう。』

『もう歸しさうなもんだ。檢束者は二十四時間以上留め置くことは出來ない筈だが此の際だから勝手にむしかへしをしてゐるのだらう。』

『戒嚴令が解かれるまで置くんぢやないでせうか。』

或はさうかも知れません。』市川某は云ふ。

喚ばれて來てから一週間目に第二號檻房にゐた大野某が唯一人歸へされた。で此の二人も曙光が見えた　思つて勢ひついた。

『大野君が歸へされたから、もう自分達も長くはあるまい。或は一緒に出さないで、ぽつ／＼一人宛出　のかも知れ

ん。』市川某は云つた。

『ぢやあなたと僕は一緒には出られないかも知れませんね。』孝吉は云つた。

『左樣、僕がさきに出されるか、あなたがさきに出されるか、どつちかだ。』市川某は云つた。

『それは僕がさきでせう。僕よりはあなたの方が警察では重く見てゐましようから。あなたは此所では巨頭と云ふ格ですからね。』孝吉は云つた。

『冗談云つてはこまる。』と相手は苦笑した『あとに殘されてたまるもんぢやない。僕がさきに出されて、君は最後まで殘されるんですよ。』

『御冗談でせう。巨頭を早く歸すもんですか巨頭は最後まで殘されるに定つてる。』

二人はそんな笑話を云ひ合つたものだが、七日八日と經つてもなかなか歸へしさうもないので、互にうんざりした。それに腹がへつて〝駄口をきく元氣もなくなつて、終日目を閉ぢてだまりこむやうになつてしまつたのである。初めのほどは文字や思想上のことについて語り合つたりしたが、日ましに度を加へる並ならぬ空腹の爲めに感情までがすさんで、氣持はひどく憂鬱になり、まるで互に喧嘩でもしたやうに、一方が話しかけても簡單な返答で受け流すやうになつてしまつたのだ。

『今度出たら、警察の不法を糺彈してやらうぢやありませんか。演説會でもやらうぢやありませんか。』

『大にやらう。』

二人はそんなことで辛うじて元氣を附け合つた。

孝吉は此所へ來て五日目に、知つた若い警官が留置場の入口から覗いて直ぐに顏を引つこませたのを氣づいてゐたの

である。孝吉が檻房の中にゐるのを見てその警官は何と思つたか直ぐに顏を引つこませてしまつた。これは孝吉の爲めに曾て縁談の奔走などをしたりした南畫家の岡田嶮岳と心易い警官であつたのだ。此の若い警官は文學好きであると云ふことから嶮岳と一緒に孝吉の家へ訪ねて來たことがあつた。嶮岳がモデル一件で感情を害して孝吉の家へ來なくなると共に此の警官も孝吉の家に來なくなつた。窃に孝吉は嶮岳と云ふ男をスパイではないだらうかなどと多少疑つて見たくなつたのも、その頃からであつた。此の留置場へ押しこまれてから再び孝吉は嶮岳についてのその疑ひを喚び起して見るのであつた。その警官が留置場の入口から、顏を出して引つこませたのを認めてから猶更いろ〳〵のことを考へて見るやうになつた。——

孝吉は留置場のせゝこましい音をたてる八角時計が三時を打つまで眠らなかつた。ひと夢見ると夜が明けてゐる。六時が鳴ると同時に『起きろ』と係官は怒鳴つた。板の間にうすべりを敷いたその上に寢るのだから皆はからだぢゆうにしびれをきらして、起きあがつてしばらくは腰をなでたり肩を叩いたりした。

『やい、北海道、てめえはゆうべ此の檻の木劍でなぐられそこなひやがつたな、口惜しいなんて夜中に起きてわめきやがつたぞ馬鹿野郎。何がくやしいんだ、俺はまた一號檻房に氣ちがひが一人殖えたと思つたんだが、さうでもないんで安心した。ばた〳〵しても此所へ入つてる間はどうにもなるんぢやねえから、おとなしくしてろ。ゆうべの罰だ、今朝はてめえに掃除を云ひつけてやるから、檻房の外の板の間をきれいに拭き掃除しろ、此の野郎……。』留置場係りは皆が寢床をあげて顏を洗つて、型の如く順々に列んですわつてしまふと、北海道に向いて笑ひながら云つた。

『ゆうべは、びつくりしましたよ旦那……』差配は警官には旦那と云ふのがくせであつた。

一夜を檻房の裡で明かした例の老易者は裏窓から射し込む朝の光に向いて、何か頻りに、うにや〳〵とお祈りをして

ゐた。かうした中に入れられてゐても晴れた朝の氣持はなつかしいものだ。皆は何かそれ〳〵希望を感じてゐるやうに朝の僅の間、わけもなくほく〳〵してゐるのである。彼等は二つの小さな握りめしと一個の梅ぼしと、一椀の白湯とがやがてくばられるのが待ち遠い希望であつた。留置人の握りめしは警察の筋向ふのめし屋から運ばれる。握りめしはどうかすると中の方がつめたいのがある。半分だけつめたいのもある。これは冷めしと、炊きたてとをまぜこぜにして握つてあるからだ。拘留者が喰ふんだからと、めし屋でもその氣である。

『それ、客が小さなおはちを喰べのこして行くだらう。あのたべ残しをあつめるんだ。そいつを混ぜて拘留人の方に持つて來やがるんだ。ひでえめし屋だ。』差配は見て來たやうなことを云ふ。

その握りめしが運ばれて來るのは大抵朝は八時である。めし屋は前以て頭數を聞きに來るのが例であつた。廂髮に結つた二番目の娘が留置場の入口のところの、小使だまりの上り段のところまで來て、そつと留置場を覗く時、留置人の饑ゑた目にはそれが姫君ほどにも美しく見えた。

『ちくしやう、のぞいてやがるぞ。今朝は姉娘の野郎だあ……。』目早な留置人等は小聲で呼き合ふ。全く留置人等はめし屋から頭數を聞きに來る時刻が來ると元氣づくのであつた

『めし屋はまだ今朝來ないな。』

『もう、さつき、聞きに來たよ姉娘のハイカラが。』

『ぢや、もう持つて來る頃だ。ありがてえ。』

ほんの二十秒ほど口を動かせばそれでおしまひになる小さな二個のめし粒のかたまりが彼等にはいかに待ち遠いことぞ。彼等はその一つの小さな朝の希望を達すれば、がつか　したやうにかう云ふ。

『あゝ何のこつた、これで朝の樂しみは終つた。あと四時間――僅か二十秒ほど口の中の歯と歯をかち合せる爲めに四時間待たなきやならない。なさけねえ……』

全くその通りであつた。

『おい爺、てめえは易者か。』留置場係の警官は今朝は少々機嫌がよく老易者にかう話しかけた『俺の年が分るか、あてゝ見い爺』

『あてゝ見ようかの、お前さんの年を。お前さんは卯ぢや。』老易者は云つた。

『よくあてやがつたなあ、おう、俺は卯だ。』警官は低い鼻と大きい口を一緒にして頰笑んだ。

『お前さんは四番目の末つ子ぢやねえかな、どうもさうらしい。』

『おう、俺の上には姉が二人と兄きが一人ゐらあ。てめえはよくあてやがるなあ。』

『お前さんは氣性は荒さうでも人情のある人ぢやとわしは見るがどうぢやの。』

『うむ、なるほど、俺は血もあり涙もある人間だぞ。』警官はます〳〵好い氣になつて云ふ『俺はなあ子供の時分からこれつぽちも曲つたことをするなきれえの性分だつた。』

『さうぢや、お前さんは眞正直な人ぢや、口ではがみ〳〵云はつしやるが、心はそれほど惡い人ぢやねえ。』爺さんはうまくおだてこんだ。人はいかなることをしてゐても善人と云はれたいものだ。此の口のやかましい、一見殘忍性で張りつめてゐるやうな警官が二人の姉と一人の兄きとを持つてゐる末つ子だと聞くを何となく可愛げで、留置人は頰笑んだ。

『それに親ごも達者ぢや、お前さんの家は先祖代々總じて長命ぢや。』

『おう俺の親爺はなあ、今年八十だ、まだぴん〳〵してら、力ぢや俺達は叶はねえぞ。』警官は云つた。

『結構なことぢや。』爺さんは云つた。爺さんは『吠えつく犬には口笛を吹け』を心得てゐるのだ。

此の日は終日此の警官の御機嫌がよかつたのは皆にとつて仕合せであつた。

例の若手の司法主任の警部補は時々留置場の入口へ算盤を持つてやつて來た。此の主任はいつも留置場を見に來る時には算盤を持つてゐるのだ。

『現在數は幾名か。』主任は訊ねる。

『三十八名であります。主任殿……』

『なか〱減らんなあ。こまるなあ、これでは……』主任はひと渡り留置人を見廻つて『めし屋の方の支拂ひが豫算を超過してこまるよ。』

『どうも、出る奴よりも來る奴の方が多いんですから、一向減りませんです主任殿。』留置場係りは云つた。

それから間もなく一人の氣ちがひが曳かれて來た。これも大地震の爲めに異狀を起した精神病者で町を歩きながら店々のものをとつてはふところに入れてしまふと云ふ氣ちがひだ。彼は入つて來ると、いきなり板の間にへたりこんで、南京豆をむいて喰ひ始めたが、警官は直ぐに懷中のものを調べてとりあげてしまつた。

『お前の家はどこか。』警官は事故簿に書き始めた。

『僕？青山穩田の大山大將邸の直ぐ裏。』氣ちがひは答へた。彼は懷中に持つてゐた煙草をとりあげられたので怒り出した。

『煙草を僕は吸んですよ。』

『煙草を吸つてはならん。』

『ならんと云ふ法はない。』氣ちがひは直ぐに警官の胸ぐらにとりついた。二人はそこでちよつとの間揉み合つたが、警官は此の氣ちがひに對してはあまり手荒いことをしなかつた。氣ちがひは十五六の面長の貴族らしい青年である。名門の息子らしいと皆は一見して云つてゐた。彼は『これから家へ歸るんだ。家では僕の歸るのを待つてゐるから歸るんだ』と云ひながら、さつさと出て行かうとするのを、警官はとう／＼二人がゝりで第二號の檻房へ押し込んでしまつた。そして早速此の日から彼は他の留置人達から穩田の御前とよばれることになつた。普通の人間と云ふ者はあまりに氣心が分り過ぎて面白味がない。然し筋のよい氣ちがひはどこまでも新味があつて人を飽きさせないものだ、彼は口で鼓の音を鳴らして勸進帳をやり出した『イヤ、オーツ、ポカポン……ポン／＼／＼イヤ、オーツ、ポン／＼……これで君新橋の藝者で僕の名を知らんやつはなかつたくらゐだよ、へへ……』と氣焔をあげるのであつた。皆はどつと笑ふ。

『あけてくれ。此所をあけてくれ、僕は家へ歸るんだ。家では僕を待つとるんだ……』穩田の御前は時々叫んだ。すると一號檻房の在郷軍人は頓狂にかう云ふのだ。するとん／＼

梨が安い……。

人はかうした場所では常人であるよりも氣ちがひである方が遙かにのんきで仕合せである。氣ちがひ自身が仕合せであるばかりでなく彼は他の多くの留置人をば重苦しい退屈から暫しでも救ひ出すのだ。

さて此の留置場と云ふ舞臺には此の日も變つたいろ／＼の登場人物が現はれて來て、いろ／＼と運命が脚色したお芝居を演ずるのであつた。トタン屋だと云ふ暴利商人がやつて來てどやされ、自轉車を乘り逃したと云ふ男がやつて來て蹴られたりした。そして、例の蒼んぶくれの女が出て行つた後に、また一人の女がやつて來た。荒い絣の新銘仙の單衣を着た二十六七の賣笑婦らしい女である。警官はからかふやうに云つた。

『何をしてゐたんだ。』

『働いてをりました。』女は笑ひながら云つた。

『何して働いとつたのだ、××××××××を働かせてをつたんだらう。亭主はないのか。』

「あつたんですけれど、のらくら者でしたから地震前に別れてしまつたんですの。』

彼女はそれから十分ほどして司法主任の室に呼ばれ十五日の拘留を言ひ渡されと共に、かう云ひつけられた。

『お前は雑役の方を手傳つて賄の方をやれ。御飯は炊けるだらうな。』

『炊けますわ旦那。』

そこで彼女は早速襷がけで甲斐々々しく小使部屋の方で立ち働くことになつたのである。震災以來巡査の全部は署内で食事をしてゐたので彼女は炊事方には持つて來いであつた。彼女の赤裸姿は場所柄にほやかに見られた。

此の日、多くの留置人の心をさびしくしたのは二人の氣ちがひが出て行つてしまつたことであつた。在郷軍人は精神病院の方へ送られ、穏田の御前は實家が分明したので家族に引き渡されたのである。在郷軍人は檻房内で便器をくつかへしたり、兵隊の動作をやらかしたり、夜中には寢てゐる者の腹の上に踊りあがつたりして皆をこまらせたが、さて彼がゐなくなつてしまふと、いかに愛すべき獣物であつたか、いかに皆を退屈と單調とから救ふに必要な人間であつたかを皆は氣づいたのであつた。大勢の中には一人の尊敬すべき人物か、さなくば馬鹿者かゞいつも必要である。人は一個の對象に向つて同一の感情を持つことを愉快とする。その意味で在郷軍人は『厄介な奴』として必要な共同の對象であつたのだ。

『あ、あいつがゐなくなつて淋びしくなつた』

『全くだ。好い退屈しのぎになつたのに……』

皆は彼の面影を目に浮べてさう云つた。

孝吉は前日と同樣に檻房の一隅に正座して瞑想の旅を續けた。瞑想は彼にとつては立派な一つの旅行であつた。そこには嘗て通り過ぎた曠野があつた。それは嘗て一度考へた心の世界の一端と云ふ意味である。そこにはまた初めて見る山河があつた。それは深められた自覺の世界と云ふ意味である。

『かうして幾日も留置かれるとは何と云ふ苦しい馬鹿々々しい話しだ。然し自分はかう云ふ苦しみを經驗してもよい時期に來てゐたのではないか。自分は一つの厄難を經るごとに心の成長を尠くも進めて來たではないか、自分には無數の厄難が必要であらう。自分の不幸な過去を顧みて見よ。一つだつて心の成長の上に無用な厄難があつたと云ひ得るか、靜かに心を亂さずに最後まで忍ばう。大震災後の裏面を此の留置場の中で見たではないか。最後までそれを見よ。冷靜に見よ……』それは此の場合彼にとつての最上の觀念であつた。然し彼のさうした瞑想も靜思も力を失ふ時が來たのだ。それはその日の夕食後、市川某だけが放還されたことである。彼はその理由を冷靜に判斷することが出來なかつた。彼はがつかりした。然し唯一夜の相異ひであつた。そして市川某が出されて歸つて行くその夕方は雨がどしや降りにふつてゐたけれど三好孝吉がその翌朝歸へされる時は空は晴れて、うるはしい初秋の朝の光が街にふりそゝいでゐたのである、市川某は濡れながらも出された嬉しさに夢中に飛んで歸つたに違ひない。然し孝吉は唯一夜長く留かれた爲めに濡れずにだけはすんだのだ。

天意は如何なる場合でも巧みに公平であると云へば云へるであらう

中央公論大賣捌所

東京市神田區表神保町　東京堂
同　神田區通神保町　上田屋
同　京橋區銀座三丁目　東海堂
同　京橋區元數寄屋町　北隆館
同　日本橋區本石町　至誠堂
同　本鄉區春木町　盛春堂
大阪市北區梅田町　盛文館
同　北區東梅田町　立盛堂
京都市七條停車場前　共盛社
同　四條西洞院　前田大誠社
名古屋市　富澤町　中京堂
朝鮮京城本町二丁目　日韓書房

◎定價　金八拾錢郵税金貳錢五厘（海外郵税貳拾八錢）
但支那を除く

冊數＼國別	內國	外國
六冊	金四圓八拾錢	金六圓四拾八錢
十二冊	金九圓六十錢	金拾貳圓九拾六錢
以上郵税共		

▲但し新年號春秋二期附錄號增刊號は各倍册に付普通號二册の代金を申請くべし、卽ち一ケ年通計十七册分の割合なれば一ケ年分御注文の方は內國は金拾參圓六拾錢外國は金拾八圓參拾六錢の割となれども頁數の都合にて變更することあるべし。

送金注意

一誌代郵税　は一切前金とす、前金切の場合は發送を止むべし
一振替貯金　口座番號は東京三四番　長野三二〇五番なり
一郵券代用　は謝絕す但し郵便局に不便の地に限り一割增にて代用せらるるを拒まず
一代金引替　小包の取扱は一切謝絕す
一集金郵便　御希望の方は拂込金額以外に左記料金を加へたる共[illegible]を前以て弊社へ通知せらるべし、弊社は直ちに其取扱手續をなすべし但集金郵便の申込を受くるも現金受領濟にあらざれば雜誌發送せず
　一金二圓以上五圓迄　金七錢
　一金拾圓迄　金八錢（集金委託料及送料共）
一中央公論及婦人公論　代金取り纏め御拂込みの場合には各誌割當て金額御指定を乞ふ
一受領證請求　は必ず返信料を要す

大正十二年十一月廿五日印刷納本
大正十二年十二月　一日發行
（禁轉載）

發行兼編輯人　瀧田哲太郎
印刷人　高木島三

發行所　東京市丸ノ内ビルヂング七階七百七十六區
中央公論社
電話　長丸ノ內三〇二
電信略號　コウロン

印刷所　東京市牛込區市谷加賀町一丁目十二番地
株式會社　秀英舍

CHUO KORON (*The Central Review.*)

By The Chuo Koron Sha Publishing Co, Published Monthly.
Terms of Subscription: Annual subscription *yen* 12.48; Single copy 80 *sen* including Postage. Entered at the Post Office at Los Angeles, Cal. U.S.A. as second-class mail matter

